

# ゼロからのラテン語

第零版

ゼロからのラテン語・第零版  
著者——大黒学

2012年 1月14日(土) 第零版発行

Copyright © 2007–2012 Daikoku Manabu

This tutorial is licensed under a Creative Commons Attribution 2.1 Japan License.

## 目次

第 1 章	ラテン語の基礎	14
1.1	ラテン語の基礎の基礎	14
1.1.1	ラテン語とは何か	14
1.1.2	ラテン語の系統	14
1.1.3	古典ラテン語	14
1.1.4	ロマンス語	14
1.1.5	ラテン語の現在	15
1.2	文字	15
1.2.1	ラテンアルファベット	15
1.2.2	ラテン語で使われる文字	15
1.2.3	大文字と小文字の使い分け	15
1.2.4	句読点	15
1.3	発音	16
1.3.1	発音の基礎	16
1.3.2	母音	16
1.3.3	長音符号	16
1.3.4	子音	16
1.3.5	発音に関する細かい規則	17
1.3.6	文字の使い分け	18
1.3.7	カタカナによる $y$ と $\bar{y}$ の表記	18
1.4	音節	18
1.4.1	音節の基礎	18
1.4.2	音節の区切り方	18
1.4.3	音節の長短	19
1.4.4	音節の長短を表示する記号	20
1.4.5	音節の呼び名	20
1.5	アクセント	20
1.5.1	アクセントの基礎	20
1.5.2	アクセントの規則	20
1.5.3	後倚辞とアクセント	21
1.5.4	単語の変化とアクセント	21
1.6	文法の基礎	22
1.6.1	文法とは何か	22
1.6.2	文法にもとづく言語の類型	22
1.6.3	品詞	22
1.6.4	変化する品詞と変化しない品詞	23
1.7	文	23
1.7.1	単語の列	23
1.7.2	文とは何か	23
1.7.3	文の分類	23
1.7.4	文の要素	24
1.7.5	授与動詞	24
1.7.6	要素の内部の修飾語	24
1.7.7	節と句	24
第 2 章	名詞	25
2.1	名詞の基礎	25
2.1.1	名詞を変化させる要因	25
2.1.2	数	25
2.1.3	格	25
2.1.4	ラテン語の格	25

2.1.5	格の用法	26
2.1.6	名詞の変化表	27
2.1.7	名詞の変化の覚え方	27
2.1.8	語幹と語尾	27
2.1.9	性	27
2.1.10	性・数・格の一致	28
2.2	名詞のグループ	28
2.2.1	名詞の分類	28
2.2.2	名詞のグループと性	28
2.2.3	辞書に書かれている名詞の項目	29
2.3	第一変化名詞	29
2.3.1	第一変化名詞の変化	29
2.3.2	第一変化名詞の性	29
2.3.3	国や地域の名前	30
2.3.4	特殊な第一変化名詞	30
2.4	第二変化名詞	30
2.4.1	第二変化名詞の分類	30
2.4.2	第二変化名詞の性	30
2.4.3	第二変化 -us 型名詞の変化	30
2.4.4	第二変化 -er 型名詞の分類	31
2.4.5	第二変化 -er 型名詞の変化	31
2.4.6	第二変化 -um 型名詞の変化	32
2.4.7	特殊な第二変化名詞	32
2.4.8	-ius 型と -ium 型の第二変化名詞の変化	32
2.4.9	deus の変化	33
2.4.10	vir の変化	33
2.5	第三変化名詞	33
2.5.1	第三変化名詞の特徴	33
2.5.2	第三変化名詞の分類	34
2.5.3	子音幹名詞の変化	34
2.5.4	i 幹名詞の変化	35
2.5.5	子音幹名詞と i 幹名詞の判別	36
2.6	第四変化名詞	36
2.6.1	第四変化名詞の性	36
2.6.2	第四変化名詞の変化	37
2.6.3	domus の変化	37
2.7	第五変化名詞	38
2.7.1	第五変化名詞の性	38
2.7.2	第五変化名詞の変化	38
<b>第 3 章</b>	<b>動詞 I [ 動詞の基礎 ]</b>	<b>38</b>
3.1	動詞の変化	38
3.1.1	動詞を変化させる要因	38
3.1.2	人称	39
3.1.3	数	39
3.1.4	時制	39
3.1.5	態	39
3.1.6	法	40
3.1.7	動詞の変化表	40
3.1.8	動詞の変化の覚え方	40
3.1.9	不定詞	41
3.1.10	分詞	41
3.1.11	動詞の分類	41

3.1.12	動詞の構造	42
3.1.13	辞書に書かれている動詞の項目	42
3.2	直説法・能動態・現在	43
3.2.1	直説法・現在の動詞の構造	43
3.2.2	現在幹	43
3.2.3	能動態の語尾	43
3.2.4	第一変化動詞	44
3.2.5	第二変化動詞	44
3.2.6	第三 a 変化動詞	44
3.2.7	第三 b 変化動詞	45
3.2.8	第四変化動詞	45
3.2.9	不規則動詞	45
3.2.10	sum	46
3.2.11	possum	46
3.2.12	volō	46
3.2.13	nōlō	46
3.2.14	mālō	47
3.2.15	eō	47
3.2.16	ferō	47
3.2.17	fiō	47
3.2.18	dō	48
3.2.19	edō	48
3.2.20	現在の意味	48
3.3	平叙文	48
3.3.1	述語動詞だけから構成される平叙文	48
3.3.2	主語	49
3.3.3	目的語	49
3.3.4	間接目的語と直接目的語	49
3.3.5	補語	50
3.3.6	語順	50
3.3.7	否定文	50
3.4	一般疑問文	51
3.4.1	疑問文の分類	51
3.4.2	一般疑問文を作る後倚辞	51
3.4.3	一般疑問文に対する肯定的な返答	52
3.4.4	一般疑問文に対する否定的な返答	52
3.4.5	肯定的または否定的な返答を期待する一般疑問文	53
3.5	不定詞の能動態・現在	53
3.5.1	不定詞の能動態・現在の意味	53
3.5.2	不定詞の用法	53
3.5.3	補足不定詞	53
3.5.4	不定詞の意味上の目的語	53
3.5.5	不定詞の意味上の主語	54
3.5.6	不定詞の意味上の補語	54
3.6	命令法・能動態・現在	54
3.6.1	命令法・能動態・現在・二人称・単数	54
3.6.2	命令法・能動態・現在・二人称・単数が特殊な動詞	54
3.6.3	命令法・能動態・現在・二人称・複数	54
3.6.4	不規則動詞の命令法・能動態・現在・二人称	55
3.6.5	禁止	55
3.6.6	挨拶	55
3.6.7	謝罪	56

第4章	前置詞と接続詞と間投詞	56
4.1	前置詞	56
4.1.1	前置詞の基礎	56
4.1.2	対格を支配する前置詞	56
4.1.3	奪格を支配する前置詞	57
4.1.4	対格と奪格を支配する前置詞	57
4.1.5	前置詞を使った文の例	58
4.1.6	地格	58
4.2	接続詞	59
4.2.1	接続詞の基礎	59
4.2.2	等位接続詞	59
4.2.3	等位接続詞的な後倚辞	60
4.2.4	接続詞の観点からの文の分類	60
4.3	間投詞	61
4.3.1	間投詞の基礎	61
4.3.2	間投詞の例	61
4.3.3	間投詞を使った文	61
第5章	形容詞と副詞	61
5.1	形容詞の基礎	61
5.1.1	形容詞の用法	61
5.1.2	形容詞を変化させる要因	61
5.1.3	形容詞と名詞の位置関係	62
5.1.4	形容詞の分類	62
5.2	第一第二変化形容詞	62
5.2.1	第一第二変化形容詞の変化	62
5.2.2	辞書に書かれている第一第二変化形容詞の項目	64
5.2.3	第一第二変化形容詞を使った文の例	64
5.3	第三変化形容詞	64
5.3.1	第三変化形容詞の分類	64
5.3.2	fortis 型形容詞の変化	65
5.3.3	alacer 型形容詞の変化	65
5.3.4	felix 型形容詞の変化	66
5.3.5	vetus 型形容詞の変化	66
5.3.6	辞書に書かれている第三変化形容詞の項目	67
5.3.7	第三変化形容詞を使った文の例	67
5.4	形容詞の名詞的用法	68
5.4.1	形容詞の名詞的用法の基礎	68
5.4.2	名詞として使われる形容詞の変化	68
5.4.3	暦の月の名前	68
5.5	副詞	69
5.5.1	副詞の基礎	69
5.5.2	純粹な副詞	69
5.5.3	形容詞から副詞を作る規則	70
5.5.4	副詞の作り方が特殊な形容詞	70
5.5.5	形容詞の中性単数対格形に由来する副詞	70
5.5.6	名詞または代名詞の奪格形に由来する副詞	70
5.5.7	-tus や -tim などによって作られた副詞	71
5.5.8	副詞の使い方	71
5.5.9	疑問副詞	71
5.6	比較変化	72
5.6.1	比較変化の基礎	72
5.6.2	形容詞の比較級	72

目次	7
5.6.3 形容詞の最上級	72
5.6.4 特殊な比較変化	73
5.6.5 副詞の比較級	74
5.6.6 副詞の最上級	75
5.6.7 比較級を使った文の作り方	75
5.6.8 最上級を使った文の作り方	75
<b>第6章 代名詞</b>	<b>76</b>
6.1 代名詞の基礎	76
6.1.1 代名詞の分類	76
6.1.2 代名詞の変化	76
6.2 人称代名詞と再帰代名詞	76
6.2.1 人称代名詞の基礎	76
6.2.2 一人称の人称代名詞	76
6.2.3 二人称の人称代名詞	77
6.2.4 人称代名詞の主格形	77
6.2.5 再帰代名詞	77
6.2.6 所有形容詞	78
6.2.7 人称代名詞と再帰代名詞の属格形	78
6.2.8 人称代名詞の複数属格形	79
6.2.9 人称代名詞と cum との複合語	79
6.3 指示代名詞	79
6.3.1 指示代名詞の基礎	79
6.3.2 hic	79
6.3.3 iste	80
6.3.4 ille	80
6.3.5 is	81
6.3.6 ipse	82
6.3.7 idem	82
6.3.8 指示代名詞の属格形	83
6.3.9 指示代名詞の形容詞的用法	83
6.4 疑問代名詞	83
6.4.1 疑問代名詞と疑問形容詞	83
6.4.2 quis	83
6.4.3 quī	84
6.4.4 疑問を強調する後倚辞	84
6.5 不定代名詞と不定形容詞	85
6.5.1 不定代名詞と不定形容詞の基礎	85
6.5.2 aliquis と aliquī	85
6.5.3 quis と quī	86
6.5.4 quisquam と ūllus	86
6.5.5 quisque	86
6.5.6 quīdam	87
6.6 代名詞的形容詞	88
6.6.1 代名詞的形容詞の基礎	88
6.6.2 代名詞的形容詞の変化	88
6.6.3 alter	89
6.6.4 alius	89
6.6.5 uter	89
6.6.6 neuter	90
6.6.7 ūllus	90
6.7 nūllus と nēmō と nihil	90
6.7.1 nūllus	90

6.7.2	nēmō	90
6.7.3	nihil	91
6.7.4	全否定と部分否定	91
<b>第7章</b>	<b>数詞</b>	<b>92</b>
7.1	数詞の基礎	92
7.1.1	数詞の分類	92
7.1.2	数詞の変化	92
7.2	基数詞	92
7.2.1	基数詞の基礎	92
7.2.2	1 から 20 までの基数詞	92
7.2.3	ūnus	93
7.2.4	duo	94
7.2.5	trēs	94
7.2.6	10 の倍数をあらわす基数詞	94
7.2.7	100 の倍数をあらわす基数詞	95
7.2.8	mille	96
7.2.9	年齢	97
7.3	序数詞	97
7.3.1	序数詞の基礎	97
7.3.2	1 から 20 までの序数詞	97
7.3.3	10 の倍数をあらわす序数詞	98
7.3.4	100 の倍数をあらわす序数詞	98
7.3.5	分数	99
7.4	配分数詞	99
7.4.1	配分数詞の基礎	99
7.4.2	1 から 20 までの配分数詞	100
7.4.3	10 の倍数をあらわす配分数詞	100
7.4.4	100 の倍数をあらわす配分数詞	101
7.4.5	1000 の倍数をあらわす配分数詞	101
7.4.6	単数の意味を持つ複数形の名詞の個数	101
7.5	数副詞	101
7.5.1	数副詞の基礎	101
7.5.2	1 から 20 までの数副詞	101
7.5.3	10 の倍数をあらわす数副詞	102
7.5.4	100 の倍数をあらわす数副詞	103
7.5.5	1000 の倍数をあらわす数副詞	103
7.5.6	1000 の倍数をあらわす序数詞	103
<b>第8章</b>	<b>動詞 II [ 時制 ]</b>	<b>103</b>
8.1	未完了過去	103
8.1.1	時制についての復習	103
8.1.2	直説法・未完了過去の動詞の構造	104
8.1.3	第一変化動詞の直説法・能動態・未完了過去	104
8.1.4	第二変化動詞の直説法・能動態・未完了過去	104
8.1.5	第三 a 変化動詞の直説法・能動態・未完了過去	104
8.1.6	第三 b 変化動詞の直説法・能動態・未完了過去	105
8.1.7	第四変化動詞の直説法・能動態・未完了過去	105
8.1.8	不規則動詞の直説法・能動態・未完了過去	105
8.1.9	未完了過去の意味	105
8.2	未来	105
8.2.1	直説法・未来の動詞の構造	105
8.2.2	第一変化動詞の直説法・能動態・未来	106
8.2.3	第二変化動詞の直説法・能動態・未来	106



8.2.4	第三 a 変化動詞の直説法・能動態・未来	106
8.2.5	第三 b 変化動詞の直説法・能動態・未来	106
8.2.6	第四変化動詞の直説法・能動態・未来	106
8.2.7	不規則動詞の直説法・能動態・未来	107
8.2.8	未来の意味	107
8.2.9	命令法・能動態・未来	107
8.3	完了	108
8.3.1	直説法・能動態・完了の動詞の構造	108
8.3.2	完了幹	108
8.3.3	不規則動詞の完了幹	110
8.3.4	直説法・能動態・完了の動詞の語尾	110
8.3.5	完了の意味	110
8.4	過去完了	111
8.4.1	直説法・能動態・過去完了の動詞の構造	111
8.4.2	過去完了の意味	112
8.5	未来完了	112
8.5.1	直説法・能動態・未来完了の動詞の構造	112
8.5.2	未来完了の意味	112
<b>第 9 章</b>	<b>動詞 III [ 受動態 ]</b>	<b>112</b>
9.1	受動態の基礎	113
9.1.1	態についての復習	113
9.1.2	受動態の現在と未完了過去と未来の動詞の構造	113
9.1.3	受動態の語尾	113
9.1.4	第一変化動詞の直説法・受動態	113
9.1.5	第二変化動詞の直説法・受動態	114
9.1.6	第三 a 変化動詞の直説法・受動態	114
9.1.7	第三 b 変化動詞の直説法・受動態	114
9.1.8	第四変化動詞の直説法・受動態	114
9.1.9	ferō の直説法・受動態	115
9.1.10	行為者	115
9.1.11	命令法・受動態・現在	115
9.1.12	命令法・受動態・未来	115
9.2	受動態の完了と過去完了と未来完了	116
9.2.1	受動態の動詞の構造と完了分詞	116
9.2.2	完了分詞の作り方	116
9.2.3	完了分詞の変化	117
9.2.4	完了分詞の形を辞書で調べる方法	117
9.2.5	受動態の完了と過去完了と未来完了の動詞の構造	117
9.3	形式受動態動詞	119
9.3.1	形式受動態動詞の基礎	119
9.3.2	形式受動態動詞の変化のグループ	119
9.3.3	辞書に書かれている形式受動態動詞の項目	119
9.3.4	対格以外の格が目的語として使われる形式受動態動詞	120
9.3.5	半形式受動態動詞	120
<b>第 10 章</b>	<b>動詞 IV [ 接続法 ]</b>	<b>120</b>
10.1	接続法の基礎	120
10.1.1	法についての復習	120
10.1.2	接続法の時制	121
10.1.3	接続法の用法	121
10.2	接続法・現在	121
10.2.1	接続法・現在の動詞の構造	121
10.2.2	接続法・能動態・現在の変化	121

10.2.3	接続法・受動態・現在の変化	122
10.2.4	不規則動詞の接続法・現在	122
10.2.5	接続法・現在の意味の分類	122
10.2.6	接続法・現在の意味 I [ 勸奨 ]	123
10.2.7	接続法・現在の意味 II [ 命令 ]	123
10.2.8	接続法・現在の意味 III [ 譲歩 ]	123
10.2.9	接続法・現在の意味 IV [ 願望 ]	123
10.2.10	接続法・現在の意味 V [ 可能性 ]	124
10.2.11	接続法・現在の意味 VI [ 懐疑 ]	124
10.3	接続法・未完了過去	124
10.3.1	接続法・未完了過去の動詞の構造	124
10.3.2	接続法・能動態・未完了過去の変化	125
10.3.3	接続法・受動態・未完了過去の変化	125
10.3.4	不規則動詞の接続法・未完了過去	125
10.3.5	接続法・未完了過去の意味の分類	126
10.3.6	接続法・未完了過去の意味 I [ 義務 ]	126
10.3.7	接続法・未完了過去の意味 II [ 願望 ]	126
10.3.8	接続法・未完了過去の意味 III [ 可能性 ]	126
10.3.9	接続法・未完了過去の意味 IV [ 懐疑 ]	126
10.4	接続法・完了	127
10.4.1	接続法・能動態・完了の動詞の構造	127
10.4.2	接続法・受動態・完了の動詞の構造	127
10.4.3	接続法・完了の意味の分類	127
10.4.4	接続法・完了の意味 I [ 禁止 ]	128
10.4.5	接続法・完了の意味 II [ 譲歩 ]	128
10.4.6	接続法・完了の意味 III [ 願望 ]	128
10.4.7	接続法・完了の意味 IV [ 可能性 ]	128
10.5	接続法・過去完了	128
10.5.1	接続法・能動態・過去完了の動詞の構造	128
10.5.2	接続法・受動態・過去完了の動詞の構造	129
10.5.3	接続法・過去完了の意味の分類	129
10.5.4	接続法・過去完了の意味 I [ 義務 ]	129
10.5.5	接続法・過去完了の意味 II [ 願望 ]	129
<b>第 11 章</b>	<b>複文</b>	<b>129</b>
11.1	複文の基礎	129
11.1.1	複文とは何か	129
11.1.2	主節と従属節	130
11.1.3	時制の関連	130
11.1.4	従属節の分類	130
11.1.5	文を従属節にするための単語	131
11.1.6	副詞節の意味の分類	131
11.2	形容詞節 I [ 関係代名詞 ]	131
11.2.1	関係代名詞の基礎	131
11.2.2	quī の変化	131
11.2.3	関係代名詞による複文の作り方	132
11.2.4	形容詞節の接続法	133
11.2.5	先行詞としての is	133
11.2.6	独立した文の先頭に置かれた関係代名詞	134
11.2.7	不定関係代名詞	134
11.3	形容詞節 II [ 関係副詞 ]	134
11.3.1	関係副詞の基礎	134
11.3.2	関係副詞による複文の作り方	135

11.3.3	-cumque を連結した関係副詞	135
11.4	副詞節 I [ 時間 ]	135
11.4.1	時間を意味する副詞節の基礎	135
11.4.2	「...したのちに」を意味する副詞節	135
11.4.3	「...する前に」を意味する副詞節	136
11.4.4	同時性の分類	136
11.4.5	同時性 I [ ...するときに ]	136
11.4.6	同時性 II [ ...しているあいだに ]	136
11.4.7	同時性 III [ ...するまで ]	137
11.5	副詞節 II [ 条件 ]	137
11.5.1	条件を意味する副詞節の基礎	137
11.5.2	条件文の分類	137
11.5.3	条件文 I [ 事実 ]	137
11.5.4	条件文 II [ 可能性 ]	137
11.5.5	条件文 III [ 非事実 ]	138
11.6	副詞節 III [ 譲歩 ]	138
11.6.1	譲歩を意味する副詞節の基礎	138
11.6.2	譲歩文の分類	138
11.6.3	譲歩文 I [ 事実 ]	138
11.6.4	譲歩文 II [ 可能性 ]	138
11.6.5	譲歩文 III [ 非事実 ]	139
11.7	副詞節 IV [ 比較 ]	139
11.7.1	比較を意味する副詞節の基礎	139
11.7.2	比較級を使った比較	139
11.7.3	同等性	139
11.7.4	比例	140
11.7.5	想像にもとづく比較	140
11.8	副詞節 V [ 理由 ]	140
11.8.1	理由を意味する副詞節の基礎	140
11.8.2	客観的な理由	140
11.8.3	主観的な理由	140
11.8.4	他人が主張している理由	141
11.9	副詞節 VI [ 目的 ]	141
11.9.1	目的を意味する副詞節の基礎	141
11.9.2	肯定的な目的	141
11.9.3	否定的な目的	141
11.9.4	「もっと...するように」を意味する副詞節	141
11.10	副詞節 VII [ 結果 ]	141
11.10.1	結果を意味する副詞節の基礎	141
11.10.2	結果を意味する副詞節の作り方	141
11.10.3	事実としての結果を述べる副詞節	142
11.11	名詞節 I [ 目的と結果 ]	142
11.11.1	目的または結果を意味する名詞節の基礎	142
11.11.2	目的を意味する名詞節	143
11.11.3	結果を意味する名詞節	143
11.12	名詞節 II [ 話法 ]	144
11.12.1	話法の基礎	144
11.12.2	直接話法	144
11.12.3	間接話法の基礎	144
11.12.4	平叙文の間接話法	144
11.12.5	疑問文の間接話法	145
11.12.6	命令文の間接話法	145
11.12.7	間接話法で複文を伝達する場合の注意点	146

<b>第 12 章 動詞 V [ 準動詞 ]</b>	<b>146</b>
12.1 準動詞の基礎	146
12.1.1 準動詞とは何か	146
12.1.2 準動詞の分類	146
12.1.3 分詞についての復習	147
12.2 現在分詞	147
12.2.1 現在分詞とは何か	147
12.2.2 現在分詞の作り方	147
12.2.3 形式受動態動詞の現在分詞	147
12.2.4 不規則動詞の現在分詞	147
12.2.5 現在分詞の変化	148
12.3 未来分詞	148
12.3.1 未来分詞とは何か	148
12.3.2 未来分詞の作り方	148
12.3.3 sum の未来分詞	149
12.3.4 未来分詞の変化	149
12.4 分詞の用法	149
12.4.1 分詞の時制	149
12.4.2 分詞の限定用法	149
12.4.3 分詞の名詞的用法	149
12.4.4 分詞の叙述用法	150
12.4.5 分詞構文	150
12.4.6 絶対的奪格	150
12.5 目的分詞	151
12.5.1 目的分詞とは何か	151
12.5.2 目的分詞の変化	151
12.5.3 目的分詞の対格	151
12.5.4 目的分詞の奪格	151
12.5.5 形式受動態動詞の目的分詞	151
12.6 不定詞	152
12.6.1 この節について	152
12.6.2 不定詞とは何か	152
12.6.3 不定詞の意味	152
12.6.4 不定詞の能動態・現在	152
12.6.5 不定詞の受動態・現在	153
12.6.6 不定詞の能動態・未来	153
12.6.7 不定詞の受動態・未来	153
12.6.8 不定詞の能動態・完了	154
12.6.9 不定詞の受動態・完了	154
12.6.10 形式受動態動詞の不定詞	154
12.7 動名詞	154
12.7.1 動名詞の基礎	154
12.7.2 動名詞の作り方	155
12.7.3 形式受動態動詞の動名詞	155
12.7.4 不規則動詞の動名詞	155
12.7.5 動名詞の変化	155
12.7.6 動名詞の用法	155
12.8 動形容詞	156
12.8.1 動形容詞の基礎	156
12.8.2 動形容詞の作り方	156
12.8.3 動形容詞の変化	156
12.8.4 動形容詞の用法	157
12.8.5 動形容詞の限定用法	157

目次	13
12.8.6 動形容詞の名詞的用法 . . . . .	157
12.8.7 sum の補語としての動形容詞 . . . . .	157
12.8.8 動形容詞による動名詞の代用 . . . . .	158
参考文献	158
索引	160

## 第1章 ラテン語の基礎

### 1.1 ラテン語の基礎の基礎

#### 1.1.1 ラテン語とは何か

この「ゼロからのラテン語」という文章は、ラテン語というものについて解説することを目的とするチュートリアルです。そこで、まず最初に、「ラテン語とは何か」という話から始めることにしたいと思います。

「ラテン語」(英語では Latin)というのは、古代ローマで共通語として使われていた言語のことです。

古代ローマは、紀元前 753 年にイタリアのテヴェレ川のほとりに建国された国家です。当初は都市国家でしたが、しだいに領土を拡大していった。紀元前 31 年には地中海に面した諸国を完全に統一するまでに発展しました。しかし、395 年に西ローマ帝国と東ローマ帝国に分裂して、前者は 476 年、後者は 1453 年に滅亡しました。

ラテン語が古代ローマの共通語になった理由は、古代ローマを建国した人々が話していた言語がラテン語だったからです。彼らは、自分たちが住んでいる土地を「ラティウム」と呼び、自分たちが話している言語を「リングウァ・ラティーナ」(ラティウムの言語)と呼んでいました。この「ラティウム」という言葉が、「ラテン」という言葉の由来です。

ちなみに、ラティウムに住んでいた人々は自分たちを「ラティーニー」(ラティウム人たち)と呼んでいたのですが、古代ローマが建国されたのちは、「ラティーニー」ではなく「ローマーニー」(ローマ人たち)という言葉が使われるようになりました。

#### 1.1.2 ラテン語の系統

言語と言語とのあいだには、共通の親から誕生したという姉妹の関係を見出すことができる場合があります。言語の親は「祖語」(英語では parent language または protolanguage)と呼ばれ、共通の親を持つ言語は「姉妹語」(英語では sister language)と呼ばれます。

ラテン語にも、共通の親を持つ姉妹がいます。姉妹の一人はオスク語で、もう一人はウンブリア語です。前者はイタリア南部、後者はイタリア中部で使われていましたが、それらの地方が古代ローマによって征服されたのちは、使う人がいなくなってしまいました。ラテン語とオスク語とウンブリア語は、総称して「イタリック語派」と呼ばれます。

イタリック語派の祖語には、多くの姉妹がいます。インド・イラン語派、ギリシア語派、スラブ語派、ゲルマン語派などです。これらの姉妹たちは、総称して「インド・ヨーロッパ語族」または「印欧語族」と呼ばれます。

#### 1.1.3 古典ラテン語

一口に「ラテン語」と言っても、時代や使用目的などによって多少の差異があります。私たちが目にするラテン語の文法書や辞書の多くが対象としているのは、紀元前 1 世紀ごろに成立して、文学作品などを書くために使われた、「古典ラテン語」(英語では classical Latin)と呼ばれるラテン語です。

古典ラテン語は、ローマ帝国が衰退したのちも、ほとんど変化することなく、文学、神学、哲学、自然科学などの文章を書くために使われ続けましたので、これを習得することによって読むことができるようになる文献は歴大な数に上ります。

ちなみに、西洋の古い文献を読む人間にとっては、古典ラテン語のほかに、古典ギリシア語もまた重要な言語の一つです。古典ラテン語と古典ギリシア語は、総称して「西洋古典語」と呼ばれます。

#### 1.1.4 ロマンズ語

どのような言語でも、文語(書き言葉)というのが保守的なのに対して、口語(話し言葉)というのは時代とともに大きく変化していくのが普通です。ラテン語も、その口語はしだいに変化していった。古典ラテン語とはかなり異なる言語になっていきました。また、ラテン語の場合は、その変化が地域ごとに別々の方向へ進みましましたので、ついにはいくつかの異なる言語へと分裂してしまいました。

それぞれの地域でラテン語が変化することによって誕生した言語は、総称して「ロマンズ語」と呼ばれます。ロマンズ語に分類される言語としては、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、イタリア語、ルーマニア語などがあります。

## 1.1.5 ラテン語の現在

現在、ラテン語を母国語として日常的に使っている人間というのはまったく存在していません。その意味では、ラテン語は「死語」だと言っていいでしょう。

しかし、現在もなお、ローマ・カトリック教会の教皇庁があるバチカン市国では、ラテン語が、イタリア語とともに公用語として使われています。また、ラテン語に翻訳された童話なども次々と出版されています。さらに、生物の学名を作るために使われている言語もラテン語です。このように、ラテン語というのは、まったく使われなくなってしまった言語というわけではないのです。

## 1.2 文字

## 1.2.1 ラテンアルファベット

ラテン語は、「ラテンアルファベット」と呼ばれる文字を使って表記されます。

ローマ人たちは、建国の時代にはまだ文字を持っていませんでしたが、そののち、ギリシア文字を改作してラテン語を表記するための文字を作りました。それがラテンアルファベットです。ラテンアルファベットは、現在、イタリア語やフランス語などのロマンス語に受け継がれているだけでなく、英語やドイツ語など、ロマンス語以外の言語でも使われています。

## 1.2.2 ラテン語で使われる文字

先ほど、イタリア語、フランス語、英語、ドイツ語などでは、文字としてラテンアルファベットが使われていると書きましたが、厳密に言えば、それぞれの言語で使われる文字の一覧は、それぞれの言語ごとに微妙に異なっています。

ラテン語で使われる文字は、基本的には 23 種類で、それぞれに大文字と小文字とがあります。それらの大文字と小文字と名称を表にすると、次のようになります。

大文字	小文字	名称	大文字	小文字	名称	大文字	小文字	名称
A	a	アー	I(J)	i(j)	イー	R	r	エル
B	b	ベー	K	k	カー	S	s	エス
C	c	ケー	L	l	エル	T	t	テー
D	d	デー	M	m	エム	U(V)	u(v)	ウー
E	e	エー	N	n	エン	X	x	イクス
F	f	エフ	O	o	オー	Y	y	ユー
G	g	ゲー	P	p	ペー	Z	z	ゼータ
H	h	ハー	Q	q	クー			

ちなみに、小文字というのは中世に考案されたもので、それ以前は大文字だけしかありませんでした。それから、J という文字も、I があらわしていた 2 種類の発音を区別するために、中世に新しく作られたものです。U と V は、もともとは同じ文字で、書体が異なるだけだったのですが、中世以降は、発音の相違を示すために使い分けられるようになりました。I と J、U と V の使い分けについては、第 1.3 節で説明したいと思います。

## 1.2.3 大文字と小文字の使い分け

小文字が考案された中世以降は、大文字と小文字とが使い分けられるようになっていきました。

大文字と小文字とをどのように使い分けるかという規則は、言語ごとに異なります。現在のラテン語では、人名や地名のような、特定のものを指示する単語の先頭は大文字にして、それ以外は小文字を使う、という規則が採用されています。

## 1.2.4 句読点

文や文章の構造を示すために使われる文字は、「句読点」(英語では punctuation mark) と呼ばれます。ラテン語には、もともとは句読点というものは存在していませんでしたが、現在では次のような句読点が使われています。

空白	単語と単語との切れ目を示す。
コンマ (,)	文を構成する部分の切れ目を示す。

コロン (:)	コロンによって示される部分よりも大きな部分の切れ目を示す。
セミコロン (;)	コロンによって示される部分よりも大きな部分の切れ目を示す。
ピリオド (.)	文の終わりを示す。
疑問符 (?)	疑問文の終わりを示す。
感嘆符 (!)	感嘆文の終わりを示す。

## 1.3 発音

### 1.3.1 発音の基礎

言葉として発せられた音声は、「音素」(英語では phoneme) と呼ばれる最小単位に細分化することができます。

ラテンアルファベットのそれぞれの文字は、基本的には、何らかの音素に対応していると考えることができます。ただし、文字と音素との対応は、言語ごとに多少の相違があります。また、一つの言語の中でも、同じ文字が場合によって異なる音素をあらわすことがあります。

### 1.3.2 母音

声帯の振動が妨害をほとんど受けなくて口の外に出てくる音素は、「母音」(英語では vowel) と呼ばれます。母音には、短く発音されるものと長く発音されるものがあり、前者は「短母音」、後者は「長母音」と呼ばれます。

ラテン語では、短母音として、

a(ア) e(エ) i(イ) o(オ) u(ウ) y

という六つのものが使われます。

これらの六つの短母音のうちで、a、e、i、o、uの五つは、日本語でも使われている音素ですが、yは、日本語では使われていない音素です。yは、唇を丸めて前に突き出して、「イ」と「ウ」の間のように発音します。

### 1.3.3 長音符号

ラテン語の短母音のそれぞれには、それに対応する長母音があります。ところが厄介なことに、ラテン語では、対応する短母音と長母音とは、同じ文字で表記されるのです。つまり、aという文字は、その文字を見ただけでは、「ア」と発音するべきなのか「アー」と発音するべきなのか分からないということです。

ですから、ラテン語の単語を正しく発音するためには、それに含まれている母音のそれぞれが長母音なのか短母音なのかということを、単語ごとに覚える必要があります。

ラテン語の辞書や文法書では、長母音を示すために、「長音符号」(英語では macron) と呼ばれる記号が使われます。長音符号というのは、

ā ē ī ō ū ŷ

というような、文字の上にかかれた水平な線のことで、長音符号は、その下にある文字が長母音だということをあらわします。たとえば、āは、「アー」という長母音をあらわしています。

ŷは、yと同じように、日本語では使われていない音素です。

ラテン語の辞書や文法書では、短母音を示す  $\grave{}$  という記号もしばしば使われます。この記号は、

ă ě ĭ ǒ ŭ ǎ

というように文字の上にかかれることによって、その下にある文字が短母音だということをあらわします。たとえば、ăは、「ア」という短母音をあらわしています。ただし、この記号が使われるのは、短母音だということを強調したいときだけです。強調する必要がない場合は、記号を何も書かないことによって、短母音だということをあらわします。

### 1.3.4 子音

舌や唇や歯などで息の流れを変化させることによって発する音素は、「子音」(英語では consonant) と呼ばれます。

ラテン語では、次のような子音が使われます。



b	「バ」「ピ」「ブ」「ベ」「ボ」の子音。たとえば、beō (幸福にする) は「ベオー」。
p	「パ」「ピ」「プ」「ペ」「ポ」の子音。たとえば、pūpa (人形) は「プーパ」。
d	「ダ」「ディ」「ドウ」「デ」「ド」の子音。たとえば、dō (与える) は「ドー」。
t	「タ」「ティ」「トゥ」「テ」「ト」の子音。たとえば、tū (あなた) は「トゥー」。
g	「ガ」「ギ」「グ」「ゲ」「ゴ」の子音。たとえば、ego (私) は「エゴ」。
c	「カ」「キ」「ク」「ケ」「コ」の子音。たとえば、capiō (捕える) は「カピオー」。
q	常に qu という形で使われて、qua (クア)、qui (クイ)、quu (クウ)、que (クエ)、quo (クオ) のような、ワ行の子音を直後に伴ったカ行の子音をあらわします。たとえば、quatiō (振動させる) は「クァティオー」。
ph	「帯気音」(英語では aspirate) と呼ばれる息の音を直後に伴ったパ行の子音。しかし、p と同じ発音でも問題はありません。たとえば、phōca (アザラシ) は「ポーカ」。
th	帯気音を直後に伴ったタ行の子音。しかし、t と同じ発音でも問題はありません。たとえば、ēthica (倫理学) は「エーティカ」。
ch	帯気音を直後に伴ったカ行の子音。しかし、c と同じ発音でも問題はありません。たとえば、ēchō (山彦) は「エーコー」。
l	「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」の子音。たとえば、lūdō (遊ぶ) は「ルードー」。
r	l と同じでラ行の子音ですが、舌を歯茎に完全には接触させないで発音します。たとえば、ratiō (計算) は「ラティオー」。
m	「マ」「ミ」「ム」「メ」「モ」の子音。たとえば、māter (母) は「マーテル」。
n	「ナ」「ニ」「ヌ」「ネ」「ノ」の子音。たとえば、nōmen (名前) は「ノーメン」。
h	「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」の子音。たとえば、habeō (持つ) は「ハベオー」。
f	「ファ」「フィ」「フウ」「フェ」「フォ」の子音。たとえば、fōrma (形) は「フォルマ」。
s	「サ」「シ」「ス」「セ」「ソ」の子音。たとえば、sēnsus (感覚) は「セーンスス」。
z	「ザ」「ジ」「ズ」「ゼ」「ゾ」の子音。たとえば、zōna (帯) は「ゾーナ」。
x	「クス」という感じで、カ行の子音を発音したのち、サ行の子音を発音します。たとえば、hexagōnum (六角形) は「ヘクサゴーンム」。
v(u)	「ワ」「ウィ」「ウウ」「ウエ」「ウオ」の子音。たとえば、vīta (生命) は「ウィータ」。
j(i)	「ヤ」「ユ」「イエ」「ヨ」の子音。たとえば、jocus (冗談) は「ヨクス」。

### 1.3.5 発音に関する細かい規則

以上に述べた文字と音素との対応を知っていれば、ほとんどの単語を発音することができるのですが、さらに細かい規則を知らなければ正しく発音することのできない単語もあります。そこで、発音に関する細かい規則をいくつか列挙しておくことにします。

- (1) 子音をあらわす同じ文字が二つ連続している場合、左側の文字は「ッ」の発音(つまる音、促音)をあらわします。たとえば、

fossa (溝)	フォッサ
hippopotamus (カバ)	ヒッポポタムス
littera (文字)	リッテラ

というように発音します。ただし、連続している子音が m または n の場合、左側の文字は「ン」の発音(はねる音、撥音)をあらわします。たとえば、

gemma (宝石)	ゲンマ
annus (年)	アンヌス

というように発音します。

- (2) 母音の前にある ngu や su は、qu と同じように、ワ行の子音を直後に伴った子音をあらわします。たとえば、

lingua (舌、言葉)	リングウァ
suāsīō (説得)	スウァーシオー

というように発音します。

- (3) *j(i)* が母音と母音とのあいだに挟まれている場合、その *j(i)* は、「イ」ののちにヤ行の子音、という発音になります。また、*j(i)* の直前の母音が長母音の場合、それは短母音になります。たとえば、

*mājor* (より大きな)   マイヨル  
*pējor* (より悪い)    ペイヨル

というように発音します。ただし、*Gaius* という人名だけは例外で、「ガイユス」ではなく「ガイウス」と発音します。

- (4) *s* または *t* の直前にある *b* は、バ行ではなくパ行の子音になります。たとえば、

*urbs* (都市)               ウルブス  
*obtimeō* (手に入れる)   オプティネオー

というように発音します。

### 1.3.6 文字の使い分け

古代ローマが繁栄していた時代のラテン語では、*V* と *U* とは同じ文字で、単に書体が違うだけでした。そして、ワ行の子音と母音の「ウ」は、どちらもその文字を使ってあらわされていました。また、当時は *J* という文字がまだありませんでしたので、ヤ行の子音と母音の「イ」についても、*I* という文字で両方があらわされていました。ですから、古代ローマの時代に建てられた建築物に刻まれた碑文では、*V* が母音の「ウ」をあらわしていたり、*I* がヤ行の子音をあらわしていたりします。

しかし、それでは不便なので、ワ行の子音と母音の「ウ」については、10世紀ごろから、*V(v)* で子音をあらわして、*U(u)* で母音をあらわす、という使い分けが一般化しました。

ヤ行の子音と母音の「イ」についても、15世紀に *J(j)* という新しい文字が作られて、*J(j)* で子音、*I(i)* で母音をあらわすという使い分けが図られるようになりました。

しかし、現代の文献の中には、*V(v)* と *J(j)* を使わないで、*U(u)* でワ行の子音をあらわしたり、*I(i)* でヤ行の子音をあらわしたりしているものも存在しますので、注意が必要です。

### 1.3.7 カタカナによる *y* と *ȳ* の表記

すでに述べたように、*y* と *ȳ* は、日本語では使われていない音素です。したがって、それらの音素をあらわすカタカナというのは存在しないわけですが、どうしてもカタカナで表記したい場合は、通常、「ユ」(小さなユ)を使います。たとえば、

*cylindrus* (円筒)    キュリンドルス  
*symbolum* (記号)   シュンボルム  
*tȳphōn* (台風)     テューポーン  
*orȳza* (稲)        オリューザ

というように表記するわけです。

## 1.4 音節

### 1.4.1 音節の基礎

一つの単語の発音は、音素の列から構成されるわけですが、音素の列は、ひとまとまりに感じられるいくつかの部分に区切ることができます。そのような、発音の面から単語を区切ってできたそれぞれの部分は、「音節」(英語では *syllable*) と呼ばれます。

日本語の場合、ひらがなやカタカナは、基本的には一つの文字が一つの音節をあらわしていると考えることができます。ただし、「きゃ」「きゅ」「きょ」などの拗音は、2文字で一つの音節をあらわします。

### 1.4.2 音節の区切り方

ラテン語の単語は、次のような規則にしたがって音節に区切ることができます。

- (1) 音節は、母音を中心として構成されます。音節のうちでもっとも単純なものは、1個の母音

だけから構成される音節です。子音は、基本的には直後の母音と結合して、「子音 + 母音」という構造の音節を作ります。ですから、arēna (砂) dea (女神) は、

a-rē-na de-a

と区切られます。

- (2) 2 個の母音が、ae、au、ei、eu、oe、ui のいずれかの形で連続したものは、「二重母音」(英語では diphthong) と呼ばれます。二重母音は、一つの音節の構成要素とみなされます。ですから、caepa (タマネギ) aura (微風) は、

cae-pa au-ra

と区切られます。

- (3) 二つの子音が連続する場合、最初の子音は前の音節の一部となって、「母音 + 子音」または「子音 + 母音 + 子音」という構造の音節を作ります。ですから、ōrdō (秩序) mēnsa (机) saxum (岩石) は、

ōr-dō mēn-sa sak-sum

と区切られます。

- (4) x があらわしている ks という発音は、「二重子音」(英語では double consonant) と呼ばれます。二重子音も、二つの子音が連続しているわけですから、音節は k と s のあいだで区切られます。たとえば、laxō (ゆるめる) texō (織る) は、

lak-sō tek-sō

と区切られます。

- (5) 単語の末尾の子音も、前の音節の一部になります。ですから、ōtium (暇) fidēs (信頼) は、

ō-ti-um fi-dēs

と区切られます。

- (6) 3 個の子音が連続する場合は、最初の 2 個が前の音節の一部になります。ですから、sanctus (神聖な) temptō (試験する) は、

sanc-tus temp-tō

と区切られます。

- (7) b、p、d、t、g、c、ph、th、ch は、総称して「破裂音」(英語では plosive) と呼ばれ、l と r は、総称して「流音」(英語では liquid) と呼ばれます。破裂音の直後に流音がある場合、または f の直後に流音がある場合(たとえば、bl、br、pl、pr、fl、fr など)、それらの 2 個の子音は、一つの音節の一部になります。ですから、libra (天秤) rostrum (くちばし) は、

lī-bra rōs-trum

と区切られます。

- (8) 単語の先頭に連続する子音がある場合、それらの子音は一つの音節の一部になります。ですから、spatium (空間) scribō (書く) は、

spa-ti-um scrī-bō

と区切られます。

#### 1.4.3 音節の長短

ラテン語の音節は、「長短」(英語では quantity) と呼ばれる性質を持っています。つまり、音節には長いものと短いものがあるということです。音節の長短というのは、基本的には、それを発音するために必要となる時間の長さのことだと考えることができます。

音節の長短は、次のような規則にしたがって決定されます。

- (1) 長母音または二重母音を含んでいる音節は、長い音節です。ですから、ēchō (山彦) の ē と chō、oconomia (経済) の oe、caelum (天) の cae などは、長い音節です。このような音節は、「本質的に長い」(英語では long by nature) と言われます。

- (2) 短母音を含んでいる音節は、基本的には短い音節です。ですから、ego (私) の e と go, nōmen (名前) の men などは、短い音節です。
- (3) ただし、短母音を含む音節であっても、その母音のうしろに二個以上の連続する子音がある場合は、長い音節になります。ですから、sanctus (神聖な) の sanc は、長い音節です。このような音節は、「位置によって長い」(英語では long by position) と言われます。
- (4) 一つの音節としては短母音のうしろに二個以上の連続する子音がないとしても、次の音節の先頭にある子音も含めて考えると二個以上の連続する子音がある、という場合も、位置によって長い音節になります。ですから、hospes (客) の hos、lectus (ベッド) の lec、laxō (ゆるめる) の lak などは、位置によって長い音節です。
- (5) ただし、短母音のうしろに二個の連続する子音があったとしても、それらが、破裂音の直後に流音があるもの、または f の直後に流音があるものだった場合は、短い音節になります。ですから、cuprum (銅) の cu、lacrima (涙) の la などは、短い音節です。

#### 1.4.4 音節の長短を表示する記号

単語を構成している音節の長短の表示には、通常、— と ∪ という記号が使われます。— が長い音節、∪ が短い音節をあらわします。たとえば、sēnsus (感覚)、homō (人間)、dōnatiō (贈り物)、māteries (物質)、bacterium (細菌) のそれぞれを構成する音節の長短は、

sēn-sus	— ∪
ho-mō	∪ —
dō-nā-ti-ō	— — ∪ —
mā-te-ri-ēs	— ∪ ∪ —
bac-te-ri-um	— ∪ ∪ ∪

と表示されます。

#### 1.4.5 音節の呼び名

ラテン語では、単語の末尾の音節は ultima と呼ばれます。そして、最後から二番目の音節は paenultima、最後から三番目の音節は antepaenultima と呼ばれます。

### 1.5 アクセント

#### 1.5.1 アクセントの基礎

言語の多くは、2 個以上の音節から構成される単語を発音するときに、その中の特定の音節だけを高く発音したり強く発音したりする、という規則を持っています。そのような言語において、高く発音されたり強く発音されたりする音節は、そこに「アクセント」(英語では accent) が置かれると言われます。高さのアクセントは「高低アクセント」(英語では pitch accent) と呼ばれ、強さのアクセントは「強弱アクセント」(英語では stress accent) と呼ばれます。

ラテン語の場合も、2 個以上の音節から構成される単語を発音するときは、それらの音節のどれか一つにアクセントが置かれます。それが高低アクセントなのか強弱アクセントなのかという点については、両方の説があるのですが、高低アクセントだという説のほうが有力です。

アクセントが置かれる音節は、通常、その音節に含まれる母音をあらわす文字の上に、´ という記号を書くことによって表示されます。

#### 1.5.2 アクセントの規則

ラテン語では、二音節以上の単語においてアクセントが置かれる音節は、次の規則にしたがって決定されます。

- (1) 末尾の音節 (ultima) にアクセントが置かれることは決してありません。ですから、二音節の単語は、かならず一音節目にアクセントが置かれます。

たとえば、do-mus (家)、mō-tus (運動) は、

dó-mus mó-tus

という位置にアクセントが置かれます。

- (2) 三音節以上の単語は、末尾から数えて二番目または三番目の音節 (つまり paenultima また

は antepaenultima) にアクセントが置かれます。ですから、三番目の音節よりも前にアクセントが置かれることはありません。

- (3) 末尾から数えて二番目の音節 (paenultima) が長い音節ならば、そこにアクセントが置かれます。

たとえば、nā-tū-la (自然) ar-gen-tum (銀) は、

na-tú-la ar-gén-tum

という位置にアクセントが置かれます。

- (4) 末尾から数えて二番目の音節 (paenultima) が短い音節ならば、末尾から数えて三番目の音節 (antepaenultima) にアクセントが置かれます。

たとえば、po-pu-lus (民衆) mo-no-ce-rōs (一角獣) は、

pó-pu-lus mo-nó-ce-ros

という位置にアクセントが置かれます。

### 1.5.3 後倚辞とアクセント

ラテン語には、「後倚辞」または「前接辞」と呼ばれる単語のようなものがあります (英語では enclitic と呼ばれます)。これは、単語の末尾に連結されることによって何らかの機能を発揮するものです。後倚辞には、「...と...」を意味する -que、「...または...」を意味する -ve、「はい」または「いいえ」で答えることのできる疑問文を作る -ne などがあります。

単語の末尾に後倚辞が連結された場合、その単語のアクセントは、後倚辞の直前の音節へ移動します。

たとえば、ro-sa (バラ) pan-thē-ra (ヒョウ) のそれぞれに -que が連結されると、

ró-sa → ro-sá-que

pan-thé-ra → pan-the-rá-que

というようにアクセントが移動します。

ただし、末尾から数えて三番目の音節 (antepaenultima) にアクセントが置かれている単語に後倚辞が連結された場合は、後倚辞の直前の音節にアクセントが置かれるだけではなくて、もともとアクセントが置かれていた音節も、そのアクセントを保持します。つまり、その場合は、一つの単語の中の二つの音節にアクセントが置かれることになるわけです。

たとえば、mā-chi-na (機械) spa-ti-um (空間) のそれぞれに -que が連結されると、

má-chi-na → má-chi-ná-que

spá-ti-um → spá-ti-úm-que

というように、二箇所にもアクセントが置かれます。

### 1.5.4 単語の変化とアクセント

ラテン語の単語の多くは、文の中での機能に応じて、その語尾の形が変化します。アクセントの位置というのは、基本的には上に述べた規則にしたがって決定されますので、同じ単語であっても、語尾の形の変化に伴ってアクセントの位置が変化することもあります。

たとえば、missiō (使命) という単語は、「使命は」を意味するときは missiō という形ですが、「使命の」を意味するときは missiōnis という形になります。ですから、アクセントの位置も、

使命は mīs-si-o

使命の mis-si-ó-nis

というように、語尾の形の変化に伴って変化します。

ただし、語尾の形が変化してもアクセントの位置が変化しない、という例外的な単語もわずかながら存在します。

たとえば、ingenium (才能) という単語は、「才能は」を意味するときは ingenium という形で、「才能の」を意味するときは ingenī という形ですので、規則にしたがえば、形の変化に伴ってアクセントの位置も変化するはずですが、実際には、

才能は in-gé-ni-um

才能の in-gé-ni

というように、同じ位置にアクセントが置かれます。

## 1.6 文法の基礎

### 1.6.1 文法とは何か

言語というのは、さまざまな規則の集合体だと考えることができます。言語を構成している規則は、大きく二種類に分類することができます。ひとつは単語と意味とを対応させる規則で、もうひとつは単語の形の変化やそれらの並べ方についての規則です。

単語と意味とを対応させる規則は、「意味論」(英語では *semantics*) と呼ばれます。それに対して、単語の形の変化やそれらの並べ方についての規則は、「文法」(英語では *grammar*) と呼ばれます。

文法は、単語の形の変化についての規則と、単語の並べ方についての規則に分類することができます。前者は「形態論」(英語では *morphology*) と呼ばれ、後者は「統語論」(英語では *syntax*) と呼ばれます。

### 1.6.2 文法にもとづく言語の類型

人類によって使用されているさまざまな言語は、それが持っている文法の性質によって、いくつかの類型に分類することができます。文法にもとづく言語の類型としては、「孤立語」(英語では *isolating language*)、「屈折語」(英語では *inflectional language*)、「膠着語」(英語では *agglutinative language*) などがあります。

孤立語というのは、単語自体は変化しないで、それらの語順によって文の中での単語の機能が決定されるという文法を持つ言語のことです。孤立語に分類される言語としては、中国語、チベット語、タイ語、ベトナム語などがあります。

屈折語というのは、文の中での単語の機能が、単語自体の形が変化することによって表示されるという文法を持つ言語のことです。屈折語に分類される言語としては、サンスクリット語、アラビア語などがあります。ちなみに、ラテン語も、屈折語に分類される言語です。

膠着語というのは、実質的な意味を持つ単語と、それに対して何らかの機能を付与する単語とを、あたかも膠(にかわ)で接着するかのように結びつけることによって、文の中での単語の機能を決定するという文法を持つ言語のことです。膠着語に分類される言語としては、韓国語、トルコ語、スワヒリ語などがあります。ちなみに、日本語も、膠着語に分類される言語です。

### 1.6.3 品詞

一つの言語の中で使われるそれぞれの単語は、その文法的な性質によって、いくつかの種類のいずれかに分類することができます。単語を文法的な性質で分類したとき、その単語が所属している種類のことを、その単語の「品詞」(英語では *part of speech*) と呼びます。

ラテン語の単語は、9個の品詞のいずれかに分類されます。それぞれの品詞について、日本語での呼び方、英語での呼び方、略称、そして文法的な性質を示すと、次のようになります。

名詞	noun	<i>n.</i>	事物の名称として使われる単語
代名詞	pronoun	<i>pron.</i>	名詞の代わりとして使われる単語
形容詞	adjective	<i>adj.</i>	事物を形容するために使われる単語
数詞	numeral	<i>num.</i>	数をあらわす単語
動詞	verb	<i>v.</i>	事物の動作、作用、状態、存在などをあらわす単語
副詞	adverb	<i>adv.</i>	動詞、形容詞、副詞などを修飾する単語
前置詞	preposition	<i>prep.</i>	名詞または名詞に相当する語句の前に置かれて、文のほかの部分とその語句との関係を示す単語
接続詞	conjunction	<i>conj.</i>	文と文、または文の部分と文の部分とを接続して、それらの関係を示す単語
間投詞	interjection	<i>int.</i>	感情の表出や呼びかけなどで使われる単語

間投詞の略称としては、*int.* のほかに、*interj.* が使われることもあります。

インド・ヨーロッパ語族に属している、英語、ドイツ語、フランス語などの言語には、「冠詞」(英語では *article*) と呼ばれる品詞に分類される単語が存在します。ラテン語もインド・ヨーロッ

バ語族に属している言語ですが、冠詞は、ラテン語には存在しません。ちなみに、ロシア語も、インド・ヨーロッパ語族に属しているけれども冠詞が存在しない言語です。

#### 1.6.4 変化する品詞と変化しない品詞

ラテン語というのは屈折語の一種ですから、ラテン語の単語は、文の中での機能に応じて形が変化します。しかし、すべての単語が変化するというわけではありません。変化するの特定の品詞の単語だけで、それ以外の品詞の単語はほとんど変化しません。

ラテン語の9個の品詞は、変化するかどうかによって、次のように分類することができます。

変化するもの	名詞、代名詞、形容詞、数詞、動詞
変化しないもの	副詞、前置詞、接続詞、間投詞

変化する品詞は、さらに、どのように変化するのかという観点から、名詞、代名詞、形容詞、数詞というグループと、動詞とに分類することができます。つまり、名詞、代名詞、形容詞、数詞は、どれも同じように変化するのですが、動詞の変化は、それらの品詞の変化とはまったく異なっているということです。

英語やラテン語などでは、名詞、代名詞、形容詞、数詞の場合と、動詞の場合とでは、変化を意味する言葉が違っています。名詞、代名詞、形容詞、数詞の変化は、英語では declension、ラテン語では *dēclīnātiō* と呼ばれるのに対して、動詞の変化は、英語では conjugation、ラテン語では *conjugātiō* と呼ばれます。日本語の文献の中でも、declension を「格変化」、conjugation を「活用」というように、それら呼び分けていることがしばしばあります。

副詞は、変化するかどうかによって品詞を分類する場合、変化しないグループに分類されますが、まったく変化しないというわけではありません。副詞と形容詞には、「比較変化」と呼ばれる変化があります。比較変化については、第 5.6 節で説明することにしたいと思います。

## 1.7 文

### 1.7.1 単語の列

単語は、単独でも意味を持ちますが、単独の単語では表現することができない複雑なことから、単語を並べて列を作ることによって表現されます。

現代の多くの言語では、単語を並べるとき、それぞれの単語を空白で区切る、つまり分かち書きをすることによって、それを読みやすいものにしています。ラテン語も、古代ローマの時代には分かち書きは使われていませんでしたが、現在は分かち書きを使用しています。

ちなみに、日本語や中国語では、通常、分かち書きは使われません。

### 1.7.2 文とは何か

一つのまとまった意味をあらわす単語の列は、「文」(英語では sentence) と呼ばれます。

現代の多くの言語では、文の末尾にはピリオド(.)を書くという規則が採用されています。現在のラテン語も同様です。

ちなみに、日本語では、横書きの場合にピリオドが使われることもありますが、通常、文の末尾に書く記号としては、句点(。)が使われます。

また、文字としてラテンアルファベットを使っている現代の言語の多くは、文の先頭の文字を大文字で書くという規則を採用しています。しかし、ラテン語では、この規則はそれほど絶対的なものではありません。ラテン語で文章を書く場合、文の先頭の文字は、大文字で書いてもかまいませんし、小文字で書いてもかまいません。

ちなみに、このチュートリアルの中では、ラテン語の文を書く場合、その先頭の文字を大文字で書くことにしたいと思います。

### 1.7.3 文の分類

文は、その目的によって、次のようないくつかの種類に分類することができます。

**平叙文** 英語では declarative sentence。事実や、話し手の判断などを述べることを目的とする文。「彼は大統領です。」「君の提案は素晴らしい。」「この本は面白くありません。」など。

**疑問文** 英語では interrogative sentence。聞き手から何かを聞き出すことを目的とする文。疑問文の末尾には、通常、ピリオドではなく疑問符(?)を書く(日本語の場合は句点でも疑問符でもよい)。「あなたは彼を愛してるの?」「あなたの名前は何ですか。」など。

**命令文** 英語では imperative sentence。聞き手に対する命令や禁止を目的とする文。語調が強いことを示すために、末尾に感嘆符 (!) が書かれることもある。「この本を読みなさい。」「邪魔するな！」など。

**感嘆文** 英語では exclamatory sentence。話し手の感嘆や驚きなどを表現することを目的とする文。感嘆文の末尾には、通常、ピリオドではなく感嘆符 (!) を書く（日本語の場合は句点でも感嘆符でもよい）。「彼女はなんと美しいんでしょう。」「なんて静かなんだ！」など。

#### 1.7.4 文の要素

ひとつの文は、主語と述語という二つの要素に分解することができます。

「主語」(英語では subject) というのは、文の主題や動作の主体をあらわす 1 個以上の単語のことで、「述語」(英語では predicate) というのは、主語によって指示される対象について何かを述べる 1 個以上の単語のことです。たとえば、「彼女は立ち上がりました。」という文の場合、「彼女は」が主語で、「立ち上がりました」が述語です。同じように、「そのとき、彼が飼っている猫が、縁側で大きなあくびをしました。」という文の場合、「彼が飼っている猫が」が主語で、「そのとき、縁側で大きなあくびをしました」が述語です。

述語は、さらにいくつかの要素に分解することができる場合があります。述語を構成する要素は、その機能によって、次の 4 種類に分類することができます。

**述語動詞** 英語では predicate verb。述語の中心となる動詞。たとえば、「彼は彼女を愛している。」という文の場合、「愛している」が述語動詞。

**目的語** 英語では object。述語動詞があらわしている動作や作用の対象をあらわす 1 個以上の単語。たとえば、「彼は彼女を愛している。」という文の場合、「彼女を」が目的語。

**補語** 英語では complement。述語動詞の意味を補う 1 個以上の単語。たとえば、「彼女は長女である。」という文の場合、「長女」が補語。同じように、「彼らは彼女を議長に選出した。」という文の場合、「議長に」が補語。

**修飾語** 英語では modifier。述語を構成する他の要素を修飾する 1 個以上の単語。「修飾」(英語では modification) というのは、文の要素に対して、意味を限定したり、説明を補足したりすること。たとえば、「昨日、彼は、新聞でその事件を知った。」という文の場合、「昨日」と「新聞で」が修飾語。

#### 1.7.5 授与動詞

「与える」、「贈る」、「貸す」、「売る」、「支払う」のような、「何々に」と「何々を」という二つの目的語を持つことのできる動詞は、「授与動詞」(英語では dative verb) と呼ばれます。

授与動詞が持つことのできる二つの目的語のそれぞれについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そして「何々に」なのか「何々を」なのかを示すと、次のようになります。

間接目的語 indirect object 何々に

直接目的語 direct object 何々を

たとえば、「私は少女に花を贈ります。」という文の場合、「少女に」が間接目的語で、「花を」が直接目的語です。

#### 1.7.6 要素の内部の修飾語

「昨日、彼は、新聞でその事件を知った。」という文の中に含まれている、「昨日」と「新聞で」という修飾語は、どちらも述語動詞を修飾していて、主語からも目的語からも独立して存在しています。しかし、文の要素を修飾する要素は、主語、目的語、補語、修飾語のいずれからも独立して存在している場合だけではなくて、それらの内部に存在している場合もあります。文の要素を修飾する要素が、主語、目的語、補語、修飾語の内部に存在している場合も、それは「修飾語」と呼ばれます。

たとえば、「彼が飼っている猫」という要素の中に含まれている、「彼が飼っている」という要素は、「猫」という要素を修飾している修飾語です。

#### 1.7.7 節と句

文を構成する要素が、1 個の単語ではなくて、2 個以上の単語から構成されている場合、それは「節」(英語では clause) または「句」(英語では phrase) と呼ばれます。



節と句との相違点は、主語と述語を含んでいるかどうかです。主語と述語を含んでいるものは「節」と呼ばれ、それらを含んでいないものは「句」と呼ばれます。

たとえば、「太陽がまぶしかったので」という要素は、「太陽が」という主語と「まぶしかった」という述語を含んでいますので、「節」と呼ばれます。同じように、「彼女を崇拜する人々」という要素も、「人々」という主語と「彼女を崇拜する」という述語を含んでいますので、やはり「節」と呼ばれます。それに対して、「池の中の魚」という要素や、「山のように巨大な動物」という要素は、主語と述語を含んでいませんので、「句」と呼ばれます。

## 第2章 名詞

### 2.1 名詞の基礎

#### 2.1.1 名詞を変化させる要因

第1.6節で説明したように、名詞というのは、変化する品詞の一つです。それでは、名詞を変化させる要因というのは何なのでしょう。つまり、名詞というのは、何が違うことに応じて変化するのでしょうか。

名詞を変化させる要因は、数と格の二つです。

#### 2.1.2 数

日本語の文法においては、文が取り扱う対象の個数によって言い方に変化が生じるということはありません。しかし、地球上の言語のうちには、個数というものに文法上の地位を与えているものがいくつもあります。ラテン語も、そのような言語の一つです。

文法の上で区別される個数の相違は、「数」(英語では number) と呼ばれます。

ラテン語の場合は、1個だけと2個以上という二つの数が、文法の上で区別されます。1個だけという数は「単数」(英語では singular、略称は *sg.* または *sing.*) と呼ばれ、2個以上という数は「複数」(英語では plural、略称は *pl.* または *plur.*) と呼ばれます。

#### 2.1.3 格

名詞が、同じ文の中にある他の単語に対してどのような関係にあるのかということは、「格」(英語では case) と呼ばれます。

「父は母を愛しています。」という日本語の文で考えてみましょう。その中にある「父」という名詞は、「愛する」という動詞に対して、その動作の主体を示すという関係にあります。そして、「母」という名詞は、「愛する」という動詞に対して、その動作の対象を示すという関係にあります。格というのは、このような関係のことです。

日本語では、格は、「格助詞」と呼ばれる、「が」「を」「の」「へ」「から」「で」などの単語を名詞に接続することによって示されます。それに対して、ラテン語などの屈折語では、名詞自体が変化することによって格が示されます。

#### 2.1.4 ラテン語の格

ラテン語には六つの格があります。それぞれの格について、日本語での呼び方、英語での呼び方、そして略称を示すと、次のようになります。

主格	nominative case	<i>nom.</i>
属格	genitive case	<i>gen.</i>
与格	dative case	<i>dat.</i>
対格	accusative case	<i>acc.</i>
奪格	ablative case	<i>abl.</i>
呼格	vocative case	<i>voc.</i>

たとえば、*rosa* (薔薇) という名詞は、単数の場合 (つまり薔薇が1本だけの場合)、格に応じて次のように変化します。

主格	rosa
属格	rosae
与格	rosae
対格	rosam
奪格	rosā
呼格	rosa

そして、複数の場合（つまり薔薇が2本以上ある場合）は、格に応じて次のように変化します。

主格	rosae
属格	rosārum
与格	rosīs
対格	rosās
奪格	rosīs
呼格	rosae

名詞の中には、きわめて少数ですが、これらの六つの格のほか、「地格」(英語では locative) と呼ばれる格を示すための形を持っているものもあります。地格については、第4.1.6項で説明することにしたいと思います。

### 2.1.5 格の用法

六つの格のそれぞれは、次のような用法で使われます。

**主格** 動作や状態などの主体を示します。日本語の「が」や「は」に相当します。ラテン語では、文の補語も主格形で示されます。

Homō animal est. 人間は動物です。

est は、「何々は何々である」ということを意味する動詞です。homō (人間) と animal (動物) は、どちらも単数主格形です。

**属格** 所有や所属などを示します。日本語の「の」に相当します。「AのB」は、BA という語順にするのが普通です。

Incola Japōniae sum. 私は日本の住民です。

sum は、「私は何々である」ということを意味する動詞です。incola (住民) は単数主格形で、Japōniae (日本の) は単数属格形です (単数主格形は Japōnia)。

**与格** 贈与の相手などを示します。日本語の「に」に相当します。ですから、授与動詞の間接目的語は与格形で示されます。

Puellae flōrem dōnō. 私は少女に花を贈ります。

dōnō は、「私是谁々に何々を贈る」ということを意味する動詞です。puellae (少女に) は単数与格形で (単数主格形は puella)、flōrem (花を) は単数対格形です (単数主格形は flōs)。

**対格** 動作や作用の対象を示します。日本語の「を」に相当します。

Fīliam amō. 私は娘を愛しています。

amō は、「私は何々を愛している」ということを意味する動詞です。fīliam (娘を) は単数対格形です (単数主格形は fīlia)。

**奪格** 分離、手段、時間、場所などを示します。日本語の「から」「によって」「で」「において」などに相当します。

lignum serrā secō. 私はのこぎりで木材を切ります。

secō は、「私は何々を切る」ということを意味する動詞です。lignum (木材を) は単数対格形で (単数主格形も同じ形)、serrā (のこぎりで) は単数奪格形です (単数主格形は serra)。

**呼格** 呼びかけを示します。日本語の「よ」に相当します。ちなみに、多くの名詞では、単数呼格は単数主格と同じ形で、それらの形が異なるのは一部の名詞だけです。そして、どんな名詞であっても、複数呼格は複数主格と同じ形です。

Amīce. 友よ。

amīce (友よ) は単数呼格形です (単数主格形は amīcus)。

### 2.1.6 名詞の変化表

ラテン語の文法書では、単語の変化は、「変化表」と呼ばれる表によって示されます。名詞の変化は、

単数主格	複数主格
単数属格	複数属格
単数与格	複数与格
単数対格	複数対格
単数奪格	複数奪格
単数呼格	複数呼格

という形の変化表によって示されます。たとえば、rosa という名詞の変化は、

	単数	複数
主格	rosa	rosae
属格	rosae	rosārum
与格	rosae	rosīs
対格	rosam	rosās
奪格	rosā	rosīs
呼格	rosa	rosae

という変化表によって示されます。

ちなみに、名詞の変化表を書く場合、呼格の行は、主格と呼格の形が異なる名詞の変化を示す場合は必要ですが、それ以外の場合は省略されるのが普通です。

### 2.1.7 名詞の変化の覚え方

名詞の変化を覚えるときは、通常、

単数主格、単数属格、単数与格、単数対格、単数奪格、  
複数主格、複数属格、複数与格、複数対格、複数奪格

という順番で、それぞれの変化形を並べたものを暗唱します。つまり、rosa という名詞の変化を覚えるときは、

rosa, rosae, rosae, rosam, rosā, rosae, rosārum, rosīs, rosās, rosīs

という呪文のようなものを暗唱するわけです。

名詞は、一つ一つがまったく違った変化をするというわけではなくて、いくつかのグループごとに同じような変化をします。ですから、いくつかのパターンを覚えれば、ほとんどすべての名詞にそれを応用することができます。

名詞のグループについては、次の節で説明したいと思います。

### 2.1.8 語幹と語尾

ラテン語では、名詞、形容詞、動詞などは、文の中での機能に応じてその形が変化するわけですが、それらの単語の多くは、単語の末尾の部分だけが変化して、それよりも前の部分は、どの変化形でも同じです。たとえば、rosa という名詞の場合、ros という部分はどの変化形でも同じで、変化するのは、それよりも後ろの部分だけです。

単語の末尾にあって変化する部分は、その単語の「語尾」(英語では ending) と呼ばれます。それに対して、語尾よりも前にあって変化しない部分は、その単語の「語幹」(英語では stem) と呼ばれます。

### 2.1.9 性

ラテン語を含む多くの言語では、個々の名詞が、「性」(英語では gender) と呼ばれる属性を持っています (ちなみに、日本語の名詞は性を持っていません)。

ラテン語の名詞は、三つの性のうちのどれかを持っています。それぞれの性について、日本語での呼び方、英語での呼び方、そして略称を示すと、次のようになります。

男性 masculine *m.*  
 女性 feminine *f.*  
 中性 neuter *n.*

たとえば、campus（平地）は男性、rosa（薔薇）は女性、vinum（ブドウ酒）は中性の名詞です。

名詞の性は、基本的には生物学上の性（英語では sex）とは関係がありません。ですから、pater（父）や filius（息子）が男性で māter（母）や filia（娘）が女性というように、名詞の性と生物学上の性とが一致する場合がありますが、そのような名詞はほんのわずかで、大多数の名詞の性は生物学上の性とは無関係です。

ラテン語が使えるようになるためには、それぞれの名詞について、その性がどれなのかを覚える必要があります。ただし、多くの名詞は、それが所属しているグループが分かれば、その性を自動的に判別することができます。ですから、すべての名詞について一語ごとに性を覚えなくていいというわけではありません。

### 2.1.10 性・数・格の一致

ところで、それぞれの名詞の性というのは、いったいどのような必要性があって、それを覚えておかないといけないのでしょうか。

名詞の性を覚える必要があるのは、形容詞を正しく使うためです。

第1.6節で説明したように、形容詞というのは、変化する品詞の一つです。形容詞を変化させる要因は、性と数と格の三つです。形容詞は、自分の性と数と格が、自分が修飾している名詞の性と数と格に一致するように変化します。

ですから、名詞の性が分かると、それを修飾する形容詞をどのように変化させればいいのかということが分からない、ということになります。また、ラテン語の文を作る場合だけでなく、ラテン語の文を解釈する場合も、どの形容詞がどの名詞を修飾しているのかという組み合わせを厳密に判定するためには、その名詞の性が分かっている必要があります。

## 2.2 名詞のグループ

### 2.2.1 名詞の分類

ラテン語の名詞は、その変化のパターンによって、五つのグループのいずれかに分類されます。

ラテン語の名詞がそのいずれかに分類される五つのグループのそれぞれは、第一変化名詞、第二変化名詞、第三変化名詞、第四変化名詞、第五変化名詞と呼ばれます（英語では、first declension noun, second declension noun, third declension noun, fourth declension noun, fifth declension noun）。

名詞は、その単数属格の語尾に着目することによって、どのグループに分類されるものなのかということを知ることができます。それぞれのグループの単数属格形は、次のような語尾を持っています。

第一変化名詞 -ae  
 第二変化名詞 -ī  
 第三変化名詞 -is  
 第四変化名詞 -ūs  
 第五変化名詞 -eī または -ēī

たとえば、第2.1節で変化を示した rosa（薔薇）という名詞は、単数属格形が rosae ですから、第一変化名詞に分類されることになります。

### 2.2.2 名詞のグループと性

多くの名詞は、それが所属しているグループが分かれば、その性を自動的に判別することができます。なぜなら、第三変化名詞以外のそれぞれのグループは、多少の例外はありますが、所属している名詞が共通の性を持っているからです。

名詞のグループと性との関係は、次のようになっています。

第一変化名詞 女性。

第二変化名詞 単数主格の語尾が *-us* または *-er* のものは男性、*-um* のものは中性。

第四変化名詞 単数主格の語尾が *-us* のものは男性、*-ū* のものは中性。

第五変化名詞 女性。

ですから、第三変化名詞についてはそれぞれの名詞ごとに性を覚える必要がありますが、それ以外のグループについては、少数の例外的な名詞についてだけ、性を覚えればいわけです。

### 2.2.3 辞書に書かれている名詞の項目

ラテン語の辞書では、名詞は、その単数主格形が見出しになっています。ですから、名詞を辞書で調べるときには、その単数主格形を探す必要があります。

そして、ラテン語の辞書では、名詞の項目は、単数主格形の見出しに続けて、単数属格形の語尾と、性が記されています。たとえば、辞書の *rosa* の項目は、

*rosa, -ae, f.* 薔薇。

というように書かれています。この記述から、*rosa* は、単数属格形が *rosae* で性が女性 (*f.*) だ、ということが分かります。

ラテン語の辞書が名詞の項目に単数属格形の語尾を記載している目的は二つあります。一つは、その名詞が所属しているグループを示すため、もう一つは、単数主格形以外の形を求める上での手がかりを与えるためです。

*rosa* の場合は、それが第一変化名詞だということさえ分かれば、それ以外の形は、第一変化名詞の変化パターンから求めることができます。しかし、単数主格形とグループが分かったとしても、それだけではその他の形を求めることができない名詞もあります。

たとえば、*tempus* (時間) という第三変化名詞の場合、それが第三変化名詞だと分かったとしても、その単数主格形と第三変化名詞の変化パターンから単数主格形以外の形を求める、ということではできません。辞書を調べると、*tempus* の項目には、

*tempus, -poris, n.* 時間。

というように書かれています。これを見て、*tempus* の単数属格形が *temporis* だということが分かった段階で、ようやくその他の形を求めることができるようになるのです。

## 2.3 第一変化名詞

### 2.3.1 第一変化名詞の変化

第 2.1 節で名詞の変化について説明したときに例として使った *rosa* (薔薇) という名詞は、第一変化名詞です。

ですから、第一変化名詞の変化については、すでに紹介が終わっているわけですが、復習のためにもう一度、*rosa* の変化表を書いておくことにしましょう。

	単数	複数
主格	<i>rosa</i>	<i>rosae</i>
属格	<i>rosae</i>	<i>rosārum</i>
与格	<i>rosae</i>	<i>rosīs</i>
対格	<i>rosam</i>	<i>rosās</i>
奪格	<i>rosā</i>	<i>rosīs</i>

ところで、この表をよく見ると、単数属格と単数与格と複数主格とが同じ形になっていて、複数与格と複数奪格も同じ形になっています。

単数属格と単数与格と複数主格が同じ形になるというのは第一変化名詞だけの特徴ですが、複数与格と複数奪格が同じ形になるというのは、すべての名詞に共通する性質ですので、覚えておいて損はありません。

### 2.3.2 第一変化名詞の性

第一変化名詞は、その大多数が女性です。すでに紹介した *rosa* (薔薇) も女性ですし、*mensa* (机)、*stella* (星)、*fābula* (物語)、*gemma* (宝石)、*mathēmatica* (数学) なども女性です。

しかし、男性の第一変化名詞というのも例外的に存在します。たとえば、nauta（船乗り）、agricola（農夫）、poëta（詩人）、scriba（書記）、collega（同僚）などは、第一変化名詞ですが、性は男性です。

### 2.3.3 国や地域の名前

国や地域の名前は、その多くが第一変化の女性名詞です。たとえば、Japōnia（日本）、India（インド）、Graecia（ギリシア）、Italia（イタリア）、Hispania（スペイン）、Asia（アジア）、Africa（アフリカ）、Europa（ヨーロッパ）などがそうです。

### 2.3.4 特殊な第一変化名詞

dea（女神）という名詞は、第一変化名詞なのですが、複数与格形と複数奪格形として deīs ではなくて deābus が使われます。その理由は、deus（神）という第二変化名詞の複数与格形と複数奪格形が deīs なので、それと同じ形になるのを避けるためです。

同じ理由で、filia（娘）という第一変化名詞も、filius（息子）という第二変化名詞との混同を避けるために、複数与格形と複数奪格形として filiīs ではなくて filiābus が使われます。

## 2.4 第二変化名詞

### 2.4.1 第二変化名詞の分類

第二変化名詞は、は、その変化のパターンによって、三つのグループのいずれかに分類されます。

第二変化名詞がそのいずれかに分類される三つのグループのそれぞれは、

- 第二変化 -us 型名詞
- 第二変化 -er 型名詞
- 第二変化 -um 型名詞

と呼ばれます。これらのグループの名前に含まれている、-us、-er、-um というのは、それぞれのグループに含まれている名詞の単数主格形の末尾です。

第二変化 -us 型名詞としては、amicus（友）、medicus（医者）、philosophus（哲学者）、equus（馬）、hippopotamus（カバ）、fungus（キノコ）、ludus（遊び）、annus（年）などがあります。

第二変化 -er 型名詞としては、puer（少年）、gener（婿）、socer（義父）、vesper（夕方）、Liber（酒神リーベル）、liber（書物）、ager（畑）、magister（教師）、minister（召使）、caper（山羊）などがあります。

第二変化 -um 型名詞としては、verbum（言葉）、forum（広場）、templum（神殿）、theatrum（劇場）、scriptum（文書）、aurum（金）、argentum（銀）、ferrum（鉄）、pomum（果実）、malum（林檎の実）、pirum（梨の実）などがあります。

### 2.4.2 第二変化名詞の性

第二変化名詞は、所属するグループと性とのあいだに次のような関連性があります。

- us 型   ほとんど男性
- er 型   すべて男性
- um 型   すべて中性

第二変化 -us 型名詞には、例外的に、女性または中性のものが存在します。

女性の第二変化 -us 型名詞は、樹木の種類、国や都市や島の名前などです。たとえば、malus（林檎の木）、pirus（梨の木）、cedrus（杉）、populus（ポプラ）、Aegyptus（エジプト）、Corinthus（コリントゥス）、Rhodus<sup>1</sup>（ロドス島）、humus（大地）、alvus（腹）、methodus（方法）などは、女性の第二変化 -us 型名詞です。

中性の第二変化 -us 型名詞としては、pelagus（海）、virus（毒）、vulgus（民衆）などがあります。

### 2.4.3 第二変化 -us 型名詞の変化

第二変化 -us 型名詞に分類される amicus（友）という名詞は、次のように変化します。

<sup>1</sup>rh の発音は、r と同じです。

	単数	複数
主格	amīcus	amīcī
属格	amīcī	amīcōrum
与格	amīcō	amīcīs
対格	amīcum	amīcōs
奪格	amīcō	amīcīs
呼格	amīce	amīcī

単数主格と単数呼格の形が異なっている、という点に注意が必要です。第 2.1 節で、単数主格と単数呼格の形が異なるのは一部の名詞だけだという話をしましたが、その話に出てきた「一部の名詞」というのは、この第二変化 -us 型名詞のことです。第二変化 -us 型名詞ではないすべての名詞は、単数主格と単数呼格が同じ形です。

ちなみに、複数主格と複数呼格は、すべての名詞について、例外なく同じ形です。

#### 2.4.4 第二変化 -er 型名詞の分類

第二変化 -er 型名詞は、さらに二つのグループのいずれかに分類することができます。ひとつは単数主格形の末尾にある -er の e が単数主格形以外でも残るグループで、もう一つは単数主格形以外では e が落ちてしまうグループです。

第二変化 -er 型名詞で e が残るものとしては、puer (少年)、gener (婿)、socer (義父)、vesper (夕方)、Liber (酒神リーベル) などがあります。

第二変化 -er 型名詞で e が落ちるものとしては、liber (書物)、ager (畑)、magister (教師)、minister (召使)、caper (山羊) などがあります。

e が残るか落ちるかということは、辞書に記載されている単数属格形から判断することができます。たとえば、ラテン語の辞書で puer (少年) という名詞を調べると、

puer, -erī, *m.* 少年。

というように書かれています。この記述から、この名詞の単数属格形は puerī で、e が残るグループに所属しているということが分かります。

同じように、ラテン語の辞書で liber (書物) という名詞を調べると、

liber, -brī, *m.* 書物。

というように書かれています。この記述から、この名詞の単数属格形は librī で、e が落ちるグループに所属しているということが分かります。

#### 2.4.5 第二変化 -er 型名詞の変化

第二変化 -er 型名詞の変化は、第二変化 -us 型名詞とほとんど同じです。それらのあいだで違っているのは、単数主格形の末尾が -er なのか -us なのかということだけです。

第二変化 -er 型名詞で e が残るグループに分類される puer (少年) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	puer	puerī
属格	puerī	puerōrum
与格	puerō	puerīs
対格	puerum	puerōs
奪格	puerō	puerīs

つまり、単数主格形は puer なのですが、それがあたかも puerus であるかのように変化するわけです。

第二変化 -er 型名詞で e が落ちるグループに分類される liber (書物) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	liber	librī
属格	librī	librōrum
与格	librō	librīs
対格	librum	librōs
奪格	librō	librīs

つまり、単数主格形は liber なのですが、それがあたかも librus であるかのように変化するわけです。

#### 2.4.6 第二変化 -um 型名詞の変化

第二変化 -um 型名詞に分類される verbum (言葉) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	verbum	verba
属格	verbī	verbōrum
与格	verbō	verbīs
対格	verbum	verba
奪格	verbō	verbīs

単数主格と単数対格とが同じ形 (verbum) で、複数主格と複数対格も同じ形 (verba) です。

実は、この性質は、第二変化 -um 型名詞だけではなくて、すべての中性名詞に共通するものです。そしてさらに、複数主格と複数対格が -a で終わるというのも、すべての中性名詞に共通する性質です。

つまり、すべての中性名詞は次の性質を持っている、ということです。

- 単数主格と単数対格は同じ形。
- 複数主格と複数対格も同じ形で、しかもかならず -a で終わる。

この性質は、覚えておいて損はありません。

#### 2.4.7 特殊な第二変化名詞

第二変化名詞の中には、これまでの説明とは少し違った変化をする特殊なものがいくつかあります。

そのような特殊な第二変化名詞は、次のように、一つのグループと二つの単語に分類することができます。

- 単数主格形が -ius または -ium で終わるもの
- deus (神)
- vir (男)

#### 2.4.8 -ius 型と -ium 型の第二変化名詞の変化

第二変化名詞のうちで、単数主格形が -ius または -ium で終わるものとしては、filius (息子)、nūntius (使者)、socius (仲間)、Vergilius (人名)、Horātius (人名)、ingenium (才能)、imperium (統治)、dōlium (樽)、lilium (ユリ) などがあります。

これらの名詞は、基本的には -us 型と同じような変化をするのですが、単数属格形は通常、-ī ではなくて -i が使われます (まれに複数主格形としても -i が使われることがあります)。ですから、filius、nūntius、socius、Vergilius、Horātius、ingenium、imperium、dōlium、lilium のそれぞれの単数属格形は、filī、nūntī、sociī、Vergilī、Horatī、ingenī、imperī、dōlī、lilī です。

第 1.5 節でも軽く触れましたが、これらの名詞では、単数属格形のアクセントが、その単数主格形のアクセントの位置を保ちます。たとえば、Vergilius の場合は、

単数主格形	Vergīlius
単数属格形	Vergilī

というようにアクセントの位置を保ち、ingenium の場合は、



単数主格形 *ingénium*  
 単数属格形 *ingénī*

というようにアクセントの位置を保ちます。

また、単数主格形が *-ius* で終わる第二変化名詞は、通常、単数呼格形が *-ie* ではなくて *-ī*、つまり単数属格形と同じ形になります。たとえば、*filius* (息子) の単数呼格形は、*filī* です。

#### 2.4.9 *deus* の変化

*deus* (神) という第二変化名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	<i>deus</i>	<i>dī</i> (または <i>dīī, deī</i> )
属格	<i>deī</i>	<i>deum</i> (または <i>deōrum</i> )
与格	<i>deō</i>	<i>dīs</i> (または <i>dīīs, deīs</i> )
対格	<i>deum</i>	<i>deōs</i>
奪格	<i>deō</i>	<i>dīs</i> (または <i>dīīs, deīs</i> )
呼格	<i>deus</i>	<i>dī</i> (または <i>dīī, deī</i> )

#### 2.4.10 *vir* の変化

*vir* (男) という第二変化名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	<i>vir</i>	<i>virī</i>
属格	<i>virī</i>	<i>virōrum</i>
与格	<i>virō</i>	<i>virīs</i>
対格	<i>virum</i>	<i>virōs</i>
奪格	<i>virō</i>	<i>virīs</i>

つまり、単数主格形は *vir* なのですが、それがあたかも *virus* であるかのように変化するわけです。

## 2.5 第三変化名詞

### 2.5.1 第三変化名詞の特徴

第三変化名詞には、次のような特徴があります。

- (1) すべての第三変化名詞は、単数属格の語尾が *-is* です。
- (2) 第一変化名詞と第二変化名詞の場合は、単数主格の語尾の形が限定されています。すなわち、第一変化名詞の単数主格の語尾はかならず *-a* で、第二変化名詞の単数主格の語尾は *-us*、*-er*、*-um* のいずれかです。それに対して、第三変化名詞の単数主格の語尾は、きわめてバラエティーに富んでいます。
- (3) 第一変化名詞と第二変化名詞は、すべての変化形が共通の語幹を持っています。それに対して、第三変化名詞の中には、単数主格の形が、その単語の語幹を持っていないものもあります。たとえば、*pater* (父) という第三変化名詞の語幹は *patr* ですが、単数主格の形 (*pater*) はその語幹を持っていません。
- (4) 第一変化名詞と第二変化名詞の大多数は、性がどれなのかを、単数主格の語尾から判定することができます。それに対して、第三変化名詞の場合、単語の形から性を判定することは、きわめて困難です。

このような特徴がありますので、個々の第三変化名詞を覚えるときは、単数主格の形と意味とを覚えるだけでは十分ではありません。単数主格以外の変化形の一つと、そして性も覚える必要があります。ですから、通常、それぞれの名詞ごとに、

単数主格、単数属格、性、意味

という形の呪文を記憶します。たとえば、*pater* (父) という第三変化名詞を覚えるときは、

pater, patris, 男性, 父

という呪文を覚えることとなります。

### 2.5.2 第三変化名詞の分類

第三変化名詞は、次の二つの種類のどちらかに分類されます。

子音幹名詞 語幹が子音で終わるもの。

i 幹名詞 語幹が i で終わるもの。

第三変化名詞の勢力は、子音幹名詞が多数派で、i 幹名詞は少数派です。

第三変化名詞の変化は、子音幹名詞なのか i 幹名詞なのかということによって少し違ってはいますが、それほど大きな違いではありません。

子音幹名詞としては、次のようなものがあります。

sōl, sōlis, *m.* 太陽。

pater, -tris, *m.* 父。

frāter, -tris, *m.* 兄弟。

homō, -minis, *m.* または *f.* 人間。

vōx, vōcis, *f.* 声。

lēs, legis, *f.* 法律。

māter, -tris, *f.* 母。

tempus, -poris, *n.* 時間。

nōmen, -minis, *n.* 名前。

corpus, -poris, *n.* 物体。

また、i 幹名詞としては、次のようなものがあります。

ignis, -is, *m.* 火。

pānis, -is, *m.* パン。

piscis, -is, *m.* 魚。

nūbēs, -is, *f.* 雲。

puppis, -is, *f.* 船。

turris, -is, *f.* 塔。

animal, -ālis, *n.* 動物。

sēdile, -is, *n.* 座席。

rēte, -is, *n.* 網。

### 2.5.3 子音幹名詞の変化

男性の子音幹名詞に分類される sōl (太陽) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	sōl	sōlēs
属格	sōlis	sōlum
与格	sōlī	sōlibus
対格	sōlem	sōlēs
奪格	sōle	sōlibus

女性の子音幹名詞に分類される vōx (声) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	vōx	vōcēs
属格	vōcis	vōcum
与格	vōcī	vōcibus
対格	vōcem	vōcēs
奪格	vōce	vōcibus

このように、子音幹名詞の変化は、男性と女性とでまったく同じです。しかし、中性は少し違ってはいます。

中性の子音幹名詞に分類される *tempus* (時間) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	<i>tempus</i>	<i>tempora</i>
属格	<i>temporis</i>	<i>temporum</i>
与格	<i>temporī</i>	<i>temporibus</i>
対格	<i>tempus</i>	<i>tempora</i>
奪格	<i>tempore</i>	<i>temporibus</i>

男性と女性の変化と中性の変化とを比べてみると、違っているところは、単数対格、複数主格、複数対格の3箇所です。

第2.4節でも述べましたが、すべての中性名詞は、

- 単数主格と単数対格は同じ形。
- 複数主格と複数対格は同じ形で、しかもかならず *-a* で終わる。

という性質を持っています。上の変化表を見ると、中性の子音幹名詞も例外ではないということが分かります。

#### 2.5.4 i 幹名詞の変化

男性の *i* 幹名詞に分類される *ignis* (火) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	<i>ignis</i>	<i>ignēs</i>
属格	<i>ignis</i>	<i>ignium</i>
与格	<i>ignī</i>	<i>ignibus</i>
対格	<i>ignem</i>	<i>ignēs</i>
奪格	<i>igne</i>	<i>ignibus</i>

女性の *i* 幹名詞に分類される *nūbēs* (雲) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	<i>nūbēs</i>	<i>nūbēs</i>
属格	<i>nūbis</i>	<i>nūbium</i>
与格	<i>nūbī</i>	<i>nūbibus</i>
対格	<i>nūbem</i>	<i>nūbēs</i>
奪格	<i>nūbe</i>	<i>nūbibus</i>

このように、子音幹名詞の場合と同じように、*i* 幹名詞の場合も、男性と女性の変化はまったく同じです。

男性または女性の第三変化名詞では、複数対格の語尾として *-ēs* が使われるわけですが、古い時代には、*i* 幹名詞に限って *-īs* という語尾が使われていました。つまり、古い時代には、*ignis* の複数対格形は *ignīs* で、*nūbēs* の複数対格形は *nūbīs* だったわけです。

子音幹名詞の場合と同じように、*i* 幹名詞の場合も、中性の変化は、男性と女性の変化とは少し違っています。

中性の *i* 幹名詞に分類される *animal* (動物) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	<i>animal</i>	<i>animālia</i>
属格	<i>animālis</i>	<i>animālium</i>
与格	<i>animālī</i>	<i>animālibus</i>
対格	<i>animal</i>	<i>animālia</i>
奪格	<i>animālī</i>	<i>animālibus</i>

ところで、子音幹名詞の変化と *i* 幹名詞の変化とは、どこがどう違うのでしょうか。変化表を見比べてください。

どの性についても変化形が違っているのは、複数属格です。

子音幹名詞の複数属格は、-um で終わります。たとえば、sōl という子音幹名詞の複数属格は solum です。それに対して、i 幹名詞の複数属格は、-um の左側に i が加わって、-ium で終わります。たとえば、ignis という i 幹名詞の複数属格は、ignum ではなくて、i が加わって、ignium になります。

子音幹名詞と i 幹名詞とで変化形が違っているのは、男性と女性の場合は複数属格だけですが、中性の場合は、それに加えて、単数奪格、複数主格、複数対格も違っています。

ところで、i 幹名詞というのは、語幹が i で終わる第三変化名詞のことです。でも、ignis の語幹は ign、nūbēs の語幹は nūb、animal の語幹は animāl なのではないでしょうか。そうだとすると、語幹が i で終わっていないじゃないかと文句を言いたくなります。

実は、第三変化名詞の語幹というのは、複数属格の形から語尾の -um を取り除いた部分のことなのです。ということは、ignis の語幹は igni、nūbēs の語幹は nūbi、animal の語幹は animāli ですから、ちゃんと i で終わっているということになります。

### 2.5.5 子音幹名詞と i 幹名詞の判別

ところで、ラテン語の辞書で第三変化名詞を調べても、それが子音幹名詞なのか i 幹名詞なのかという区別は書かれていません。辞書の記述から、子音幹名詞なのか i 幹名詞なのかを判別することは、可能なのでしょうか。

判別の方法は、あることはあります（ただし、例外がたくさんありますので、完璧な方法とは言えないのですが）。それは、単数主格と単数属格の音節の個数を比較するという方法です。

子音幹名詞の多くは、単数属格の音節の個数が、単数主格の音節の個数よりも 1 個だけ多くなります。それに対して、i 幹名詞の多くは、単数属格の音節の個数と単数主格の音節の個数が等しくなります。

たとえば、sōl という子音幹名詞の場合、単数主格の音節の個数は 1 個ですが、単数属格 (sōlis) の音節の個数は 2 個です。それに対して、ignis という i 幹名詞の場合、単数主格も単数属格も ignis ですから、音節の個数は等しくなります。

音節の個数が等しいのに子音幹名詞だという例外としては、次のようなものがあります。

pater, -tris, *m.* 父。  
māter, -tris, *f.* 母。  
frāter, -tris, *m.* 兄弟。

また、単数主格が -al または -ar で終わる次のような第三変化名詞は、単数主格と単数属格とで音節の個数が違っているにもかかわらず、i 幹名詞です。

animal, -ālis, *n.* 動物。  
calcar, -āris, *n.* 拍車。  
exemplar, -āris, *n.* 模写、模範。

また、単数主格が -ns、-rs、-bs などと終わる次のような第三変化名詞も、単数主格と単数属格とで音節の個数が違っているにもかかわらず、i 幹名詞です。

mēns, mentis, *f.* 精神。  
gēns, gentis, *f.* 種族。  
mōns, montis, *m.* 山。  
pōns, pontis, *m.* 橋。  
fōns, fontis, *m.* 泉。  
ars, artis, *f.* 技術、学術、芸術。  
pars, partis, *f.* 部分。  
mors, mortis, *f.* 死。  
urbs, urbis, *f.* 都市。

## 2.6 第四変化名詞

### 2.6.1 第四変化名詞の性

第四変化名詞は、その大多数が男性で、女性と中性は少数です。

男性の第四変化名詞としては、fructus (果実)、gradus (階段)、impetus (攻撃)、magistrātus (官職)、exercitus (軍隊)、fluctus (潮流) などがあります。

女性の第四変化名詞としては、manus（手）、acus（針）、anus（老婆）、tribus（部族）、domus（家）などがあります。

中性の第四変化名詞としては、cornū（<sup>20</sup>角）、genū（膝）、verū（鉄串）などがあります。

第四変化名詞の性は、単数主格の語尾によって、男性または女性なのか、それとも中性なのか、ということを見分けることができます。単数主格の語尾が -us ならば男性または女性で、-ū ならば中性です。

### 2.6.2 第四変化名詞の変化

男性の第四変化名詞に分類される fructus（果実）という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	fructus	fructūs
属格	fructūs	fructuum
与格	fructū	fructibus
対格	fructum	fructūs
奪格	fructū	fructibus

女性の第四変化名詞に分類される manus（手）という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	manus	manūs
属格	manūs	manuum
与格	manū	manibus
対格	manum	manūs
奪格	manū	manibus

このように、第四変化名詞の変化は、男性と女性とでまったく同じです。

男性または女性の第四変化名詞では、単数与格の形として、通常、fructū か manuī というように、-ū という語尾が使われるわけですが、まれに、fructū か manū というように、-ū という語尾が使われることもあります。

中性の第四変化名詞に分類される cornū（<sup>20</sup>角）という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	cornū	cornua
属格	cornūs	cornuum
与格	cornū	cornibus
対格	cornū	cornua
奪格	cornū	cornibus

### 2.6.3 domus の変化

domus（家）という女性の第四変化名詞の変化は少し特殊で、次のような、第四変化名詞と第二変化名詞とが混合したような変化をします。

	単数		複数	
主格	domus		domūs	
属格	domūs	(domī)	domuum	domōrum
与格	domū	(domō)	domibus	
対格	domum		domūs	domōs
奪格	(domū)	domō	domibus	

括弧で囲まれているのは、使われる頻度が少ない形です。

## 2.7 第五変化名詞

### 2.7.1 第五変化名詞の性

第五変化名詞の性は、基本的には女性です。

女性の第五変化名詞としては、rēs (もの、こと)、spēs (希望)、fidēs (信頼)、faciēs (顔)、glaciēs (氷)、seriēs (連続、系列)、speciēs (外見、種)、effigiēs (肖像) などがあります。

第五変化名詞は、そのほとんどすべてが女性なのですが、例外的に男性のものもあります

男性の第五変化名詞は、diēs (日) と merīdiēs (正午) の二つだけです (merīdiēs は diēs から作られた派生語ですので、実質的には一つだけと言ってもいいでしょう)。なお、diēs は、日付や期間などの意味で使われるときは、女性として扱われます。

### 2.7.2 第五変化名詞の変化

第五変化名詞に分類される rēs (もの、こと) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	rēs	rēs
属格	reī	rērum
与格	reī	rēbus
対格	rem	rēs
奪格	rē	rēbus

同じく第五変化名詞に分類される diēs (日) という名詞は、次のように変化します。

	単数	複数
主格	diēs	diēs
属格	diēi	diērum
与格	diēi	diēbus
対格	diem	diēs
奪格	diē	diēbus

このように、第五変化名詞には、単数の属格と与格の語尾が -eī になるものと -ei になるもの、つまりそこに含まれている e が短母音になるものと長母音になるもの、という二種類のものがあります。

単数の属格と与格の語尾に含まれている e が短母音になるのは、その直前に子音があるもので、長母音になるのは、その直前に母音があるものです。たとえば、rēs (もの、こと)、spēs (希望)、fidēs (信頼) などは、e の直前に子音がありますので、reī、speī、fideī というように、e が短母音になります。それに対して、diēs (日)、faciēs (顔)、glaciēs (氷) などは、e の直前に i という子音がありますので、diēi、faciēi、glaciēi というように、e が長母音になります。

## 第3章 動詞 I [ 動詞の基礎 ]

### 3.1 動詞の変化

#### 3.1.1 動詞を変化させる要因

動詞は、名詞と同じように、変化する品詞の一つです。名詞を変化させる要因としては数と格という二つのものがあるわけですが、動詞を変化させる要因は五つあります。

動詞を変化させる五つの要因のそれぞれについて、日本語での呼び方と英語での呼び方を示すと、次のようになります。

人称	person
数	number
時制	tense
態	voice
法	mood

## 3.1.2 人称

ひとつの文が存在するという事は、それを話した（あるいは書いた）誰かが存在するという事です。そして、文というものは、それを聞く（あるいは読む）誰かを想定して作られるものです。文の話し手（作者）と聞き手（読者）は、その文にとって特別な存在ですので、多くの言語では、話し手と聞き手とそれ以外の者（物）とを文法の上で区別します。

話し手と聞き手とそれ以外の者（物）という区別は、「人称」（英語では person）と呼ばれます。それぞれの人称について、日本語での呼び方、英語での呼び方、そして意味を示すと、次のようになります。

一人称	first person	話し手
二人称	second person	聞き手
三人称	third person	話し手でも聞き手でもない者（物）

ラテン語の動詞は、それがあらわしている動作や状態などの主体がどの人称なのかということに応じて変化します。

## 3.1.3 数

数というのは、第 2.1 節で説明したように、文法の上で区別される個数の相違のことです。ラテン語では、単数と複数という二つの数が区別されます。

ラテン語の動詞は、それがあらわしている動作や状態などの主体が単数なのか複数なのかということに応じて変化します。

## 3.1.4 時制

文というものは、ある一つの時点において話されたり書かれたりするものです。しかし、文があらわしている内容は、その文が発言または記述されるのと同じ時点についてのものとは限りません。過去に起こった出来事について語る文もありますし、これから起こるであろう出来事について語る文もあります。

文が発言または記述された時点と、その文があらわしている内容の時点との関係は、「時制」（英語では tense）と呼ばれます（「時称」と呼ばれることもあります）。時制としてどのようなものがあるかというのは、言語によって差異があります。

ラテン語には、時制として次の六つのものがあります。

現在	英語では present。現在の事実、一般的な真理、過去から継続して現在もまだ終わっていない動作などをあらわす時制。
未完了過去	英語では imperfect。過去において継続していた動作や、過去において習慣的に反復されていた動作などをあらわす時制。
未来	英語では future。未来において起こるであろう動作をあらわす時制。
完了	英語では perfect。現在から見て、すでに完了している動作をあらわす時制。
過去完了	英語では past perfect または pluperfect。過去のある時点から見て、すでに完了している動作をあらわす時制。
未来完了	英語では future perfect。未来のある時点から見て、すでに完了している動作をあらわす時制。

ラテン語の動詞は、それが使われている文がどの時制なのかということに応じて変化します。

## 3.1.5 態

動詞は、それがあらわしている動作に何らかの対象があるかないかという観点から、二つのグループのどちらかに分類することができます。それぞれのグループについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そして対象があるかないかを示すと、次のようになります。

他動詞	transitive verb	対象がある
自動詞	intransitive verb	対象がない

たとえば、「書く」という日本語の動詞は、何らかの対象に対する動作をあらわしていますので、他動詞に分類されます。それに対して、「生まれる」という日本語の動詞は、それがあらわしている動作が対象を持っていませんので、自動詞に分類されます。

述語動詞として他動詞を使って文を作る場合には、「*A*が*B*を*V*する」というように、他動詞があらわしている動作の主体を主語にすることもできますし、「*B*が*A*によって*V*される」というように、動作の対象を主語にすることもできます。たとえば、「書く」という動詞を使って文を書くとすると、

私はこの手紙を書きました。

というように動作の主体を主語にすることも、

この手紙は私によって書かれました。

というように動作の対象を主語にすることも可能です。

「*A*が*B*を*V*する」なのか「*B*が*A*によって*V*される」なのかという、他動詞があらわしている動作と主語との関係は、「態」(英語では voice)と呼ばれます(「相」と呼ばれることもあります)。

態のそれぞれについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そしてその意味を示すと、次のようになります。

能動態 active voice 「*A*が*B*を*V*する」という態

受動態 passive voice 「*B*が*A*によって*V*される」という態

能動態と受動態のそれぞれは、「能動相」と「受動相」と呼ばれることもあります。

ラテン語の動詞は、それが使われている文がどちらの態なのかということに応じて変化します。

### 3.1.6 法

動詞があらわしている意味に対して、文の話し手の主観がどのように加わっているかということとは、法(英語では mood)と呼ばれます。

ラテン語には、三つの法があります。それぞれの法について、日本語での呼び方、英語での呼び方、そして意味を示すと、次のようになります。

直説法 indicative mood 話し手の主観をまじえないで事実を述べる法

接続法 subjunctive mood 話し手の主観をまじえつつ事実を述べる法

命令法 imperative mood 命令をあらわす法

ラテン語の動詞は、どの法によってそれが使われているのかということに応じて変化します。

### 3.1.7 動詞の変化表

第2.1節で説明したように、ラテン語の文法書では、単語の変化は、通常、「変化表」と呼ばれる表によって示されます。

名詞の場合は数と格に応じた変化を示すために変化表が使われるのに対して、動詞の場合は、人称と数に応じた変化を示すために変化表が使われます。

人称と数に応じた動詞の変化を示す変化表としては、通常、

一人称単数 一人称複数

二人称単数 二人称複数

三人称単数 三人称複数

という形のものを書きます。たとえば、amō(愛する)という動詞の直説法・能動態・現在の変化は、

	単数	複数
一人称	amō	amāmus
二人称	amās	amātis
三人称	amat	amant

という変化表によって示されます。

### 3.1.8 動詞の変化の覚え方

人称と数に応じた動詞の変化を覚えるときは、通常、

一人称単数、二人称単数、三人称単数、一人称複数、二人称複数、三人称複数



という順番で、それぞれの変化形を並べたものを暗唱します。つまり、amō (愛する) という動詞の直説法・能動態・現在の変化を覚えるときは、

amō, amās, amat, amāmus, amātis, amant

という呪文のようなものを暗唱するわけです。

ラテン語の動詞というのはかなり規則的に変化しますので、一つ一つの動詞についてその変化を覚えなければならないというわけではありません。いくつかのパターンを覚えるだけで十分です。

ただし、少数ですが、「不規則動詞」(英語では irregular verb) と呼ばれる独自の变化をする動詞があって、それらについては個別に変化を覚える必要があります。不規則動詞は、数は少ないのですが、いずれも重要な動詞ですので、しっかり覚えたいといけません。

### 3.1.9 不定詞

動詞は、動詞として使われるばかりではなくて、名詞として使われたり形容詞として使われたりすることもあります。動詞が名詞として使われたり形容詞として使われたりする場合、それは、動詞として使われる場合とは異なる形に変化します。

文の中で動詞を名詞として使いたいときは、通常、その動詞を、「不定詞」(英語では infinitive) と呼ばれる形に変化させます。

不定詞は、次のような性質を持っています。

- 主格と対格があり、文の主語、補語、目的語にすることができる。
- 性は中性で、数は単数。
- 態と時制に応じて変化する。ただし、時制は、現在、未来、完了の三つだけ。したがって、不定詞の形の個数は  $2 \times 3 = 6$  個。
- 意味上の主語、補語、目的語を伴うことができる。意味上の主語、補語、目的語は、格を対格にする必要がある。

たとえば、amō (愛する) という動詞の不定詞の能動態・現在は、amāre です。

### 3.1.10 分詞

動詞を形容詞として使いたいときは、通常、その動詞を「分詞」(英語では participle) と呼ばれる形に変化させます。

分詞は、態、時制、性、数、格に応じて変化します。ただし、態と時制の組み合わせは、

能動態・現在  
能動態・未来  
受動態・完了

という三つだけです。

たとえば、amō (愛する) という動詞の分詞の能動態・現在・男性・単数・主格は、amāns です。

### 3.1.11 動詞の分類

不規則動詞以外のラテン語の動詞は、その変化のパターンによって、四つのグループのいずれかに分類されます。

不規則動詞以外のラテン語の動詞がそのいずれかに分類される四つのグループのそれぞれは、第一変化動詞、第二変化動詞、第三変化動詞、第四変化動詞と呼ばれます(英語では、first conjugation verb, second conjugation verb, third conjugation verb, fourth conjugation verb)。

不規則動詞以外の動詞は、その不定詞の能動態・現在(つまり、「何々すること」という意味をあらわす形)の末尾に着目することによって、どのグループに分類されるものなのかということを知ることができます。それぞれのグループの不定詞の能動態・現在は、次のような末尾を持っています。

第一変化動詞 -āre  
第二変化動詞 -ēre  
第三変化動詞 -ĕre  
第四変化動詞 -īre

たとえば、amō (愛する) という動詞は、その不定詞の能動態・現在が amāre ですから、第一変化動詞に分類されることになります。

第三変化動詞のところで使われている、<sup>u</sup> という記号は、第 1.3 節で説明したように、その下の母音が短母音だということを強調するためのものです。

第三変化動詞は、さらに、直説法・能動態・現在・一人称・単数の末尾が -iō にならないものと、そうなるもの、という二つのグループのどちらかに分類することができます。このチュートリアルでは、第三変化動詞のグループのそれぞれを、

第三 a 変化動詞 ( -iō にならないもの )

第三 b 変化動詞 ( -iō になるもの )

と呼ぶことにします。

### 3.1.12 動詞の構造

ラテン語の動詞は、通常、「語幹」(英語では stem)、「時制符号」(英語では tense sign)、「語尾」(英語では ending) と呼ばれる三つの部分が、

語幹 + 時制符号 + 語尾

という形で連結されることによって作られています。

動詞を構成している三つの部分は、次のように、それぞれが異なる役割を持っています。

**語幹** 時制を、現在、未完了過去、未来のグループと、完了、過去完了、未来完了のグループに二分したとき、どちらのグループに所属するのか、ということを示します。現在、未完了過去、未来のグループを示す形は「現在幹」(英語では present stem) と呼ばれ、完了、過去完了、未来完了のグループを示す形は「完了幹」(英語では perfect stem) と呼ばれます。たとえば、amō (愛する) という動詞の場合、現在幹は amā- で、完了幹は amāv- です。

**時制符号** 法と時制を示します。たとえば、直説法・未完了過去の時制符号は、-bā- です(語尾の変化に応じて -ba- になる場合もあります)。ただし、直説法・現在と直説法・能動態・完了は、時制符号の不在によって示されます。つまり、語幹の直後に語尾が連結されている動詞は、直説法・現在または直説法・能動態・完了です。

**語尾** 「人称語尾」(person ending) と呼ばれることもあります。態と人称と数を示します。たとえば、能動態・二人称・複数の語尾は、-tis です。

たとえば、「あなたたちは何々していた」を意味する、動詞の直説法・能動態・未完了過去・二人称・複数の形は、

現在幹 + 直説法・未完了過去の時制符号 + 能動態・二人称・複数の語尾

という連結によって作られます。ですから、「あなたたちは愛していた」は、amō (愛する) の現在幹 amā-、直説法・未完了過去の時制符号 -bā-、そして能動態・二人称・複数の語尾 -tis を連結した、

amābātis

という形の動詞によってあらわされることになります。

### 3.1.13 辞書に書かれている動詞の項目

ラテン語の動詞はさまざまな形に変化するわけですが、一つの動詞のさまざまな形のうちに、直説法・能動態・現在・一人称・単数の形は、その動詞の代表として扱われます。ですから、ラテン語の辞書では、動詞の項目の見出しとして、その形を掲げることになっています。

ラテン語の辞書に書かれている動詞の項目は、次のような記述から構成されています(ただし、辞書ごとに相違がありますので、すべての辞書がこのとおりになっているわけではありません)。

- (1) 見出し。直説法・能動態・現在・一人称・単数。「私は何々する」の形。
- (2) 不定詞の能動態・現在の末尾。「何々すること」の形。この形によって変化のグループと現在幹が分かります。
- (3) 直説法・能動態・完了・一人称・単数の末尾。「私は何々した」の形。この形によって完了幹が分かります。
- (4) 「目的分詞」(英語では supine) と呼ばれるものの対格の末尾。「何々するために」の形。

## (5) 意味。

たとえば、辞書の amō の項目は、  
amō, -āre, -āvī, -ātum 愛する。

このように書かれています。この記述から、amō について、次のことが分かります。

直説法・能動態・現在・一人称・単数	amō
不定詞の能動態・現在	amāre
直説法・能動態・完了・一人称・単数	amāvī
目的分詞の対格	amātum
意味	愛する

## 3.2 直説法・能動態・現在

## 3.2.1 直説法・現在の動詞の構造

この節では、動詞の直説法・能動態・現在について説明したいと思います。

第 3.1.12 項で説明したように、動詞は、

語幹 + 時制符号 + 語尾

という構造を持っているわけですが、直説法・現在と直説法・能動態・完了は、時制符号の不在によって示されます。つまり、

語幹 + 語尾

このように、語幹の直後に語尾を連結することによって示されるわけです。

一つの動詞は、語幹として、現在幹と完了幹という二つの形を持っています。直説法・現在は、

現在幹 + 語尾

このように、現在幹の直後に語尾を連結することによって示されます。

## 3.2.2 現在幹

不規則動詞ではない動詞の場合、その現在幹は、不定詞の能動態・現在の形から機械的に割り出すことができます。

不規則動詞ではない動詞の不定詞の能動態・現在は、かならず -re という末尾を持っています。その -re を取り除いた形が、その動詞の現在幹です。

たとえば、amō (愛する) という動詞は、不定詞の能動態・現在が amāre です。現在幹は amā- になります。

## 3.2.3 能動態の語尾

第 3.1.12 項で説明したように、動詞の語尾は、態と人称と数を示します。

能動態の語尾は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	-ō または -m	-mus
二人称	-s	-tis
三人称	-t	-nt

能動態・一人称・単数の語尾としては、-ō と -m の二通りがあるわけですが、直説法・現在で使われるのは -ō だけで、-m は使われません (ただし、不規則動詞の中には、-m を使うものもあります)。

-ō を除いたそれぞれの語尾は、その直前にならず母音が置かれます。-s、-mus、-tis の直前の母音が短母音になるか長母音になるかというのは一定ではありませんが、-m、-t、-nt の直前の母音は、かならず短母音になります。

時制が完了の場合と、態が受動態の場合は、能動態・現在とは異なる語尾が使われます (完了の語尾については第 8.3.4 項で、受動態の語尾については第 9.1.3 項で説明します)。

## 3.2.4 第一変化動詞

第一変化動詞（すなわち、不定詞の能動態・現在が *-āre* で終わる動詞）の例としては、次のようなものがあります。

<i>amō</i>	愛する
<i>cantō</i>	歌う
<i>cōgitō</i>	考える
<i>habitō</i>	住む
<i>optō</i>	望む
<i>salūtō</i>	挨拶する

たとえば、*amō*（愛する）という第一変化動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	<i>amō</i>	<i>amāmus</i>
二人称	<i>amās</i>	<i>amātis</i>
三人称	<i>amat</i>	<i>amant</i>

*amō* の不定詞の能動態・現在は *amāre* で、現在幹は *amā-* です。ただし、現在幹の末尾の *ā* は、語尾が *-ō* の場合は語尾の中に埋没して表面に現れず、語尾が *-t* または *-nt* の場合は短母音になります。

## 3.2.5 第二変化動詞

第二変化動詞（すなわち、不定詞の能動態・現在が *-ēre* で終わる動詞）の例としては、次のようなものがあります。

<i>habeō</i>	持つ
<i>videō</i>	見る
<i>impleō</i>	満たす
<i>lūceō</i>	光る
<i>rīdeō</i>	笑う
<i>jubeō</i>	命令する

たとえば、*habeō*（持つ）という第二変化動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	<i>habeō</i>	<i>habēmus</i>
二人称	<i>habēs</i>	<i>habētis</i>
三人称	<i>habet</i>	<i>habent</i>

*habeō* の不定詞の能動態・現在は *habēre* で、現在幹は *habē-* です。ただし、現在幹の末尾の *ē* は、語尾が *-ō*、*-t*、*-nt* のいずれかの場合は短母音になります。

## 3.2.6 第三 a 変化動詞

第三 a 変化動詞（すなわち、不定詞の能動態・現在が *-ēre* で終わる動詞のうちで、直説法・能動態・現在・一人称・単数の末尾が *-iō* にならないもの）の例としては、次のようなものがあります。

<i>regō</i>	支配する
<i>agō</i>	する
<i>vīvō</i>	生きる
<i>dīcō</i>	言う
<i>discō</i>	学ぶ
<i>scribō</i>	書く

たとえば、regō（支配する）という第三変化動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	regō	regimus
二人称	regis	regitis
三人称	regit	regunt

regō の不定詞の能動態・現在は regēre で、現在幹は regē- です。ただし、現在幹の末尾の ē は、語尾が -ō の場合は脱落し、-nt の場合は u に置き換わり、それ以外の場合は i に置き換わります。

### 3.2.7 第三 b 変化動詞

第三 b 変化動詞（すなわち、不定詞の能動態・現在が -ēre で終わる動詞のうちで、直説法・能動態・現在・一人称・単数の末尾が -iō になるもの）の例としては、次のようなものがあります。

capiō	捕える
faciō	作る
cupiō	望む
fugiō	逃げる
jaciō	投げる
rapiō	奪う

たとえば、capiō（捕える）という第三 b 変化動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	capiō	capimus
二人称	capis	capitis
三人称	capit	capiunt

capiō の不定詞の能動態・現在は capēre で、現在幹は capē- です。ただし、現在幹の末尾の ē は、語尾が -nt の場合は iu に置き換わり、それ以外の場合は i に置き換わります。

### 3.2.8 第四変化動詞

第四変化動詞（すなわち、不定詞の能動態・現在が -īre で終わる動詞）の例としては、次のようなものがあります。

audiō	聞く
veniō	来る
sentiō	感じる
dormiō	眠る
sciō	知っている
nesciō	知らない

たとえば、audiō（聞く）という第四変化動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	audiō	audīmus
二人称	audis	auditis
三人称	audit	audiunt

audiō の不定詞の能動態・現在は audīre で、現在幹は audi- です。ただし、現在幹の末尾の ī は、語尾が -ō または -t の場合は短母音になり、語尾が -nt の場合は iu になります。

### 3.2.9 不規則動詞

不規則動詞には、次のようなものがあります。

sum	存在する、である
possum	できる
volō	欲する
nōlō	欲しない
mālō	むしろ...を選ぶ
eō	行く
ferō	運ぶ
fiō	なる、作られる
dō	与える
edō	食べる

### 3.2.10 sum

sum (存在する、である) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	sum	sumus
二人称	es	estis
三人称	est	sunt

sum の不定詞の能動態・現在は、esse です。

sum は、英語の be に相当する動詞です。ラテン語では、「A は B である」と言いたいときには、この動詞が使われます。使用頻度がとても高い動詞ですので、変化をしっかりと覚えておく必要があります。

### 3.2.11 possum

possum (できる) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	possum	possumus
二人称	potes	potestis
三人称	potest	possunt

possum の不定詞の能動態・現在は、posse です。

possum は、pot- という接頭辞を sum に加えることによって作られた動詞ですので、sum と同じように変化します。pot- という接頭辞は、その直後が s になる場合は pos- に変わります。

### 3.2.12 volō

volō (欲する) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	volō	volumus
二人称	vīs	vultis
三人称	vult	volunt

volō の不定詞の能動態・現在は、velle です。

### 3.2.13 nōlō

nōlō (欲しない) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	nōlō	nōlumus
二人称	nōn vīs	nōn vultis
三人称	nōn vult	nōlunt

nōlō の不定詞の能動態・現在は、nōlle です。

nōlō は、何かを否定するときに使われる nōn という副詞を volō に加えることによって作られた動詞です。人称と数によって、1 語になる場合と 2 語になる場合があります。

### 3.2.14 mālō

mālō (むしろ...を選ぶ) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	mālō	mālumus
二人称	māvīs	māvultis
三人称	māvult	mālunt

mālō の不定詞の能動態・現在は、mälle です。

mālō は、mā- という接頭辞を volō に加えることによって作られた動詞です。

### 3.2.15 eō

eō (行く) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	eō	īmus
二人称	īs	ītis
三人称	it	eunt

eō の不定詞の能動態・現在は、īre です。

eō から派生した、abeō (立ち去る)、adeō (近づく)、exeō (出る)、ineō (入る)、redeō (帰る) などの動詞も、eō と同じような変化をします。

### 3.2.16 ferō

ferō (運ぶ) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	ferō	ferimus
二人称	fers	fertis
三人称	fert	ferunt

ferō の不定詞の能動態・現在は、ferre です。

ferō から派生した、auferō (持ち去る)、referō (持ち帰る)、sufferō (耐える) などの動詞も、ferō と同じような変化をします。

### 3.2.17 fiō

fiō (なる、作られる) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	fiō	fīmus
二人称	fīs	fītis
三人称	fīt	fīunt

fiō の不定詞の能動態・現在は、fieri です。

fiō の変化は、第四変化動詞の変化に似ていますが、語尾が -ō の場合と -nt の場合に i が長母音になるという点が、第四変化動詞とは違っています。

## 3.2.18 dō

dō (与える) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	dō	dāmus
二人称	dās	dātis
三人称	dāt	dānt

dō の不定詞の能動態・現在は、dāre です。

dō の変化は、第一変化動詞の変化に似ていますが、語尾が -mus の場合と -tis の場合に a が短母音になるという点が、第一変化動詞とは違っていています。

## 3.2.19 edō

edō (食べる) という動詞の直説法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	edō	edimus
二人称	edis (ēs)	editis (ēstis)
三人称	edit (ēst)	edunt

edō の不定詞の能動態・現在は、edere または esse です。

edō の変化は、第三 a 変化動詞の変化と同じなのですが、まれに、丸括弧の中に書かれている形が使われることがあります。

## 3.2.20 現在の意味

現在 (英語では present) という時制は、現在の事実や一般的な真理などをあらわします。つまり、日本語で言えば、「何々する」とか「何々である」というような意味を持つ時制です。

また、現在は、過去から継続して現在もまだ終わっていない動作をあらわすために使われることもあります。つまり、日本語で言えば、「何々している」とか「何々しつつある」という意味でも使われるということです。

## 3.3 平叙文

## 3.3.1 述語動詞だけから構成される平叙文

ラテン語では、述語動詞だけから構成される平叙文、というものを作ることができます。

英語の平叙文には、かならず主語が必要です。それに対してラテン語では、主語というものは絶対に必要なものというわけではありません。なぜなら、ラテン語の平叙文は、たとえそれに主語がなかったとしても、その述語動詞の主体が、

私	私たち
あなた	あなたたち
彼 (彼女、それ)	彼ら (彼女たち、それら)

のうちのどれなのかということが、その動詞の形から分かるからです。ラテン語の平叙文を作るときに主語が必要になるのは、彼 (彼女、それ) または彼ら (彼女たち、それら) が誰 (何) なのか、ということを示したいときだけです。

したがって、ラテン語では、目的語や補語が必要でなければ、述語動詞だけで文を作ることができます。たとえば、次の文は、いずれも述語動詞だけから構成されています。

Vivō.	私は生きています。
Rīdēs.	あなたは笑っています。
Est.	彼 (彼女、それ) は存在しています。
Fugimus.	私たちは逃げています。
Cantātis.	あなたたちは歌っています。
Dormiunt.	彼ら (彼女たち、それら) は眠っています。



ここで、次の文の意味を考えてみましょう。

Cōgitō, ergō sum.

cōgitō は「考える」を意味する動詞の一人称単数の形、sum は「存在する」を意味する動詞の一人称単数の形です。そして、ergō というのは、「したがって」という意味の接続詞です。だとすると、この文は、

私は考えており、したがって私は存在しています。

という意味だということになります。勘の鋭い人はすでに気づいたかもしれませんが、この文は、「我思う、ゆえに我あり」というデカルトの言葉をラテン語で書いたものなのです。

中島敦の「無題」という小説の中に、次のような一節があります。

中山の得意な「現実逃避法」というのがある。コギト・エルゴ・スム、という言葉の、スムをストに置換えて、中山は現実を、「我考ふ。故に、彼等（外界の事物）存在す」と、いう風に考える。之を逆にすれば、「我思わざれば、彼等存在せず」となる。故に、厭なこと、醜いこと、は凡て考えなければいい。すると、それは存在しないことになるんだ。

「スムをストに置換えて」というのは、sum の人称と数を一人称単数から三人称複数へ変更するということですから、「我あり」が「それらあり」に変わるということになります。

### 3.3.2 主語

次に、主語と述語動詞から構成される、「*S* は *V* します」ということを述べる文を作ってみましょう。

主語は、形が主格でないといけません。語順は、

主語、述語動詞

という順序が普通です。

Pater dormit. 父は眠っています。

Animālia fugiunt. 動物たちは逃げています。

### 3.3.3 目的語

次に、目的語を伴う、「*S* は *O* を *V* します」という文を作ってみましょう。

目的語は、形を対格にする必要があります。語順は、

主語、目的語、述語動詞

という順序が普通です。

Pater mātrem amat. 父は母を愛しています。

Filiae lūnam vident. 娘たちは月を見えています。

Litteram scribit. 彼（彼女）は手紙を書いています。

Pānēs edimus. 私たちはパンを食べています。

littera, -ae, *f.* 文字、手紙。

lūna, -ae *f.* 月。

### 3.3.4 間接目的語と直接目的語

次に、授与動詞を使って、間接目的語と直接目的語を伴う、「*S* は *IO* に *DO* を *V* します」という文を作ってみましょう。

間接目的語は形を与格に、直接目的語は形を対格にする必要があります。語順は、

主語、間接目的語、直接目的語、述語動詞

という順序が普通です。

Pater matrī flōrem dōnat. 父は母に花を贈ります。

Filiae fāburam nārrō. 私は娘に物語を語ります。

dōnō, -āre 贈る。

nārrō, -āre 語る。

### 3.3.5 補語

次に、補語を伴う文を作ってみましょう。

補語は、主語の説明になっているものと、目的語の説明になっているものに分類することができます。それぞれの補語について、日本語での呼び方、英語での呼び方、そして主語の説明なのか目的語の説明なのかを示すと、次のようになります。

主格補語 subjective complement 主語の説明  
目的補語 objective complement 目的語の説明

主格補語は、形を主格にする必要があります。語順は、  
主語、主格補語、述語動詞  
という順序が普通です。

Homō animal est. 人間は動物です。  
Sāturnus deus est. サトゥルヌスは神です。

Sāturnus, -ī, m. サトゥルヌス (古代ローマの農耕神)。

sum という動詞は、補語がない場合は「存在する」という意味ですが、この例のように、補語がある場合は「である」という意味になります。

目的補語は、形を対格にする必要があります。語順は、  
主語、目的語、目的補語、述語動詞  
という順序が普通です。

Pater filiam Terentiam nōminat. 父は娘をテレンティアと名づけます。  
nōminō, -āre 名づける。

### 3.3.6 語順

英語では、文の中での単語の機能の多くが、その文の語順によって示されます。それに対してラテン語では、文の中での単語の機能がそれぞれの単語の形によって示されていますので、語順にそれほど大きな意味はありません。ですから、主語は文の先頭に、述語動詞は文の末尾に置くというような規則は、あくまで原則にすぎません。ラテン語というのは、語順に関してはとても自由な言語なのです。

たとえば、「A は B です」という文は、原則としては、

A B est.

という語順にするのが普通ですが、

B A est.  
A est B.  
B est A.

というような語順でも、決して間違いではありません。ですから、A と B のどちらが主語でどちらが補語なのかというのは、文脈などから判断する必要があります。

sum という動詞を使った文の語順については、一つ、注意しないといけないことがあります。それは、「A が存在します」という文の語順です。

「A が存在します」と言いたいときは、

Est A.

という語順にするのが普通です。なぜなら、

A est.

という語順だと、「彼 (彼女、それ) は A です」という意味だと誤解されてしまう可能性があるからです。

### 3.3.7 否定文

平叙文は、肯定的に述べるのか否定的に述べるのかという観点から、二つのグループのどちらかに分類することができます。それぞれのグループについて、日本語での呼び方、英語での呼び

方、そして肯定的なのか否定的なのかを示すと、次のようになります。

肯定文 affirmative sentence 肯定的(何々は何々します)  
 否定文 negative sentence 否定的(何々は何々しません)

ラテン語で否定文を作りたいときは、「ではない」を意味する *nōn* という副詞を、否定したい単語の直前に置きます。述語動詞の直前に *nōn* を置くと、文全体を否定することになります。

<i>Rēx rēgīnam nōn amat.</i>	王は王妃を愛していません。
<i>Homō herba nōn est.</i>	人間は植物ではありません。
<i>Caelum nōn vident.</i>	彼らは空を見ていません。
<i>Animal nōn est.</i>	それは動物ではありません。
<i>Nōn fugimus</i>	私たちは逃げはしません。
<i>Nōn pānem edō, sed carnem edō.</i>	私はパンではなくて肉を食べています。

*rēx*, *rēgis*, *m.* 王。  
*rēgīna*, *-ae*, *f.* 女王、王妃。  
*herba*, *-ae*, *f.* 草、植物。  
*caelum*, *-ī*, *n.* 空、天。  
*cārō*, *carnis*, *f.* 肉。  
*sed* しかし。 *nōn ... sed ...* ...ではなく....

### 3.4 一般疑問文

#### 3.4.1 疑問文の分類

疑問文は、それに対する返答が「はい」または「いいえ」になるかそれよりも具体的な言明になるかという観点から、二つのグループのどちらかに分類することができます。それぞれのグループについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そしてどのような返答になるかを示すと、次のようになります。

一般疑問文 general interrogative sentence 「はい」または「いいえ」  
 特殊疑問文 special interrogative sentence 具体的な言明

たとえば、「あなたは私を愛していますか？」という疑問文は、「はい」または「いいえ」で答えることとなりますので、一般疑問文です。それに対して、「あなたは誰を愛していますか？」という疑問文は、「誰々です」という具体的な言明で答えることとなりますので、特殊疑問文です。

この節で説明するのは、ラテン語で一般疑問文を作る方法です。特殊疑問文の作り方については、もう少し先のところで説明することにしたいと思います。「いつ?」とか「どこで?」という疑問文は第 5.5.9 項、「何が?」とか「誰を?」という疑問文は第 6.4 節です。

#### 3.4.2 一般疑問文を作る後倚辞

第 1.5 節でアクセントについて説明したときにも登場しましたが、ラテン語には、単語の末尾に連結されることによって何らかの機能を発揮する、「後倚辞」(英語では *enclitic*) と呼ばれる単語のようなものがあります。

後倚辞のひとつに、*-ne* というのがあります。これは、一般疑問文を作るための後倚辞です。ラテン語では、一般疑問文は、次のような手順によって作ることができます。

- (1) 尋ねたい疑問を肯定する平叙文を作ります。
- (2) 尋ねたい単語(文全体を尋ねたい場合は述語動詞)の末尾に *-ne* を連結します。
- (3) *-ne* を連結した単語が文の先頭でない場合は、それを文の先頭へ移動させます。

それでは、「父は母を愛していますか？」という一般疑問文を作ってみましょう。まず最初に、その疑問を肯定する、

*Pater mātrem amat.* 父は母を愛しています。

という平叙文を作ります。次に、この場合は文全体を尋ねたいわけですから、*amat* という述語動詞の末尾に *-ne* を連結します。そして次に、*amatne* を文の先頭へ移動させます。そうすることによって、

Amatne pater mātrem? 父は母を愛していますか？

という一般疑問文を作ることができます。

次に、「父が愛しているのは母ですか？」という一般疑問文を作ってみましょう。まず最初に、その疑問を肯定する、

mātrem pater amat. 父が愛しているのは母です。

という平叙文を作ります。次に、この場合は、父が愛しているのが母なのかどうかを尋ねたいわけですから、mātrem という単語の末尾に -ne を連結します。そうすることによって、

Mātremne pater amat? 父が愛しているのは母ですか？

という一般疑問文を作ることができます。

### 3.4.3 一般疑問文に対する肯定的な返答

ラテン語では、一般疑問文に対して肯定的に返答したいときは、通常、その疑問文の述語動詞を繰り返します。たとえば、

Amatne pater mātrem? 父は母を愛していますか？

という一般疑問文に対して「はい」と答えたいときは、

Amat.

と言えればいいわけです。

「私は何々ですか？」とか「あなたは何々ですか？」というような一般疑問文に対して返答する場合には、述語動詞の人称が変化しますので、注意が必要です。たとえば、

Edisne pānēs? あなたはパンを食べていますか？

という一般疑問文の述語動詞は人称が二人称ですが、それに対して返答するときは、述語動詞の人称を一人称にする必要があります。ですから、「はい」と答えたいときは、

Edō.

と言わないといけません。

一般疑問文に対して、副詞を使って肯定的に返答することも可能です。その場合に使われる副詞としては、

ita, sic	そのとおり
certē, etiam, sānē, vērō	確かに、もちろん

などがあります。たとえば、

Esne homōne? あなたは人間ですか？

という一般疑問文に対して、

Certē.

と答えると、「もちろんです」という意味になります。

### 3.4.4 一般疑問文に対する否定的な返答

ラテン語では、一般疑問文に対して否定的に返答したいときは、通常、その疑問文の述語動詞を繰り返して、それを nōn で否定します。たとえば、

Edisne pānēs? あなたはパンを食べていますか？

という一般疑問文に対して「いいえ」と答えたいときは、

Nōn edō.

と言えればいいわけです。

一般疑問文に対して否定的に返答する場合は、述語動詞を省略して、単に、

Nōn.

と言うだけでもかまいません。

また、*nōn* の代わりに、「決して何々でない」を意味する *minimē* という副詞を使うことによって、一般疑問文に対して否定的に返答することも可能です。*minimē* を使うと、否定が *nōn* よりも強くなります。

### 3.4.5 肯定的または否定的な返答を期待する一般疑問文

一般疑問文を作る方法としては、疑問の後倚辞を使う方法のほかに、文の先頭に *nōnne* または *num* という単語を置くという方法もあります。ただし、この方法によって作られる一般疑問文は、肯定的または否定的な返答のどちらかを期待するものになります。

文の先頭に *nōnne* を置くことによって一般疑問文を作ると、それは、「何々なのではないでしょうか」という、肯定的な返答を期待するものになります。

*Nōnne pater mātrem amat?* 父は母を愛しているのではないのでしょうか？

同じように、文の先頭に *num* を置くことによって一般疑問文を作ると、それは、「はたして何々なのではないでしょうか」という、否定的な返答を期待するものになります。

*Num pater mātrem amat?* はたして父は母を愛しているのでしょうか？

## 3.5 不定詞の能動態・現在

### 3.5.1 不定詞の能動態・現在の意味

不定詞の能動態・現在は、「何々すること」という意味を持っています。

たとえば、*amāre* は「愛すること」、*habēre* は「持つこと」、*regēre* は「支配すること」、*capere* は「捕えること」、*audire* は「聞くこと」という意味です。

### 3.5.2 不定詞の用法

不定詞には主格と対格という二つの格があります。ですから、文の主語、補語、目的語として使うことができます。

不定詞の性は中性です。そして数は単数だけで、複数はありません。

不定詞の能動態・現在は、主格も対格も同じ形です。ですから、主語として使う場合も、補語として使う場合も、目的語として使う場合も、形は同じです。

*Cantāre amant.* 彼らは歌うことを愛しています。

*Vivere edere est.* 生きることは食べることです。

### 3.5.3 補足不定詞

不定詞は、動詞の意味を補足するという目的で使われる場合もあります。そのような目的で使われる不定詞は、「補足不定詞」(英語では *complementary infinitive*) と呼ばれます。

可能、意志、願望、義務などを意味する、

*possum, posse* できる。

*volō, velle* 欲する。

*cupiō, cupere* 願う。

*optō, optāre* 望む。

*dēbeō, dēbere* しなければならない。

*jubeō, jubere* 命ずる。

などの動詞は、通常、不定詞によって意味が補足されます。

*Homō ridēre potest.* 人間は笑うことができます。

*Fugere volō.* 私は逃げたいのです。

### 3.5.4 不定詞の意味上の目的語

不定詞は、その動作の対象をあらわす意味上の目的語を伴って、「何々を何々すること」という意味の句を作ることができます。不定詞の意味上の目的語は、格を対格にする必要があります。

*Terram amāre dēbēmus.* 私たちは大地を愛さなければなりません。

*terra, -ae, f.* 大地。

### 3.5.5 不定詞の意味上の主語

不定詞は、自分があらわしている動作の主体と、述語動詞があらわしている動作の主体とが異なる場合、前者の主体をあらわす意味上の主語を伴って、「何々が何々すること」という意味の句を作ることができます。不定詞の意味上の主語は、格を対格にする必要があります。

Patrem rīdere videō. 私は父が笑っているのを見えています。

不定詞は、意味上の主語と意味上の目的語の両方を伴って、「何々が何々を何々すること」という意味の句を作ることにも可能です。

Patrem mātrem amāre crēdō. 私は、父が母を愛していると信じています。

crēdō, -ere 信じる。

### 3.5.6 不定詞の意味上の補語

不定詞は、その意味上の主語が補語を必要とする場合、意味上の補語を伴うことができます。不定詞の意味上の補語は、格を対格にする必要があります。

Hominem animālem esse scīmus.

私たちは、人間が動物だということを知っています。

## 3.6 命令法・能動態・現在

### 3.6.1 命令法・能動態・現在・二人称・単数

動詞の命令法・能動態・現在は、人称は二人称だけしかありませんが、数は単数が複数かで異なる形になります。

一人の人間に向かって「何々しなさい」と命令する命令文を作りたいときは、その動作をあらわす動詞を命令法・能動態・現在・二人称・単数の形にする必要があります。

動詞の命令法・能動態・現在・二人称・単数は、その動詞の現在幹とまったく同じ形です（現在幹というのは、第3.2節で説明したように、不定詞の能動態・現在から、その語尾にある -re を取り除いた形のことです）。たとえば、amō（愛する）の命令法・能動態・現在・二人称・単数（愛せよ）は、不定詞の能動態・現在が amāre ですから、その末尾にある -re を取り除くことによってできる、amā という形です。

命令文の語順は、動詞を文頭に置いて、目的語などをその後ろに置くのが普通です。

Fuge.	逃げなさい。
Dormī.	眠りなさい。
Amā patrem.	父を愛しなさい。
Nārrā filiae faburam.	娘に物語を語りなさい。

### 3.6.2 命令法・能動態・現在・二人称・単数が特殊な動詞

次の動詞（いずれも第三変化動詞）の命令法・能動態・現在・二人称・単数は、現在幹と同じ形ではなくて、その末尾から e を取り除いた形です。

命令法・能動態・現在・二人称・単数

dīcō（言う）	dīc
dūcō（導く）	dūc
faciō（作る）	fac

### 3.6.3 命令法・能動態・現在・二人称・複数

二人以上の人間に向かって「何々しなさい」と命令する命令文を作りたいときは、その動作をあらわす動詞を命令法・能動態・現在・二人称・複数の形にする必要があります。

命令法・能動態・現在・二人称・複数の作り方は、第三変化動詞とそれ以外の動詞とで、少し違いがあります。

第三変化動詞以外の動詞の命令法・能動態・現在・二人称・複数は、その動詞の現在幹の末尾に -te を連結した形です。たとえば、amō（愛する）の命令法・能動態・現在・二人称・複数は、現在幹が amā- ですから、その末尾に -te を連結することによってできる、amāte という形です。

Vidēte caelum. (二人以上の人間に向かって) 空を見なさい。

第三変化動詞の命令法・能動態・現在・二人称・複数は、その動詞の現在幹の末尾にある *e* を *i* に変えたものに *-te* を連結した形です。たとえば、*vīvō* (生きる) の命令法・能動態・現在・二人称・複数は、現在幹が *vīve-* ですから、その末尾にある *e* を *i* に変えたものに *-te* を連結することによってできる、*vīvite* という形です。

Discite mathēmaticam. (二人以上の人間に向かって) 数学を学びなさい。

*mathēmatica*, -ae, *f.* 数学。

*dicō* (言う) *dūcō* (導く) *faciō* (作る) が特殊なのは単数だけです。複数の作り方は普通の第三変化動詞と同じですので、それぞれの複数は、*dicite*、*dūcite*、*facite* になります。

### 3.6.4 不規則動詞の命令法・能動態・現在・二人称

不規則動詞の命令法・能動態・現在・二人称は、次の表のような形になります。

	単数	複数
<i>sum</i> (である)	<i>es</i>	<i>este</i>
<i>nōlō</i> (欲しない)	<i>nōlī</i>	<i>nōlīte</i>
<i>eō</i> (行く)	<i>ī</i>	<i>īte</i>
<i>ferō</i> (運ぶ)	<i>fer</i>	<i>ferite</i>
<i>fiō</i> (なる)	<i>fi</i>	<i>fiite</i>
<i>dō</i> (与える)	<i>dā</i>	<i>dāte</i>
<i>edō</i> (食べる)	<i>ede (ēs)</i>	<i>edite (ēste)</i>

*possum* (できる) *volō* (欲する) *mālō* (むしろ...を選ぶ) という不規則動詞には、命令法の形はありません。

### 3.6.5 禁止

否定的な意味を持つ命令文、つまり禁止を意味する命令文は、*nōlō* (欲しない) の命令法・能動態・現在・二人称と、禁止したい動作をあらわす動詞の不定詞の能動態・現在を使うことによって作ることができます。つまり、直訳すれば「何々することを欲してはいけません」となる文を作るわけです。

語順は、*nōlō* を文頭に置いて、不定詞を文末に置くのが普通です。

*Nōlī pecūniam amāre.* 財貨を愛してはいけません。

*Nōlīte cārnem edere.* (二人以上の人間に向かって) 肉を食べてはいけません。

*pecūnia*, -ae, *f.* 財貨。

*cārō*, *carnis*, *f.* 肉。

### 3.6.6 挨拶

ラテン語では、挨拶の言葉は命令文です。

人間と人間とが出会ったとき、ラテン語では、*salveō* (健在である) という動詞の命令法・能動態・現在・二人称を使って、次のような言葉を交します。

*Salvē.* こんにちは。(相手が一人の場合)

*Salvēte.* こんにちは。(相手が二人以上の場合)

日本語では、挨拶の言葉として、「おはよう」、「こんにちは」、「こんばんは」などを、出会ったときの時刻に応じて使い分けますが、ラテン語の挨拶の言葉は、時刻とは無関係です。

人間と人間とが別れるとき、ラテン語では、*valeō* (健康である) という動詞の命令法・能動態・現在・二人称を使って、次のような言葉を交します。

*Valē.* さようなら。(相手が一人の場合)

*Valēte.* さようなら。(相手が二人以上の場合)

別れるときの言葉としては、このように *valeō* を使うのが普通ですが、出会ったときと同じように *salveō* を使うこともできます。

### 3.6.7 謝罪

ラテン語では、謝罪の言葉も命令文です。

謝罪の気持ちを伝えたいとき、ラテン語では、*īgnōscō* (許す) という動詞の命令法・能動態・現在・二人称を使って、次のように言います。

*Īgnōsce.* ごめんなさい。(相手が一人の場合)

*Īgnōscite.* ごめんなさい。(相手が二人以上の場合)

また、謝罪の言葉は、*dō* (与える) という動詞の命令法・能動態・現在・二人称と、*venia* (許し) という名詞を使って、次のように言うこともできます。

*Dā veniam.* ごめんなさい。(相手が一人の場合)

*Dāte veniam.* ごめんなさい。(相手が二人以上の場合)

## 第4章 前置詞と接続詞と間投詞

### 4.1 前置詞

#### 4.1.1 前置詞の基礎

名詞または名詞に相当する語句の前に置かれて、文のほかの部分とその語句との関係を示す単語は、「前置詞」(英語では *preposition*) と呼ばれる品詞に分類されます。

前置詞の後ろに置かれる名詞の変化形は、対格または奪格です。対格にしないといけないのか奪格にしないといけないのかというのは、それぞれの前置詞ごとに決まっています(ただし、どんな意味で使うのかということに応じて、対格と奪格を使い分ける前置詞もあります)。

たとえば、「...に向かって」などの意味を持つ *ad* という前置詞の場合、その後ろに置かれる名詞は、対格にしないといけないと決まっています。ですから、「山に向かって」と言いたいときは、*mons* (山) を対格にして、

*ad montem*

と言わないといけません。

*mons, montis, m.* 山。

後ろに置かれる名詞を対格にしないといけない前置詞は、「対格を支配する前置詞」または「対格支配の前置詞」と呼ばれます。同じように、奪格にしないといけない前置詞は、「奪格を支配する前置詞」または「奪格支配の前置詞」と呼ばれます。そして、対格と奪格を使い分ける前置詞は、「対格と属格を支配する前置詞」または「対格奪格支配の前置詞」と呼ばれます。

名詞または名詞に相当する語句の前に前置詞を置くことによって作られた語句は、文の中で、一つの修飾語として機能します。

#### 4.1.2 対格を支配する前置詞

対格を支配する前置詞のうちで主要なものとしては、次のようなものがあります。

<i>ad</i>	...の方へ、...に向かって、...まで、...に関して、...について。
<i>ante</i>	(空間的に) ...の前へ、...の前で。(時間的に) ...よりも前に、...以前に。
<i>apud</i>	...へ、...で、...の家で、...の著書で。
<i>circum</i>	...のまわりに。
<i>citrā</i>	...のこちら側に。
<i>contrā</i>	...に反して、...に対抗して。
<i>īnfrā</i>	...の下に。
<i>inter</i>	...のあいだに。
<i>juxtā</i>	...の近くに、...に接して。
<i>ob</i>	...の前に、...のために、...のゆえに、



per	...を通して、...によって。
post	(空間的に) ...の後ろに、...の後ろで。(時間的に) ...よりもあとに、...以後に。
praeter	...の前を通して、...以外に。
prope	...の近くに、...のそばで。
propter	...の近くに、...によって、...のために。
secundum	...にしたがって、...に次いで。
suprā	(空間的に) ...の上に。(時間的に) ...以前に。(数量的に) ...を超えて。
trāns	...を横切って、...を越えて。
ultrā	...の彼方に。

「その場限りの」とか「そのためだけの」という意味で使われる「アドホック」という言葉は、ラテン語の *ad hoc* に由来するものです。hoc というのは「これ」という意味ですので、*ad hoc* を直訳すると、「これに関して」ということになります (hoc については、第 6.3 節で説明します)。

午前を意味する a.m. という言葉は、ラテン語の *ante meridiem* (直訳すれば「正午よりも前に」) から作られた頭字語です。同じように、午後を意味する p.m. は、*post meridiem* から作られた頭字語です。

*meridiēs, -ēi, f.* 正午。

#### 4.1.3 奪格を支配する前置詞

奪格を支配する前置詞のうちで主要なものとしては、次のようなものがあります。

ab, ā	...から、...によって。後ろに置かれる名詞が母音または h で始まる場合は ab、そうでない場合は ā を使う。
cum	...とともに。
cōram	...の面前で、...のいるところで。
dē	...から、...から下へ、...について、...にしたがって。
ex, ē	...から、...から外へ、...によって。後ろに置かれる名詞が母音または h で始まる場合は ex、そうでない場合は ē を使う。
prae	...の前に、...のために、...と比べて。
prō	...の前に、...のために、...の代わりに。
sine	...なしに。

「事実上の」という意味で使われる「デファクト」という言葉は、ラテン語の *dē factō* (直訳すれば「事実にしたがって」) に由来するものです。

*factum, -i, n.* 行為、行動、事実。

劇や小説などで、急場をしのぐために御都合主義的な解決をもたらす登場人物は、「機械仕掛けの神」と呼ばれます。この言葉は、

*deus ex māchinā*

というラテン語の言葉に由来するものです。

*māchina, -ae, f.* 機械。

#### 4.1.4 対格と奪格を支配する前置詞

対格と奪格の両方を支配する前置詞としては、*in*、*sub*、*super* という三つのものがあります。

これらの前置詞は、後ろに置かれた名詞が対格の場合と奪格の場合とで、次のように意味の相違が生じます。

	対格	属格
<i>in</i>	...の中へ	...の中で
<i>sub</i>	...の下へ	...の下で
<i>super</i>	...の上へ	...の上で

このように、これらの前置詞は、対格の場合は運動の方向を示して、奪格の場合は静止している位置を示す、と考えることができます。

## 4.1.5 前置詞を使った文の例

それでは、前置詞を使って、文をいくつか作ってみましょう。たとえば、次のような文を作ることができます。

Puer verbum ad montem clāmat.	少年は山に向かって言葉を叫んでいます。
Māter frūctum cum patre edit.	母は父といっしょに果実を食べています。
Vir ante domum amicus patris est.	家の前の男は父の友人です。
Māter librum dē lēge scribet.	母は法律についての本を書いています。

clāmō, -āre 叫ぶ。

## 4.1.6 地格

ラテン語には、主格、属格、与格、対格、奪格、呼格という六つの格のほかに、「地格」(英語では locative) と呼ばれる格があります<sup>1</sup>。ただし、すべての名詞が地格形を持っているわけではありません。地格形を持っているのは、都市や村落や小島の地名と、ごく少数の普通名詞だけです。

地名の地格形は、次の規則によって求めることができます。

- 第一変化名詞または第二変化名詞で、かつ単数ならば、地格形は属格形と同じ。
- 第一変化名詞でも第二変化名詞でもないか、または複数ならば、地格形は奪格形と同じ。

いくつかの地名について例を示すと、次のようになります。

主格	地格
Rōma, -ae, <i>f.</i>	Rōmae
Corinthus, -ī, <i>f.</i>	Corintī
Carthāgō, -ginis, <i>f.</i>	Carthāgine
Athēnae, -ārum, <i>f.</i>	Athēnis
Philippī, -ōrum, <i>m.</i>	Philippīs
Gādēs, -ium, <i>f.</i>	Gādibus

地格形を持っている普通名詞は、次の3個だけです。

主格	地格
rūs, rūris, <i>n.</i> 田舎	rūrī
domus, -ūs, <i>f.</i> 家	domī
humus, -ī, <i>f.</i> 地面	humī

通常の名詞の場合、それを使って、「...で」、「...に」、「...へ」、「...から」というように、動作の場所、移動の目的地、移動の出発点を示したいときは、しかるべき前置詞を使えばいいわけですが、地格形を持っている名詞の場合は、前置詞を使わないで、しかるべき格に変化させた名詞だけを置きます。

地格形を持っている名詞を使って、「...で」、「...に」というように、動作の場所を示したいときは、前置詞を使わないで、その名詞の地格形だけを置きます。

Rūrī habitō.	私は田舎に住んでいます。
Rōmae habitō.	私はローマに住んでいます。

地格形を持っている名詞を使って、「...へ」というように、移動の目的地を示したいときは、前置詞を使わないで、その名詞の対格形だけを置きます。

Rūs eō.	私は田舎へ行きます。
Rōmam eō.	私はローマへ行きます。

地格形を持っている名詞を使って、「...から」というように、移動の出発点を示したいときは、前置詞を使わないで、その名詞の奪格形だけを置きます。

<sup>1</sup>地格は、「位格」と呼ばれることもあります。

Rūre redeō. 私は田舎から帰ります。  
Rōmā redeō. 私はローマから帰ります。

## 4.2 接続詞

### 4.2.1 接続詞の基礎

文と文、または文の部分と文の部分とを接続して、それらの関係を示す単語は、「接続詞」(英語では conjunction) と呼ばれる品詞に分類されます。

接続詞は、それが接続するものの関係が対等どうかという観点から、二つのグループのどちらかに分類することができます。

接続詞がそのどちらかに分類される二つのグループのそれぞれについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そして接続するものの関係を示すと、次のようになります。

等位接続詞 coordinate conjunction 対等の関係  
従属接続詞 subordinate conjunction 一方が他方に従属する関係

従属接続詞は、「従位接続詞」と呼ばれることもあります。

従属接続詞を使って作られる文では、多くの場合、接続法の動詞が使われます。ですので、従属接続詞にはどのようなものがあるかということや、従属接続詞を使って文と文とを接続する方法については、第 10 章で接続法について学習したのち、第 11 章で説明することにしたいと思います。

### 4.2.2 等位接続詞

等位接続詞としては、たとえば次のようなものがあります。

et と、および、そして。  
atque と、および、そして。  
nec そして...ではない。  
vel または、あるいは。  
aut または、あるいは。  
sed しかし、ところで。  
autem しかし、ところで。  
at しかし、ところで。  
quia なぜなら。  
nam なぜなら。  
enim なぜなら。  
ergō したがって。  
igitur したがって。  
itaque したがって。

等位接続詞を使って文の部分と文の部分とを接続する場合は、接続されるそれぞれの部分の中間に等位接続詞を置きます。

Patrem et mātrem amō.  
私は父と母を愛しています。  
Mathēmaticam vel philosophiam discere potes.  
あなたは数学または哲学を学ぶことができます。

**philosophia**, -ae, *f.* 哲学。  
**discō**, -ere 学ぶ。

et または aut を使って文の部分と文の部分とを接続する場合の使い方としては、その接続詞を、接続されるそれぞれの部分の中間だけではなくて、それらの部分の左側と中間の 2 箇所に置く、という使い方もあります。et または aut を左側と中間の 2 箇所に置いた場合は、それぞれ、

et A et B A と B の両方  
aut A aut B A または B のうちの一方

という意味になります。

等位接続詞を使って文と文とを接続する場合も、接続されるそれぞれの文の中間に等位接続詞を置きます。等位接続詞によって接続されるそれぞれの文は、通常、コンマで区切られます。コンマを打つ位置は、左側の文の末尾です。

Pater nauta est, et māter magister est.

父は船乗りで、そして母は教師です。

Vespertiliō avis nōn est, sed volāre potest.

コウモリは鳥ではありませんが、しかし飛ぶことができます。

Sapientiam amat, quia philosophus est.

彼が知恵を愛しているのは、彼が哲学者だからです。

Cōgitō, ergō sum.

我思う、ゆえに我あり。

vespertiliō, -ōnis, *m.* コウモリ。

volō, -āre 飛ぶ。

sapientia, -ae, *f.* 知恵。

#### 4.2.3 等位接続詞的な後倚辞

ラテン語には、単語の末尾に連結されることによって何らかの機能を発揮する、「後倚辞」(英語では enclitic) と呼ばれる単語のようなものがあります(第1.5節でアクセントについて説明したときと、第3.4節で一般疑問文について説明したときにも登場しました)。

次の二つの後倚辞は、等位接続詞と同じように、文の部分と文の部分、あるいは文と文を、対等の関係で接続するために使われます。

-que と、および、そして。

-ve または、あるいは。

これらの後倚辞を使って単語と単語とを接続したいときは、

$A Bque$   $A$  と  $B$

$A Bve$   $A$  または  $B$

というように、右側の単語の末尾に、その後倚辞を連結します。

Patrem mātreque amō.

私は父と母を愛しています。

Mathematicam philosophiamve discere potes.

あなたは数学または哲学を学ぶことができます。

後倚辞を使って、複数の単語から構成されている文または文の部分を接続したいときは、右側の文または文の部分を構成している単語のうちのどれか(通常は先頭の単語)の末尾に、その後倚辞を連結します。

Pater nauta est mātreque magister est.

父は船乗りで、そして母は教師です。

#### 4.2.4 接続詞の観点からの文の分類

文は、複数の文から構成されているかどうか、そして、複数の文から構成されている場合、それらの文はどのような接続詞によって接続されているか、という観点から、次の三つのグループに分類することができます。

単文 英語では simple sentence。複数の文に分解することができない文。

重文 英語では compound sentence。等位接続詞によって文と文とを接続することによって作られた文。

複文 英語では complex sentence。従属接続詞または関係代名詞<sup>2</sup>によって文と文とを接続することによって作られた文。

<sup>2</sup>関係代名詞については、第11.2節で説明します。

## 4.3 間投詞

### 4.3.1 間投詞の基礎

感情の表出や呼びかけなどで使われる単語は、「間投詞」(英語では interjection) と呼ばれる品詞に分類されます。間投詞は、「感嘆詞」または「感動詞」と呼ばれることもあります。

### 4.3.2 間投詞の例

間投詞としては、次のようなものがあります。

ō	さまざまな感情。ōh も同様。
ā	さまざまな感情。āh、vāh も同様。
hei	悲嘆や苦痛。hau も同様。
hem	驚き。hui も同様。
heus	呼びかけ。ēn、ecce も同様。
iō	喜び、呼びかけ。
ēcastor	カストルにかけて。カストル (Castor, -oris, <i>m.</i> ) は神の名前。
pol	ポルックスにかけて。edepol も同様。ポルックス (Pollux, -ūcis, <i>m.</i> ) も神の名前。カストルとポルックスは双子の兄弟。
hercule	ヘルクレスにかけて。herculēs、mēhercule、mēherculēs も同様。ヘルクレス (Herculēs, -is, <i>m.</i> ) も神の名前。

### 4.3.3 間投詞を使った文

間投詞は、基本的にはそれ自体が一つの文になります。間投詞から作られた文の末尾に打つ句読点は、ピリオドでも感嘆符でもどちらでもかまいません。

Ō!	おお!
Heus.	ほら。
Pol!	ポルックスにかけて!

## 第5章 形容詞と副詞

### 5.1 形容詞の基礎

#### 5.1.1 形容詞の用法

ラテン語の形容詞には、次のような三つの用法があります。

限定用法	名詞に対する修飾語として使うという用法。たとえば、 flōs pulcher 美しい花 という句の中では、pulcher (美しい) という形容詞は限定用法で使われています。
叙述用法	補語として使うという用法。たとえば、 Flōs pulcher est. 花は美しい。 という文の中では、pulcher という形容詞は叙述用法で使われています。
名詞的用法	名詞として使うという用法。たとえば、 Pulcher filiam videt. 美しい男が娘を見えています。 という文の中では、pulcher という形容詞は名詞的用法で使われています。

#### 5.1.2 形容詞を変化させる要因

ラテン語では、形容詞も、変化する品詞の一つです。形容詞を変化させる要因は、性と数と格の三つです。形容詞は、自分の性と数と格が、自分が修飾している名詞の性と数と格に一致するように変化します。たとえば、男性単数主格の名詞を修飾する形容詞は男性単数主格に変化して、女性複数対格の名詞を修飾する形容詞は女性複数対格に変化します。

限定用法の場合だけではなくて、叙述用法の場合も、その形容詞は「性・数・格の一致」で変化します。主格補語として使われる形容詞は主語の性と数と格に一致するように変化して、目的補語として使われる形容詞は目的語の性と数と格に一致するように変化します。

形容詞が修飾する名詞、主格補語の形容詞に対応する主語、目的補語の形容詞に対する目的語が、一つだけではなくて二つ以上ある場合、原則としては、形容詞の性と数を、その形容詞にもっとも近い位置に置かれている名詞の性と数に一致させます。しかし、この原則を無視して、名詞がすべて生物の場合は形容詞を男性複数に、名詞の中に無生物がある場合は形容詞を中性複数にしてもかまいません。

### 5.1.3 形容詞と名詞の位置関係

名詞とそれを修飾する形容詞の語順は、日本語や英語では、

形容詞、名詞

という順序が普通です。それに対して、ラテン語では、

名詞、形容詞

という順序が普通です。ただし、この語順はあくまで原則にすぎません。それとは逆の順序にしてもかまいませんし、形容詞と名詞とのあいだに別の単語を割り込ませてかまいません。

ラテン語では、名詞とそれを修飾する形容詞との対応は、それらの位置関係ではなくて性・数・格の一致によって示されます。ですから、形容詞と名詞とがどのような位置関係にあったとしても、混乱が発生することはめったにありません。

古い文献では、前置詞が前に置かれた名詞を形容詞が修飾する場合に、

形容詞、前置詞、名詞

という語順が使われていることもしばしばあります。

### 5.1.4 形容詞の分類

ラテン語の形容詞の変化は、名詞の変化に準拠しています。形容詞は、その変化が準拠している名詞のグループという観点から、二つのグループのどちらかに分類されます。一つのグループは第一変化名詞と第二変化名詞に準拠して変化するもので、もう一つのグループは第三変化名詞に準拠して変化するものです。

ラテン語の形容詞がそのどちらかに分類される二つのグループのそれぞれについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そしてその変化が準拠している名詞のグループを示すと、次のようになります。

第一第二変化形容詞	first-second declension adjective	第一変化名詞と第二変化名詞
第三変化形容詞	third declension adjective	第三変化名詞

## 5.2 第一第二変化形容詞

### 5.2.1 第一第二変化形容詞の変化

第一第二変化形容詞は、その名前が示しているとおり、第一変化名詞と第二変化名詞に準拠して変化するわけですが、準拠している名詞のグループは、性に応じて、次のように細分化することができます。

男性	第二変化 -us 型名詞または第二変化 -er 型名詞
女性	第一変化名詞
中性	第二変化 -um 型名詞

第一第二変化形容詞は、男性の変化が第二変化 -us 型名詞に準拠しているグループと、第二変化 -er 型名詞に準拠しているグループのいずれかに分類することができます。男性の変化が第二変化 -er 型名詞に準拠しているグループは、さらに、男性単数主格形の末尾にある -er の e が、それ以外の形でも残るグループと、落ちてしまうグループに分類することができます。

男性の変化が第二変化 -us 型名詞に準拠している形容詞としては、magnus (大きい)、parvus (小さい)、multus (多い)、paucus (少ない)、bonus (よい)、malus (悪い)、vērus (真実の)、falsus (虚偽の)、clārus (明るい)、obscurus (暗い) などがあります。

magnus (大きい) という形容詞は、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	magnus	magna	magnum
	属格	magnī	magnae	magnī
	与格	magnō	magnae	magnō
	対格	magnum	magnam	magnum
	奪格	magnō	magnā	magnō
	呼格	magne	magna	magnum
複数	主格	magnī	magnae	magna
	属格	magnōrum	magnārum	magnōrum
	与格	magnīs	magnīs	magnīs
	対格	magnōs	magnās	magna
	奪格	magnīs	magnīs	magnīs

余談ですが、日本列島の本州の中央には、新第三期の厚い地層を持つ南北に細長い地域があって、この地域は、「フォッサマグナ」(Fossa Magna) というラテン語の名前で呼ばれています。fossa は「溝」という意味の女性名詞ですので、Fossa Magna は「大きな溝」という意味になります。

男性の変化が第二変化 -er 型名詞に準拠している形容詞のうちで、男性単数主格形の末尾にある -er の e が、それ以外の形でも残るものとしては、liber (自由な)、tener (柔らかい)、prosper (繁栄している)、asper (荒々しい)、miser (哀れな) などがあります。

liber (自由な) という形容詞は、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	liber	libera	liberum
	属格	liberī	liberae	liberī
	与格	liberō	liberae	liberō
	対格	liberum	liberam	liberum
	奪格	liberō	liberā	liberō
	複数	主格	liberī	liberae
属格		liberōrum	liberārum	liberōrum
与格		liberīs	liberīs	liberīs
対格		liberōs	liberās	libera
奪格		liberīs	liberīs	liberīs

男性の変化が第二変化 -er 型名詞に準拠している形容詞のうちで、男性単数主格形の末尾にある -er の e が、それ以外の形では落ちてしまうものとしては、pulcher (美しい)、ruber (赤い)、niger (黒い)、sinister (左の)、dexter (右の)、sacer (神聖な) などがあります。

pulcher (美しい) という形容詞は、次のように変化します。

	男性	女性	中性	
単数	主格	pulcher	pulchra	pulchrum
	属格	pulchrī	pulchrae	pulchrī
	与格	pulchrō	pulchrae	pulchrō
	对格	pulchrum	pulchram	pulchrum
	奪格	pulchrō	pulchrā	pulchrō
複数	主格	pulchrī	pulchrae	pulchra
	属格	pulchrōrum	pulchrārum	pulchrōrum
	与格	pulchrīs	pulchrīs	pulchrīs
	对格	pulchrōs	pulchrās	pulchra
	奪格	pulchrīs	pulchrīs	pulchrīs

### 5.2.2 辞書に書かれている第一第二変化形容詞の項目

ラテン語の辞書は、第一第二変化形容詞の項目の見出しとして、その男性単数主格形を掲げています。ちなみに、見出しとして掲げられているのが男性単数主格形だという点については、第三変化形容詞も同じです。

第一第二変化形容詞の項目には、見出しに続けて、女性単数主格形の語尾と中性単数主格形の語尾が記されています。たとえば、*magnus* (大きい) という第一第二変化形容詞の項目は、

*magnus*, -a, -um 大きい。

というように書かれています。この記述から、*magnus* は、男性単数主格形が *magnus* で、女性単数主格形が *magna* で、中性単数主格形が *magnum* だ、ということが分かります。

同じように、*liber* (自由な) という第一第二変化形容詞の項目は、

*liber*, -era, -erum 自由な。

というように書かれています。この記述から、*liber* は、男性単数主格形が *liber* で、女性単数主格形が *libera* で、中性単数主格形が *liberum* だ、ということが分かります。

同じように、*pulcher* (美しい) という第一第二変化形容詞の項目は、

*pulcher*, -chra, -chrum 美しい。

というように書かれています。この記述から、*pulcher* は、男性単数主格形が *pulcher* で、女性単数主格形が *pulchra* で、中性単数主格形が *pulchrum* だ、ということが分かります。

### 5.2.3 第一第二変化形容詞を使った文の例

それでは、第一第二変化形容詞を使って、文をいくつか作ってみましょう。たとえば、次のような文を作ることができます。

<i>Animal magnum dormit.</i>	大きな動物が眠っています。
<i>Avēs liberae sunt.</i>	鳥たちは自由です。
<i>Pater matrī flōrem pulchrum dōnat.</i>	父は母に美しい花を贈ります。
<i>avis</i> , -is, <i>f.</i> 鳥。	

## 5.3 第三変化形容詞

### 5.3.1 第三変化形容詞の分類

第三変化形容詞は、その名前が示しているとおり、第三変化名詞に準拠して変化します。

第三変化形容詞は、その変化のパターンによって、四つのグループのいずれかに分類されます。

このチュートリアルでは、第三変化形容詞がそれらのうちのいずれかに分類される四つのグループのそれぞれを、それぞれのグループに所属している代表的な形容詞を使って、次のように呼ぶことにしたいと思います。

- *fortis* 型形容詞
- *alacer* 型形容詞



- *fēlix* 型形容詞
- *vetus* 型形容詞

第三変化形容詞は、*fortis* 型形容詞がその大多数を占めていて、それ以外のグループは、いずれも少数派です。

第 2.5 節で説明したように、第三変化名詞は、子音幹名詞と *i* 幹名詞に分類することができて、子音幹名詞のほうが多数派で *i* 幹名詞のほうが少数派です。しかし、第三変化形容詞の大多数が準拠しているのは、第三変化名詞では少数派だった *i* 幹名詞のほうの変化です。第三変化形容詞の四つのグループのうちで、*fortis* 型形容詞、*alacer* 型形容詞、*fēlix* 型形容詞の三グループは、いずれも *i* 幹名詞に準拠して変化します。子音幹名詞に準拠して変化するのは、*vetus* 型形容詞のみです。

### 5.3.2 *fortis* 型形容詞の変化

*fortis* 型形容詞としては、*fortis* (強い)、*omnis* (すべての)、*brevis* (短い)、*similis* (同様の)、*facilis* (容易な)、*difficilis* (困難な)、*dulcis* (甘い)、*Aprilis* (4月の) などがあります。

*fortis* (強い) という形容詞は、次のように変化します。

		男・女性	中性
単数	主格	<i>fortis</i>	<i>forte</i>
	属格	<i>fortis</i>	<i>fortis</i>
	与格	<i>fortī</i>	<i>fortī</i>
	対格	<i>fortem</i>	<i>forte</i>
	奪格	<i>fortī</i>	<i>fortī</i>
複数	主格	<i>fortēs</i>	<i>fortia</i>
	属格	<i>fortium</i>	<i>fortium</i>
	与格	<i>fortibus</i>	<i>fortibus</i>
	対格	<i>fortēs</i>	<i>fortia</i>
	奪格	<i>fortibus</i>	<i>fortibus</i>

この変化表と *i* 幹名詞の変化表とを見比べてみてください。両者の語尾はほとんど同じですが、一箇所だけ、違うところがあります。それは、男・女性の単数奪格です。男・女性の *i* 幹名詞の単数奪格は語尾が *-e* ですが、この変化表の男・女性の単数奪格は語尾が *-ī* になっています。

男・女性の単数奪格の語尾が *-e* ではなくて *-ī* になるという性質は、*fortis* 型形容詞だけのものではなくて、*alacer* 型形容詞と *fēlix* 型形容詞にも共通するものです。

### 5.3.3 *alacer* 型形容詞の変化

*alacer* 型形容詞としては、*alacer* (活発な)、*ācer* (鋭い)、*celer* (速い)、*celeber* (にぎやかな、有名な)、*September* (9月の)、*October* (10月の)、*November* (11月の)、*December* (12月の) などがあります。

*alacer* 型形容詞の変化の特徴は、男性の変化と女性の変化がまったく同じというわけではなくて、単数主格だけ、男性と女性とで違う形になる、という点にあります。たとえば、*alacer* (活発な) という形容詞は、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	alacer	alacris	alacre
	属格	alacris	alacris	alacris
	与格	alacrī	alacrī	alacrī
	対格	alacrem	alacrem	alacre
	奪格	alacrī	alacrī	alacrī
複数	主格	alacrēs	alacrēs	alacria
	属格	alacrium	alacrium	alacrium
	与格	alacribus	alacribus	alacribus
	対格	alacrēs	alacrēs	alacria
	奪格	alacribus	alacribus	alacribus

### 5.3.4 fēlix 型形容詞の変化

fēlix 型形容詞としては、fēlix (幸福な)、audāx (勇気のある)、duplex (二重の)、concors (協調的な)、sollers (熟練した)、sapiēns (賢明な) などがあります。

fēlix 型形容詞は、単数主格がすべての性で同じ形になります (この性質は、vetus 型形容詞も同じです)。たとえば、fēlix (幸福な) という形容詞は、次のように変化します。

		男・女性	中性
単数	主格	fēlix	fēlix
	属格	fēlicis	fēlicis
	与格	fēlicī	fēlicī
	対格	fēlicem	fēlix
	奪格	fēlicī	fēlicī
複数	主格	fēlicēs	fēlicia
	属格	fēlicium	fēlicium
	与格	fēlicibus	fēlicibus
	対格	fēlicēs	fēlicia
	奪格	fēlicibus	fēlicibus

fortis 型形容詞、alacer 型形容詞、fēlix 型形容詞は、i 幹名詞と同じように、古い時代には男性または女性の複数対格の語尾として -īs が使われていました。ですから、文献によっては、fortis、alacer、fēlix の男性または女性の複数対格形として、fortīs、alacrīs、fēlicīs が使われていることもあります。

### 5.3.5 vetus 型形容詞の変化

vetus 型形容詞としては、vetus (古い)、dīves (富める)、pauper (貧しい)、memor (覚えている) などがあります。

vetus 型形容詞は、子音幹名詞に準拠して変化します。たとえば、vetus (古い) という形容詞は、次のように変化します。

		男・女性	中性
単数	主格	vetus	vetus
	属格	veteris	veteris
	与格	veterī	veterī
	対格	veterem	vetus
	奪格	vetere	vetere
複数	主格	veterēs	vetera
	属格	veterum	veterum
	与格	veteribus	veteribus
	対格	veterēs	vetera
	奪格	veteribus	veteribus

### 5.3.6 辞書に書かれている第三変化形容詞の項目

ラテン語の辞書は、第三変化形容詞の項目の見出しとして、第一第二変化形容詞の場合と同じように、その男性単数主格形を掲げています。

第三変化形容詞の項目で、見出しに続けて記載されているものは、その第三変化形容詞が所属しているグループごとに、若干、違いがあります。

fortis 型形容詞は、男性と女性の変化がまったく同じですので、その項目には、見出しに続けて、中性単数主格形の語尾だけが記載されています<sup>1</sup>。たとえば、fortis の項目は、

fortis, -e 強い。

というように書かれています。この記述から、fortis は、男性と女性の単数主格形が fortis で、中性単数主格形が forte だ、ということが分かります。

alacer 型形容詞の項目には、見出しに続けて、女性単数主格形の語尾と中性単数主格形の語尾が記載されています。たとえば、alacer の項目は、

alacer, -cris, -cre 活発な。

というように書かれています。この記述から、alacer は、男性単数主格形が alacer で、女性単数主格形が alacris で、中性単数主格形が alacre だ、ということが分かります。

fēlix 型形容詞の項目には、名詞の項目と同じように、見出しに続けて、単数属格形の語尾が記載されています。たとえば、fēlix の項目は、

fēlix, -icis 幸福な。

というように書かれています。この記述から、fēlix は、単数属格形が fēlicis だ、ということが分かります。

vetus 型形容詞の項目にも、名詞の項目や fēlix 型形容詞の項目と同じように、見出しに続けて、単数属格形の語尾が記載されています。たとえば、vetus の項目は、

vetus, -teris 古い。

というように書かれています。この記述から、vetus は、単数属格形が veteris だ、ということが分かります。

### 5.3.7 第三変化形容詞を使った文の例

それでは、第三変化形容詞を使って、文をいくつか作ってみましょう。たとえば、次のような文を作ることができます。

Homō animal sapiens est.	人間は賢明な動物です。
Inimicum amāre difficile est.	敵を愛することは困難です。
Vitam felicem vult.	彼は幸福な人生を望んでいます。

inimicus, -ī, m. 敵。

古代ギリシアの医学者で「医学の父」と称されるヒッポクラテスが残した次の格言には、第一第二変化形容詞と第三変化形容詞の両方が使われています。

<sup>1</sup>見出しに続けて、女性単数主格形の語尾と中性単数主格形の語尾を記載している辞書もあります。

Ars longa, vīta brevis. 学術は長く、人生は短い。

ars, artis, *f.* 学術。

この文のように、格言などでは、sum はしばしば省略されることがあります。

## 5.4 形容詞の名詞的用法

### 5.4.1 形容詞の名詞的用法の基礎

第5.1節で説明したように、形容詞の用法の一つとして、形容詞を名詞として使う、「名詞的用法」と呼ばれるものがあります。

形容詞が名詞として使われた場合、その形容詞は、その性と数に応じて、次のような意味を持つこととなります。

	男性	女性	中性
単数	...な男、...な人	...な女性	...なもの、...なこと
複数	...な男たち、...な人々	...な女性たち	...なもの(複数)

たとえば、

Pulchrās amō.

という文の中にある pulchrās という単語は、pulcher (美しい) という形容詞の女性複数対格形ですが、この形容詞に対応する女性複数対格形の名詞が存在しませんので、それ自体が名詞として使われていて、amō の目的語になっていると考えることができます。そして、名詞としての意味は、性が女性で数が複数だということから、「美しい女性たち」だということが分かります。ですから、この文は、

私は美しい女性たちを愛しています。

と翻訳することができます。

### 5.4.2 名詞として使われる形容詞の変化

形容詞が名詞として使われる場合の変化は、基本的には形容詞として使われる場合の変化と同じですが、例外もあります。それは、fēlix 型形容詞の単数奪格形です。

第5.3節で説明したように、fortis 型形容詞、alacer 型形容詞、fēlix 型形容詞は、基本的には i 幹名詞に準拠して変化するわけですが、男・女性の単数奪格形だけは、-e という i 幹名詞の語尾ではなくて、-ī という語尾になります。

しかし、それらの形容詞のうちで、fēlix 型形容詞だけは、名詞として使われる場合、単数奪格形の語尾が -ī ではなくて -e になります。たとえば、fēlix (幸福な) という形容詞の単数奪格形は、それを形容詞として使うならば felici ですが、名詞として使うならば felice になります。

中性の i 幹名詞は、単数奪格形の語尾が -ī ですが、fēlix 型形容詞が名詞として使われる場合には、中性名詞として使われる場合も、単数奪格形の語尾は -ī ではなくて -e になります。つまり、fēlix 型形容詞が名詞として使われる場合、男性と女性については男・女性の i 幹名詞とまったく同じ変化ですが、中性については、中性の i 幹名詞とまったく同じ変化ではなくて、単数奪格形だけが違う形になる、ということです。

### 5.4.3 暦の月の名前

ラテン語では、1月、2月、3月、.....という暦の月は、1月の、2月の、3月の、.....を意味する、次の形容詞を使って表現されます。

1月の	Jānuārius, a, um
2月の	Februārius, a, um
3月の	Mārtius, a, um
4月の	Aprīlis, e
5月の	Māius, a, um
6月の	Jūnius, a, um
7月の	Jūlius, a, um

8月の	Augustus, a, um
9月の	September, bris, bre
10月の	October, bris, bre
11月の	November, bris, bre
12月の	December, bris, bre

これらの形容詞の男性単数形は、1月、2月、3月、……を意味する名詞としても使われます。たとえば、

Augustus tempus calidum est. 8月は暑い時期です。

という文の中にある Augustus という形容詞の男性単数形は、8月を意味する名詞として使われています。

calidus, -a, -um 暑い、熱い。

ところで、暦の月を意味する形容詞を名詞として使うときに、なぜ男性単数形が使われるのでしょうか。

実は、本来、暦の月を意味する名詞的な表現は、暦の月を意味する形容詞と、

mēnsis, -is, *m.* 暦の月。

という男性名詞の単数形とを組み合わせたものなのです。暦の月を意味する形容詞の名詞的用法というのは、その表現の mēnsis が省略されたものです。たとえば、名詞として使われている Augustus というのは、mēnsis Augustus という表現の mēnsis が省略されたものです。暦の月を意味する形容詞を名詞として使うときに男性単数形が使われるのは、そのような理由によるものです。

## 5.5 副詞

### 5.5.1 副詞の基礎

動詞や形容詞などを修飾する単語は、「副詞」(英語では adverb)と呼ばれます。副詞は、他の副詞を修飾するために使われることもあります。

副詞の大多数は、他の品詞から派生してできたものです。副詞は、どの品詞からどのように派生したものなのか、という観点から、次のようないくつかのグループに分類することができます。

- 他の品詞から派生したものではない、純粋な副詞。
- 形容詞から規則的に作られた副詞。
- 形容詞の中性単数対格形がそのまま副詞として定着したもの。
- 名詞または代名詞の奪格形がそのまま副詞として定着したもの。
- -tus や -tim などの接尾辞によって作られた副詞。

### 5.5.2 純粋な副詞

他の品詞から派生したものではない、純粋な副詞としては、次のようなものがあります。

ita	このように、そのように。
sic	このように、そのように。
tam	これほどに、それほどに。
nimis	過度に、あまりに。
satis	十分に。
paene	ほとんど、ほぼ。
ferē	ほとんど、ほぼ。
vix	かろうじて、ほとんど...でない。
nōn	ではない。
num	はたして...なのか。
nunc	今、現在、たった今。
crās	明日、将来、今後。
ōlim	以前、かつて。

jam	すでに。
saepe	しばしば、頻繁に。
semper	常に、いつでも。
diū	長いあいだ、ずっと以前。
tum	そのとき、その当時。
mox	すぐに、それから、続いて。
nūper	最近、近年、昨今。

### 5.5.3 形容詞から副詞を作る規則

ラテン語では、若干の例外はありますが、一定の規則にもとづいて形容詞から副詞を作ることができます。そのようにして作られた副詞のグループは、副詞のうちで最大の派閥を形成しています。

形容詞から副詞を作る規則は、第一第二変化形容詞と第三変化形容詞とで異なっていて、それぞれ、次のような規則によって副詞を作ります。

第一第二変化形容詞 男性単数属格形の語尾の  $-ī$  を  $-ē$  に置き換える。

第三変化形容詞 単数属格形の語尾の  $-is$  を  $-iter$  に置き換える。

この規則にもとづいて、第一第二変化形容詞からは、次のように副詞が作られます。

	男性単数属格形	副詞
vērus (真実の)	vērī	vērē (本当に)
liber (自由な)	liberī	liberē (自由に)

第三変化形容詞からは、次のように副詞が作られます。

	単数属格形	副詞
fortis (勇敢な)	fortis	fortiter (勇敢に)
similis (同様の)	similis	similiter (同様に)

### 5.5.4 副詞の作り方が特殊な形容詞

形容詞の中には、副詞の作り方が特殊なものがあります。

bonus (よい) と malus (悪い) は、男性単数属格形の語尾を、 $-ē$  という長母音ではなくて  $ě$  という短母音に置き換えることによって副詞を作ります。

	男性単数属格形	副詞
bonus (よい)	bonī	boně (よく)
malus (悪い)	malī	malě (悪く)

第三変化形容詞のうちで、単数主格形が  $-ns$  で終わるものは、単数属格形の語尾の  $-tis$  を  $-ter$  に置き換えることによって副詞を作ります。

	単数属格形	副詞
prūdēns (賢明な)	prūdentis	prūdentē (賢明に)

### 5.5.5 形容詞の中性単数対格形に由来する副詞

形容詞の中性単数対格形がそのまま副詞として定着したものとしては、次のようなものがあります。

multum	大いに、非常に。multus, -a, -um 多い。
dulce	甘く、快く。dulcis, -e 甘い、快い。
facile	容易に。facilis, -e 容易な。

### 5.5.6 名詞または代名詞の奪格形に由来する副詞

名詞または代名詞の奪格形がそのまま副詞として定着したものとしては、次のようなものがあります。

forte	偶然に。fors, fortis, f. 偶然。
-------	--------------------------

jūre 合法的に。jūs, jūris, *n.* 法律。  
 vulgō 一般に。vulgus, -i, *n.* 大衆。  
 eō それゆえに。is それ。

### 5.5.7 -tus や -tim などによって作られた副詞

単語の語幹などの末尾に連結されることによって、その単語の意味などを変化させるものは、「接尾辞」(英語では suffix) と呼ばれます。

ラテン語の副詞の中には、-tus や -tim などの接尾辞によって作られたものがあります。そのような副詞としては、次のようなものがあります。

antiquitus 昔から。antiquus, -a, -um 昔の。  
 partim 部分的に。pars, partis *f.* 部分。  
 statim ただちに、その場で。stō, -āre 立つ。  
 furtim こっそりと。furtum, -ī, *n.* 窃盗。  
 passim いたるところに。pandō, -ere 広げる。

### 5.5.8 副詞の使い方

副詞は、通常、修飾したい動詞や形容詞などの直前に置きます。

Liberē vivit. 彼は自由に生きています。  
 Multum felix sum. 私はとても幸福です。

次の格言のように、修飾される動詞や形容詞の直後に副詞が置かれることもあります。

Festīnā lentē! ゆっくり急げ(急がば回れ)。

festīnō, -āre 急ぐ。  
 lentē ゆっくり、冷静に。

### 5.5.9 疑問副詞

「いつ?」とか「どこで?」とか「なぜ?」というような、時間や場所や理由などを尋ねる疑問文は、そのための副詞を使うことによって作ることができます。疑問文を作るために使われる副詞は、「疑問副詞」(英語では interrogative adverb) と呼ばれます。

疑問副詞には、次のようなものがあります。

quandō いつ。  
 ubi どこで、どこに。ubīと発音してもよい。  
 quō どこへ。  
 unde どこから、誰から。  
 cūr なぜ。  
 quā どこを、どのように、どんな方法で。  
 quam どれくらい、どの程度。

平叙文の先頭に疑問副詞を置くと、その平叙文が述べていることの時間や場所や理由などを尋ねる疑問文になります。

Ubi medicus est? 医者はどこにいますか?  
 Cūr rīdēs? あなたはなぜ笑っているのですか?

シェンキエーヴィチ (Henryk Sienkiewicz) というポーランドの小説家が、『クオ・ワディス』という小説を書いています。この小説のタイトルは、次のようなラテン語の疑問文に由来するものです。

Quō vādīs, Domine? 主よ、いづこへ行きたまふ。

vādō, -ere 行く、進む、歩く。  
 dominus, -ī, *m.* 主人、主(神またはキリスト)。

## 5.6 比較変化

### 5.6.1 比較変化の基礎

ラテン語の形容詞と副詞は、それを使って、何らかの比較にもとづく程度の差について表現する場合に、その形を変化させます。そのような変化は、「比較変化」(英語では comparison)と呼ばれます。そして、比較変化によって生じるそれぞれの形は、「級」(英語では degree)と呼ばれます。

級には、次の三つのものがあります。

- 原級 英語では positive degree。「地球は青い」というような、比較ではない表現で使われる級。
- 比較級 英語では comparative degree。「木星は土星よりも大きい」というような、何らかの対象と比較したときの程度の違いを述べる表現で使われる級。
- 最上級 英語では superlative degree。「地球は星々の中でもっとも美しい」というような、ある集団の中で最上位に位置しているという表現で使われる級。

### 5.6.2 形容詞の比較級

形容詞の比較級は、その語幹に次の語尾を連結することによって作ることができます。

		男・女性	中性
単数	主格	-ior	-ius
	属格	-iōris	-iōris
	与格	-iōrī	-iōrī
	対格	-iōrem	-ius
	奪格	-iōre	-iōre
複数	主格	-iōrēs	-iōra
	属格	-iōrum	-iōrum
	与格	-iōribus	-iōribus
	対格	-iōrēs	-iōra
	奪格	-iōribus	-iōribus

このように、形容詞の比較級は、第三変化形容詞と同じような変化をします。

形容詞の語幹というのは、第一第二変化形容詞の場合は男性単数属格形の語尾から  $-ī$  を取り除いた部分で、第三変化形容詞の場合は単数属格形の語尾から  $-is$  を取り除いた部分です。

たとえば、longus (長い) は、語幹が long です。ので、「よりも長い」という比較級は、次のような形になります。

		男・女性	中性
単数	主格	longior	longius
	属格	longiōris	longiōris
	与格	longiōrī	longiōrī
	対格	longiōrem	longius
	奪格	longiōre	longiōre
複数	主格	longiōrēs	longiōra
	属格	longiōrum	longiōrum
	与格	longiōribus	longiōribus
	対格	longiōrēs	longiōra
	奪格	longiōribus	longiōribus

### 5.6.3 形容詞の最上級

形容詞の最上級は、その語幹に次の語尾を連結することによって作ることができます。



	男性	女性	中性	
単数	主格	-issimus	-issima	-issimum
	属格	-issimī	-issimae	-issimī
	与格	-issimō	-issimae	-issimō
	対格	-issimum	-issimam	-issimum
	奪格	-issimō	-issimā	-issimō
複数	主格	-issimī	-issimae	-issima
	属格	-issimōrum	-issimārum	-issimōrum
	与格	-issimīs	-issimīs	-issimīs
	対格	-issimōs	-issimās	-issima
	奪格	-issimīs	-issimīs	-issimīs

このように、形容詞の最上級の変化は、第一第二変化形容詞の変化とまったく同じです。たとえば、longus (長い) の最上級 (もっとも長い) は、次のような形になります。

	男性	女性	中性	
単数	主格	longissimus	longissima	longissimum
	属格	longissimī	longissimae	longissimī
	与格	longissimō	longissimae	longissimō
	対格	longissimum	longissimam	longissimum
	奪格	longissimō	longissimā	longissimō
複数	主格	longissimī	longissimae	longissima
	属格	longissimōrum	longissimārum	longissimōrum
	与格	longissimīs	longissimīs	longissimīs
	対格	longissimōs	longissimās	longissima
	奪格	longissimīs	longissimīs	longissimīs

#### 5.6.4 特殊な比較変化

形容詞の中には、特殊な比較変化をするものがあります。

- 男性単数主格形が -er で終わる形容詞は、それが第一第二変化形容詞なのか第三変化形容詞なのかにかかわらず、その最上級は、男性単数主格形に -rimus, -a, -um を連結することによって作ります。比較級の作り方は普通の形容詞と同じです。

原級	比較級	最上級
pulcher, -chra, -chrum 美しい	pulchrior, -ius	pulcherrimus, -a, -um
miser, -era, -erum 哀れな	miserior, -ius	miserrimus, -a, -um
celer, -eris, -ere 速い	celerior, -ius	celerrimus, -a, -um
ācer, -cris, -cre 鋭い	ācrior, -ius	ācerrimus, -a, -um

vetus (古い、高齢の) という形容詞は、男性単数主格形が -er で終わるわけではありませんが、

原級	比較級	最上級
vetus, -teris	veterior, -ius	veterrimus, -a, -um

というように比較変化します。

- 次の形容詞は、男性単数主格形の語尾の -ilis を -illimus に置き換えることによって最上級を作ります。比較級の作り方は普通の形容詞と同じです。

原級	比較級	最上級
facilis, -e やさしい	facilior, -ius	facillimus, -a, -um
difficilis, -e 難しい	difficilior, -ius	difficillimus, -a, -um
similis, -e 似ている	similior, -ius	simillimus, -a, -um
dissimilis, -e 似ていない	dissimilior, -ius	dissimillimus, -a, -um
humilis, -e 低い	humilior, -ius	humillimus, -a, -um
gracilis, -e 細い	gracilior, -ius	gracillimus, -a, -um

- 次の形容詞は、原級と比較級と最上級とがまったく違う形に変化します。

原級	比較級	最上級
bonus, -a, -um よい	melior, melius	optimus, -a, -um
malus, -a, -um 悪い	pējor, pējus	pessimus, -a, -um
magnus, -a, -um 大きい	mājor, mājus	maximus, -a, -um
parvus, -a, -um 小さい	minor, minus	minus, -a, -um
multus, -a, -um 多量の、多数の	plūs (n.)	plūrimus, -a, -um

plūs ( multus の比較級 ) は、次のように、変化が少し特殊です。

	男・女性	中性	
単数	主格	—	plūs
	属格	—	plūris
	与格	—	—
	対格	—	plūs
	奪格	—	plūre
複数	主格	plūrēs	plūra
	属格	plūrium	plūrium
	与格	plūribus	plūribus
	対格	plūrēs	plūra
	奪格	plūribus	plūribus

このように、plūs の単数形は中性形のみで、男性形と女性形はありません。また、複数属格形が plūrum ではなくて plūrium になる、という点にも注意してください。

- 男性単数主格形が -ius または -eus で終わる形容詞は、それ自体は変化しないで、比較級は magis ( より多く ) という副詞、最上級は maximē ( もっとも ) という副詞を添えることによって作ります。

原級	比較級	最上級
pius, -a, -um 敬虔な	magis pius	maximē pius
necessārius, -a, -um 必要な	magis necessārius	maximē necessārius
idōneus, -a, -um 適した	magis idōneus	maximē idōneus

### 5.6.5 副詞の比較級

副詞の比較級は、その副詞に対応する形容詞の比較級の中性単数対格形です。

たとえば、liberē ( 自由に ) という副詞の比較級は、それに対応する liber ( 自由な ) という形容詞の比較級の中性単数対格形ですから、liberius という形になります。

同じように、bonē ( よく ) という副詞の比較級は、それに対応する bonus ( よい ) という形容詞の比較級の中性単数対格形ですから、melius という形になります。

近代オリンピックの標語として知られている、

Citius, altius, fortius. より速く、より高く、より強く。

という言葉は、citō ( 速く )、altē ( 高く )、fortiter ( 強く ) という副詞の比較級を並べたものです。

## 5.6.6 副詞の最上級

副詞の最上級は、その副詞に対応する形容詞の最上級の語尾を *-ē* に置き換えたものです。

たとえば、*liberē* (自由に) という副詞の最上級は、それに対応する *liber* (自由な) という形容詞の最上級が *liberissimus, -a, -um* ですから、その語尾を *-ē* に置き換えた形、つまり *liberissimē* という形になります。

同じように、*bonē* (よく) という副詞の最上級は、それに対応する *bonus* (よい) という形容詞の最上級が *optimus, -a, -um* ですから、その語尾を *-ē* に置き換えた形、つまり *optimē* という形になります。

## 5.6.7 比較級を使った文の作り方

比較級を使って文を作るときは、次の二つの方法のどちらかを使って、比較の対象となるもの、つまり、「何々よりも」の「何々」に相当するものを示します。

- 比較の対象をあらゆる名詞を奪格にします。この方法は、比較されるものが主格または対格の場合にだけ使うことができます。
- 比較の対象をあらゆる名詞の前に、「...よりも」を意味する *quam* という接続詞を置きます。比較の対象をあらゆる名詞の格は、比較されるものをあらゆる名詞の格と同じにします。この方法は、比較されるものがどの格であっても使うことができます。

たとえば、「木星は土星よりも大きい」を意味するラテン語の文は、二つの方法のそれぞれを使って、次のように書くことができます。

奪格を使う方法     *Juppiter mājor est Sāturnō.*

*quam* を使う方法     *Juppiter mājor est quam Sāturnus.*

*Juppiter, Jovis, m.* ユピテル (ローマ神話の最高神) 木星。

*Sāturnus, ī, m.* サトゥルヌス (ローマ神話の農耕神) 土星。

「私は女神よりも美しい少女に花を贈ります」を意味するラテン語の文を作る場合は、比較されるものが与格ですので、次のように、*quam* を使う方法だけしか使えません。

*Puellae pulchriorī flōrem dōnō quam deae.*

*dea, -ae, f.* 女神。

比較級は、特定の何かと比較する表現だけではなくて、程度の高さを漠然と表現する場合にも使われます。

*Pater veterior est.* 父はかなり高齢です。

何かと何かとを比較するときに、それらの程度の差を強調したい場合は、「はるかに」を意味する *multō* という副詞を使います。

*Sōl multō mājor est terrā.* 太陽は地球よりもはるかに大きい。

*sōl, sōlis, m.* 太陽。

*terra, -ae, f.* 大地、地球。

## 5.6.8 最上級を使った文の作り方

最上級を使って文を作るときは、次の二つの方法のどちらかを使って、どのような集団の中で最上位に位置しているのかということ、つまり、「何々の中でもっとも」の「何々」に相当するものを示します。

- 集団をあらゆる名詞を属格にします。
- 集団をあらゆる名詞を奪格にして、その前に、「の中で」を意味する *ex* という前置詞を置きます。

たとえば、「地球は星々の中でもっとも美しい」を意味するラテン語の文は、二つの方法のそれぞれを使って、次のように書くことができます。

属格を使う方法     *Terra stellārum pulcherrima est.*

*ex* を使う方法     *Terra ex stellis pulcherrima est.*

最上級は、特定の集団の中で最上位に位置しているという表現だけではなくて、程度がきわめて高いということを表現する場合にも使われます。

Pater veterrimus est. 父はものすごく高齢です。

## 第6章 代名詞

### 6.1 代名詞の基礎

#### 6.1.1 代名詞の分類

名詞の代わりとして使われる単語は、「代名詞」(英語では pronoun)と呼ばれます。

ラテン語の代名詞は、機能の観点から、次のようないくつかのグループに分類することができます。

人称代名詞	personal pronoun
再帰代名詞	reflexive pronoun
指示代名詞	demonstrative pronoun
疑問代名詞	interrogative pronoun
関係代名詞	relative pronoun
不定代名詞	indefinite pronoun

この章では代名詞について説明していくことになるわけですが、関係代名詞については、この章の中の節ではなくて、第 11.2 節で説明することにしたいと思います。

#### 6.1.2 代名詞の変化

代名詞というのは名詞の代わりとして使われるわけですから、名詞と同じように、数と格に応じて変化します。そしてさらに、一部の代名詞は、それによって代用される名詞の性に応じて変化します。

性による変化があるかないかで代名詞を分類すると、次のようになります。

変化あり	指示代名詞、疑問代名詞、関係代名詞、不定代名詞
変化なし	人称代名詞、再帰代名詞

### 6.2 人称代名詞と再帰代名詞

#### 6.2.1 人称代名詞の基礎

第 3.1 節で説明したように、「人称」(英語では person)という言葉は、話し手と聞き手とそれ以外の者(物)という区別を意味しています。そして、話し手は「一人称」(英語では first person)、聞き手は「二人称」(英語では second person)、そして話し手でも聞き手でもない者(物)は「三人称」(英語では third person)と呼ばれます。

人称がどれなのかということを指示するために使われる代名詞は、「人称代名詞」(英語では personal pronoun)と呼ばれます。

ラテン語には、一人称と二人称の人称代名詞は存在しますが、三人称の人称代名詞は存在しません。人称が三人称だということを指示する場合は、人称代名詞ではなくて、指示代名詞(第 6.3 節参照)が使われます。

人称代名詞は、数と格に応じて変化します。性に応じた変化はありません。

#### 6.2.2 一人称の人称代名詞

ラテン語の一人称の人称代名詞は、ego(または egō)です。

ego は、数と格に応じて、次のように変化します。

	単数	複数
主格	ego (egō)	nōs
属格	meī	nostrī, nostrum
与格	mihi (mihī)	nōbīs
対格	mē	nōs
奪格	mē	nōbīs

Mē amās. あなたは私を愛しています。

Nōs amātis. あなたたちは私たちを愛しています。

### 6.2.3 二人称の人称代名詞

ラテン語の二人称の人称代名詞は、tū です。

tū は、数と格に応じて、次のように変化します。

	単数	複数
主格	tū	vōs
属格	tuī	vestrī, vestrum
与格	tibi (tibī)	vōbīs
対格	tē	vōs
奪格	tē	vōbīs

Tē amō. 私はあなたを愛しています。

Vōs amāmus. 私たちはあなたたちを愛しています。

### 6.2.4 人称代名詞の主格形

ラテン語では、動作の主体の人称がどれなのかということが動詞の形によって示されますので、主語というのは、絶対に必要なものではありません。主語が必要になるのは、動作の主体が誰（何）なのかということをも具体的に示す必要がある場合に限られます。

ですから、動作の主体の人称を示すという、それだけの目的で人称代名詞の主格形が使われることはありません。人称代名詞の主格形が必要になるのは、動作の主体の人称を強調したい、という場合に限られます。たとえば、人称が一人称だということを経強調したい場合、次の例のように、ego という人称代名詞の主格形が使われます。

Ego tē amō. 私こそがあなたを愛しているのです。

### 6.2.5 再帰代名詞

動作の主体と同じ人称を主格以外の格で示すために使われる代名詞は、「再帰代名詞」(英語では reflexive pronoun) と呼ばれます。

ラテン語の再帰代名詞は、三人称だけしか存在しません。

ラテン語の三人称の再帰代名詞は、suī です (suī というのは属格形です。再帰代名詞には主格形が存在しませんので、辞書の見出し語として、主格形の代わりに属格形が使われます)。

suī は、格に応じて、次のように変化します。

主格	—
属格	suī
与格	sibi (sibī)
対格	sē, sēsē
奪格	sē, sēsē

対格と奪格は、sē というのが通常の形で、sēsē というのは意味を強調するために使われる形です。

suī は、人称代名詞と同じように、性に応じた変化はありません。ですから、「彼自身」の場合も、「彼女自身」の場合も、形は同じです。

また、数に応じた変化もありません。ですから、「彼（彼女、それ）自身」の場合も、「彼ら（彼女たち、それら）自身」の場合も、形は同じです。

Sē amat. 彼（彼女）は彼（彼女）自身を愛しています。

Sē amant. 彼ら（彼女たち）は彼ら（彼女たち）自身を愛しています。

ラテン語には、一人称と二人称の再帰代名詞が存在しませんので、動作の主体が一人称または二人称のときに、それと同じ人称を主格以外の格で示したいときは、再帰代名詞ではなくて、人称代名詞が使われます。

Mē amō. 私は私自身を愛しています。

Nōs amāmus. 私たちは私たち自身を愛しています。

Tē amās. あなたはあなた自身を愛しています。

Vōs amātis. あなたたちはあなたたち自身を愛しています。

### 6.2.6 所有形容詞

名詞の属格形には、「建物の柱」とか「動物の骨」のように、所有という意味がありますが、人称代名詞と再帰代名詞の属格形は、所有の意味を持っていません。ですから、人称代名詞と再帰代名詞の属格形を、「私の家」とか「あなたの声」とか「彼自身の足」というような所有の意味で使うことはできません。

「人称が所有している何か」ということを表現したいときは、人称代名詞や再帰代名詞の代わりに、「所有形容詞」（英語では *possessive adjective*）と呼ばれる形容詞を使います。

次の表は、一人称と二人称の所有形容詞を示しています。

	単数		複数
一人称	meus, -a, -um	私の	noster, -tra, -trum 私たちの
二人称	tuus, -a, -um	あなたの	vester, -tra, -trum あなたたちの

これらは第一第二変化形容詞で、普通の形容詞と同じように、自分が修飾している名詞の性と数と格に一致するように変化します。

Filia mea tē amat. 私の娘はあなたを愛しています。

Filiam tuam amo. 私はあなたの娘さんを愛しています。

Māter nostra tē amat. 私たちの母はあなたを愛しています。

Māterem vestram amo. 私はあなたたちのお母さんを愛しています。

meus の男性単数呼格形は、mī です。

Mī fili! わが息子よ！

三人称の所有形容詞は、suus, -a, -um です。

suus は、再帰代名詞と同じように、動作の主体と同じ人称を主格以外の格で示します。ですから、彼自身の、彼女自身の、それ自身の、彼ら自身の、彼女たち自身の、それら自身の、という意味で使われる形容詞です。

suus も、一人称と二人称の所有形容詞と同じように第一第二変化形容詞で、自分が修飾している名詞の性と数と格に一致するように変化します。

suus は、再帰代名詞と同じように、それが示している三人称の数に応じた変化はありません。ですから、「彼（彼女、それ）自身の」の場合も、「彼ら（彼女たち、それら）自身の」の場合も、形は同じです。

Pater matrī suae flōrem dōnat. 父は彼自身の母に花を贈ります。

Patriam suam amant. 彼らは彼ら自身の祖国を愛しています。

patria, -ae, f. 祖国。

### 6.2.7 人称代名詞と再帰代名詞の属格形

先ほど述べたとおり、人称代名詞と再帰代名詞の属格形は、所有という意味を持たないわけですが、それでは、それらの属格形というのは、いったい何のために存在しているのでしょうか。

人称代名詞と再帰代名詞が属格形になるのは、補語として属格形の名詞を要求する特殊な動詞や形容詞を使う場合などです。たとえば、meminī（覚えている）という動詞や inscius（知らない）という形容詞は、補語として属格形の名詞を要求しますので、人称代名詞または再帰代名詞

をそのような動詞や形容詞の補語にする場合は、

Meminī tuī. 私はあなたのことを覚えています。

Inscius suī est. 彼は彼自身のことを知りません。

というように、属格形が使われることとなります。

#### 6.2.8 人称代名詞の複数属格形

人称代名詞の複数属格形には、

一人称 nostrī nostrum

二人称 vestrī vestrum

というように二通りのものがあるわけですが、これらの形には、次のような使い分けがあります。

nostrī と vestrī 動詞や形容詞の補語など

nostrum と vestrum 部分の属格

「部分の属格」(英語では partitive genitive) というのは、「何々たちのうちの」ということをあらわすために使われる属格の用法のことです。

Multī nostrum tē amant. 私たちのうちの多数の者があなたを愛しています。

Paucōs vestrum amō. 私はあなたたちのうちの少数の者を愛しています。

#### 6.2.9 人称代名詞と cum との複合語

「...とともに」を意味する前置詞の cum は、人称代名詞または再帰代名詞とともに使われる場合、その代名詞の末尾に結合されて、次のような複合語を作ります。

mēcum 私とともに

nōbīscum 私たちとともに

tēcum あなたとともに

vōbīscum あなたたちとともに

sēcum 彼(彼ら)自身とともに

Vōbīscum sum. 私はあなたたちとともにいます。

### 6.3 指示代名詞

#### 6.3.1 指示代名詞の基礎

特定の事物を指示するために使われる代名詞は、「指示代名詞」(英語では demonstrative pronoun) と呼ばれます。

ラテン語には、hic、iste、ille、is、ipse、īdem という、六つの指示代名詞があります。

指示代名詞は、性と数と格に応じて変化します。性と数は、指示される対象となる事物をあらわす名詞の性と数に一致させる必要があります。

#### 6.3.2 hic

hic は、空間的または心理的に、話し手の近くにあるものを指示する代名詞です。日本語の「これ」に相当すると考えていいでしょう。

hic は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	hic (hīc)	haec	hoc (hōc)
	属格	hūjus	hūjus	hūjus
	与格	huīc	huīc	huīc
	対格	hunc	hanc	hoc (hōc)
	奪格	hōc	hāc	hōc
複数	主格	hī	hae	haec
	属格	hōrum	hārum	hōrum
	与格	hīs	hīs	hīs
	対格	hōs	hās	haec
	奪格	hīs	hīs	hīs

hic を使うことによって、次のような文を作ることができます。

Hic liber est.                      これは本です。  
Hae māchinae sunt.              これらは機械です。

### 6.3.3 iste

iste は、空間的または心理的に、聞き手の近くにあるものを指示する代名詞です。日本語にはこれに相当する代名詞はないのですが、訳すとすれば「それ」ということになります。

iste は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	iste	ista	istud
	属格	istīus	istīus	istīus
	与格	istī	istī	istī
	対格	istum	istam	istud
	奪格	istō	istā	istō
複数	主格	istī	istae	ista
	属格	istōrum	istārum	istōrum
	与格	istīs	istīs	istīs
	対格	istōs	istās	ista
	奪格	istīs	istīs	istīs

iste を使うことによって、次のような文を作ることができます。

Iste liber est.                      (あなたの近くにある)それは本です。  
Istae māchinae sunt.              (あなたの近くにある)それらは機械です。

### 6.3.4 ille

ille は、空間的または心理的に、話し手からも聞き手からも遠く離れた位置にあるものを指示する代名詞です。日本語の「あれ」に相当すると考えていいでしょう。

ille は、性と数と格に応じて、次のように変化します。



		男性	女性	中性
単数	主格	ille	illa	illud
	属格	illius	illius	illius
	与格	illi	illi	illi
	対格	illum	illam	illud
	奪格	illo	illa	illo
複数	主格	illi	illae	illa
	属格	illorum	illarum	illorum
	与格	illis	illis	illis
	対格	illos	illas	illa
	奪格	illis	illis	illis

ille を使うことによって、次のような文を作ることができます。

Ille liber est.                      あれは本です。  
 Illae m̄achinae sunt.              あれらは機械です。

ille と hic は、先行する文で述べられた二つのもののそれぞれを指示するために使われることがあります。その場合、ille は、遠くにあるもの、つまり先に述べられたものを指示して、hic は、近くにあるもの、つまり後で述べられたものを指示します。日本語に訳すと、ille が「前者」、hic が「後者」となります。

Filiam et filium habeō. Illa medicus est et hic nauta est.  
 私は娘と息子を持っています。前者は医者で、後者は船乗りです。

### 6.3.5 is

is は、先行する文ですでに述べられたものごとなどを指示する代名詞です。日本語の「それ」に相当すると考えていいでしょう。

is は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	is	ea	id
	属格	ejus	ejus	ejus
	与格	eī	eī	eī
	対格	eum	eam	id
	奪格	eō	eā	eō
複数	主格	eī	eae	ea
	属格	eōrum	eārum	eōrum
	与格	eīs	eīs	eīs
	対格	eōs	eās	ea
	奪格	eīs	eīs	eīs

これらの形のほかに、男性複数主格として iī, ī, 複数与格と複数奪格として iīs, īs が使われることもあります。

is を使うことによって、次のような文を作ることができます。

Epistulam sc̄ibō. Patrī eam mittō.  
 私は手紙を書いています。私はそれを父に送ります。

epistula, -ae, f. 手紙。  
 mittō, -ere, 送る。

英語の文章の中でしばしば使われる、「すなわち」を意味する i.e. という言葉は、ラテン語の id est (それは...である) から作られた頭字語です。

第 6.2 節で、ラテン語には三人称の人称代名詞が存在しないので、三人称を指示するときは、

人称代名詞ではなくて指示代名詞が使われる、と述べました。三人称の人称代名詞の代わりとして使われる指示代名詞というのは、is のことです。

一人称と二人称の人称代名詞には性に応じた変化がないのに対して、三人称の人称代名詞として代用される is は、指示される三人称の性に依りて変化します。指示される三人称が人間ではないときは、指示代名詞として事物を指示する場合と同じことなので、それをあらず名詞の性に一致させればいわけですが、人間のときは、それが男性ならば男性形、女性ならば女性形を使わないといけません。

Eum amās. あなたは彼を愛しています。

Eās amō. 私は彼女たちを愛しています。

### 6.3.6 ipse

ipse は、「…自身」「…自体」「…そのもの」「…こそ」「…でさえ」「まさにその…」「ほかならぬ…」というように、指示する対象を強調する指示代名詞です。「強意代名詞」(intensive pronoun) と呼ばれることもあります。

ipse は、性と数と格に依りて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	ipse	ipsa	ipsum
	属格	ipsius	ipsius	ipsius
	与格	ipsī	ipsī	ipsī
	対格	ipsum	ipsam	ipsum
	奪格	ipsō	ipsā	ipsō
複数	主格	ipsī	ipsae	ipsa
	属格	ipsōrum	ipsārum	ipsōrum
	与格	ipsīs	ipsīs	ipsīs
	対格	ipsōs	ipsās	ipsa
	奪格	ipsīs	ipsīs	ipsīs

この変化は、ille の変化とほとんど同じで、違うところは中性単数の主格と対格だけです。

ipse は、通常、意味を強めたい名詞や代名詞の直後に置かれます。

ipse を使うことによって、次のような文を作ることができます。

Ego ipse ire volō. 私自身が行きたいのです。

Pater epistulam ipsam legit. 父は、まさにその手紙を読んでいます。

legō, -ere 読む。

### 6.3.7 idem

idem は、「(…と) 同じもの(人)」を意味する指示代名詞です。

idem は、性と数と格に依りて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	īdem	eadem	idem
	属格	ējusdem	ējusdem	ējusdem
	与格	eīdem	eīdem	eīdem
	対格	eundem	eandem	idem
	奪格	eōdem	eādem	eōdem
複数	主格	īdem	eaedem	eadem
	属格	eōrundem	eārundem	eōrundem
	与格	eīsdem	eīsdem	eīsdem
	対格	eōsdem	eāsdem	eadem
	奪格	eīsdem	eīsdem	eīsdem

これらの形のほかに、男性複数主格として *eīdem*、*iīdem*、複数与格と複数奪格として *isdem*、*iīsdem* が使われることもあります。

*īdem* の変化形は、基本的には *is* の変化形の末尾に *-dem* を連結した形です。ただし、いくつかの形に対しては音韻の変化が加わっています。

*īdem* を使うことによって、次のような文を作ることができます。

*Eandem amō.* 私は同じ女性を愛しています。

*īdem* を使うとき、何（誰）と同じもの（人）なのかということを示したい場合は、*atque* を使います。

*Eandem atque tū amō.* 私はあなたと同じ女性を愛しています。

### 6.3.8 指示代名詞の属格形

第 6.2 節で、人称代名詞と再帰代名詞の属格形は所有の意味を持っていないという話をしましたが、それに対して、指示代名詞の属格形は所有の意味を持っています。

*Fīliam ējus amō.* 私は彼の（彼女の）娘を愛しています。

*Māter eārum mē amat.* 彼女たちのお母さんは私を愛しています。

### 6.3.9 指示代名詞の形容詞的用法

指示代名詞は、「この...」「あの...」「その...」というように、形容詞的に使うこともできます。その場合、指示代名詞の性と数と格は、形容詞の場合と同じように、それが修飾している名詞の性と数と格に一致させる必要があります。

*Haec puella filia mea est.* この少女は私の娘です。

*Illōs librōs legō.* 私はあれらの本を読みます。

*ille* は、「かの...」というように、広く知られている事物を指示する場合にも使われます。

*Ille Aristoteles filius meus est.* かのアリストテレスは私の息子です。

## 6.4 疑問代名詞

### 6.4.1 疑問代名詞と疑問形容詞

「誰ですか？」とか「何ですか？」ということを探ねる疑問文を作るときに、尋ねられる名詞の代わりに置かれる代名詞は、「疑問代名詞」（英語では *interrogative pronoun*）と呼ばれます。

また、「どの...ですか？」とか「どのような...ですか？」ということを探ねる疑問文を作るために使われる、「どの」とか「どのような」を意味する形容詞は、「疑問形容詞」（英語では *interrogative adjective*）と呼ばれます。

ラテン語には、*quis* という疑問代名詞と、*quī* という疑問形容詞があります。

### 6.4.2 *quis*

*quis* は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	<i>quis</i>	<i>quis</i>	<i>quid</i>
	属格	<i>cūjus</i>	<i>cūjus</i>	<i>cūjus</i>
	与格	<i>cuī</i>	<i>cuī</i>	<i>cuī</i>
	対格	<i>quem</i>	<i>quem</i>	<i>quid</i>
	奪格	<i>quō</i>	<i>quō</i>	<i>quō</i>
複数	主格	<i>quī</i>	<i>quae</i>	<i>quae</i>
	属格	<i>quōrum</i>	<i>quārum</i>	<i>quōrum</i>
	与格	<i>quibus</i>	<i>quibus</i>	<i>quibus</i>
	対格	<i>quōs</i>	<i>quās</i>	<i>quae</i>
	奪格	<i>quibus</i>	<i>quibus</i>	<i>quibus</i>

男性単数の変化と女性単数の変化は、まったく同じです。  
性に応じた quis の変化は、「誰ですか?」と質問する場合は男性形または女性形、「何ですか?」と質問する場合は中性形を使います。

quis を使って疑問文を作るときは、次の例のように quis を文の先頭に置きます。

Quis es?	あなたは誰ですか?
Quid hoc est?	これは何ですか?
Quis mē amat?	誰が私を愛しているのですか?
Quem amās?	あなたは誰を愛しているのですか?
Cūjus filia est?	彼女は誰の娘ですか?
Cuī flōrem dōnās?	あなたは誰に花を贈るのですか?

「...とは何ですか?」というように単語の定義を尋ねる場合も、その単語の性とは無関係に、quis は中性形を使います。

Quid est philosophia? 哲学とは何ですか?

quis は、人間と人間とが出会ったときの挨拶でも使われます。

Quid agis? ごきげんいかが?

### 6.4.3 quī

quī は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	quī	quae	quod
	属格	cūjus	cūjus	cūjus
	与格	cuī	cuī	cuī
	対格	quem	quam	quod
	奪格	quō	quā	quō
複数	主格	quī	quae	quae
	属格	quōrum	quārum	quōrum
	与格	quibus	quibus	quibus
	対格	quōs	quās	quae
	奪格	quibus	quibus	quibus

quī の複数の変化は、quis の複数の変化とまったく同じです。

quī の単数の変化は、quis の単数の変化に似ていますが、違っているところもありますので、見比べてみてください。違っているところは、男性の主格、女性的主格と対格と奪格、中性の主格と対格、という六箇所です。

quī は形容詞ですので、その性と数と格は、「どの...」とか「どのような...」の「...」に相当する名詞の性と数と格に一致させる必要があります。

quī を使って疑問文を作る場合は、次の例のように、quī を文の先頭に置いて、その直後に、「...」に相当する名詞を置きます。

Quae puella mē amat? どの少女が私を愛しているのですか?

Quem librum legis? あなたはどの本を読んでいるのですか?

ちなみに、quī は、関係代名詞としても使われる単語です。その場合の変化は、疑問形容詞として使われる場合とまったく同じです。

### 6.4.4 疑問を強調する後倚辞

-nam という後倚辞を疑問代名詞または疑問形容詞の末尾に連結することによって、「いったい誰ですか?」とか「いったい何ですか?」とか「いったいどの...ですか?」というように、尋ねたい疑問を強調することができます。

Quisnam mē amat?	いったい誰が私を愛しているのですか？
Quidnam cōgitās?	あなたはいったい何を考えているのですか？
Quamnam puellam amās?	あなたはいったいどの少女を愛しているのですか？

## 6.5 不定代名詞と不定形容詞

### 6.5.1 不定代名詞と不定形容詞の基礎

「誰か」とか「何か」というように、不特定のものを指示するために使われる代名詞は、「不定代名詞」(英語では indefinite pronoun)と呼ばれます。

また、「ある...」というように、名詞を修飾することによって不特定のものを指示するために使われる形容詞は、「不定形容詞」(英語では indefinite adjective)と呼ばれます。

ラテン語の主要な不定代名詞と不定形容詞としては、次のようなものがあります(同じ行にある不定代名詞と不定形容詞は、意味の上でペアになっています)。

不定代名詞	不定形容詞
aliquis	aliquī
quis	quī
quisquam	ūllus
quisque	quisque
quīdam	quīdam

### 6.5.2 aliquis と aliquī

aliquis は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	aliquis	aliquis	aliquid
	属格	alicūjus	alicūjus	alicūjus
	与格	alicuī	alicuī	alicuī
	対格	aliquem	aliquem	aliquid
	奪格	aliquō	aliquō	aliquō
複数	主格	aliquī	aliquae	aliqua
	属格	aliquōrum	aliquārum	aliquōrum
	与格	aliquibus	aliquibus	aliquibus
	対格	aliquōs	aliquās	aliqua
	奪格	aliquibus	aliquibus	aliquibus

このように、aliquis は、ali- の右側の部分が疑問代名詞の quis と同じように変化します。ただし、中性複数の主格形と対格形は、aliquae ではなくて aliqua になります。

aliquis は、「誰か」とか「何か」を意味する不定代名詞です。

Aliquis tē amat. 誰かがあなたを愛しています。

Tibi aliquid dōnō. 私はあなたに何かを贈ります。

aliquī は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	aliquī	aliqua	aliquod
	属格	alicūjus	alicūjus	alicūjus
	与格	alicuī	alicuī	alicuī
	对格	aliquem	aliquam	aliquod
	奪格	aliquō	aliquā	aliquō
複数	主格	aliquī	aliquae	aliqua
	属格	aliquōrum	aliquārum	aliquōrum
	与格	aliquibus	aliquibus	aliquibus
	对格	aliquōs	aliquās	aliqua
	奪格	aliquibus	aliquibus	aliquibus

このように、aliquī は、ali- の右側の部分が疑問形容詞の quī と同じように変化します。ただし、女性単数主格形と、中性複数の主格形と対格形は、aliquae ではなくて aliqua になります。aliquī は、「ある...」を意味する不定形容詞です。

Aliqua puella tē amat. ある少女があなたを愛しています。

Tibi aliquem librum dōnō. 私はあなたにある本を贈ります。

aliquis と aliquī は、肯定文の中でしか使われません。

### 6.5.3 quis と quī

aliquis と aliquī は、従属接続詞の sī (もしも...ならば) nisi (もしも...ではないならば) nē の後ろとか、num を使った疑問文(第3.4節参照)の中では、ali- の部分が省略されて、aliquis は quis、aliquī は quī という形になります。

Num quis mē amat? はたして誰かが私を愛しているのでしょうか?

Num quam puellam amat? はたして彼はある少女を愛しているのでしょうか?

### 6.5.4 quisquam と ūllus

quisquam は、性と格に応じて、次のように変化します(quisquam は単数だけしかありません)。

	男性	女性	中性
主格	quisquam	quisquam	quidquam
属格	cūjusquam	cūjusquam	cūjusquam
与格	cūquam	cūquam	cūquam
对格	quemquam	quemquam	quidquam
奪格	quōquam	quōquam	quōquam

このように、quisquam は、quam の左側の部分が疑問代名詞の quis とまったく同じ変化をします。

quisquam は、nōn などの否定を意味する単語とともに使われることによって、「いかなる人も...ない」とか「いかなるものも...ない」という意味を持つ否定文を作る不定代名詞です。

Quisquam mē nōn amat. いかなる人も私を愛していません。

Quidquam nōn habeō. 私はいかなるものも持っていません。

ūllus は、「代名詞的形容詞」と呼ばれる形容詞の一つです。ūllus も含めて、代名詞的形容詞については、第6.6節で説明することにしたいと思います。

### 6.5.5 quisque

quisque は、不定代名詞としても不定形容詞としても使われます。ただし、不定代名詞として使われる場合と不定形容詞として使われる場合とで、変化に少し違いがあります。

quisque は、不定代名詞として使われる場合、性と格に応じて、次のように変化します(複数形はほとんど使われません)。

	男性	女性	中性
主格	quisque	quaeque	quidque
属格	cūjusque	cūjusque	cūjusque
与格	cuīque	cuīque	cuīque
対格	quemque	quamque	quidque
奪格	quōque	quāque	quōque

quisque は、不定形容詞として使われる場合、性と格に応じて、次のように変化します（やはり、複数形はほとんど使われません）。

	男性	女性	中性
主格	quisque	quaeque	quodque
属格	cūjusque	cūjusque	cūjusque
与格	cuīque	cuīque	cuīque
対格	quemque	quamque	quodque
奪格	quōque	quāque	quōque

このように、quisque は、不定代名詞として使われる場合も不定形容詞として使われる場合も、-que の左側の部分が疑問形容詞の quī と同じように変化します。ただし、男性主格形は quīque ではなくて quisque になります。

不定代名詞として使われる場合と不定形容詞として使われる場合とで変化形が違っているところは、中性の主格形と対格形です。不定代名詞として使われる場合、中性の主格形と対格形は quidque ですが、不定形容詞として使われる場合はそれらの形が quodque になります。

quisque は、再帰代名詞、関係代名詞、疑問代名詞、序数詞、形容詞の最上級などとともに使われます。

quisque は、不定代名詞としては、「各人」「おのおの」「誰でも」「何でも」というような意味で使われます。

Sē quisque amat. 誰でも自分を愛しています。

quisque は、不定形容詞としては、「各人の」「おのおのの」「いかなる...も」というような意味で使われます。

Quisque homō insquius suī est. いかなる人間も自分自身のことを知りません。

### 6.5.6 quīdam

quīdam は、quisque と同じように、不定代名詞としても不定形容詞としても使われます。そして、不定代名詞として使われる場合と不定形容詞として使われる場合とで変化が少し違うという点も、quisque と同じです。

quīdam は、不定代名詞として使われる場合、性と数と格に応じて、次のように変化します。

	男性	女性	中性	
単数	主格	quīdam	quaedam	quiddam
	属格	cūjusdam	cūjusdam	cūjusdam
	与格	cuīdam	cuīdam	cuīdam
	対格	quendam	quandam	quiddam
	奪格	quōdam	quādam	quōdam
複数	主格	quīdam	quaedam	quaedam
	属格	quōrundam	quārundam	quōrundam
	与格	quibusdam	quibusdam	quibusdam
	対格	quōsdam	quāsdam	quaedam
	奪格	quibusdam	quibusdam	quibusdam

quīdam は、不定形容詞として使われる場合、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	quīdam	quaedam	quoddam
	属格	cūjūsdam	cūjūsdam	cūjūsdam
	与格	cuīdam	cuīdam	cuīdam
	对格	quendam	quandam	quoddam
	奪格	quōdam	quādam	quōdam
複数	主格	quīdam	quaedam	quaedam
	属格	quōrundam	quārundam	quōrundam
	与格	quibusdam	quibusdam	quibusdam
	对格	quōsdam	quāsdam	quaedam
	奪格	quibusdam	quibusdam	quibusdam

このように、quīdam は、不定代名詞として使われる場合も不定形容詞として使われる場合も、-dam の左側の部分が疑問形容詞の quī と同じように変化します。ただし、-dam の直前の m が n に変化しますので、quemdam、quamdam、quōrundam、quārundam は、それぞれ、quendam、quandam、quōrundam、quārundam になります。

quisque の場合と同じように、中性単数の主格形と対格形は、不定代名詞として使われる場合は quiddam になって、不定形容詞として使われる場合は quoddam になります。

quīdam は、不定代名詞としては、「ある人」とか「あるもの」という意味で使われます。

Quendam amō. 私はある人を愛しています。

quīdam は、不定形容詞としては、「ある…」という意味で使われます。

Quaedam puella tē amat. ある少女があなたを愛しています。

## 6.6 代名詞的形容詞

### 6.6.1 代名詞的形容詞の基礎

形容詞のうちで、指示代名詞に似た特殊な変化をするものは、「代名詞的形容詞」(英語では pronominal adjective) と呼ばれます。

次の9個の形容詞が、代名詞的形容詞です。

tōtus, -a, -um	全体の、全部の。
ūnus, -a, -um	一つの。
sōlus, -a, -um	ただ一つの、ただ一人の。
alter, altera, alterum	(二つのうちで) 一方の。
alius, -a, -ud	その他の、別の。
uter, utra, utrum	(二つのうちの) どちらの。
neuter, -tra, -trum	(二つのうちの) どちらも…ない。
ūllus, -a, -um	(否定文で) いかなる…も。
nūllus, -a, -um	いかなる…も…ない。

これらの形容詞のうちで、ūnus と alter は、数詞に分類することも可能です。

代名詞的形容詞の多くは、それ自体が代名詞としても使われます。

nūllus については、第6.7節で説明することにしたと思います。

### 6.6.2 代名詞的形容詞の変化

代名詞的形容詞の変化は、基本的には第一第二変化ですが、iste や ille や ipse と同じように、単数属格形がすべての性で -īus、単数与格形がすべての性で -ī になります。

たとえば、tōtus は、次のように変化します。



		男性	女性	中性
単数	主格	tōtus	tōta	tōtum
	属格	tōtīus	tōtīus	tōtīus
	与格	tōtī	tōtī	tōtī
	対格	tōtum	tōtam	tōtum
	奪格	tōtō	tōtā	tōtō
複数	主格	tōtī	tōtae	tōta
	属格	tōtōrum	tōtārum	tōtōrum
	与格	tōtīs	tōtīs	tōtīs
	対格	tōtōs	tōtās	tōta
	奪格	tōtīs	tōtīs	tōtīs

そのほかの代名詞的形容詞も基本的には tōtus と同じように変化するのですが、alius だけは変化が少し特殊で、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	alius	alia	<b>aliud</b>
	属格	<b>alterīus</b>	<b>alterīus</b>	<b>alterīus</b>
	与格	aliī	aliī	aliī
	対格	alium	aliam	<b>aliud</b>
	奪格	aliō	aliā	aliō
複数	主格	aliī	aliae	alia
	属格	aliōrum	aliārum	aliōrum
	与格	aliīs	aliīs	aliīs
	対格	aliōs	aliās	alia
	奪格	aliīs	aliīs	aliīs

この変化表の中で太字になっているのが、alius の変化がほかの代名詞的形容詞と違っているところです。

### 6.6.3 alter

alter は、「(二つのうちで) 一方の」という意味を持つ代名詞的形容詞です。

alter ..., alter ... は、「(二つのうちで) 一方は...、他方は...」という意味になります。

Alter flōs albus, alter flāvus est. 一方の花は白色で、他方は黄色です。

albus, -a, -um, 白い。  
flāvus, -a, -um, 黄色の。

### 6.6.4 alius

alius は、「その他の」とか「別の」という意味を持つ代名詞的形容詞です。

alius ..., alius ... は、「(いくつかのうちで) 一つは...、その他は...」という意味になります。

Alius flōs albus, alius flāvus est. 一つの花は白色で、その他は黄色です。

aliī ..., aliī ... は、「ある者たちは...、その他の者たちは...」という意味になります。

Aliī rident, aliī lacrimant. ある者たちは笑い、その他の者たちは泣いています。

lacrimō, -āre, 泣く。

### 6.6.5 uter

uter は、「(二つのうちの) どちらの...が...ですか?」という意味を持つ疑問文を作る代名詞的形容詞です。

Uter puellus filius tuus est? どちらの少年があなたの息子さんですか。

### 6.6.6 neuter

neuter は、「(二つのうちの) どちらの...も...ではない」という意味を持つ否定文を作る代名詞的形容詞です。

Neuter puellus filius meus est. どちらの少年も私の息子ではありません。

ちなみに、「(二つのうちの) どちらの...も...である」という意味を持つ肯定文を作りたいときは、uterque という形容詞を使います。uterque は、-que の左側の部分が uter と同じように変化します。

Uterque puellus filius meus est. どちらの少年も私の息子です。

### 6.6.7 ūllus

ūllus は、第 6.5 節で説明した不定形容詞の一つで、そして代名詞的形容詞の一つでもあります。

ūllus は、nōn などの否定を意味する単語とともに使われることによって、「いかなる...も...ない」という意味を持つ否定文を作ります。

Ūlla puella mē nōn amat. いかなる少女も私を愛していません。

Ūllum librum nōn habeō. 私はいかなる本も持っていません。

代名詞的形容詞の多くは、それ自体が代名詞としても使われるのですが、ūllus は、それ自体が代名詞として使われることはありません。意味の上で ūllus に対応する代名詞は、第 6.5 節で紹介した quisquam という不定代名詞です。

## 6.7 nūllus と nēmō と nihil

### 6.7.1 nūllus

nūllus は、第 6.6 節で説明した代名詞的形容詞の一つで、「いかなる...も...ない」という意味を持つ否定文を作ります。

Nūlla puella mē amat. いかなる少女も私を愛していません。

Nūllum librum habeō. 私はいかなる本も持っていません。

nūllus は、属格形と奪格形を除いて、それ自体が代名詞として使われることはありません。意味の上で nūllus に対応する代名詞は、nēmō と nihil です。

### 6.7.2 nēmō

nēmō は、数は単数だけ、性は男性と女性だけで、男性と女性は同じ形です。また、属格と奪格がありませんので、それらの格は nūllus で補われます。nēmō と nūllus の変化表を作ると、次のようになります。

男・女性

主格 nēmō

属格 nūllius

与格 nēminī

対格 nēminem

奪格 nūllō

nēmō は、「いかなる人も...ない」という意味を持つ否定文を作る代名詞です。

Nēmō mortem ēvītāre potest. いかなる人も死を避けることはできません。

mors, mortis, *f.* 死。

ēvītō, -āre, 避ける。

## 6.7.3 nihil

nihil は、数は単数だけ、性は中性だけ、格は主格と対格だけで、主格形と対格形はどちらも nihil です。nihil には属格と与格と奪格がありませんので、それらの格は nulla rēs で補われます (rēs は、「もの」とか「こと」を意味する女性名詞です)。nihil と nulla rēs の変化表を作ると、次のようになります。

	中性
主格	nihil
属格	nūllīus reī
与格	nūllī reī
対格	nihil
奪格	nūllā rē

nihil は、「いかなるものも...ない」という意味を持つ否定文を作る代名詞です。

Nihil habeo. 私はいかなるものも持っていません。

## 6.7.4 全否定と部分否定

omnis (すべての) という形容詞と nōn とを組み合わせで作られる文は、nōn の位置によって意味が変わります。たとえば、

Omnēs tē sciunt. すべての人があなたを知っています。

という文に nōn を加えることによって作られた、

(a) Omnēs tē nōn sciunt.

(b) Nōn omnēs tē sciunt.

という二つの否定文は、それぞれ意味が違います。

nōn は、その直後にある単語の意味を否定すると考えることができます。ですから、(a) は、sciunt (彼らは知っている) という述語動詞の直前に nōn が置かれていますので、「すべての人があなたを知りません」という意味になります。それに対して、(b) は、omnēs (すべての人々) という形容詞 (名詞的用法) の直前に nōn が置かれていますので、「すべての人があなたを知っているわけではありません」という意味になります。

(a) のような、文の全体の意味に対する否定は、「全否定」(英語では total negation) と呼ばれます。それに対して、(b) のような、文の一部分の意味に対する否定は、「部分否定」(英語では partial negation) と呼ばれます。

否定を意味する二つの単語を一つの文の中で使うことを、「二重否定」(英語では double negation) と呼びます。

nūllus、nēmō、nihil のいずれかと nōn を組み合わせることによって、二重否定の文を作ることができます。その場合、omnis と nōn の組み合わせがそうだったように、述語動詞の直前に nōn を置くと全否定になって、nūllus、nēmō、nihil の直前に nōn を置くと部分否定になります。

二重否定で全否定の文は、「...でないものはない」というように、何かを全面的に肯定する意味になります。

Nūlla puella tē nōn amat. あなたを愛さない少女は誰もいません。

Nēmō tē nōn scit. あなたを知らない人は誰もいません。

Nihil nōn habeo. 私が持っていないものは何もありません。

二重否定で部分否定の文は、「...であるものが何もないということはない」というように、例外が存在することを肯定する意味になります。

Nōn nūlla puella tē amat.

あなたを愛している少女が誰もいないということはありません。

Nōn nēmō tē scit.

あなたを知っている人が誰もいないということはありません。

Nōn nihil habeo.

私が持っているものが何もないということはありません。

## 第7章 数詞

### 7.1 数詞の基礎

#### 7.1.1 数詞の分類

数をあらわす単語は、「数詞」(英語では numeral)と呼ばれます。

ラテン語の数詞は、四つのグループに分類することができます。それぞれのグループについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そしてそれに分類される数詞があらわす意味を示すと、次のようになります。

基数詞	cardinal numeral	数量
序数詞	ordinal numeral	順序
配分数詞	distributive numeral	配分
数副詞	numeral adverb	回数や倍数

#### 7.1.2 数詞の変化

ラテン語の数詞には、変化するものとしらないものがあります。数詞を構成している四つのグループのそれぞれについて、それに分類される数詞が変化するかどうかを示すと、次のようになります。

基数詞	変化するものとしらないものがある
序数詞	変化する
配分数詞	変化する
数副詞	変化しない

### 7.2 基数詞

#### 7.2.1 基数詞の基礎

1個、2個、3個、……というように個数を示したり、何らかの単位を使って量を示したりするために使われる数詞は、「基数詞」(英語では cardinal numeral)と呼ばれます。

ラテン語の基数詞には、変化するものとしらないものがあります。変化しないほうが多数派で、変化するのは次の11個だけです。

- 1と2と3をあらわすそれぞれの基数詞。
- 200から900までの100の倍数をあらわすそれぞれの基数詞。

基数詞と、それが修飾する名詞との語順は、どちらが先でどちらが後でもかまいません。

#### 7.2.2 1から20までの基数詞

1から20までの基数詞を表にすると、次のようになります。

1	ūnus, -a, -um	11	ūndecim
2	duo, duae, duo	12	duodecim
3	trēs, tria	13	tredecim
4	quattuor	14	quattuordecim
5	quīnque	15	quīndecim
6	sex	16	sēdecim
7	septem	17	septendecim
8	octō	18	duodēvigintī (octōdecim)
9	novem	19	ūndēvigintī (novendecim)
10	decem	20	vīgintī

これらの基数詞のうちで、変化するのは、ūnus と duo と trēs、つまり1と2と3をあらわすそれぞれの基数詞だけです。それらの三つ以外は、まったく変化しません。

Quattuor filiās habeō. 私は四人の娘を持っています。

9月から12月までの月を意味するラテン語の形容詞は、基数詞から派生したものです。また、古い時代には、7月と8月も、基数詞から派生した *Quīntilis* と *Sextilis* が使われていました。*Quīntilis* は、ユリウス暦を制定したユリウス・カエサル (*Jūlius Caesar*) の誕生月にちなんで、紀元前44年に *Jūlius* に改称されました。そして *Sextilis* は、閏年の置き方を修正したアウグストゥス (*Augustus*) にちなんで、紀元後8年に *Augustus* に改称されました。

ところで、月を意味する形容詞の語源となった基数詞があらわしている数と、その月の番号とのあいだには、次の表が示しているように2箇月のズレがあります。

5	<i>quīnque</i>	→	<i>Quīntilis</i>	7月の
6	<i>sex</i>	→	<i>Sextilis</i>	8月の
7	<i>septem</i>	→	<i>September</i>	9月の
8	<i>octō</i>	→	<i>Octōber</i>	10月の
9	<i>novem</i>	→	<i>November</i>	11月の
10	<i>decem</i>	→	<i>December</i>	12月の

ローマの古い暦法では *Mārtius* が1年の最初の月でしたので、その時代にはこのようなズレは存在しませんでした。ズレが発生したのは、紀元前153年に、1年の最初の月が *Jānuālius* に変更されたためです。

### 7.2.3 *ūnus*

*ūnus* は、1をあらわす基数詞です。

*ūnus* は、数詞に分類することができるだけでなく、形容詞に分類することも可能で、第6.6節で紹介した代名詞的形容詞の一つです。

*ūnus* は、それが修飾する名詞の性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	<i>ūnus</i>	<i>ūna</i>	<i>ūnum</i>
	属格	<i>ūnīus</i>	<i>ūnīus</i>	<i>ūnīus</i>
	与格	<i>ūnī</i>	<i>ūnī</i>	<i>ūnī</i>
	対格	<i>ūnum</i>	<i>ūnam</i>	<i>ūnum</i>
	奪格	<i>ūnō</i>	<i>ūnā</i>	<i>ūnō</i>
複数	主格	<i>ūnī</i>	<i>ūnae</i>	<i>ūna</i>
	属格	<i>ūnōrum</i>	<i>ūnārum</i>	<i>ūnōrum</i>
	与格	<i>ūnīs</i>	<i>ūnīs</i>	<i>ūnīs</i>
	対格	<i>ūnōs</i>	<i>ūnās</i>	<i>ūna</i>
	奪格	<i>ūnīs</i>	<i>ūnīs</i>	<i>ūnīs</i>

このように、*ūnus* の変化は、ほかの代名詞的形容詞と同様です。

*Ūnam puellam amō.* 私は一人の少女を愛しています。

*ūnus* の変化表を見て、「どうして複数形が必要なのか？」と疑問に思った人がいるかもしれませんが、*ūnus* の複数形は、必要性がまったくないというわけではありません。

*ūnus* の複数形が必要となる事例の一つは、単数の意味を持つ複数形の名詞を修飾する場合があります。たとえば、*litterae* (手紙) という女性名詞や、*castra* (陣営) という中性名詞は、意味が単数の場合でも複数形が使われます。このような名詞を修飾する場合は、*ūnus* も複数形になります。

*Ūnās litterās scribō.* 私は一通の手紙を書いています。

*ūnus* の複数形が必要となるもう一つの事例は、それが「...のみ」という意味で使われる場合です。その場合も、修飾される名詞が複数形ならば、*ūnus* も複数形になります。

*Ūnās avēs amō.* 私は鳥たちのみを愛しています。

## 7.2.4 duo

duo は、2 をあらわす基数詞です。

duo は、単数形がなくて複数形だけで、それが修飾する名詞の性と格に応じて、次のように変化します。

	男性	女性	中性
主格	duo	duae	duo
属格	duōrum	duārum	duōrum
与格	duōbus	duābus	duōbus
対格	duōs	duās	duo
奪格	duōbus	duābus	duōbus

Duās filiās habeō. 私は二人の娘を持っています。

## 7.2.5 trēs

trēs は、3 をあらわす基数詞です。

trēs は、単数形がなくて複数形だけで、それが修飾する名詞の性と格に応じて、次のように変化します。

	男・女性	中性
主格	trēs	tria
属格	trium	trium
与格	tribus	tribus
対格	trēs	tria
奪格	tribus	tribus

Cum tribus filiīs vivō. 私は三人の娘と暮らしています。

vivō, -ere, 生きる、暮らす。

## 7.2.6 10の倍数をあらわす基数詞

20 から 90 までの 10 の倍数をあらわす基数詞を表にすると、次のようになります。

20	vīgintī
30	trīgintā
40	quadrāgintā
50	quīnquāgintā
60	sexāgintā
70	septuāgintā
80	octōgintā
90	nōnāgintā

20 以上の 2 桁の数のうちで、1 の位が 1 から 7 までものは、それぞれの桁をあらわす基数詞を、

10 の位 1 の位

という順序で並べるか、または、

1 の位 et 10 の位

というように、それとは逆の順序で並べて、あいだに et を挟むことによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

21	vīgintī ūnus	または	ūnus et vīgintī
32	trīgintā duo	または	duo et trīgintā
43	quadrāgintā trēs	または	trēs et quadrāgintā
86	octōgintā sex	または	sex et octōgintā
97	nōnāgintā septem	または	septem et nōnāgintā

ūnus と duo と trēs は、2桁の数の1の位をあらわす場合も、それが修飾する名詞の性と格に応じて変化します。この場合、名詞は複数形ですが、ūnus は単数形が使われます。

Vīgintī ūnum librōs habeō. 私は21冊の本を持っています。

20以上の2桁の数のうちで、1の位が8のもの(ただし98は除く)は、それに2を加算した数をあらわす基数詞に、

duodē- ...から2を減算する

という接頭辞を加えた基数詞によってあらわされます。いくつか例を挙げると、次のようになります。

28	duodētrīgintā
38	duodēquadrāgintā
88	duodēnōnāgintā

20以上の2桁の数のうちで、1の位が9のもの(ただし99は除く)は、それに1を加算した数をあらわす基数詞に、

ūndē- ...から1を減算する

という接頭辞を加えた基数詞によってあらわされます。いくつか例を挙げると、次のようになります。

29	ūndētrīgintā
39	ūndēquadrāgintā
89	ūndēnōnāgintā

98と99は、次のように表現されます。

98	nōnāgintā octō	または	octō et nōnāgintā
99	nōnāgintā novem	または	novem et nōnāgintā

### 7.2.7 100の倍数をあらわす基数詞

100から900までの100の倍数をあらわす基数詞を表にすると、次のようになります。

100	centum
200	ducentī, -ae, -a
300	trecentī, -ae, -a
400	quadringentī, -ae, -a
500	quīngentī, -ae, -a
600	sēscentī, -ae, -a
700	septingentī, -ae, -a
800	octingentī, -ae, -a
900	nōngentī, -ae, -a

これらの基数詞は、centum だけは変化しないのですが、それ以外はすべて、それが修飾する名詞の性と格に応じて変化します。centum 以外の100の倍数をあらわす基数詞の変化は、第一第二変化形容詞の変化と同じです。

Haec silva septingentās cedrōs habet. この森は700本の杉の木を持っています。

silva, -ae, *f.* 森。  
cedrus, -ī, *f.* 杉の木。

3桁の数は、100の位をあらわす基数詞と、10の位と1の位をあらわす表現を、

100の位 (et) 10の位と1の位

という形で並べることによって表現します。etは、置いても置かなくてもどちらでもかまいません。いくつか例を挙げると、次のようになります。

101 centum et ūnus  
 221 ducentī et vīgintī ūnus  
 328 trecentī et duodētrīgintā  
 432 quadringentī et trīgintā duo  
 999 nōngentī et nōnāgintā novem

### 7.2.8 mille

1000という数は、milleという単語によってあらわされます。

milleには単数形と複数形があります。単数形はmilleで、複数形はmīliaです。単数形のmilleは基数詞ですが、複数形のmīliaは数詞ではなくて、「1000個のもの」を意味する中性複数の名詞です。

1000から1999までの数は、基数詞のmilleと、100の位をあらわす基数詞と、10の位と1の位をあらわす表現を、

mille (et) 100の位 10の位と1の位

という形で並べることによって表現します。etは、置いても置かなくてもどちらでもかまいません。いくつか例を挙げると、次のようになります。

1001 mille et ūnus  
 1234 mille et ducentī trīgintā quattuor  
 1999 mille et nōngentī nōnāgintā novem

単数形のmilleは、性や格に応じて変化するということはありません。

Haec silva mille et octingentās cedrōs habet.

この森は1800本の杉の木を持っています。

2000以上の数は、中性複数名詞のmīliaを使って表現します。

mīliaは、格に応じて次のように変化します。

主格 mīlia  
 属格 mīlium  
 与格 mīlibus  
 対格 mīlia  
 奪格 mīlibus

1000の倍数は、何倍するかということであらわす基数詞の中性形をmīliaの左側に置くことによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

2000 duo mīlia  
 3000 tria mīlia  
 4000 quattuor mīlia  
 10000 decem mīlia  
 21000 vīgintī ūnum mīlia  
 100000 centum mīlia  
 200000 ducenta mīlia

1000の倍数をあらわす表現を使って、「...千個の何々」と言うためには、「何々」を属格にする必要があります。つまり、修飾の関係を逆にして、「何々の...千個」と言わないといけないわけです。

Haec silva duo mīlia cedrōrum habet. この森は2000本の杉の木を持っています。



2000 以上の数は、1000 の倍数をあらわす表現と、100 の位をあらわす基数詞と、10 の位と 1 の位をあらわす表現を、

1000 の倍数 (et) 100 の位 10 の位と 1 の位

という形で並べることによって表現します。et は、置いても置かなくてもどちらでもかまいません。いくつか例を挙げると、次のようになります。

2001 duo milia et unus  
 3456 tria milia et quadringenti quinquaginta sex  
 34567 trīgintā quattuor milia et quīngenti sexaginta septem  
 345678 trecenta quadrāgintā quīnque milia et sēscenti duodēoctōgintā

2000 以上の数をあらわす表現で、milia の右側に下位の桁をあらわす表現が続いているものを使って、「...千...個の何々」と言う場合、「何々」を属格にする必要はありません。

Haec silva duo milia et octingentās cedrōs habet.  
 この森は 2800 本の杉の木を持っています。

### 7.2.9 年齢

「誰々は...歳です」というように年齢を表現したいときは、基数詞の男性対格形と、「年」を意味する annus という男性名詞の複数対格形と、「生まれる」を意味する nascor という動詞の現在分詞（第 12.2 節参照）を、

基数詞の男性対格形 annōs nātus

という形で並べたものを使います。

Quīnquāgintā unum annōs nātus sum. 私は 51 歳です。

## 7.3 序数詞

### 7.3.1 序数詞の基礎

1 番目、2 番目、3 番目、..... というように番号を示すために使われる数詞は、「序数詞」(英語では ordinal numeral) と呼ばれます。

ラテン語の序数詞は、すべて、それが修飾する名詞の性と数と格に応じて変化します。序数詞の変化は、すべて、第一第二変化形容詞の変化と同じです。

序数詞と、それが修飾する名詞との語順は、どちらが先でどちらが後でもかまいません。

### 7.3.2 1 から 20 までの序数詞

1 から 20 までの序数詞を表にすると、次のようになります。

1	prīmus	11	ūndecimus
2	secundus	12	duodecimus
3	tertius	13	tertius decimus
4	quartus	14	quartus decimus
5	quīntus	15	quīntus decimus
6	sextus	16	sextus decimus
7	septimus	17	septimus decimus
8	octāvus	18	duodēvīcēsīmus
9	nōnus	19	ūndēvīcēsīmus
10	decimus	20	vīcēsīmus

Tertia filia mea est. 彼女は私の三番目の娘です。

13 から 17 までの番号は、上の表で示されているように、1 の位をあらわす序数詞の右側に decimus を並べることによって表現します。

代名詞的形容詞の alter は、2 番目を意味する序数詞として使うことも可能です。

### 7.3.3 10の倍数をあらわす序数詞

20から100までの10の倍数をあらわす序数詞を表にすると、次のようになります。

20	vīcēsīmus
30	trīcēsīmus
40	quadrāgēsīmus
50	quīnquāgēsīmus
60	sexāgēsīmus
70	septuāgēsīmus
80	octōgēsīmus
90	nōnāgēsīmus
100	centēsīmus

20以上の2桁の番号のうちで、1の位が1から7までものは、それぞれの桁をあらわす序数詞を、

10の位 1の位

という順序で並べることによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

21	vīcēsīmus pīmus
32	trīcēsīmus secundus
86	octōgēsīmus sextus
97	nōnāgēsīmus septīmus

20以上の2桁の番号のうちで、1の位が8のものは、それに2を加算した番号をあらわす序数詞に、

duodē- ...から2を減算する

という接頭辞を加えた序数詞によってあらわされます。同じように、1の位が9のものは、それに1を加算した番号をあらわす序数詞に、

ūndē- ...から1を減算する

という接頭辞を加えた序数詞によってあらわされます。いくつか例を挙げると、次のようになります。

28	duodētrīcēsīmus
29	ūndētrīcēsīmus
98	duodēcentēsīmus
99	ūndēcentēsīmus

### 7.3.4 100の倍数をあらわす序数詞

100から1000までの100の倍数をあらわす序数詞を表にすると、次のようになります。

100	centēsīmus
200	ducentēsīmus
300	trecentēsīmus
400	quadringentēsīmus
500	quīngentēsīmus
600	sēscentēsīmus
700	septingentēsīmus
800	octingentēsīmus
900	nōngentēsīmus
1000	millēsīmus

3桁の番号は、100の位をあらわす序数詞と、10の位と1の位をあらわす表現を、

100 の位 10 の位と 1 の位

という形で並べることによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

101 centēsimus p̄rimus  
 432 quadringentēsimus quadrāgēsimum secundus  
 678 sēscentēsimus duodēoctōgēsimum  
 999 nōngentēsimus ūndēcentēsimus

1000 の倍数の番号はどのように表現されるのかということについては、第 7.5.6 項で説明することにしたいと思います。

### 7.3.5 分数

分数を表現するときには、その分母を表現するために序数詞が使われます。

分子が 1 の分数は、分母をあらわす序数詞の女性単数形と、「部分」を意味する pars という女性名詞を、

分子をあらわす基数詞 pars

という形で並べることによって表現します。つまり、「...番目の部分」という表現によってあらわすわけです。いくつか例を挙げると、次のようになります。

1/3 tertia pars  
 1/10 decima pars  
 1/100 centēsima pars

ただし、1/2 は、「半分の」という意味を持つ dīmidius という形容詞を使って、  
 dīmidia pars

と言うのが普通です。

分子が 2 以上で、分母から 1 を減算した結果と分子とが等しい分数は、分子をあらわす基数詞の女性形と、pars の複数形 (partēs) を、

分子をあらわす基数詞 partēs (partēs)

という形で並べることによって表現します。つまり、「...個の部分」という表現によってあらわすわけです。いくつか例を挙げると、次のようになります。

2/3 duae partēs  
 3/4 trēs partēs  
 99/100 nōnāgintā novem partēs

分子が 2 以上で、分母から 1 を減算した結果と分子とが等しくない分数は、分子をあらわす基数詞の女性形と、分母をあらわす序数詞の女性複数形を、

分子をあらわす基数詞 分母をあらわす序数詞

という形で並べることによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

2/5 duae quīntae  
 7/10 septem decimae  
 21/100 vīgintī ūna centēsima

## 7.4 配分数詞

### 7.4.1 配分数詞の基礎

一つずつ、二つずつ、三つずつ、.....というように、複数のもののそれぞれに対していくつのものを配分するかということを示すために使われる数詞は、「配分数詞」(英語では distributive numeral) と呼ばれます。

配分数詞は、常に複数形の名詞を修飾します。ですから、配分数詞の形は複数形だけで、単数形はありません。この点については、「一つずつ」を意味する配分数詞も例外ではありません。

配分数詞は、すべて、それが修飾する名詞の性と格に応じて変化します。配分数詞の変化は、すべて、第一第二変化形容詞の変化と同じです。

配分数詞と、それが修飾する名詞との語順は、どちらが先でどちらが後でもかまいません。

#### 7.4.2 1 から 20 までの配分数詞

1 から 20 までの配分数詞を表にすると、次のようになります。

1	singulī	11	ūndēnī
2	bīnī	12	duodēnī
3	ternī (trīnī)	13	ternī dēnī
4	quaternī	14	quaternī dēnī
5	quīnī	15	quīnī dēnī
6	sēnī	16	sēnī dēnī
7	septēnī	17	septēnī dēnī
8	octōnī	18	octōnī dēnī (duodēvīcēnī)
9	novēnī	19	novēnī dēnī (ūndēvīcēnī)
10	dēnī	20	vīcēnī

Fīliīs singulōs librōs dōnō. 私は娘たちに 1 冊ずつの本を贈ります。

Fīliīs quaternōs librōs dōnō. 私は娘たちに 4 冊ずつの本を贈ります。

#### 7.4.3 10 の倍数をあらわす配分数詞

20 から 100 までの 10 の倍数をあらわす配分数詞を表にすると、次のようになります。

20	vīcēnī
30	trīcēnī
40	quadrāgēnī
50	quīnquāgēnī
60	sexāgēnī
70	septuāgēnī
80	octōgēnī
90	nōnāgēnī
100	centēnī

20 以上の 2 桁の配分のうちで、1 の位が 1 から 7 までものは、それぞれの桁をあらわす配分数詞を、

10 の位 1 の位

という順序で並べることによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

21	vīcēnī singulī
32	trīcēnī bīnī
86	octōgēnī sēnī
97	nōnāgēnī septēnī

20 以上の 2 桁の配分のうちで、1 の位が 8 のものは、それに 2 を加算した配分をあらわす配分数詞に duodē- という接頭辞を加えた配分数詞によってあらわされます。同じように、1 の位が 9 のものは、それに 1 を加算した配分をあらわす配分数詞に ūndē- という接頭辞を加えた配分数詞によってあらわされます。いくつか例を挙げると、次のようになります。

28	duodētrīcēnī
29	ūndētrīcēnī
98	duodēcentēnī
99	ūndēcentēnī

## 7.4.4 100の倍数をあらわす配分数詞

100 から 900 までの 100 の倍数をあらわす配分数詞を表にすると、次のようになります。

100	centēnī
200	ducēnī
300	trecēnī
400	quadringēnī
500	quīngēnī
600	sēscēnī
700	septingēnī
800	octingēnī
900	nōngēnī

## 7.4.5 1000の倍数をあらわす配分数詞

1000 の倍数の配分は、何倍するかということであらわす配分数詞の中性形を *milia* の左側に置くことによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

1000	singula <i>mīlia</i>
2000	bīna <i>mīlia</i>
3000	terna <i>mīlia</i>
4000	quaterna <i>mīlia</i>
10000	dēna <i>mīlia</i>
21000	vīcēna singula <i>mīlia</i>
100000	centēna <i>mīlia</i>
200000	ducēna <i>mīlia</i>

## 7.4.6 単数の意味を持つ複数形の名詞の個数

第 7.2.3 項で説明したように、意味が単数の場合でも複数形が使われる名詞があります。*litterae* (手紙) という女性名詞や、*castra* (陣営) という中性名詞などがそうです。

そのような名詞によって示されるものが 2 個以上ある場合、それらの個数は、基数詞ではなくて配分数詞によって表現されます。ただし、個数が 3 個の場合は、*ternī* ではなくて、*trīnī* という別形のほうが使われます。

<i>bīnae litterae</i>	2 通の手紙
<i>trīnae litterae</i>	3 通の手紙

## 7.5 数副詞

## 7.5.1 数副詞の基礎

一回、二回、三回、……というように回数を示したり、一倍、二倍、三倍、……というように倍数を示したりするために使われる数詞は、「数副詞」(英語では *numeral adverb*) と呼ばれます。

数副詞は、まったく変化しません。

## 7.5.2 1 から 20 までの数副詞

1 から 20 までの数副詞を表にすると、次のようになります。

1	semel	11	ūndeciēs
2	bis	12	duodeciēs
3	ter	13	ter deciēs (tredeciēs)
4	quater	14	quater deciēs (quattuordecīēs)
5	quīnquiēs	15	quīnquiēs deciēs (quīndeciēs)
6	sexiēs	16	sexiēs deciēs (sēdeciēs)
7	septiēs	17	septiēs deciēs
8	octiēs	18	duodēvīciēs (octiēs deciēs)
9	noviēs	19	ūndēvīciēs (noviēs deciēs)
10	deciēs	20	vīciēs

5以上の数副詞の語尾は、すべて、-ēs という形になっています。この語尾を -ēns に置き換えた、たとえば、

quīnquiēns  
sexiēns  
septiēns

というような形のものも、数副詞として使われることがあります。

### 7.5.3 10の倍数をあらわす数副詞

20から100までの10の倍数をあらわす数副詞を表にすると、次のようになります。

20	vīciēs
30	trīciēs
40	quadrāgiēs
50	quīnquāgiēs
60	sexāgiēs
70	septuāgiēs
80	octōgiēs
90	nōnāgiēs
100	centiēs

20以上の2桁の回数の中で、1の位が1から7までものは、それぞれの桁をあらわす数副詞と et を、

1の位 et 10の位

という順序で並べることによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

21	semel et vīciēs
32	bis et trīciēs
86	sexiēs et octōgiēs
97	septiēs et nōnāgiēs

20以上の2桁の回数の中で、1の位が8のものは、それに2を加算した回数をあらわす数副詞に duodē- という接頭辞を加えた数副詞によってあらわされます。同じように、1の位が9のものは、それに1を加算した回数をあらわす数副詞に ūndē- という接頭辞を加えた数副詞によってあらわされます。いくつか例を挙げると、次のようになります。

28	duodētrīciēs
29	ūndētrīciēs
98	duodēcentiēs
99	ūndēcentiēs

#### 7.5.4 100 の倍数をあらわす数副詞

100 から 1000 までの 100 の倍数をあらわす数副詞を表にすると、次のようになります。

100	centiēs
200	ducentiēs
300	trecentiēs
400	quadringentiēs
500	quīngentiēs
600	sēscentiēs
700	septingentiēs
800	octingentiēs
900	nōngentiēs
1000	milliēs (mīliēs, milliēs)

#### 7.5.5 1000 の倍数をあらわす数副詞

1000 の倍数の回数は、何倍するかということであらわす数副詞を *milliēs* の左側に置くことによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

2000	bis milliēs
3000	ter milliēs
4000	quater milliēs
10000	deciēs milliēs
21000	semel et vīciēs milliēs
100000	centiēs milliēs
200000	ducentiēs milliēs

#### 7.5.6 1000 の倍数をあらわす序数詞

第 7.3 節で説明したように、番号は、1 個以上の序数詞を並べることによって表現されます。ただし、序数詞だけを使って表現することのできる番号は、1999 までです。2000 以上の番号を表現するためには、序数詞だけではなくて、数副詞も必要になります。

1000 の倍数の番号は、何倍するかということであらわす数副詞を *millēsimus* の左側に置くことによって表現します。いくつか例を挙げると、次のようになります。

2000	bis millēsimus
3000	ter millēsimus
4000	quater millēsimus
10000	deciēs millēsimus
21000	semel et vīciēs millēsimus
100000	centiēs millēsimus
200000	ducentiēs millēsimus

## 第 8 章 動詞 II [ 時制 ]

### 8.1 未完了過去

#### 8.1.1 時制についての復習

第 3.1 節で説明したように、ラテン語の動詞を変化させる要因としては、人称、数、時制、態、法、という五つのものがあります。

時制については、すでに第 3.1.4 項で説明しましたが、ここでもう一度復習しておきましょう。

時制（英語では *tense*）というのは、文が発言または記述された時点と、その文があらわしている内容の時点との関係のことです。ラテン語の時制には、現在、未完了過去、未来、完了、過

去完了、未来完了という六つのものがあります。

この章のテーマは、直説法・能動態の動詞は時制に応じてどのように変化するかということ、そしてそれぞれの時制はどのような意味を持つのかということです。ただし、現在という時制については、すでに第3.2節で説明していますので、この章では、未完了過去、未来、完了、過去完了、未来完了という、現在を除いた五つの時制について説明したいと思います。

### 8.1.2 直説法・未完了過去の動詞の構造

第3.1.12項で説明したように、動詞は、

語幹 + 時制符号 + 語尾

という構造を持っています(ただし、直説法・現在と直説法・能動態・完了は、時制符号の不在、つまり語幹の直後に語尾を連結することによって示されます)。

直説法・未完了過去は、現在幹と、-bā- という時制符号によって示されます。つまり、動詞の直説法・未完了過去の形は、

現在幹 + bā + 語尾

という構造を持っているということです。ただし、時制符号の -bā- は、語尾の変化に応じて -bā- になる場合もあります。

第3.2.3項で説明したように、能動態の語尾は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	-ō または -m	-mus
二人称	-s	-tis
三人称	-t	-nt

ただし、直説法・能動態・未完了過去では、一人称・単数の語尾として使われるのは -m だけで、-ō は使われません。

### 8.1.3 第一変化動詞の直説法・能動態・未完了過去

amō という第一変化動詞の直説法・能動態・未完了過去は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	amābam	amābāmus
二人称	amābās	amābātis
三人称	amābat	amābant

### 8.1.4 第二変化動詞の直説法・能動態・未完了過去

habēō という第二変化動詞の直説法・能動態・未完了過去は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	habēbam	habēbāmus
二人称	habēbās	habēbātis
三人称	habēbat	habēbant

### 8.1.5 第三 a 変化動詞の直説法・能動態・未完了過去

regō という第三 a 変化動詞の直説法・能動態・未完了過去は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	regēbam	regēbāmus
二人称	regēbās	regēbātis
三人称	regēbat	regēbant

第三 a 変化動詞の現在幹の末尾にある ě という短母音は、直説法・能動態・未完了過去では、ē という長母音になります。



## 8.1.6 第三 b 変化動詞の直説法・能動態・未完了過去

capiō という第三 b 変化動詞の直説法・能動態・未完了過去は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	capiēbam	capiēbāmus
二人称	capiēbās	capiēbātis
三人称	capiēbat	capiēbant

第三 b 変化動詞の現在幹の末尾にある ē は、直説法・能動態・未完了過去では、iē になります。

## 8.1.7 第四変化動詞の直説法・能動態・未完了過去

audiō という第四変化動詞の直説法・能動態・未完了過去は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	audiēbam	audiēbāmus
二人称	audiēbās	audiēbātis
三人称	audiēbat	audiēbant

第四変化動詞の現在幹の末尾にある ī は、直説法・能動態・未完了過去では、iē になります。

## 8.1.8 不規則動詞の直説法・能動態・未完了過去

不規則動詞の直説法・能動態・未完了過去は、数と人称に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>sum</b>	eram	erās	erat	erāmus	erātis	erant
<b>possum</b>	poteram	poterās	poterat	poterāmus	poterātis	poterant
<b>volō</b>	volēbam	volēbās	volēbat	volēbāmus	volēbātis	volēbant
<b>nōlō</b>	nōlēbam	nōlēbās	nōlēbat	nōlēbāmus	nōlēbātis	nōlēbant
<b>mālō</b>	mālēbam	mālēbās	mālēbat	mālēbāmus	mālēbātis	mālēbant
<b>eō</b>	ībam	ībās	ībat	ībāmus	ībātis	ībant
<b>ferō</b>	ferēbam	ferēbās	ferēbat	ferēbāmus	ferēbātis	ferēbant
<b>fiō</b>	fiēbam	fiēbās	fiēbat	fiēbāmus	fiēbātis	fiēbant
<b>dō</b>	dabam	dabās	dabat	dabāmus	dabātis	dabant
<b>edō</b>	edēbam	edēbās	edēbat	edēbāmus	edēbātis	edēbant

## 8.1.9 未完了過去の意味

未完了過去（英語では imperfect）という時制は、過去において継続していた動作や、過去において習慣的に反復されていた動作などをあらわします。つまり、日本語で言えば、「何々していた」とか「何々しつつあった」とか「何々するのが常だった」というような意味を持つ時制です。

Tē amābam. 私はあなたを愛していました。

Nāvem faciēbant. 彼らは船を作っていました。

nāvis, -vis, f. 船。

## 8.2 未来

## 8.2.1 直説法・未来の動詞の構造

直説法・未来の動詞は、

現在幹 + 直説法・未来を示す時制符号 + 語尾

という構造を持っています。

直説法・未来を示す時制符号は、二つあります。そして、次の表が示しているように、動詞が所属しているグループによって、使われる時制符号が違います。

第一変化・第二変化	-bi-
第三 a 変化・第三 b 変化・第四変化	-ē-

ただし、-bi- という時制符号は、一人称・単数では -b- になって、三人称・複数では -bu- になります。

また、-ē- という時制符号は、一人称・単数では -a- になって、三人称では -ē- になります。

### 8.2.2 第一変化動詞の直説法・能動態・未来

amō という第一変化動詞の直説法・能動態・未来は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	amābō	amābimus
二人称	amābis	amābitis
三人称	amābit	amābunt

### 8.2.3 第二変化動詞の直説法・能動態・未来

habēō という第二変化動詞の直説法・能動態・未来は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	habēbō	habēbimus
二人称	habēbis	habēbitis
三人称	habēbit	habēbunt

### 8.2.4 第三 a 変化動詞の直説法・能動態・未来

regō という第三 a 変化動詞の直説法・能動態・未来は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	regam	regēmus
二人称	regēs	regētis
三人称	reget	regent

第三 a 変化動詞の現在幹の末尾にある ē は、直説法・能動態・未来では欠落します。

### 8.2.5 第三 b 変化動詞の直説法・能動態・未来

capiō という第三 b 変化動詞の直説法・能動態・未来は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	capiam	capiēmus
二人称	capiēs	capiētis
三人称	capiet	capient

第三 b 変化動詞の現在幹の末尾にある ē は、直説法・能動態・未来では、i になります。

### 8.2.6 第四変化動詞の直説法・能動態・未来

audiō という第四変化動詞の直説法・能動態・未来は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	audiam	audiēmus
二人称	audiēs	audiētis
三人称	audiet	audient

第四変化動詞の現在幹の末尾にある *i* という長母音は、直説法・能動態・未来では、*i* という短母音になります。

### 8.2.7 不規則動詞の直説法・能動態・未来

不規則動詞の直説法・能動態・未来は、数と人称に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>sum</b>	erō	eris	erit	erimus	eritis	erunt
<b>possum</b>	poterō	poteris	poterit	poterimus	poteritis	poterunt
<b>volō</b>	volam	volēs	volet	volēmus	volētis	volent
<b>nōlō</b>	nōlam	nōlēs	nōlet	nōlēmus	nōlētis	nōlent
<b>mālō</b>	mālam	mālēs	mālet	mālēmus	mālētis	mālent
<b>eō</b>	ībō	ībis	ībit	ībimus	ībitis	ībunt
<b>ferō</b>	feram	ferēs	feret	ferēmus	ferētis	ferent
<b>fiō</b>	fiām	fiēs	fiēt	fiēmus	fiētis	fiēt
<b>dō</b>	dabō	dabis	dabit	dabimus	dabitis	dabunt
<b>edō</b>	edam	edēs	edet	edēmus	edētis	edent

### 8.2.8 未来の意味

未来（英語では future）という時制は、未来において起こるであろう動作をあらわします。つまり、日本語で言えば、「何々するであろう」という意味を持つ時制です。

Tē amābit. 彼はあなたを愛するでしょう。

Nāvem facient. 彼らは船を作るでしょう。

一人称の未来は、未来において実行する意思があるということを示す場合にも使われます。つまり、「何々するつもりだ」という日本語に相当する使い方です。

Nāvem faciam. 私は船を作るでしょう。（私は船を作るつもりです）

二人称の未来は、婉曲な命令の意味で使われることもあります。

Nāvem faciēs. あなたは船を作るでしょう。（船を作りなさい）

### 8.2.9 命令法・能動態・未来

第 3.6 節で、命令法・能動態・現在について説明しましたが、命令法の時制としては、現在だけではなく、未来もあります。ただし、命令法の未来というのは、法律や布告や遺言書のような特殊な文書の中で使われるものですので、覚えておく必要性がものすごく高いものではありません。

命令法・能動態・未来・二人称の単数は、現在幹に *-tō* を連結した形で、複数は、現在幹に *-tōte* を連結した形です。ただし、第三変化動詞は、現在幹の末尾にある *e* を *i* に変える必要があります。

命令法の現在には、人称としては二人称しかありませんが、それに対して命令法の未来には、二人称だけではなくて三人称もあります。

命令法・能動態・未来の三人称・単数は、二人称・単数と同じ形で、三人称・複数は、次のような方法で作ります。

- 第一変化動詞と第二変化動詞は、現在幹に *-ntō* を連結する。ただし、現在幹の末尾にある長母音を短母音にする。
- 第三 a 変化動詞は、現在幹に *-untō* を連結する。ただし、現在幹の末尾にある *e* を取り除く。
- 第三 b 変化動詞は、現在幹に *-untō* を連結する。ただし、現在幹の末尾にある *e* を *i* に変える。
- 第四変化動詞は、現在幹に *-untō* を連結する。ただし、現在幹の末尾にある *i* を *i* に変える。

*amō*、*habeō*、*regō*、*capiō*、*audiō* の命令法・能動態・未来は、次の表のような形になります。

	二人称		三人称	
	単数	複数	単数	複数
<b>amō</b>	amātō	amātōte	amātō	amantō
<b>habeō</b>	habētō	habētōte	habētō	habentō
<b>regō</b>	regitō	regitōte	regitō	reguntō
<b>capiō</b>	capitō	capitōte	capitō	capiuntō
<b>audiō</b>	auditō	auditōte	auditō	audiuntō

不規則動詞の命令法・能動態・未来は、次の表のような形になります。

	二人称		三人称	
	単数	複数	単数	複数
<b>sum</b>	estō	estōte	estō	suntō
<b>nōlō</b>	nōlitō	nōlitōte	nōlitō	nōluntō
<b>eō</b>	itō	itōte	itō	euntō
<b>ferō</b>	fertō	fertōte	fertō	feruntō
<b>fiō</b>	fitō	—	—	—
<b>dō</b>	datō	datōte	datō	dantō
<b>edō</b>	editō (ēstō)	editōte (ēstōte)	editō (ēstō)	eduntō

sciō (知っている) と meminī (覚えている) という動詞には、命令法・現在の形がありませんので、「知りなさい」とか「覚えていなさい」と命令するためには、命令法・未来の形を使う必要があります。

	単数	複数
<b>sciō</b>	scītō	scītōte
<b>meminī</b>	mementō	mementōte

Mementō morī. 死ぬことを覚えていなさい。

**morior**, morī 死ぬ。

## 8.3 完了

### 8.3.1 直説法・能動態・完了の動詞の構造

直説法・能動態・完了は、完了幹の直後に語尾を連結することによって示されます。つまり、直説法・能動態・完了の動詞は、

完了幹 + 語尾

という構造を持っているということです。

### 8.3.2 完了幹

ある動詞の完了幹がどのような形なのかということは、ラテン語の辞書でその動詞を調べることによって知ることができます。

ラテン語の辞書では、動詞の項目の中に、その動詞の直説法・能動態・完了・一人称・単数の形が書かれています。その形は、完了幹に -ī という語尾を連結したものですので、その語尾を取り除いた部分が完了幹です。

たとえば、ラテン語の辞書で amō という動詞を調べると、

**amō**, -āre, -āvī, -ātum 愛する。

というように書かれています。この中にある -āvī という記述は、amō の直説法・能動態・完了・一人称・単数の形が amāvī だということを示しています。ですから、その形から -ī を取り除いた、amāv- というのが、amō の完了幹だということが分かります。

現在幹から完了幹を導き出すことのできる明確で単純な規則、というものは存在しません。ですから、完了幹は、基本的には動詞ごとに覚える必要があります。ただし、現在幹から完了幹を

作るという変化は、まったく不規則というわけではなくて、動詞の多くは、いくつかのパターンのうちのどれかを使って変化します。

現在幹から完了幹が作られるパターンとしては、次のようなものがあります。

- 現在幹の末尾に *-v-* を連結する。第一変化動詞と第四変化動詞の大多数は、このパターン。
 

amō (愛する)	→	amāvī
audiō (聞く)	→	audīvī

矢印の右側は、直説法・能動態・完了・一人称・単数の形(以下同様)。
- 現在幹の末尾から母音を除去したのちに *-u-* を連結する。第二変化動詞の多くは、このパターン。
 

habeō (持つ)	→	habuī
------------	---	-------
- 短母音を長母音にする。a は ē に変わることが多い。また、n や m が消失することもある。
 

veniō (来る)	→	vēnī
videō (見る)	→	vidī
faciō (作る)	→	fēcī
jaciō (投げる)	→	jēcī
capiō (捕える)	→	cēpī
agō (導く)	→	ēgī
vincō (勝つ)	→	vīcī
fundō (注ぐ)	→	fūdī
rumpō (破る)	→	rūpī
- 現在幹の末尾から母音を除去したのちに *s* を連結する。gs は x に、bs は ps に、ts や ds は s に変化することが多い。
 

carpō (摘む)	→	carpsī
dīcō (言う)	→	dīxī
regō (支配する)	→	rexī
scribō (書く)	→	scīpsī
sentiō (感じる)	→	sensī
rīdeō (笑う)	→	rīsī
mittō (送る)	→	mīsī
- 単語の先頭の部分を重複させる(「畳音」(英語では reduplication) と呼ばれる)。母音が変わることもある。
 

currō (走る)	→	cucurrī
poscō (要求する)	→	poposcī
dō (与える)	→	dedī
canō (歌う)	→	cecinī
fallō (あざむく)	→	fefellī
spondeō (約束する)	→	spopondī
stō (立つ)	→	stetī
- 現在幹の末尾から母音を除去するだけ。
 

arguō (論証する)	→	arguī
solvō (解く)	→	solvī
dēfendō (守る)	→	dēfendī
ascendō (昇る)	→	ascendī
bibō (飲む)	→	bibī

## 8.3.3 不規則動詞の完了幹

不規則動詞の直説法・能動態・完了・一人称・単数を表にすると、次のようになります。

sum	→	fuī
possum	→	potuī
volō	→	voluī
nōlō	→	nōluī
mālō	→	māluī
eō	→	iī (īvī)
ferō	→	tulī
fiō	→	factus sum
dō	→	dedī
edō	→	ēdī

この表をよく見ると、fiō だけ、完了の形がほかの動詞とは大きく違っています。その理由は、fiō の能動態・完了としては、faciō の受動態・完了が使われるからです（受動態・完了については、第9.2節で説明します）。

## 8.3.4 直説法・能動態・完了の動詞の語尾

直説法・能動態・完了の動詞の語尾としては、通常の能動態の語尾とは異なる、次のようなものが使われます。

	単数	複数
一人称	-ī	-imus
二人称	-istī	-istis
三人称	-it	-ērunt (-ēre)

たとえば、amō という動詞の直説法・能動態・完了は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	amāvī	amāvimus
二人称	amāvistī	amāvistis
三人称	amāvit	amāvērunt

不規則動詞も、直説法・能動態・完了の語尾については、普通の動詞とまったく同じです。たとえば、sum の直説法・能動態・完了は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	fuī	fuimus
二人称	fuistī	fuistis
三人称	fuit	fuērunt

## 8.3.5 完了の意味

完了（英語では perfect）という時制は、次の二つの意味で使われます。

- 歴史的完了（英語では historical perfect）
- 現在完了（英語では present perfect）

歴史的完了は、過去において起こった動作という意味です。つまり、日本語で言えば、「何々した」という意味になります。

Nāvem fecērunt. 彼らは船を作りました。

紀元前47年、古代ローマの将軍カエサル (Gaius Jūlius Caesar) は、ポントスのパルナケス王との戦いに勝利したとき、次の言葉を掲げて凱旋したと伝えられています。

Vēnī, vīdī, vīcī. 来た、見た、勝った。

現在完了は、動作はすでに終わっているのだけれども、その影響が現在も残っている、という意味です。つまり、日本語で言えば、「何々し終わった」とか「もはや何々していない」とか「(何々した結果として)何々している」という意味になります。

Dixī. 私は言い終わりました。

Vixit. 彼は生き終わりました。(もはや彼は生きていません)

Tē novī. 私はあなたを知っています。

vīvō, -ere, vixī 生きる。

noscō, -ere, novī 知る。

meminī (覚えている)とōdī (憎む)という動詞は、現在の形がなくて、完了の形で現在の意味をあらわします。

Tē meminī. 私はあなたを覚えています。

Mē odērunt. 彼らは私を憎んでいます。

## 8.4 過去完了

### 8.4.1 直説法・能動態・過去完了の動詞の構造

直説法・能動態・過去完了は、完了幹と、-erā- という時制符号によって示されます。つまり、動詞の直説法・能動態・過去完了の形は、

完了幹 + erā + 語尾

という構造を持っているということです。ただし、時制符号の -erā- は、語尾の変化に応じて -era- になる場合もあります。

直説法・能動態・過去完了の時制符号と語尾は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	-eram	-erāmus
二人称	-erās	-erātis
三人称	-erat	-erant

たとえば、amō という動詞の直説法・能動態・過去完了は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	amāveram	amāverāmus
二人称	amāverās	amāverātis
三人称	amāverat	amāverant

不規則動詞も、直説法・能動態・過去完了の時制符号と語尾については、普通の動詞とまったく同じです。たとえば、sum の直説法・能動態・過去完了は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	fueram	fuerāmus
二人称	fuerās	fuerātis
三人称	fuerat	fuerant

ところで、すでに気づいた人がいるかもしれませんが、直説法・能動態・過去完了の時制符号と語尾は、不規則動詞 sum の直説法・能動態・未完了過去と、まったく同じ変化をします。ですから、動詞の直説法・能動態・過去完了の形は、

完了幹 + sum の直説法・能動態・未完了過去

という構造を持っていると考えることも可能です。

## 8.4.2 過去完了の意味

過去完了（英語では past perfect または pluperfect）という時制は、過去のある時点から見て、すでに完了している動作をあらわします。つまり、日本語で言えば、「何々し終えていた」とか「何々しできていた」という意味を持つ時制です。

Nāvem fēcerant. 彼らは船を作り終えていました。

## 8.5 未来完了

## 8.5.1 直説法・能動態・未来完了の動詞の構造

直説法・能動態・未来完了は、完了幹と、-eri- という時制符号によって示されます。つまり、動詞の直説法・能動態・未来完了の形は、

完了幹 + eri + 語尾

という構造を持っているということです。ただし、時制符号の -eri- は、一人称・単数では -er- になります。

直説法・能動態・未来完了の時制符号と語尾は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	-erō	-erimus
二人称	-eris	-eritis
三人称	-erit	-erint

たとえば、amō という動詞の直説法・能動態・未来完了は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	amāverō	amāverimus
二人称	amāveris	amāveritis
三人称	amāverit	amāverint

不規則動詞も、直説法・能動態・未来完了の時制符号と語尾については、普通の動詞とまったく同じです。たとえば、sum の直説法・能動態・未来完了は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	fuerō	fuerimus
二人称	fueris	fueritis
三人称	fuerit	fuerint

ところで、第 8.4.1 項で、動詞の直説法・能動態・過去完了の形は、

完了幹 + sum の直説法・能動態・未完了過去

という構造を持っていると考えることも可能だ、と説明しましたが、それと同じように、動詞の直説法・能動態・未来完了の形は、

完了幹 + sum の直説法・能動態・未来

という構造を持っていると考えることも可能です。ただし、直説法・能動態・未来完了の時制符号と語尾の変化と、sum の直説法・能動態・未来の変化は、まったく同じではありません。三人称・複数が、前者は -erint ですが、後者は erunt です。

## 8.5.2 未来完了の意味

未来完了（英語では future perfect）という時制は、未来のある時点から見て、すでに完了している動作をあらわします。つまり、日本語で言えば、「何々し終えるだろう」とか「何々してしまうだろう」という意味を持つ時制です。

Nāvem fecerint. 彼らは船を作り終えるでしょう。



## 第9章 動詞 III [ 受動態 ]

### 9.1 受動態の基礎

#### 9.1.1 態についての復習

第3.1節で説明したように、ラテン語の動詞を変化させる要因としては、人称、数、時制、態、法、という五つのものがあります。

態については、すでに第3.1.5項で説明しましたが、ここでもう一度復習しておきましょう。

動詞は、それがあらわしている動作に何らかの対象があるかないかという観点から、二つのグループのどちらかに分類することができます。対象を持つ動作をあらわす動詞は「他動詞」(英語では transitive verb) と呼ばれ、対象を持たない動作をあらわす動詞は「自動詞」(英語では intransitive verb) と呼ばれます。

述語動詞として他動詞を使って文を作る場合には、「A が B を V する」というように、他動詞があらわしている動作の主体を主語にすることもできますし、「B が A によって V される」というように、動作の対象を主語にすることもできます。

他動詞があらわしている動作と主語との関係は、「態」(英語では voice) と呼ばれます。「A が B を V する」という態は「能動態」(英語では active voice) と呼ばれ、「B が A によって V される」という態は「受動態」(英語では passive voice) と呼ばれます。

この章では、直説法・受動態の動詞について説明したいと思います。

#### 9.1.2 受動態の現在と未完了過去と未来の動詞の構造

受動態の動詞の構造は、時制が現在または未完了過去または未来の場合と、完了または過去完了または未来完了の場合とで、大きく違っています。そこで、この節では前者について説明して、後者については次の節で説明することにしたと思います。

受動態の現在と未完了過去と未来の動詞は、

現在幹 + 時制符号 + 受動態の語尾

という構造を持っています。ただし、直説法・受動態・現在は、時制符号の不在、つまり現在幹の直後に受動態の語尾を連結することによって示されます。

直説法の未完了過去と未来のそれぞれを示す時制符号は、能動態の場合と同じです。つまり、直説法の未完了過去を示す時制符号は -bā- で、直説法の未来を示す時制符号は -bi- または -ē- です。

#### 9.1.3 受動態の語尾

受動態の語尾は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	-r	-mur
二人称	-ris	-mini
三人称	-tur	-ntur

受動態・二人称・単数の語尾としては、-ris のほかに、まれに -re というものが使われることもあります。

#### 9.1.4 第一変化動詞の直説法・受動態

amō という第一変化動詞の直説法・受動態は、時制と人称と数に応じて次のように変化します。

		現在	未完了過去	未来
単数	一人称	amor	amābar	amābor
	二人称	amāris	amābāris	amāberis
	三人称	amātur	amābātur	amābitur
複数	一人称	amāmur	amābāmur	amābimur
	二人称	amāmini	amābāmini	amābimini
	三人称	amantur	amābantur	amābuntur

直説法・受動態・現在・一人称・単数は、現在幹に -r を接続するのではなくて、直説法・能動態・現在・一人称・単数の末尾にある *ō* を短母音にしたものに -r を接続します。ですから、*amō* の場合、*amār* ではなくて *amor* になります。このことは、第一変化動詞だけではなくて、ほかのグループの動詞も同様です。

#### 9.1.5 第二変化動詞の直説法・受動態

*habeō* という第二変化動詞の直説法・受動態は、時制と人称と数に応じて次のように変化します。

		現在	未完了過去	未来
単数	一人称	<i>habeor</i>	<i>habēbar</i>	<i>habēbor</i>
	二人称	<i>habēris</i>	<i>habēbāris</i>	<i>habēberis</i>
	三人称	<i>habētur</i>	<i>habēbātur</i>	<i>habēbitur</i>
複数	一人称	<i>habēmur</i>	<i>habēbāmur</i>	<i>habēbimur</i>
	二人称	<i>habēminī</i>	<i>habēbāminī</i>	<i>habēbiminī</i>
	三人称	<i>habentur</i>	<i>habēbantur</i>	<i>habēbuntur</i>

#### 9.1.6 第三 a 変化動詞の直説法・受動態

*regō* という第三 a 変化動詞の直説法・受動態は、時制と人称と数に応じて次のように変化します。

		現在	未完了過去	未来
単数	一人称	<i>regor</i>	<i>regēbar</i>	<i>regar</i>
	二人称	<i>regeris</i>	<i>regēbāris</i>	<i>regēris</i>
	三人称	<i>regitur</i>	<i>regēbātur</i>	<i>regētur</i>
複数	一人称	<i>regimur</i>	<i>regēbāmur</i>	<i>regēmur</i>
	二人称	<i>regiminī</i>	<i>regēbāminī</i>	<i>regēminī</i>
	三人称	<i>reguntur</i>	<i>regēbantur</i>	<i>regentur</i>

#### 9.1.7 第三 b 変化動詞の直説法・受動態

*capiō* という第三 b 変化動詞の直説法・受動態は、時制と人称と数に応じて次のように変化します。

		現在	未完了過去	未来
単数	一人称	<i>capior</i>	<i>capiēbar</i>	<i>capiar</i>
	二人称	<i>caperis</i>	<i>capiēbāris</i>	<i>capiēris</i>
	三人称	<i>capitur</i>	<i>capiēbātur</i>	<i>capiētur</i>
複数	一人称	<i>capimur</i>	<i>capiēbāmur</i>	<i>capiēmur</i>
	二人称	<i>capiminī</i>	<i>capiēbāminī</i>	<i>capiēminī</i>
	三人称	<i>capientur</i>	<i>capiēbantur</i>	<i>capientur</i>

#### 9.1.8 第四変化動詞の直説法・受動態

*audiō* という第四変化動詞の直説法・受動態は、時制と人称と数に応じて次のように変化します。

		現在	未完了過去	未来
単数	一人称	<i>audior</i>	<i>audiēbar</i>	<i>audiar</i>
	二人称	<i>audīris</i>	<i>audiēbāris</i>	<i>audiēris</i>
	三人称	<i>audītur</i>	<i>audiēbātur</i>	<i>audiētur</i>
複数	一人称	<i>audīmur</i>	<i>audiēbāmur</i>	<i>audiēmur</i>
	二人称	<i>audīminī</i>	<i>audiēbāminī</i>	<i>audiēminī</i>
	三人称	<i>audiuntur</i>	<i>audiēbantur</i>	<i>audientur</i>

## 9.1.9 ferō の直説法・受動態

ferō という不規則動詞の直説法・受動態は、時制と数と人称に応じて次のように変化します。

		現在	未完了過去	未来
単数	一人称	feror	ferēbar	ferar
	二人称	ferris	ferēbāris	ferēris
	三人称	fertur	ferēbātur	ferētur
複数	一人称	ferimur	ferēbāmur	ferēmur
	二人称	feriminī	ferēbāminī	ferēminī
	三人称	feruntur	ferēbantur	ferentur

## 9.1.10 行為者

受動態の動詞があらわしている動作を実行する主体となっているものは、「行為者」(英語では agent)と呼ばれます(「動作主」と呼ばれることもあります)。日本語では、行為者は、「...によって」「...に」「...から」などの表現によって示されます。

ラテン語で行為者を示す方法は、行為者が生物なのか無生物なのかということによって違います。

行為者が生物(人間、動物、神など)の場合は、それをあらわす名詞の奪格形の前に *ā* または *ab* という前置詞を置くことによって、それが行為者だということを示します。

*Māter ā patre amātur.* 母は父に愛されています。

行為者が無生物の場合は、名詞の奪格形だけで、それが行為者だということを示します。

*Problēma tempore solvitur.* 問題は時間によって解決されます。

**problēma**, -atis, *n.* 問題。  
**solvō**, -ere, solvī 解く、解決する。

## 9.1.11 命令法・受動態・現在

誰かに向かって「何々されなさい」と命令する命令文を作りたいときは、その動作をあらわす動詞を命令法・受動態・現在・二人称の形にする必要があります。

命令法・受動態・現在の形としては、直説法・受動態・現在・二人称と同じ形が使われます。ただし、単数の語尾としては、-ris ではなくて -re が使われます。ですから、動詞の命令法・受動態・現在・単数は、その不定詞の能動態・現在と同じ形になります。

*amō*, *habeō*, *regō*, *capiō*, *audiō*, *ferō* の命令法・受動態・現在・二人称は、次の表のような形になります。

	単数	複数
<b>amō</b>	amāre	amāminī
<b>habeō</b>	habēre	habēminī
<b>regō</b>	regere	regiminī
<b>capiō</b>	capere	capiminī
<b>audiō</b>	audire	audiminī
<b>ferō</b>	ferre	feriminī

*Amāre ā dīs.* 神々に愛されなさい。

## 9.1.12 命令法・受動態・未来

命令法・受動態にも、命令法・能動態と同じように、現在だけではなくて未来があります。ただし、命令法・受動態・未来・二人称は、単数だけで、複数はありません。

命令法・受動態・未来の二人称・単数は、現在幹に -tor を連結した形です。ただし、第三変化動詞は、現在幹の末尾にある e を i に変える必要があります。

命令法・受動態・未来にも、命令法・能動態・未来と同じように、二人称だけではなくて三人称があります。

命令法・受動態・未来の三人称・単数は、二人称・単数と同じ形で、三人称・複数は、次のような方法で作ります。

- 第一変化動詞と第二変化動詞は、現在幹に *-ntor* を連結する。ただし、現在幹の末尾にある長母音を短母音にする。
- 第三 a 変化動詞は、現在幹に *-untor* を連結する。ただし、現在幹の末尾にある *e* を取り除く。
- 第三 b 変化動詞は、現在幹に *-untor* を連結する。ただし、現在幹の末尾にある *e* を *i* に変える。
- 第四変化動詞は、現在幹に *-untor* を連結する。ただし、現在幹の末尾にある *i* を *i* に変える。

*amō*、*habeō*、*regō*、*capiō*、*audiō*、*ferō* の命令法・受動態・未来は、次の表のような形になります。

	二人称	三人称	
	単数	単数	複数
<b>amō</b>	<i>amātor</i>	<i>amātor</i>	<i>amantor</i>
<b>habeō</b>	<i>habētor</i>	<i>habētor</i>	<i>habentor</i>
<b>regō</b>	<i>regitor</i>	<i>regitor</i>	<i>reguntor</i>
<b>capiō</b>	<i>capitor</i>	<i>capitor</i>	<i>capiuntor</i>
<b>audiō</b>	<i>auditor</i>	<i>auditor</i>	<i>audiuntor</i>
<b>ferō</b>	<i>fertor</i>	<i>fertor</i>	<i>feruntor</i>

## 9.2 受動態の完了と過去完了と未来完了

### 9.2.1 受動態の動詞の構造と完了分詞

前の節で述べたように、受動態の動詞の構造は、時制が現在または未完了過去または未来の場合と、完了または過去完了または未来完了の場合とで、大きく違っています。前者については前の節で説明しましたので、この節では後者について説明したいと思います。

受動態の完了と過去完了と未来完了では、「完了分詞」と呼ばれる動詞の形が使われます。ですから、受動態の完了と過去完了と未来完了の動詞の構造について理解するためには、完了分詞というのがどのような形なのかということについて知っている必要があります。

### 9.2.2 完了分詞の作り方

第 3.1.10 項で説明したように、動詞を形容詞として使いたいときは、通常、その動詞を、「分詞」(英語では *participle*) と呼ばれる形に変化させます。分詞は、態、時制、性、数、格に応じて変化します。

分詞の受動態・完了の形は、「完了分詞」(英語では *perfect participle*) と呼ばれます(「完了受動分詞」(英語では *perfect passive participle*) と呼ばれることもあります)。つまり、完了分詞というのは、「何々された(ところの)」という意味を持つ形容詞として動詞が使われるときの形のことです。

現在幹から完了幹を導き出すことのできる明確で単純な規則が存在しないのと同じように、現在幹から完了分詞を導き出すことのできる明確で単純な規則も存在しません。ですから、完了分詞も、基本的には動詞ごとに覚える必要があります。ただし、現在幹から完了幹を作るという変化にいくつかのパターンがあったのと同じように、現在幹から完了分詞を作るという変化にもいくつかのパターンがあります。

現在幹から完了分詞の男性・単数・主格が作られるパターンとしては、次のようなものがあります。

- 現在幹の末尾に *-tus* を連結する。第一変化動詞と第四変化動詞の大多数は、このパターン。
 

<i>amō</i> (愛する)	→	<i>amātus</i>
<i>audiō</i> (聞く)	→	<i>auditus</i>
- 現在幹の末尾から母音を除去したのちに *-itus* を連結する。第二変化動詞の多くは、このパターン。
 

<i>habeō</i> (持つ)	→	<i>habitus</i>
-------------------	---	----------------

- それらのパターン以外は不規則。ただし、大多数は末尾が -tus になる。

veniō (来る) → ventus  
 faciō (作る) → factus  
 agō (導く) → actus  
 dō (与える) → dātus

末尾が -sus になるものもある。

videō (見る) → vīsus  
 sentiō (感じる) → sensus  
 mittō (送る) → missus  
 claudō (閉じる) → clausus

### 9.2.3 完了分詞の変化

性と数と格に応じた完了分詞の変化のパターンは、第一第二変化形容詞と同じです。たとえば、amō の完了分詞は、性と数と格に応じて次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	amātus	amāta	amātum
	属格	amātī	amātae	amātī
	与格	amātō	amātae	amātō
	対格	amātum	amātam	amātum
	奪格	amātō	amātā	amātō
	呼格	amāte	amāta	amātum
複数	主格	amātī	amātae	amāta
	属格	amātōrum	amātārum	amātōrum
	与格	amātīs	amātīs	amātīs
	対格	amātōs	amātās	amāta
	奪格	amātīs	amātīs	amātīs

### 9.2.4 完了分詞の形を辞書で調べる方法

ある動詞の完了分詞がどのような形なのかということは、ラテン語の辞書でその動詞を調べることによって知ることができます。

ラテン語の辞書では、動詞の項目の中に、その動詞の「目的分詞」(英語では supine)と呼ばれるものの対格の形が書かれています。その形は、完了分詞の中性・単数・主格の形と同じですので、完了分詞のそれ以外の形も、その形から導き出すことができます。

たとえば、ラテン語の辞書で amō という動詞を調べると、

amō, -āre, -āvī, -ātum 愛する。

というように書かれています。この中にある -ātum という記述は、amō の目的分詞の対格が amātum だということを示しています。この形は完了分詞の中性・単数・主格の形と同じですから、amō の完了分詞は、amātus, -ta, -tum という形だということが分かります。

目的分詞については、第 12.5 節で説明することにしたいと思います。

### 9.2.5 受動態の完了と過去完了と未来完了の動詞の構造

受動態の完了と過去完了と未来完了の動詞は、

完了分詞 + sum

という構造を持っています。ただし、完了分詞の部分と sum の部分とは、合体しないで別々の単語のままになりますので、二つの単語が一つの動詞として機能することになります。

完了分詞の部分は、格は常に主格ですが、性と数に応じて変化します。動作の主体が「私」や「あなた」の場合も、それが男性なのか女性なのかということに応じて、完了分詞の性が変化します。

sum の部分は、法と時制と人称と数に応じて変化します。ただし、sum の部分の時制と動詞全体の時制とは同じではなくて、それらのあいだの関係は次の表のようになっています。

sum の部分の時制	動詞全体の時制
現在	完了
未完了過去	過去完了
未来	未来完了

たとえば、amō という動詞の直説法・受動態・完了は、人称と数と性に応じて次のように変化します。

	男性	女性	中性
単数 一人称	amātus sum	amāta sum	amātum sum
二人称	amātus es	amāta es	amātum es
三人称	amātus est	amāta est	amātum est
複数 一人称	amātī sumus	amātae sumus	amāta sumus
二人称	amātī estis	amātae estis	amāta estis
三人称	amātī sunt	amātae sunt	amāta sunt

amō の直説法・受動態・過去完了は、人称と数と性に応じて次のように変化します。

	男性	女性	中性
単数 一人称	amātus eram	amāta eram	amātum eram
二人称	amātus erās	amāta erās	amātum erās
三人称	amātus erat	amāta erat	amātum erat
複数 一人称	amātī erāmus	amātae erāmus	amāta erāmus
二人称	amātī erātis	amātae erātis	amāta erātis
三人称	amātī erant	amātae erant	amāta erant

amō の直説法・受動態・未来完了は、人称と数と性に応じて次のように変化します。

	男性	女性	中性
単数 一人称	amātus erō	amāta erō	amātum erō
二人称	amātus eris	amāta eris	amātum eris
三人称	amātus erit	amāta erit	amātum erit
複数 一人称	amātī erimus	amātae erimus	amāta erimus
二人称	amātī eritis	amātae eritis	amāta eritis
三人称	amātī erunt	amātae erunt	amāta erunt

ユリウス・カエサル (Jūlius Caesar) は、紀元前 49 年、ポンペイウス (Pompēius) を倒すことを決意してルビコン川 (Rubicōn) を渡りました。そのときにカエサルは、

*Ālea jacta est.*

と語ったと伝えられています。ālea は「賽」(さいころ)を意味する女性名詞で、jacta est は「投げる」を意味する jaciō という動詞の直説法・受動態・完了・三人称・単数・女性ですので、この言葉は、

賽は投げられた。

という意味だと解釈することができます。

カエサルの言葉では投げられたものが 1 個の賽ですので、完了分詞も jacta という単数形になっていますが、もしも投げられたものが 2 個以上の賽だったとするならば、

*Āleae jactae sunt.*

というように、完了分詞も jactae という複数形になります。さらに、もしも投げられたものが賽ではなくて 1 個の石だったとするならば、石を意味する lapis は男性名詞ですから、

*Lapis jactus est.*

というように、完了分詞も男性形になります。

### 9.3 形式受動態動詞

#### 9.3.1 形式受動態動詞の基礎

ラテン語には、能動態の形がなく、受動態の形で能動態の意味をあらわす、という奇妙な動詞が存在しています。そのような動詞は、「形式受動態動詞」(英語では deponent verb)と呼ばれます。形式受動態動詞は、「デポネント動詞」、「形式所相動詞」、「能動態欠如動詞」、「能相欠如動詞」などと呼ばれることもあります。

たとえば、mīror (驚く) という形式受動態動詞は、次のように、受動態の形で能動態の意味をあらわします。

Mīror.	私は驚いています。
Mīrātur.	彼は驚いています。
Mīrābantur.	彼らは驚いていました。
Mīrātae sunt.	彼女たちは驚きました。
Mīrāre.	驚きなさい。

#### 9.3.2 形式受動態動詞の変化のグループ

形式受動態動詞も、普通の動詞と同じように、その変化のパターンによって、第一変化動詞、第二変化動詞、第三変化動詞、第四変化動詞という四つのグループのいずれかに分類されます。

それぞれのグループに所属する形式受動態動詞は、自分と同じグループに所属している普通の動詞の受動態と同じパターンで変化します。たとえば、第一変化動詞のグループに所属している形式受動態動詞は、普通の第一変化動詞の受動態と同じパターンで変化します。

形式受動態動詞も、普通の動詞と同じように、その不定詞の受動態・現在の末尾に着目することによって、どのグループに分類されるものなのかということを知ることができます。それぞれのグループに所属している形式受動態動詞の不定詞の受動態・現在は、次のような末尾を持っています。

第一変化動詞	-ārī
第二変化動詞	-ērī
第三変化動詞	-ī
第四変化動詞	-īrī

たとえば、mīror (驚く) という動詞は、その不定詞の受動態・現在が mīrārī ですから、第一変化動詞に分類されることになります。

第三変化動詞に所属している形式受動態動詞は、普通の第三変化動詞と同じように、直説法・受動態・現在・一人称・単数の末尾が -ior になるかならないかということによって、

第三 a 変化動詞	(-ior にならないもの)
第三 b 変化動詞	(-ior になるもの)

という二つのグループのどちらかに分類することができます。

たとえば、sequor (追う) は第三 a 変化動詞に分類される形式受動態動詞で、morior (死ぬ) は第三 b 変化動詞に分類される形式受動態動詞です。

#### 9.3.3 辞書に書かれている形式受動態動詞の項目

ラテン語の辞書では、動詞の項目の見出しとして、それが普通の動詞ならば、その動詞の直説法・能動態・現在・一人称・単数の形が掲げられているのですが、形式受動態動詞の場合、能動態の形というものはありませんので、その項目の見出しとしては、直説法・受動態・現在・一人称・単数の形が掲げられています。

ラテン語の辞書に書かれている形式受動態動詞の項目は、次のような記述から構成されています(ただし、辞書ごとに相違がありますので、すべての辞書がこのとおりになっているわけではありません)。

(1) 見出し。直説法・受動態・現在・一人称・単数。「私は何々する」の形。

- (2) 不定詞の受動態・現在の末尾。「何々すること」の形。この形によって変化のグループと現在幹が分かります。
- (3) 完了分詞の男性・単数・主格の末尾と *sum*、つまり、直説法・受動態・完了・一人称・単数・男性。「私(男性)は何々した」の形。
- (4) 意味。

たとえば、辞書の *mīror* の項目は、  
*mīror*, -ārī, -ātus *sum* 驚く。

というように書かれています。この記述から、*mīror* について、次のことが分かります。

直説法・受動態・現在・一人称・単数	<i>mīror</i>
不定詞の受動態・現在	<i>mīrārī</i>
直説法・受動態・完了・一人称・単数・男性	<i>mīrātus sum</i>
意味	驚く

### 9.3.4 対格以外の格が目的語として使われる形式受動態動詞

形式受動態動詞には、自動詞も他動詞もあります。他動詞の形式受動態動詞を述語とする文には、目的語を置くことができます。

他動詞の形式受動態動詞の中には、目的語として奪格や属格が使われるものがあります。

目的語として奪格が使われる形式受動態動詞としては、*ūtor* (使う)、*fungor* (実行する)、*fruor* (享受する) などがあります。

*Rēgulā ūtor.* 私は定期を使っています。

*rēgula*, -ae, *f.* 定期。

目的語として属格が使われる形式受動態動詞としては、*oblīviscor* (忘れる)、*reminiscor* (思い出す)、*misereor* (あわれむ) などがあります。ただし、これらの動詞は、目的語として対格を使うことも可能です。

### 9.3.5 半形式受動態動詞

ラテン語には、普通の動詞のようでもあり形式受動態動詞のようでもある、「半形式受動態動詞」(英語では *semi-deponent verb*) と呼ばれる動詞が存在しています。

半形式受動態動詞は、時制が現在と未完了過去と未来の場合は、普通の動詞と同じように能動態の形で能動態の意味をあらわすのですが、時制が完了と過去完了と未来完了の場合は、形式受動態動詞と同じように受動態の形で能動態の意味をあらわします。

たとえば、*gaudeō* (喜ぶ) という半形式受動態動詞は、時制が現在ならば、

*Gaudeo.* 私は喜んでいます。

というように能動態の形で能動態の意味をあらわすのですが、時制が完了だと、

*Gāvīsus sum.* 私は喜びました。

というように受動態の形で能動態の意味をあらわします。

半形式受動態動詞の例としては、*gaudeō* のほかに、*audeō* (あえて...する)、*fidō* (信頼する)、*soleō* (...する習慣である) などがあります。

## 第10章 動詞IV [ 接続法 ]

### 10.1 接続法の基礎

#### 10.1.1 法についての復習

この章では、接続法について説明したいと思います。

接続法は、法のひとつです。「法とは何か」ということについてはすでに第3.1.6項で説明していますが、接続法の説明を始める前に、そのときに説明したことを復習しておくことにしましょう。



「法」(英語では mood) というのは、動詞があらわしている意味に対して、文の話し手の主観がどのように加わっているかということです。ラテン語には、直説法、接続法、命令法という三つの法があります。

「直説法」(英語では indicative mood) というのは話し手の主観をまじえないで事実を述べる法で、「接続法」(英語では subjunctive mood) というのは話し手の主観をまじえつつ事実を述べる法で、「命令法」(英語では imperative mood) というのは命令をあらわす法です。

### 10.1.2 接続法の時制

ラテン語には、現在、未完了過去、未来、完了、過去完了、未来完了という六つの時制があって、直説法にはそれらの時制がすべてそろっています。それに対して、接続法には、現在、未完了過去、完了、過去完了という四つの時制しかありません。三つの法のそれぞれが持っている時制を表にすると、次のようになります。

	現在	未完了過去	未来	完了	過去完了	未来完了
直説法						
接続法						
命令法						

### 10.1.3 接続法の用法

接続法の用法は、二種類に分類することができます。

一つは、接続法が持っている本来の機能を利用するという用法です。接続法が持っている本来の機能というのは、何らかの主観を意味に加えるというものです。

もう一つは、複文を作るという用法です。

「複文」(英語では complex sentence) というのは、文が内部に含まれている文のことです。文の内部に含まれている文は、「従属節」(英語では subordinate clause) と呼ばれます。それに対して、複文から従属節を取り除いた部分は、「主節」(英語では main clause) と呼ばれます。

複文では、多くの場合、従属節の述語動詞を接続法の形にすることが要求されます。それは、どちらかと言えば形式的な要求ですので、接続法が使われていても、何らかの主観がその意味に加わっているとは限りません。

接続法が持っている本来の機能を利用するという用法についてはこの章で説明しますが、複文を作るという接続法の用法については、第 11 章で説明することにしたいと思います。

## 10.2 接続法・現在

### 10.2.1 接続法・現在の動詞の構造

接続法・現在の動詞は、

現在幹 + 接続法・現在を示す時制符号 + 語尾

という構造を持っています。

接続法・現在を示す時制符号は、第一変化動詞とそれ以外とで違って、第一変化動詞は -ē- で、第一変化動詞以外は -ā- です。ただし、語尾の変化に応じて、-ē- は -e- に、-ā- は -a- になる場合もあります。

語尾は、直説法で使われるものと同じです。能動態は能動態の語尾(第 3.2.3 項参照)、受動態は受動態の語尾(第 9.1.3 項参照)を使います。

### 10.2.2 接続法・能動態・現在の変化

第一変化動詞の amō、第二変化動詞の habeō、第三 a 変化動詞の regō、第三 b 変化動詞の capiō、第四変化動詞の audiō の接続法・能動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>amō</b>	amem	amēs	amet	amēmus	amētis	ament
<b>habeō</b>	habeam	habeās	habeat	habeāmus	habeātis	habeant
<b>regō</b>	regam	regās	regat	regāmus	regātis	regant
<b>capiō</b>	capiam	capiās	capiat	capiāmus	capiātis	capiant
<b>audiō</b>	audiam	audiās	audiat	audiāmus	audiātis	audiant

### 10.2.3 接続法・受動態・現在の変化

第一変化動詞の amō、第二変化動詞の habeō、第三 a 変化動詞の regō、第三 b 変化動詞の capiō、第四変化動詞の audiō の接続法・受動態・現在は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>amō</b>	amer	amēris	amētur	amēmur	amēminī	amentur
<b>habeō</b>	habear	habeāris	habeātur	habeāmur	habeāminī	habeantur
<b>regō</b>	regar	regāris	regātur	regāmur	regāminī	regantur
<b>capiō</b>	capiar	capiāris	capiātur	capiāmur	capiāminī	capiantur
<b>audiō</b>	audiar	audiāris	audiātur	audiāmur	audiāminī	audiantur

### 10.2.4 不規則動詞の接続法・現在

不規則動詞の接続法・能動態・現在は、数と人称に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>sum</b>	sim	sīs	sit	sīmus	sītis	sint
<b>possum</b>	possim	possīs	possit	possīmus	possītis	possint
<b>volō</b>	velim	velīs	velit	velīmus	velītis	velint
<b>nōlō</b>	nōlim	nōlīs	nōlit	nōlīmus	nōlītis	nōlint
<b>mālō</b>	mālim	mālīs	mālit	mālīmus	mālītis	mālint
<b>eō</b>	eam	eās	eat	eāmus	eātis	eant
<b>ferō</b>	feram	ferās	ferat	ferāmus	ferātis	ferant
<b>fiō</b>	fiam	fiās	fiat	fiāmus	fiātis	fiant
<b>dō</b>	dem	dēs	det	dēmus	dētis	dent
<b>edō</b>	edam	edās	edat	edāmus	edātis	edant

ferō と dō の接続法・受動態・現在は、数と人称に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>ferō</b>	ferar	ferāris	ferātur	ferāmur	ferāminī	ferantur
<b>dō</b>	—	dēris	dētur	dēmur	dēminī	dentur

### 10.2.5 接続法・現在の意味の分類

接続法・現在が持っている意味は、次のように分類することができます。

- 勸奨
- 命令
- 譲歩
- 願望
- 可能性
- 懷疑

## 10.2.6 接続法・現在の意味 I [ 勧奨 ]

接続法・現在・一人称・複数は、「勧奨」と呼ばれる意味を持っています。勧奨というのは、「(私たちは) 何々しよう」という提案のことです。

Saltēmus. 踊りましょう。

saltō, -āre, -āvī, -ātum 踊る。

否定的な勧奨を述べたいときは、否定を意味する *nē* という副詞を使います (*nōn* ではないという点に注意してください)。

Nē hunc flōrem carpāmus. この花は摘まないでおきましょう。

## 10.2.7 接続法・現在の意味 II [ 命令 ]

接続法・現在には、「何々せよ」という命令の意味もあります。

命令法・現在には三人称がありませんので、三人称に対して命令する文を、命令法・現在を使って作ることはできません。ですから、三人称に対して命令する文を作りたいときは、接続法・現在・三人称が使われます。

Puerī hunc librum legant. 少年たちはこの本を読みなさい。

Lux fiat. 光あれ。

lux, lucis, *f.* 光。

接続法・現在を使って禁止(否定的な命令)を述べたいときは、勧奨の場合と同じように、*nē* を使います。

Nē puerī hunc librum legant. 少年たちはこの本を読んではいけません。

## 10.2.8 接続法・現在の意味 III [ 譲歩 ]

接続法・現在には、現在の事実についての譲歩という意味もあります。譲歩というのは、「何々かもしれないが、(たとえそうだとした) 何々だ」という言い回しの前半部分の意味、つまり、「何々かもしれないが」という部分の意味のことです。

Sit pauper, industrius est. 彼は貧乏かもしれませんが、勤勉です。

pauper, -eris 貧乏な。  
industrius, -a, -um, 勤勉な。

否定的な譲歩を述べたいときは、勧奨や命令の場合と同じように、*nē* を使います。

Nē sit dīves, industrius est. 彼は裕福ではないかもしれませんが、勤勉です。

dīves, -vitis 裕福な。

## 10.2.9 接続法・現在の意味 IV [ 願望 ]

接続法には、どの時制についても願望という意味があります。

願望の意味で使われる接続法は、その時制が、次の二つのことを示します。

- 実現する可能性のある願望なのか、それとも実現する可能性のない願望(つまり現実に反する願望)なのかということ。
- 現在または未来の事実に関する願望なのか、それとも過去の事実に関する願望なのかということ。

それぞれの時制の接続法はどのような願望を意味するのか、ということを表にすると、次のようになります。

	現在または未来の事実	過去の事実
実現する可能性のある願望	現在	完了
実現する可能性のない願望	未完了過去	過去完了

この表から分かるとおり、接続法・現在には、実現する可能性のある現在または未来の事実に関する願望という意味があります。

実現する可能性のある願望を述べる文には、しばしば、utinam、velim、mālim という単語が添えられます (mālim が使われるのは、「むしろ」という意味がある場合)。utinam は「何々でありますように」を意味する副詞で、velim、mālim は、それぞれ、volō、mālō の接続法・能動態・現在・一人称・単数の形です。

Mundus pācātus sit. 世界が平和でありますように。  
 Utinam uxōrem dūcere possim. 私が妻を娶ることができますように。  
 Velim valeās. あなたが健康でありますように。

**mundus**, ī, *m.* 世界。  
**pācātus**, -a, -um, 平和な。  
**uxor**, -ōris, *f.* 妻。  
**dūcō**, -ere, dūxī, ductum 引く、(妻を) 娶る。  
**valeō**, -ēre, -luī, -litum 健康である。

「何々でありませぬように」という否定的な願望を述べたいときは、utinam nē または nōlim を使います。nōlim は、nōlō の接続法・能動態・現在・一人称・単数の形です。

Utinam nē despēret. 彼が絶望しませんように。  
 Nōlim aegrōtēs. あなたが病気でありませんように。

**despērō**, -āre, -āvī, -ātum 絶望する。  
**aegrōtō**, -āre, -āvī, -ātum 病気である。

#### 10.2.10 接続法・現在の意味 V [可能性]

接続法・現在には、現在または未来についての可能性という意味、つまり「何々かもしれない」という意味もあります。

Errem. 私は間違っているかもしれません。

**errō**, -āre, -āvī, -ātum 間違う。

否定的な可能性を述べたいときは、nōn を使います (nē ではないという点に注意してください)。

Nōn errem. 私は間違っていないかもしれません。

#### 10.2.11 接続法・現在の意味 VI [懷疑]

接続法・現在・一人称には、現在または未来についての懷疑という意味、つまり、「何々なのだろうか」、「何々するべきだろうか」という意味もあります。この意味での接続法・現在は、疑問代名詞、疑問形容詞、疑問副詞のいずれかを伴う疑問文の中で使われます。

Quid dīcam? 私は何を言うべきなのだろうか。

否定的な懷疑を述べたいときは、可能性の場合と同じように、nōn を使います。

Quid nōn dīcam? 私は何を言うべきではないのだろうか。

### 10.3 接続法・未完了過去

#### 10.3.1 接続法・未完了過去の動詞の構造

未完了過去の動詞は、

現在幹 + 接続法・未完了過去を示す時制符号 + 語尾

という構造を持っています。接続法・未完了過去を示す時制符号は、-rē- です。ただし、語尾の変化に応じて、-rē- が -re- になる場合もあります。

動詞の現在幹に -re- を連結すると、その動詞の不定詞の能動態・現在と同じ形になります。ですから、接続法・未完了過去の動詞は、時制符号が -rē- になる場合もあるということを見れば、

不定詞の能動態・現在 + 語尾

という構造を持っていると考えることもできます。

## 10.3.2 接続法・能動態・未完了過去の変化

第一変化動詞の *amō*、第二変化動詞の *habeō*、第三 a 変化動詞の *regō*、第三 b 変化動詞の *capiō*、第四変化動詞の *audiō* の接続法・能動態・未完了過去は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>amō</b>	amārem	amārēs	amāret	amārēmus	amārētis	amārent
<b>habeō</b>	habērem	habērēs	habēret	habērēmus	habērētis	habērent
<b>regō</b>	regerem	regerēs	regeret	regerēmus	regerētis	regerent
<b>capiō</b>	caperem	caperēs	caperet	caperēmus	caperētis	caperent
<b>audiō</b>	audīrem	audīrēs	audīret	audīrēmus	audīrētis	audīrent

## 10.3.3 接続法・受動態・未完了過去の変化

第一変化動詞の *amō*、第二変化動詞の *habeō*、第三 a 変化動詞の *regō*、第三 b 変化動詞の *capiō*、第四変化動詞の *audiō* の接続法・受動態・未完了過去は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>amō</b>	amārer	amārēris	amārētur	amārēmur	amārēminī	amārentur
<b>habeō</b>	habērer	habērēris	habērētur	habērēmur	habērēminī	habērentur
<b>regō</b>	regerer	regerēris	regerētur	regerēmur	regerēminī	regerentur
<b>capiō</b>	caperer	caperēris	caperētur	caperēmur	caperēminī	caperentur
<b>audiō</b>	audīrer	audīrēris	audīrētur	audīrēmur	audīrēminī	audīrentur

## 10.3.4 不規則動詞の接続法・未完了過去

不規則動詞の接続法・能動態・未完了過去は、数と人称に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>sum</b>	essem	essēs	esset	essēmus	essētis	essent
<b>possum</b>	possem	possēs	posset	possēmus	possētis	possent
<b>volō</b>	vellem	vellēs	vellet	vellēmus	vellētis	vellent
<b>nōlō</b>	nōllem	nōllēs	nōllet	nōllēmus	nōllētis	nōllent
<b>mālō</b>	māllem	māllēs	māllet	māllēmus	māllētis	māllent
<b>eō</b>	īrem	īrēs	īret	īrēmus	īrētis	īrent
<b>ferō</b>	ferrem	ferrēs	ferret	ferrēmus	ferrētis	ferrent
<b>fīō</b>	fierem	fierēs	fieret	fierēmus	fierētis	fierent
<b>dō</b>	darem	darēs	daret	darēmus	darētis	darent
<b>edō</b>	ederem	ederēs	ederet	ederēmus	ederētis	ederent

*sum* の接続法・能動態・未完了過去には、次のような別の形が使われることもあります。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>sum</b>	forem	forēs	foret	forēmus	forētis	forent

*ferō* と *dō* の接続法・受動態・未完了過去は、数と人称に応じて次のように変化します。

	単数			複数		
	一人称	二人称	三人称	一人称	二人称	三人称
<b>ferō</b>	ferrer	ferrēris	ferrētur	ferrēmur	ferrēminī	ferrentur
<b>dō</b>	darer	darēris	darētur	darēmur	darēminī	darentur

### 10.3.5 接続法・未完了過去の意味の分類

接続法・未完了過去が持っている意味は、次のように分類することができます。

- 義務
- 願望
- 可能性
- 懐疑

### 10.3.6 接続法・未完了過去の意味 I [ 義務 ]

接続法・未完了過去は、過去において果たされなかった義務という意味、つまり、「何々するべきだった(けれどもしなかった)」という意味を持っています。

Id dicerem. 私はそれを言うべきでした。

過去において果たされなかった否定的な義務を述べたいときは、*nē* を使います。

Nē id dicerem. 私はそれを言うべきではありませんでした。

### 10.3.7 接続法・未完了過去の意味 II [ 願望 ]

接続法・未完了過去には、実現する可能性がない(つまり現実に反する)現在の事実に関する願望という意味もあります。

接続法・未完了過去を使って、実現する可能性がない事実に関する願望を述べる文には、かならず、*utinam*、*vellem*、*mällem*、*nöllem* のいずれかを添えないといけません。*vellem*、*mällem*、*nöllem* は、それぞれ、*volō*、*mälō*、*nölō* の接続法・能動態・未完了過去・一人称・単数の形です。

Utinam avis essem. 私が鳥だったらいいのになあ。

Vellem pater vīveret. 父が生きていればいいのになあ。

接続法・未完了過去を使って否定的な願望を述べたいときは、*utinam nē* または *nöllem* を使います。

Utinam nē timidus essem. 私が臆病でなかったらいいのになあ。

Nöllem pater pertinax esset. 父が頑固でなかったらいいのになあ。

**timidus**, -a, -um 臆病な。

**pertinax**, -ācis 頑固な。

### 10.3.8 接続法・未完了過去の意味 III [ 可能性 ]

接続法・未完了過去には、過去の可能性という意味もあります。ただし、この意味は、仮想的な人物を二人称とする歴史的な記述の中で使われる以外には、ほとんど使われません。

Ortum hērōis vidērēs. あなたは英雄の誕生を見たことでしょう。

**ortus**, -ūs, *m.* 誕生。

**hērō**, -ōis, *m.* 英雄。

過去の否定的な可能性を述べたいときは、*nōn* を使います。

Ortum hērōis nōn vidērēs. あなたは英雄の誕生を見なかったことでしょう。

### 10.3.9 接続法・未完了過去の意味 IV [ 懐疑 ]

疑問代名詞、疑問形容詞、疑問副詞のいずれかを伴う疑問文の中での接続法・未完了過去・一人称には、過去の懐疑という意味、つまり、「何々だったのだろうか」、「何々するべきだったのだろうか」という意味もあります。

Quid dicerem? 私は何を言うべきだったのだろうか。

過去の否定的な懷疑を述べたいときは、nōn を使います。

Quid nōn dicerem? 私は何を言うべきではなかったのだろうか。

## 10.4 接続法・完了

### 10.4.1 接続法・能動態・完了の動詞の構造

接続法・能動態・完了の動詞は、

完了幹 + 接続法・完了を示す時制符号 + 能動態の語尾

という構造を持っています。接続法・完了を示す時制符号は、-eri- です。

たとえば、amō という動詞の接続法・能動態・完了は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	amāverim	amāverimus
二人称	amāveris	amāveritis
三人称	amāverit	amāverint

接続法・完了を示す -eri- という時制符号は、直説法・未来完了を示す時制符号と同じものです。そのため、一人称単数を除いたすべての人称と数で、接続法・能動態・完了の動詞と直説法・能動態・未来完了の動詞とは、まったく同じ形になります。一人称単数だけは、使われる語尾が違いますので、違う形になります。

一人称単数の語尾として、接続法・能動態・完了では -m が使われるのに対して、直説法・能動態・未来完了では -ō が使われます。たとえば、amō の接続法・能動態・完了・一人称・単数と直説法・能動態・未来完了・一人称・単数のそれぞれは、

接続法・能動態・完了・一人称・単数	amāverim
直説法・能動態・未来完了・一人称・単数	amāverō

というように、違う形になります。

### 10.4.2 接続法・受動態・完了の動詞の構造

接続法・受動態の動詞の構造は、直説法・受動態がそうだったように、現在または未完了過去の場合と、完了または過去完了の場合とで、大きく違います。

接続法・受動態・完了の動詞は、

完了分詞 + sum の接続法・現在

という構造を持っています。直説法・受動態・完了の場合と同じように、完了分詞の部分と sum の部分とは、合体しないで別々の単語のままになります。

たとえば、amō という動詞の直説法・受動態・完了は、人称と数と性に応じて次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	一人称	amātus sim	amāta sim	amātum sim
	二人称	amātus sīs	amāta sīs	amātum sīs
	三人称	amātus sit	amāta sit	amātum sit
複数	一人称	amātī sīmus	amātae sīmus	amāta sīmus
	二人称	amātī sītis	amātae sītis	amāta sītis
	三人称	amātī sint	amātae sint	amāta sint

### 10.4.3 接続法・完了の意味の分類

接続法・完了が持っている意味は、次のように分類することができます。

- 禁止
- 譲歩
- 願望

- 可能性

#### 10.4.4 接続法・完了の意味I [ 禁止 ]

接続法・完了・二人称と *nē* を使うことによって、「何々するな」という禁止の意味を持つ文を作ることができます。

*Nē studium neglēxeris.* 勉強を怠るな。

*studium*, -ī, *n.* 熱意、勉強。  
*neglegō*, -ere, -ēxī, -ēctum 怠る。

二人称に対する禁止を意味する文を作る方法としては、接続法・完了を使う方法のほかに、第3.6.5項で説明した、*nōlō* の命令法・現在と不定詞を使う方法もあります。接続法・完了を使った禁止が強制的な口調になるのに対して、*nōlō* を使った禁止は儀礼的な口調になります。

#### 10.4.5 接続法・完了の意味II [ 譲歩 ]

接続法・現在と同じように、接続法・完了にも譲歩という意味があります。接続法・現在の譲歩が現在の事実に関するものなのに対して、接続法・完了の譲歩は過去の事実に関するものです。

*Fuerit pauper, industrius fuit.* 彼は貧乏だったかもしれませんが、勤勉でした。

#### 10.4.6 接続法・完了の意味III [ 願望 ]

第10.2.9項で説明したように、接続法には、どの時制についても願望という意味があります。接続法・完了にも、実現する可能性のある過去の事実に関する願望という意味があります。しかし、実現する可能性のある過去の事実に関して願望を表明したいという状況は、それほどしばしば訪れるものではありません。ですから、接続法・完了が願望の意味で使われる、ということはいったんめったにないと言っていいでしょう。

#### 10.4.7 接続法・完了の意味IV [ 可能性 ]

接続法・完了は、接続法・現在と同じように、「何々かもしれない」という、現在または未来の可能性という意味で使われることもあります。過去の可能性ではないという点に注意してください。

*Errāverim.* 私は間違っているかもしれません。

### 10.5 接続法・過去完了

#### 10.5.1 接続法・能動態・過去完了の動詞の構造

接続法・能動態・過去完了の動詞は、

完了幹 + 接続法・過去完了を示す時制符号 + 能動態の語尾

という構造を持っています。接続法・過去完了を示す時制符号は、-isse- です。ただし、語尾の変化に応じて、-isse- が -issē- になる場合もあります。

たとえば、*amō* という動詞の接続法・能動態・過去完了は、人称と数に応じて次のように変化します。

	単数	複数
一人称	<i>amāvissem</i>	<i>amāvissēmus</i>
二人称	<i>amāvissēs</i>	<i>amāvissētis</i>
三人称	<i>amāvisset</i>	<i>amāvissent</i>

動詞の完了幹に -isse- を連結すると、その動詞の不定詞の能動態・完了と同じ形になります（不定詞の能動態・完了については、第12.6.8項で説明します）。ですから、接続法・未完了過去の動詞は、時制符号が -issē- になる場合もあるということを見れば、

不定詞の能動態・完了 + 語尾

という構造を持っていると考えることもできます。



### 10.5.2 接続法・受動態・過去完了の動詞の構造

接続法・受動態・過去完了の動詞は、

完了分詞 + *sum* の接続法・未完了過去

という構造を持っています。

たとえば、*amō* という動詞の直説法・受動態・過去完了は、人称と数と性に依りて次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	一人称	<i>amātus essem</i>	<i>amāta essem</i>	<i>amātum essem</i>
	二人称	<i>amātus essēs</i>	<i>amāta essēs</i>	<i>amātum essēs</i>
	三人称	<i>amātus esset</i>	<i>amāta esset</i>	<i>amātum esset</i>
複数	一人称	<i>amātī essēmus</i>	<i>amātae essēmus</i>	<i>amāta essēmus</i>
	二人称	<i>amātī essētis</i>	<i>amātae essētis</i>	<i>amāta essētis</i>
	三人称	<i>amātī essent</i>	<i>amātae essent</i>	<i>amāta essent</i>

### 10.5.3 接続法・過去完了の意味の分類

接続法・過去完了が持っている意味は、次のように分類することができます。

- 義務
- 願望

#### 10.5.4 接続法・過去完了の意味 I [ 義務 ]

接続法・過去完了は、接続法・未完了過去と同じように、過去において果たされなかった義務という意味、つまり、「何々するべきだった(けれどもしなかった)」という意味を持っています。

*Id dixissem.* 私はそれを言うべきでした。

#### 10.5.5 接続法・過去完了の意味 II [ 願望 ]

接続法・過去完了には、実現する可能性がない(つまり現実に反する)過去の事実に関する願望という意味もあります。

接続法・過去完了を使って願望を述べる場合には、接続法・未完了過去を使って願望を述べる場合と同じように、かならず、*utinam*、*vellem*、*māllem*、*nōllem* のいずれかを添えないといけません。

*Utinam tē crēdidissem.* 私があなたを信用すればよかったのになあ。

*Vellem id scīvisēs.* あなたがそれを知っていればよかったのになあ。

*crēdō*, -ere, -didī, -ditum 信用する。

*sciō*, -īre, -īvī, -ītum 知っている。

接続法・過去完了を使って否定的な願望を述べたいときは、接続法・未完了過去の場合と同じように、*utinam nē* または *nōllem* を使います。

*Utinam nē tē crēdidissem.* 私があなたを信用しなければよかったのになあ。

*Nōllem id scīvisēs.* あなたがそれを知っていなければよかったのになあ。

## 第 11 章 複文

### 11.1 複文の基礎

#### 11.1.1 複文とは何か

この章では、「複文」(英語では *complex sentence*) と呼ばれる文を、ラテン語ではどのように作ればいいのか、ということについて説明したいと思います。

複文とは何か、という問題については、第 10.1.3 項でも簡単に説明しましたが、複文の作り方について本格的に説明するのに先立って、この問題について、もう少し丁寧に説明しておくこと

にしましょう。

複文というのは、文が内部に含まれている文のことです。

文は、主語、述語動詞、目的語、補語、修飾語という 5 種類の要素から構成されます。それらの要素のうちで、述語動詞を除いた 4 種類は、それ自体が文を含んでいてもかまいません。つまり、文を含んでいる主語や、文を含んでいる目的語や、文を含んでいる補語や、文を含んでいる修飾語を作ることができる、ということです。複文というのは、そのような、文を含んでいる要素を持っている文のことです。

たとえば、「鯨が哺乳類だということを私は知っています」という日本語の文の目的語は、「鯨が哺乳類だということを」です。この目的語は、「鯨が哺乳類だ」という文を含んでいます。ですから、「鯨が哺乳類だということを私は知っています」という文は、複文だということになります。

### 11.1.2 主節と従属節

複文を構成している、それ自体が文を含んでいる要素は、「従属節」(英語では subordinate clause)と呼ばれます。それに対して、複文からすべての従属節を取り除いた部分は、「主節」(英語では main clause)と呼ばれます。

たとえば、「鯨が哺乳類だということを私は知っています」という日本語の複文の場合、「鯨が哺乳類だということを」という目的語が従属節で、その部分を取り除いた、「私は知っています」という部分が主節です。

同じように、「私が飼っている猫は彼女が飼っている猫の子供です」という日本語の複文の場合、「私が飼っている」という修飾語と「彼女が飼っている」という修飾語が従属節で、それらの部分を取り除いた、「猫は猫の子供です」という部分が主節です。

### 11.1.3 時制の関連

第 10.1.3 項で説明したように、複文では、従属節の述語動詞として接続法の動詞が要求されることがあります。その場合、従属節の述語動詞の時制は、主節の述語動詞の時制と、主節と従属節とのあいだの時間的な前後関係によって決定されます。主節の時制と従属節の時制とのあいだに成り立っている規則は、「時制の関連」(英語では sequence of tenses)と呼ばれます(「時制の関連」、「時制の対応」、「時制の照応」などと呼ばれることもあります)。

主節の時制は、六つの時制のどれかになるわけですが、時制の関連は、それらの六つの時制のそれぞれについて細かく決まっているわけではありません。時制の関連で問題になるのは、六つの時制を二つのグループに分類したときに、主節の時制がどちらのグループに属しているかということです。

時制の関連で問題になる時制のグループのそれぞれについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そしてそれに分類される時制を示すと、次のようになります。

第一時制	primary tense	現在、未来、未来完了
第二時制	secondary tense	未完了過去、完了、過去完了

ただし、完了のうちで、意味が現在のもの(現在完了)は、第二時制ではなくて第一時制に分類されます。

複文の従属節の述語動詞として使われる接続法の動詞の時制は、主節の述語動詞の時制が第一時制なのか第二時制なのかということ、そして主節と従属節とのあいだの時間的な前後関係、という二つの要因によって、次のように決定されます。

	第一時制	第二時制
主節と同時またはそれよりも以後	現在	未完了過去
主節よりも以前	完了	過去完了

### 11.1.4 従属節の分類

従属節は、それが文の中でどのような品詞として働くかということに応じて、三つのグループに分類することができます。それぞれのグループについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そしてそれが文の中でどのような品詞として働くかということを示すと、次のようになります。

形容詞節	adjective clause	形容詞
副詞節	adverb clause	副詞
名詞節	noun clause	名詞

形容詞節と副詞節は修飾語になることができ、名詞節は主語、目的語、補語になることができます。

#### 11.1.5 文を従属節にするための単語

複文では、多くの場合、文を従属節にするための何らかの単語が使われます。

文を形容詞節にする場合には、「関係代名詞」(英語では relative pronoun) と呼ばれる代名詞が、または「関係副詞」(英語では relative adverb) と呼ばれる副詞が使われます。

文を副詞節にする場合には、「従属接続詞」(英語では subordinate conjunction) と呼ばれる接続詞が使われます。

文を名詞節にする場合には、従属接続詞または疑問副詞が使われます。ただし、文を従属節にするための特別な単語を使わずに、述語動詞を接続法にするだけで名詞節を作る場合もあります。

#### 11.1.6 副詞節の意味の分類

副詞節が持っている意味は、次の七つのグループに分類することができます。

- 時間 (...したのちに、...する前に、...するときに、.....)
- 条件 (...ならば)
- 譲歩 (...だけれども、...だとしても)
- 比較 (...よりも、...であればあるほど、あたかも...であるかのよう、.....)
- 理由 (...なので)
- 目的 (...するために、...するように)
- 結果 (...するほど)

## 11.2 形容詞節 I [ 関係代名詞 ]

### 11.2.1 関係代名詞の基礎

第 11.1 節で説明したように、文を形容詞節にするために使われる単語としては、関係代名詞と関係副詞の 2 種類があります。この節では関係代名詞について、そして次の節では関係副詞について説明したいと思います。

「関係代名詞」(英語では relative pronoun) というのは、形容詞節と主節とのあいだの関係を示すために、形容詞節の中で、主節の中にある名詞の代わりとして使われる代名詞のことです。

関係代名詞によって代用される、主節の中の名詞は、その関係代名詞の「先行詞」(英語では antecedent) と呼ばれます。形容詞節が修飾する対象となる名詞は、その形容詞節の中にある関係代名詞の先行詞です。

ラテン語では、関係代名詞として、quī という単語が使われます。これは、単語としては、第 6.4 節で紹介した疑問形容詞の quī と同じものです。つまり、quī は、疑問文を作るために使われた場合は「疑問形容詞」と呼ばれて、文を形容詞節にするために使われた場合は「関係代名詞」と呼ばれる、ということです。

### 11.2.2 quī の変化

quī は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	quī	quae	quod
	属格	cūjus	cūjus	cūjus
	与格	cuī	cuī	cuī
	対格	quem	quam	quod
	奪格	quō	quā	quō
複数	主格	quī	quae	quae
	属格	quōrum	quārum	quōrum
	与格	quibus	quibus	quibus
	対格	quōs	quās	quae
	奪格	quibus	quibus	quibus

この変化は、疑問形容詞として使われる場合も、関係代名詞として使われる場合も、まったく同じです。

関係代名詞の *quī* は、形容詞節の中で、先行詞の代わりにする代名詞として機能します。ですから、*quī* の性と数は、先行詞の性と数に一致させる必要があります。そして、*quī* の格は、形容詞節の中での役割によって決定されます。たとえば、*quī* が形容詞節の主語になっているならばそれを主格にしないといけませんし、奪格を支配する前置詞の後ろに置かれているならばそれを奪格にしないといけません。

### 11.2.3 関係代名詞による複文の作り方

それでは、関係代名詞を使った複文はどのように作ればいいのか、ということについて説明しましょう。

次のような二つの文があるとします。

- (1) *Puellam amō.* 私は少女を愛しています。  
 (2) *Puella mathēmaticam discit.* 少女は数学を学んでいます。

(1) 中にある *puellam* (少女を) という名詞を (2) で修飾する複文を作ってみましょう。まず、(2) を形容詞節にします。(2) 中にある *puella* という名詞を、性と数と格を一致させて *quī* に置き換えればいわけです。そうすると、次のような形容詞節ができます。

- (2)' *quae mathēmaticam discit*

次に、この形容詞節を (1) の中に埋め込みます。埋め込む場所は、原則としては先行詞の直後です。そうすると、次のような複文ができます。

- (1 + 2) *Puellam quae mathēmaticam discit amō.*  
 数学を学んでいる少女を私は愛しています。

同じようにして、(1) 中にある *puellam* (少女を) という名詞を、次のような文で修飾する複文を作ってみましょう。

- (3) *Rēx puellam ōdit.* 王は少女を憎んでいます。  
 (4) *Pater puellae mathēmaticus est.* 少女の父親は数学者です。  
 (5) *Ā puellā mathēmaticam discō.* 私は少女から数学を学んでいます。

*mathēmaticus*, -ī, *m.* 数学者。

まず、これらの文を形容詞節にします。これらの文の中にある *puella* という名詞を、性と数と格を一致させて *quī* に置き換えると、次のような形容詞節ができます。

- (3)' *rēx quam ōdit*  
 (4)' *pater cūjus mathēmaticus est*  
 (5)' *ā quā mathēmaticam discō*

(3)' と (4)' については、この語順のままでも間違いではないのですが、通常は次のように、関係代名詞が形容詞節の先頭になるように語順を入れ替えます。

(3)'' quam rēx ōdit

(4)'' cūjus pater mathēmaticus est

これらの形容詞節を (1) の中に埋め込むと、次のような複文ができます。

(1 + 3) Puellam quam rēx ōdit amō.

王が憎んでいる少女を私は愛しています。

(1 + 4) Puellam cūjus pater mathēmaticus est amō.

父親が数学者の少女を私は愛しています。

(1 + 5) Puellam ā quā mathēmaticam discō amō.

私が彼女から数学を学んでいる少女を私は愛しています。

形容詞節の前後には、次のようにコンマを置いてもかまいません。

(1 + 2)' Puellam, quae mathēmaticam discit, amō.

数学を学んでいる少女を私は愛しています。

このように、形容詞節の前後にコンマを置くことによって、文の構造を明確にすることができます。

#### 11.2.4 形容詞節の接続法

形容詞節の述語動詞としては、通常は直説法の動詞が使われます。

しかし、形容詞節の述語動詞として接続法の動詞が使われることもあります。接続法の動詞は、多くの場合、その形容詞節に何らかのニュアンスを加えます。加わるニュアンスとしては、たとえば次のようなものがあります。

- 種類。... するような。
- 目的。... するための。
- 程度。... するほどの。
- 理由・原因。... するので。
- 譲歩。... するとしても。

たとえば、次の文では、形容詞節の述語動詞として接続法の動詞が使われることによって、「... するような」という、種類のニュアンスが加わっています。

Hic liber quem puellae legant est. これは少女たちが読むような本です。

また、次の文では、形容詞節の述語動詞として接続法の動詞が使われることによって、「... するので」という、理由のニュアンスが加わっています。

Tē quae pulchra sīs amō. あなたが美しいので、私はあなたを愛しています。

#### 11.2.5 先行詞としての is

関係代名詞の先行詞が指示代名詞の is の場合、その is は、男性形ならば「人」、女性形ならば「女性」、中性形ならば「もの」または「こと」を意味します。

Is quī pecūniam amat infēlix est. 財貨を愛している人は不幸です。

Ea quae rīdet pulchra est. 笑っている女性は美しい。

Id quod facis amō. あなたが作るものを私は愛しています。

Id quod optō pax est. 私が望んでいることは平和です。

infēlix, -icis 不幸な。

pax, pācis, f. 平和。

関係代名詞の先行詞が is の主格または対格の場合、その is は省略することができます。

Quī nāvem faciunt amīcī mēī sunt. 船を作っている人々は私の友人たちです。

Quae mathēmaticam discit amō. 数学を学んでいる女性を私は愛しています。

### 11.2.6 独立した文の先頭に置かれた関係代名詞

関係代名詞は、独立した文の先頭に置かれることがあります。その場合の関係代名詞は、接続詞と代名詞とを合わせた役割を果たします。

Māter mathēmaticus est. Quae magister meus est.

母は数学者です。そして彼女は私の教師です。

この場合、二番目の文の先頭にある quae は、「そして」という意味を持つ接続詞としての役割と、māter という名詞の代わりをする代名詞としての役割を果たしています。

### 11.2.7 不定関係代名詞

関係代名詞としては、quī のほかに、「...する者は誰でも」とか「...するものは何でも」という意味を持つ形容詞節を作るために使われるものもあります。そのような関係代名詞は、「不定関係代名詞」(英語では indefinite relative pronoun) と呼ばれます。

たいていの場合、不定関係代名詞の先行詞は is で、その is は省略されるのが普通です。

不定関係代名詞には、quisquis と quicumque という二つのものがあって、どちらも同じ意味で使われます。

quisquis は、quis を二つ並べて一つの単語にしたもので、両方の quis が疑問代名詞の quis と同じように変化します。中性・単数の主格と対格の形としては、quidquid のほかに、quicquid という形が使われることもあります。

Quisquis mē amat amō. 私は、私を愛する者は誰でも愛します。

quicumque は、quī の末尾に -cumque という接尾辞を連結したもので、quī の部分が関係代名詞の quī と同じように変化します。

Quodcumque optās tibi dō.

私は、あなたが望んでいるものは何でもあなたに与えます。

## 11.3 形容詞節 II [ 関係副詞 ]

### 11.3.1 関係副詞の基礎

この節では、「関係副詞」(英語では relative adverb) と呼ばれる、文を形容詞節にするために使われる副詞について説明したいと思います。

関係副詞も、関係代名詞と同じように、形容詞節と主節とのあいだの関係を示すために、形容詞節の中で、主節の中にある名詞の代わりとして使われます。関係代名詞と関係副詞との相違点は、関係代名詞は形容詞節の中で名詞として働くのに対して、関係副詞は形容詞節の中で副詞として働くというところにあります。

関係代名詞の場合と同じように、関係副詞によって代用される、主節の中の名詞も、その関係副詞の「先行詞」(英語では antecedent) と呼ばれます。形容詞節が修飾する対象となる名詞は、その形容詞節の中にある関係副詞の先行詞です。

ラテン語には、関係副詞として次のようなものがあります。

quandō	そのときに...するところの
ubi	そこで...するところの
quō	そこへ...するところの
unde	そこから...するところの、その人から...するところの
quā	そこを...して...するところの、その方法で...するところの
cūr	その理由で...するところの
quam	その程度に...するところの

このように、関係副詞というのは、第 5.5.9 項で紹介した疑問副詞と、単語としては同じものです。つまり、それらの副詞は、疑問文を作るために使われた場合は「疑問副詞」と呼ばれて、文を形容詞節にするために使われた場合は「関係副詞」と呼ばれる、ということです。

関係代名詞と関係副詞は、総称して「関係詞」(英語では relative) と呼ばれます。



*occidō*, -ere, -cidī, -cāsūm (天体が)沈む。

副詞節の場合も、形容詞節の場合と同じように、文の構造を明確にするためにコンマを使うことができます。

*Pater vēnit, postquam sōl occidit.*

副詞節は、主節の前に置いてもかまいませんし、主節の途中に挿入してもかまいません。

*Postquam sōl occidit, pater vēnit.*

*Pater, postquam sōl occidit, vēnit.*

従属節の動作が起きるとすぐに主節の動作が起きるということを意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*cum primum*、*ubi primum*、*ut primum*、*simul atque*、*simulac* が使われます。

*Pater rediit cum primum mē vīdit.* 父は私を見るとすぐに帰りました。

#### 11.4.3 「...する前に」を意味する副詞節

従属節の動作の前に主節の動作が起きるということを意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*antequam* または *priusquam* が使われます (*ante quam*、*prius quam* というように、2語に分けて使われることもあります)。

*Pater vēnit antequam sōl occidit.* 父は太陽が沈む前に来ました。

「...する前に」という意味を持つ副詞節の述語動詞として、接続法の動詞が使われることもあります。その場合は、時間的な前後関係だけではなくて、懸念や意図などの意味が加わっていると考えることができます。

*Domum redire volō antequam sōl occidat.*

私は太陽が沈む前に家に帰りたいのです。

*Eī epistulam mīsī antequam eum salūtārem.*

私は彼を訪ねる前に彼に手紙を送りました。

*salūtō*, -āre, -āvī, -ātum 挨拶する、訪問する。

#### 11.4.4 同時性の分類

主節の動作と従属節の動作とが同時に起きるということ、つまり同時性は、さらに次の三つのグループに分類することができます。

- ...するときに
- ...しているあいだに
- ...するまで

#### 11.4.5 同時性 I [ ...するときに ]

従属節の動作が起きるときに主節の動作が起きるということを意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*cum*、*ubi*、*ut*、*quandō* が使われます。

*Filiae nōmen dedī cum nāta est.*

娘が生まれたときに私は彼女に名前を与えました。

*nāscor*, -scī, nātus sum 生まれる。

#### 11.4.6 同時性 II [ ...しているあいだに ]

従属節の動作が起きている時間的な範囲の中のどこかの時点で主節の動作が起きるということの意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*dum* が使われます。

このような意味を持つ副詞節を作る場合、主節の時制とは無関係に、副詞節の時制は現在になります。

*Pater vēnit dum dormiō.* 父は私が眠っているあいだに来ました。

「...しているあいだずっと」「...している限り」というような、従属節の動作が起きている時間的な範囲と主節の動作が起きている時間的な範囲とが一致するということの意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*dum*、*dōnec*、*quoad*、*quamdiū* が使われます。

このような意味を持つ副詞節を作る場合、副詞節の時制は、主節の時制と同じになります。



Pater labōrābat dum dormiēbam.

父は私が眠っているあいだずっと働いていました。

labōrō, -āre, -āvī, -ātum 働く。

#### 11.4.7 同時性 III [ ...するまで ]

従属節の動作が起きるまで主節の動作が続くということを意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、dum、dōnec、quoad が使われます。

Labōrāvī dum sōl occidit. 私は太陽が沈むまで働きました。

「...するまで」という意味を持つ副詞節の述語動詞として、接続法の動詞が使われることもあります。その場合、「...する前に」という意味を持つ副詞節の場合と同じように、時間的な前後関係だけではなくて、懸念や意図などの意味が加わっていると考えることができます。

Domum redire volō dum sōl occidat.

私は太陽が沈むまでに家に帰りたいのです。

Labōrāvī dum nāvem perficerem.

私は船を完成させるまで働きました。

perficiō, -ere, -fēcī, -fectum 完成させる。

### 11.5 副詞節 II [ 条件 ]

#### 11.5.1 条件を意味する副詞節の基礎

この節では、主節の動作が起きるための条件を意味する副詞節、つまり、「...ならば」を意味する副詞節について説明します。

条件を意味する副詞節を持つ文は、「条件文」(英語では conditional sentence) と呼ばれます。

条件を意味する副詞節は、通常、主節の前に置かれます。そのため、条件文を構成している従属節と主節のそれぞれについて、従属節のほうを「前文」(英語では protasis)、主節のほうを「後文」(英語では apodosis) と呼ぶこともあります。ただし、後文を前に置いて前文をうしろに置くことも可能です。

条件を意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、sī が使われます。

否定的な条件を意味する副詞節、つまり、「...ではないならば」を意味する副詞節を作りたいときは、sī と nōn を使うか、または、否定的な条件の意味を持つ nisi という従属接続詞を使います。

#### 11.5.2 条件文の分類

条件文は、次の三つのグループに分類することができます。

- 事実の条件文 (事実を述べるもの)
- 可能性の条件文 (可能性の薄いことが起きたと仮定して推測を述べるもの)
- 非事実の条件文 (事実と反する想像や願望を述べるもの)

#### 11.5.3 条件文 I [ 事実 ]

単なる事実として「...ならば...である」と述べる条件文は、従属節も主節も、述語動詞として直説法の動詞を使って作ります。

Sī uxor fēlix est, fēlix sum. 妻が幸福ならば私も幸福です。

#### 11.5.4 条件文 II [ 可能性 ]

可能性の薄いことが起きたと仮定して推測を述べる条件文、つまり、「もしも...ならば...だろう」と述べる条件文は、従属節も主節も、述語動詞として接続法の動詞を使って作ります。使われる時制は現在または完了で、どちらの時制を使っても意味は同じです。

Sī eam videat, eam amet. もしも彼が彼女を見たならば、彼は彼女を愛するでしょう。

### 11.5.5 条件文 III [ 非事実 ]

事実に反することを仮定して想像や願望を述べる条件文は、従属節も主節も、述語動詞として接続法の動詞を使って作ります。使われる時制は、現在の事実に反することを仮定するのか、それとも過去の事実に反することを仮定するのか、ということによって違います。

現在の事実に反することを仮定する場合は、従属節も主節も、未完了過去を使います。

*Sī filia vīveret, eam amārēs.*

もしも娘が生きていれば、あなたは彼女を愛しているでしょう。

過去の事実に反することを仮定する場合は、従属節も主節も、過去完了を使います。

*Sī mathēmaticam didicissem, id problēma solvere potuissem.*

もしも私が数学を学んでいたならば、私はその問題を解決することができていたでしょう。

## 11.6 副詞節 III [ 譲歩 ]

### 11.6.1 譲歩を意味する副詞節の基礎

この節では、譲歩を意味する副詞節、つまり、「...だけれども」とか「...だとしても」を意味する副詞節について説明します。

譲歩を意味する副詞節を持つ文は、「譲歩文」(英語では *concessive sentence*) と呼ばれます。

譲歩を意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*etsī*、*tametsī*、*etiāmsī*、*quamvīs*、*quamquam* などが使われます。ただし、譲歩の意味の違いに応じて、よく使われるものとそうでないものがあります。

譲歩を意味する副詞節を前に置いて、そのうしろに主節を置く場合、しばしば、譲歩の意味を明確にするために、*tamen* (しかし)、*at* (しかし)、*certē* (いずれにしても)、*nihilō minus* (それにもかかわらず) などの副詞が主節の中で使われます。

### 11.6.2 譲歩文の分類

譲歩文は、次の三つのグループに分類することができます。

- 事実の譲歩文 (事実についての譲歩を述べるもの)
- 可能性の譲歩文 (可能性の薄いことを仮定して、それについての譲歩を述べるもの)
- 非事実の譲歩文 (事実に反することを仮定して、それについての譲歩を述べるもの)

譲歩を意味する副詞節を作るための従属接続詞のそれぞれについて、よく使われるグループを表にすると、次のようになります。

事実    可能性    非事実

*etsī*

*tametsī*

*etiāmsī*

*quamvīs*

*quamquam*

この表の中の 印は、「この従属接続詞はこのグループでよく使われる」という意味です。印のないところは、「まったく使われない」という意味ではなくて、「まれにしか使われない」という意味です。

### 11.6.3 譲歩文 I [ 事実 ]

単なる事実として「...だけれども...である」と述べる譲歩文は、従属節も主節も、述語動詞として直説法の動詞を使って作ります。

*Etsī nocens es, tē amō.* あなたは罪人だけれども、私はあなたを愛しています。

*nocens*, *-entis*, *m.* 犯罪者、罪人。

### 11.6.4 譲歩文 II [ 可能性 ]

可能性の薄いことが起きたと仮定して推測を述べる譲歩文、つまり、「たとえ...だとしても...だろう」と述べる譲歩文は、従属節の述語動詞として接続法の動詞、主節の述語動詞として直説

法の動詞を使って作ります。

Quamvis nocens sis, te amabo.

たとえあなたが罪人だとしても、私はあなたを愛するでしょう。

### 11.6.5 譲歩文 III [ 非事実 ]

事実と反することを仮定して、それについての譲歩を述べる譲歩文は、従属節も主節も、述語動詞として接続法の動詞を使って作ります。

使われる時制は、非事実の条件文の場合と同じように、現在の事実と反することを仮定する場合は未完了過去、過去の事実と反することを仮定する場合は過去完了です。

Etiam si filia viveret, te non amaret.

たとえ娘が生きているとしても、彼女はあなたを愛さないでしょう。

Etiam si mathematicam didicissem, id problema solvere non potuissem.

たとえ私が数学を学んでいたとしても、私にはその問題を解決することはできなかったでしょう。

## 11.7 副詞節 IV [ 比較 ]

### 11.7.1 比較を意味する副詞節の基礎

この節では、比較を意味する副詞節、つまり、「...よりも」とか「...であればあるほど」とか「あたかも...であるかのように」などを意味する副詞節について説明します。

比較を意味する副詞節の述語動詞としては、その副詞節が述べていることが事実ならば、直説法の動詞が使われます。それに対して、「あたかも...であるかのように」という、想像にもとづく比較では、接続法が使われます。

### 11.7.2 比較級を使った比較

第 5.6.7 項で、形容詞の比較級を使った、

Jupiter major est quam Saturnus. 木星は土星よりも大きい。

という文を紹介しましたが、この文の中で使われている quam という単語は、副詞節を作るための従属接続詞です。ということは、

quam Saturnus

という部分は、実は副詞節だということになります。この副詞節には、本来は est という述語動詞があったのですが、主節の述語動詞と同じなので省略されているのです。

このように、何かと何かを比較する文では、主節と従属節とで述語動詞が同じ場合、従属節の述語動詞は省略されるのが普通です。

### 11.7.3 同等性

何かと何かとが同等だということを述べる文を作る場合には、接続詞として、形容詞や副詞の組み合わせが、主節と従属節の双方に置かれます。接続詞として使われる形容詞や副詞の組み合わせは、「相関詞」(英語では correlative)と呼ばれます。

相関詞としては、次のようなものがあります。

tot (totidem)...quot	...と同じだけ多くの
tantus...quantus	...と同じだけの量(大きさ)の
talis...qualis	...のような
idem...quid	...と同じ
tam...quam	...と同じほど、...と同様に
tantopere...quantopere	...と同じほど
totiens...quotiens	...するたびごとに
tamdiu...quamdium	...のあいだだけ
ita...ut	...のように

たとえば、tam...quam という相関詞を使うことによって、次のような文を作ることができます。

Tam pulchra es quam ea. あなたは彼女と同じくらい美しい。

古代ローマに、テレンティウス (Pūblius Terentius Āfer, 前 185 ごろ ~ 前 159) という人がいました。この人は、奴隷としてカルタゴからローマへ連れて来られたのですが、そののち文才が認められて解放され、喜劇作家になったと伝えられています。

テレンティウスが書いた『ポルミオー』(Phormiō) という喜劇の中には、「...と同じだけ多くの」という意味を持つ tot...quot という相関詞を使った、次のような言葉があります。

Quot hominēs, tot sententiae. 人間の数だけ意見がある。

sententia, -ae, f. 意見。

#### 11.7.4 比例

「...であればあるほど...である」という比例を意味する文を作りたいときは、次のように、相関詞と、形容詞または副詞の比較級または最上級とを組み合わせます。

- quō + 比較級 ... eō + 比較級
- quantō + 比較級 ... tantō + 比較級
- ut quisque + 最上級 ... ita + 最上級
- quam + 最上級 ... tam + 最上級

たとえば、quō...eō という相関詞を使うことによって、次のような文を作ることができます。

Quō vacātiō longior est, eō felīcior sum. 休暇が長ければ長いほど、私は幸福です。

vacātiō, -ōnis, f. 休暇。

#### 11.7.5 想像にもとづく比較

「あたかも...であるかのように」という、想像にもとづく比較を意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、quasi、tamquam、velut sī、ac sī、tamquam sī などが使われます。

想像にもとづく比較を意味する副詞節は、述語動詞として接続法の動詞を使って作ります。

Eum amat quasi māter ējus sit.

彼女はあたかも彼の母親であるかのように彼を愛しています。

### 11.8 副詞節 V [理由]

#### 11.8.1 理由を意味する副詞節の基礎

この節では、主節の動作が起きた理由を意味する副詞節、つまり、「...なので」を意味する副詞節について説明します。

理由を意味する副詞節の述語動詞としては、その副詞節が述べていることが客観的な事実ならば直説法の動詞が使われます。それに対して、主観的な理由を述べる場合や、主節の主語になっている他人の主張を理由として述べる場合は、接続法が使われます。

理由を意味する副詞節を持つ複文の主文では、しばしば、「それゆえに」を意味する、propterea、eō、ideō、idcirco などの副詞が使われます。

#### 11.8.2 客観的な理由

理由として客観的な事実を述べる副詞節を作る場合、従属接続詞としては quia、quod、quoniam、quandō、ut などが使われ、副詞節の述語動詞としては直説法の動詞が使われます。

Cōgitāre possum quia homō sum. 私は人間ですから、考えることができます。

#### 11.8.3 主観的な理由

主観的な理由を述べる副詞節を作る場合、従属接続詞としては cum が使われ、副詞節の述語動詞としては接続法の動詞が使われます。

Eum nōn crēdō cum mendax sit. 彼は嘘つきなので、私は彼を信用していません。

mendax, -ācis, m. 嘘つき。

## 11.8.4 他人が主張している理由

主節の主語になっている他人の主張を理由として述べる副詞節を作る場合、従属接続詞としては *quod* が使われ (まれに *quia* が使われることもあります)、副詞節の述語動詞としては接続法の動詞が使われます。

*Mē nōn crēdit quod mendax sim.*

彼は、私が嘘つきだからと言って、私を信用していません。

## 11.9 副詞節 VI [ 目的 ]

## 11.9.1 目的を意味する副詞節の基礎

この節では、主節の動作を実行する目的を意味する副詞節、つまり、「...するために」とか「...するように」を意味する副詞節について説明します。

目的を意味する副詞節の述語動詞としては、常に接続法が使われます。

目的を意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*ut*、*nē*、*quō* が使われます。*ut* は肯定的な目的を意味する副詞節、*nē* は否定的な目的を意味する副詞節、*quō* は「もっと...するように」を意味する副詞節を作るための従属接続詞です。

## 11.9.2 肯定的な目的

「...するために」とか「...するように」という、肯定的な目的を意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*ut* が使われます。

*Studeō ut vēritātem noscam.* 私は真理を知るために勉強しているのです。

*studeō*, -ēre, -duī 勉強する。

*vēritās*, -ātis, *f.* 真理。

## 11.9.3 否定的な目的

「...しないために」とか「...しないように」という、否定的な目的を意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*nē* が使われます。

*Discipulōs hortor nē cessent.* 生徒たちが怠けないように、私は彼らを激励します。

*discipulus*, -ī, *m.* 生徒。

*hortor*, -ārī, -ātus sum 激励する。

*cessō*, -āre, -āvī, -ātum 怠ける。

## 11.9.4 「もっと...するように」を意味する副詞節

*quō* という従属接続詞と、形容詞または副詞の比較級を使うことによって、「もっと...するように」という意味を持つ副詞節を作ることができます。

*Discipulōs hortor quō ēnixius studeant.*

生徒たちがもっと熱心に勉強するように、私は彼らを激励します。

*ēnixē* 熱心に。

## 11.10 副詞節 VII [ 結果 ]

## 11.10.1 結果を意味する副詞節の基礎

この節では、結果を意味する副詞節について説明します。

結果を意味する副詞節というのは、主節が述べていることの結果を述べることによって、主節が述べていることの結果を明確にする、という機能を果たしている副詞節のことです。つまり、「...するほど」という意味を持つ副詞節だということです。

結果を意味する副詞節の述語動詞としては、常に接続法が使われます。

## 11.10.2 結果を意味する副詞節の作り方

結果を意味する副詞節を作るための従属接続詞としては、*ut* が使われます。

*Adeō dolet ut lacrima mare faciat.* 涙が海を作るほど彼は悲しんでいます。

doleō, -ēre, doluī, dolitum 悲しむ。  
 lacrima, -ae, *f.* 涙。  
 mare, -is, *n.* 海。

この例文の中で使われている *adeō* という単語は、「そのように」とか「それほど」という意味を持っている副詞です。この例文のように、結果を意味する副詞節を持つ複文では、多くの場合、「そのように」とか「それほど」を意味する副詞や、「そのような」とか「それほど大きな」を意味する形容詞が主節の中で使われます。そのような副詞や形容詞としては、次のようなものがあります。

	品詞	修飾の対象	意味
<i>adeō</i>	副詞	動詞	そのように、それほど
<i>eō</i>	副詞	動詞	そのように、それほど
<i>ita</i>	副詞	動詞・形容詞	それほど
<i>tam</i>	副詞	副詞・形容詞	それほど
<i>is</i>	形容詞	名詞	そのような
<i>tālis</i>	形容詞	名詞	そのような
<i>tantus</i>	形容詞	名詞	それほど大きな
<i>tot</i>	形容詞	名詞	それほど多くの

否定的な結果を意味する副詞節、つまり、「...しないほど」という意味の副詞節は、*ut* と *nōn* を使って作ります。否定的な目的を意味する副詞節の場合とは違って、*nē* は使われません。

*Ita occupātus est ut dormire nōn possit.* 彼は、眠ることができないほど忙しい。

*occupātus*, -a, -um 忙しい。  
*dormiō*, -īre, īī, -ītum 眠る。

否定的な結果を意味する副詞節を持つ複文が、主節も否定的な場合、その副詞節は、*ut* と *nōn* を使って作ることもできますが、*quān* という従属接続詞を使って作ることもできます。

*quān* は、それ自体が否定的な意味を持っていますので、それを使った副詞節は、*nōn* なしで、「...しないほど」という意味を持つことになります。

*Hoc problēma tam difficile nōn est quān id solvere possim.*

この問題は、私に解決できないほど難しいものではありません。

### 11.10.3 事実としての結果を述べる副詞節

結果を意味する副詞節が、主節が述べていることの程度を明確にするという目的よりもむしろ、主節が述べていることの程度があまりにもはなはだしいので、事実としてこのような結果が起きる、と述べることを目的として使われることもあります。つまり、結果を意味する副詞節を持つ複文は、「...するほど...である」と解釈するよりもむしろ、「あまりにも...なので、...する」と解釈するほうが適切な場合もある、ということです。

*Ita terribilis fuit ut fugerem.* 彼があまりにも恐ろしかったので、私は逃げました。

*terribilis*, -is, -e 恐ろしい。

## 11.11 名詞節 I [ 目的と結果 ]

### 11.11.1 目的または結果を意味する名詞節の基礎

この節では、目的を意味する名詞節と結果を意味する名詞節について説明します。

目的を意味する副詞節については第 11.9 節で、結果を意味する副詞節については第 11.10 節で説明しましたが、実は、目的または結果を意味する副詞節と、目的または結果を意味する名詞節とは、ほとんど同じものだと考えることができます。ただ単に、従属節が主節の修飾語になっている場合は副詞節で、主節の主語または目的語になっている場合は名詞節というように、従属節が主節の中で果たしている役割の違いが品詞の違いとなって現れるというだけのことです。

## 11.11.2 目的を意味する名詞節

目的を意味する名詞節の作り方は、第 11.9 節で説明した、目的を意味する副詞節の作り方とまったく同じです。

目的を意味する名詞節を作るための従属接続詞としては、ut または nē が使われます。ut は肯定的な目的を意味する名詞節、nē は否定的な目的を意味する名詞節を作るための従属接続詞です。名詞節の述語動詞としては、常に接続法が使われます。

願望、要求、忠告、命令、努力、危惧などを意味する動詞は、「...するように」という目的を意味する名詞節を目的語にすることができます。

Ōrō ut mundus pācātus sit. 世界が平和でありますようにと私は願っています。  
Moneō nē id edās. あなたがそれを食べないようにと私は忠告します。

ōrō, -āre, -āvī, -ātum 願う。  
moneō, -ēre, monuī, monitum 忠告する。

危惧を意味する動詞の目的語として目的を意味する名詞節を使う場合、ut と nē の使い分けには注意が必要です。

Timeō ut eam amēs. あなたが彼女を愛さないのではないかと私は心配です。  
Timeō nē eam amēs. あなたが彼女を愛するのではないかと私は心配です。

timeō, -ēre, -muī 心配する。

一見すると、左のラテン語の文と右の日本語の文との対応が間違っているように見えますが、これは間違いではありません。なぜかと言うと、ut という従属接続詞には「...するように」という願望の意味があって、nē という従属接続詞には「...しないように」という願望の意味があるからです。

ut eam amēs と言っている「私」は、「あなたが彼女を愛しますように」と願っています。そして、それを timeō という動詞の目的語にすることによって、「そうならないのではないか」という心配を表明しているのです。つまり、「あなたが彼女を愛さないのではないか」と心配しているわけです。

同じように、nē eam amēs と言っている「私」は、「あなたが彼女を愛しませんように」と願っています。そして、それを timeō という動詞の目的語にすることによって、「そうならないのではないか」という心配を表明しているのです。つまり、「あなたが彼女を愛するのではないか」と心配しているわけです。

## 11.11.3 結果を意味する名詞節

結果を意味する名詞節の作り方も、第 11.10 節で説明した、結果を意味する副詞節の作り方とまったく同じです。

結果を意味する名詞節を作るための従属接続詞としては、ut が使われます。否定的な結果を意味する名詞節は、ut と nōn を使って作ります。名詞節の述語動詞としては、常に接続法が使われます。

「なる」とか「起こる」というような意味の動詞は、結果を意味する名詞節を主語にすることができます。

Accidit ut ibi essem.  
私がそこにいたということが起こりました(たまたま私はそこにいました)。

accidō, -ere, cidi 起こる。  
ibi そこに、そこで。

「成し遂げる」「引き起こす」「強いる」「許す」というような意味の動詞は、結果を意味する名詞節を目的語にすることができます。

Bellum efficit ut hominēs multī moriantur.  
戦争は、多くの人々が死ぬという結果を引き起こします。

bellum, -ī, n. 戦争。  
efficiō, -ere, fecī, -fectum 引き起こす。

## 11.12 名詞節 II [ 話法 ]

### 11.12.1 話法の基礎

発言や思考内容などを伝達する文を作る方法は、「話法」(英語では *narration*) と呼ばれます<sup>1</sup>。話法には、次の二つの種類があります。

- 直接話法 (英語では *direct narration*)
- 間接話法 (英語では *indirect narration*)

### 11.12.2 直接話法

直接話法というのは、発言や思考内容などをそのまま文の一部にするという話法です。たとえば、次の日本語の文は、直接話法の例です。

「私はあなたを愛しています」と彼は私に言っています。

この例のように、日本語の場合、直接話法の文を文字で書き記すときには、発言や思考内容などの部分をカギ括弧で囲むのが普通です。

ラテン語でも、直接話法の文を作る方法は、日本語と同じです。先ほどの日本語の文は、ラテン語では次のように言うことができます。

*Mē dicit, "Tē amō."*

この例のように、ラテン語では、日本語のカギ括弧に相当する記号として引用符が使われます。

### 11.12.3 間接話法の基礎

間接話法というのは、発言や思考内容などを話し手の視点から見た形に言い換えたものを文の一部にする、という話法です。たとえば、次の日本語の文は、間接話法の例です。

私を愛していると彼は私に言っています。

ラテン語の間接話法の文は、伝達される発言や思考内容などをあらわす文が、平叙文なのか、疑問文なのか、命令文なのか、ということによって作り方が違います。

### 11.12.4 平叙文の間接話法

平叙文によってあらわされる発言や思考内容などを間接話法で伝達したい場合は、その平叙文を、不定詞を使った名詞句に変えます。伝達される平叙文の主語は、不定詞の意味上の主語になりますので、それを対格に変える必要があります。伝達される平叙文が主格補語を持っている場合は、その主格補語も対格に変える必要があります。

例として、次の直接話法の文を間接話法に書き直してみましょう。

*Dicit, "Mathēmatica jūcunda est."* 「数学は楽しい」と彼は言っています。

*jūcundus, -a, -um* 楽しい。

伝達される平叙文の述語動詞は *est* で、主語は *mathēmatica* です。間接話法では、述語動詞は不定詞の *esse* に変わって、主語は対格の *mathēmaticam* に変わります。さらに、*jūcunda* という主格補語も対格の *jūcundam* に変わります。ですから、上の文を間接話法に書き直した結果は、次のようになります。

*Dicit mathēmaticam jūcundam esse.* 数学は楽しいと彼は言っています。

今度は、次の直接話法の文を間接話法に書き直してみましょう。

*Mihi dicit, "Tē amō."* 「私はあなたを愛しています」と彼は私に言っています。

この例文の場合、直接話法を間接話法に書き直すためには、伝達される文の人称を、話し手の視点から見たものに変更しないといけません。「彼」の発言の中の「私」は、話し手から見ると「彼」ですし、「彼」の発言の中の「あなた」は、話し手から見ると「私」です。また、この例文のように、伝達する文と伝達される平叙文とで主語が同じ場合、間接話法では、伝達される平叙文の主語として、再帰代名詞の対格を使います。ですから、上の文を間接話法に書き直した結果は、次のようになります。

<sup>1</sup>英語では、*speech* や *discourse* という単語も、話法という意味で使われます。



Mihi dicit sē mē amāre. 私を愛していると彼は私に言っています。

英語では、間接語法で平叙文を伝えたいとき、従属接続詞として *that* を使うことによって、その平叙文の意味を持つ名詞節を作ります。たとえば、上の例文は、英語では次のように言います。

He tells me that he loves me. 私を愛していると彼は私に言っています。

ラテン語でも、間接語法で平叙文を伝える方法として、不定詞を使う方法のほかに、英語のように、従属接続詞を使ってその平叙文の意味を持つ名詞節を作るという方法が使えます。ラテン語では、平叙文の意味を持つ名詞節を作るための従属接続詞として、*quod* を使います。伝えられる名詞節の述語動詞としては、直説法の動詞が使われます。たとえば、上の例文は、*quod* を使うことによって次のように言うこともできます。

Mihi dicit quod mē amat. 私を愛していると彼は私に言っています。

*quod* を使ったこのような間接語法は、古代ローマの時代には俗語的とみなされていたものです。しかし、中世になると、このような間接語法も普通に使われるようになりました。

#### 11.12.5 疑問文の間接語法

疑問文によってあらわされる発言や思考内容などを間接語法で伝えたい場合は、その疑問文を、疑問を意味する名詞節に変えます。疑問文を名詞節に変える方法は、ただ単にその疑問文の述語動詞を接続法に変えるだけです。従属接続詞は必要ではありません。

例として、次の直接語法の文を間接語法に書き直してみましょう。

Rogat, “Estne mathēmatica jūcunda?”

「数学は楽しいですか」と彼は尋ねています。

rogō, -āre, -āvī, -ātum 尋ねる。

伝えられる疑問文の述語動詞は *est* です。それを接続法の *sit* に変えると、間接語法になります。ですから、上の文を間接語法に書き直した結果は、次のようになります。

Rogat sitne mathēmatica jūcunda.

数学は楽しいかと彼は尋ねています。

今度は、次の直接語法の文を間接語法に書き直してみましょう。

Mē rogat, “Quem amās?”

「あなたは誰を愛しているのですか」と彼は私に尋ねています。

述語動詞を直説法から接続法に変更すればいいわけですが、さらに人称も変更する必要があります。「彼」の発言の中の「あなた」は話し手自身のことですから、直接語法ではそれが「私」に変わります。ですから、伝えられる疑問文の述語動詞は、直説法・二人称の *amās* から接続法・一人称の *amem* に変わることになります。したがって、上の文を間接語法に書き直した結果は、次のようになります。

Mē rogat quem amem.

私は誰を愛しているのかと彼は私に尋ねています。

#### 11.12.6 命令文の間接語法

命令文によってあらわされる発言や思考内容などを間接語法で伝えたい場合は、その命令文を、命令を意味する名詞節に変えます。命令を意味する名詞節というのは、第 11.11.2 項で説明した、目的を意味する名詞節の一種です。

命令を意味する名詞節は、従属接続詞として、伝えたい命令文が肯定的な意味の場合は *ut*、否定的な意味の場合（つまり禁止の場合）は *nē* を使って作ります。肯定的な命令を意味する名詞節を作る場合、従属接続詞の *ut* は省略してもかまいません。伝えられる名詞節の述語動詞としては、接続法の動詞が使われます。

例として、次の直接語法の文を間接語法に書き直してみましょう。

Puellae imperat, “Fuge.” 「逃げなさい」と彼は少女に命じています。

imperō, -āre, -āvī, -ātum 命じる。

伝達される命令文の人称は、間接話法では、命令を受ける人を話し手の視点から見たものになります。この命令文の場合、命令を受けるのは少女で、その少女は話し手の視点から見ると三人称です。したがって、上の文を間接話法に書き直した結果は、次のようになります。

Puellae imperat ut fugiat. 逃げろと彼は少女に命じています。

間接話法で伝達される命令文の述語動詞は、命令を受ける人が話し手自身の場合は一人称、聞き手の場合は二人称になります。

Mihi imperat ut fugiam. 逃げろと彼は私に命じています。

Tibi imperat ut fugiās. 逃げろと彼はあなたに命じています。

今度は、次の直接話法の文を間接話法に書き直してみましょう。

Puellae imperat, “Nōlī fugere.” 「逃げてはいけません」と彼は少女に命じています。

禁止を意味する命令文を間接話法で伝達する場合は、接続詞として *nē* を使います。*nē* は、それ自体が禁止の意味を持っていますので、間接話法では *nōlō* は必要ではありません。ですから、上の文を間接話法に書き直した結果は、次のようになります。

Puellae imperat *nē* fugiat. 逃げるなと彼は少女に命じています。

### 11.12.7 間接話法で複文を伝達する場合の注意点

間接話法で複文を伝達する場合には、注意しないといけないことがあります。それは、間接話法では、伝達される複文の従属節の述語動詞として、接続法の動詞が使われるということです。その動詞が原文では直説法だった場合も、それを接続法に変える必要があります。

例として、次の直接話法の文を間接話法に書き直してみましょう。

Dicit, “Puellam quae mathēmaticam discit amō.”

「数学を学んでいる少女を私は愛しています」と彼は言っています。

伝達される文は複文で、その従属節の述語動詞は *discit* という直説法の動詞です。複文を間接話法で伝達する場合は従属節の述語動詞を接続法に変える必要がありますので、*discit* は *discat* に変えないといけません。ですから、上の文を間接話法に書き直した結果は、次のようになります。

Dicit *sē* puellam quae mathēmaticam *discat* amāre.

数学を学んでいる少女を愛していると彼は言っています。

## 第12章 動詞 V [準動詞]

### 12.1 準動詞の基礎

#### 12.1.1 準動詞とは何か

この章では、準動詞について説明します。

「準動詞」(英語では verbal) というのは、動詞を変化させることによって作られた、動詞以外の品詞として使われる単語のことです。

#### 12.1.2 準動詞の分類

ラテン語の準動詞は、五つのグループに分類することができます。それぞれのグループについて、日本語での呼び方、英語での呼び方、そしてそれがどのような品詞として使われるかということを示すと、次のようになります。

分詞	participle	形容詞、名詞
目的分詞	supine	名詞
不定詞	infinitive	名詞
動名詞	gerund	名詞
動形容詞	gerundive	形容詞、名詞

## 12.1.3 分詞についての復習

分詞については、すでに第 3.1.10 項で基礎的な説明をしています。この章では、分詞についてもう少し踏み込んで説明したいと思いますが、その前に、第 3.1.10 項で説明したことを復習しておくことにしましょう。

文の中で動詞を形容詞として使いたいときは、通常、その動詞を、「分詞」(英語では participle) と呼ばれる形に変化させます。

分詞は、態、時制、性、数、格に応じて変化します。ただし、態と時制の組み合わせは、

能動態・現在  
能動態・未来  
受動態・完了

という三つだけです<sup>1</sup>。

分詞の能動態・現在の作り方と変化については第 12.2 節で、分詞の能動態・未来の作り方と変化については第 12.3 節で説明したいと思いますが、分詞の受動態・完了の作り方と変化については、すでに第 9.2 節で説明していますので、そちらを参照していただきたいと思います。

## 12.2 現在分詞

## 12.2.1 現在分詞とは何か

分詞の能動態・現在の形は、「現在分詞」(英語では present participle) と呼ばれます(「現在能動分詞」(英語では present active participle) と呼ばれることもあります)。

## 12.2.2 現在分詞の作り方

現在分詞の単数・主格は、次のような方法で作ります。

第一変化動詞	現在幹に -ns を付加する。
第二変化動詞	現在幹に -ns を付加する。
第三 a 変化動詞	現在幹から末尾の e を取り除いたものに -ēns を付加する。
第三 b 変化動詞	現在幹から末尾の e を取り除いたものに -iēns を付加する。
第四変化動詞	現在幹から末尾の ī を取り除いたものに -iēns を付加する。

amō、habeō、regō、capiō、audiō の現在分詞の単数・主格は、次のような形です。

amō	amāns
habeō	habēns
regō	regēns
capiō	capiēns
audiō	audiēns

## 12.2.3 形式受動態動詞の現在分詞

形式受動態動詞の現在分詞の単数・主格は、次のような形です。

第一変化動詞	mīror (驚く)	mīrāns
第二変化動詞	vereor (恐れる)	verēns
第三 a 変化動詞	sequor (追う)	sequēns
第三 b 変化動詞	morior (死ぬ)	moriēns
第四変化動詞	mentior (欺く)	mentiēns

## 12.2.4 不規則動詞の現在分詞

不規則動詞の現在分詞の単数・主格は、次のような形です。

sum	ēns
possum	potēns

<sup>1</sup>動形容詞は、分詞の受動態・未来だと考えることもできます。

volō	volēns
nōlō	nōlēns
mālō	malēns
eō	iēns
ferō	ferēns
dō	dāns
edō	edēns

sum は、古代ローマの時代には現在分詞がありませんでした。現在分詞として ēns が使われるようになったのは、時代が下ってからのことです。

### 12.2.5 現在分詞の変化

現在分詞の変化は、fēlix 型形容詞と同じです。たとえば、amō の現在分詞 amāns は、性と数と格に応じて次のように変化します。

		男・女性	中性
単数	主格	amāns	amāns
	属格	amantis	amantis
	与格	amantī	amantī
	対格	amantem	amāns
	奪格	amantī (-e)	amantī (-e)
複数	主格	amantēs	amantia
	属格	amantium	amantium
	与格	amantibus	amantibus
	対格	amantēs (-īs)	amantia
	奪格	amantibus	amantibus

eō の現在分詞 iēns は、次のように、不規則な変化をします。

		男・女性	中性
単数	主格	iēns	iēns
	属格	euntis	euntis
	与格	euntī	euntī
	対格	euntem	iēns
	奪格	euntī (-e)	euntī (-e)
複数	主格	euntēs	euntia
	属格	euntium	euntium
	与格	euntibus	euntibus
	対格	euntēs (-īs)	euntia
	奪格	euntibus	euntibus

## 12.3 未来分詞

### 12.3.1 未来分詞とは何か

分詞の能動態・未来の形は、「未来分詞」(英語では future participle)と呼ばれます(「未来能動分詞」(英語では future active participle)と呼ばれることもあります)。

### 12.3.2 未来分詞の作り方

未来分詞の男性・単数・主格は、完了分詞の男性・単数・主格の末尾にある -us を -ūrus に置き換えることによって作ります。

たとえば、amō は、完了分詞の男性・単数・主格が amātus ですから、その末尾にある -us を

-ūrus に置き換えた、amātūrus という形が、未来分詞の男性・単数・主格です。

### 12.3.3 sum の未来分詞

sum は、完了分詞は持っていないのですが、未来分詞は持っています。sum の未来分詞の男性・単数・主格は、futūrus という形です。

### 12.3.4 未来分詞の変化

性と数と格に応じた未来分詞の変化のパターンは、第一第二変化形容詞と同じです。たとえば、amō の未来分詞は、性と数と格に応じて次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	amātūrus	amātūra	amātūrum
	属格	amātūrī	amātūrae	amātūrī
	与格	amātūrō	amātūrae	amātūrō
	対格	amātūrum	amātūram	amātūrum
	奪格	amātūrō	amātūrā	amātūrō
	呼格	amātūre	amātūra	amātūrum
複数	主格	amātūrī	amātūrae	amātūra
	属格	amātūrōrum	amātūrārum	amātūrōrum
	与格	amātūrīs	amātūrīs	amātūrīs
	対格	amātūrōs	amātūrās	amātūra
	奪格	amātūrīs	amātūrīs	amātūrīs

## 12.4 分詞の用法

### 12.4.1 分詞の時制

分詞の時制は、それを含んでいる文の述語動詞の時制に対する相対的な時間の前後関係です。述語動詞の時制に対して、現在は同時、未来はそれ以後、完了はそれ以前を示します。

### 12.4.2 分詞の限定用法

分詞の用法のうちでもっともよく使われるのは、限定用法です。

現在分詞は、限定用法で使われると、「何々している(ところの)」という意味になります。

Puellam rīdentem vīdī. 笑っている少女を私は見ました。

分詞というのは、もともとは動詞ですので、目的語を持つこともできます。

Puellam mathēmaticam discentem amō. 数学を学んでいる少女を私は愛しています。

未来分詞は、限定用法で使われると、「何々するであろう(ところの)」とか、「何々することになる(ところの)」という意味になります。

Puellam tē amātūram vīdī. あなたを愛することになる少女を私は見ました。

完了分詞は、限定用法で使われると、「何々された(ところの)」という意味になります。

Hic liber ā mē scriptus est. これは私によって書かれた本です。

### 12.4.3 分詞の名詞的用法

分詞は、名詞として使われることもあります。普通の形容詞の場合と同じように、男性形は人間(男性)、女性形は女性、中性形はものまたはことを意味します。

rīdens	笑っている人
scriptum	書かれたもの
tē amātūra	あなたを愛することになる女性

現在分詞の変化は *fēlix* 型ですので、それが名詞として使われる場合、単数奪格形の語尾は *-ī* ではなくて *-e* になります。

分詞の中には、名詞の用法がそのまま定着して完全に名詞になったものもあります。たとえば、次の名詞は分詞に由来するものです。

*oriēns, -entis, m.* 東。orior (昇る) の現在分詞。

*occidēns, -entis, m.* 西。occidō (沈む) の現在分詞。

*factum, -ī, n.* 行為。faciō の完了分詞。

*futūrum, -ī, n.* 未来。sum の未来分詞。

#### 12.4.4 分詞の叙述用法

未来分詞は、叙述用法で使われることもあります。

sum を述語動詞とする文の補語として未来分詞を使うと、それは、「...するつもりだ」とか「...しようとしている」という意図を示します。

*Nāvem factūrus sum.* 私は船を作るつもりです。

*Librum scriptūra erat.* 彼女は本を書こうとしていました。

#### 12.4.5 分詞構文

性と数と格が一致する名詞または代名詞と分詞から構成される、

名詞または代名詞 + 分詞

という構文は、しばしば、副詞節のような意味で使われることがあります。そのような場合、その構文は、「分詞構文」(英語では *participial construction*) と呼ばれます。

分詞構文の意味としては、付随的状況 (...しながら) 時間 (...するとき、...したのち) 理由 (...なので) 譲歩 (...だけれども) 条件 (...ならば) などがあります。

*Puella lacrimāns rīdet.*

少女は泣きながら笑っています。

*Ea mathēmaticam discēns theōrēma dēmonstrāre potest.*

彼女は数学を学んでいますので、定理を証明することができます。

*Eam mē nōn amantem amō.*

彼女は私を愛していないけれども、私は彼女を愛しています。

*theōrēma, -atis, n.* 定理。

*dēmonstrō, -āre, -āvī, -ātum* 証明する。

#### 12.4.6 絶対的奪格

上の三つの例文では、分詞構文は、主語または目的語が分詞を伴うことによって形成されています。しかし、そのような分詞構文ばかりではありません。主語や目的語や補語として文の中に組み込まれるのではなくて、それらから独立した修飾語として文を副詞的に修飾する分詞構文もあります。そのような分詞構文は、「絶対的奪格」(英語では *ablative absolute*) と呼ばれます。

絶対的奪格の意味は、普通の分詞構文と同じで、付随的状況、時間、理由、譲歩、条件などです。

絶対的奪格は、それを構成している名詞または代名詞と分詞を、ともに奪格に変化させることによって作られます。つまり、

名詞または代名詞の奪格形 + 分詞の奪格形

という構文です。絶対的奪格で現在分詞の単数奪格形が使われる場合、その語尾は *-ī* ではなくて *-e* になります。

絶対的奪格を構成している名詞は、原則として、それが修飾している部分に再び出現することはできません。ただし、これはあくまで原則で、絶対に守らなければならないものではありません。

絶対的奪格と、それが修飾する部分とのあいだは、通常、コンマで区切られます。

*Filiā vivente, felix eram.*

娘が生きていたとき、私は幸福でした。

*Nocente captō, sēcūrī sumus.*

罪人が捕えられたので、私たちは安心しています。

sēcūrus, -a, -um 安心している。

絶対的奪格としては、分詞を含まない、

名詞または代名詞の奪格形 + 形容詞または名詞の奪格形

という形のものもしばしば使われます。これは、古代ローマの時代には存在していなかった sum の現在分詞が省略されている絶対的奪格だと考えることができます。

Lūnā clārā, id vidēre potuī.

月が明るかったので、私はそれを見ることができました。

lūna, -ae, f. 月。

clārus, -a, -um 明るい。

## 12.5 目的分詞

### 12.5.1 目的分詞とは何か

第 9.2.4 項で説明したように、ラテン語の辞書では、動詞の項目の中に、その動詞の「目的分詞」(英語では supine) と呼ばれるものの対格の形が書かれています。

目的分詞というのは、名詞として使われる準動詞の一種で、目的を示したり観点を示したりするために使われるものです。

目的分詞を意味する日本語の言葉としては、「目的分詞」のほかに、「スピーヌム」というものが使われることもあります。「スピーヌム」は、ラテン語で目的分詞を意味する supīnum という単語をカタカナで表記したものです。

### 12.5.2 目的分詞の変化

目的分詞は、格に応じて変化します。変化のパターンは、第四変化名詞の単数と同じです。ただし、対格と奪格という二つの格しかありません。

たとえば、amō の目的分詞は、格に応じて次のように変化します。

対格 amātum

奪格 amātū

### 12.5.3 目的分詞の対格

目的分詞の対格は、「何々するために」という目的を示すために、移動を意味する動詞とともに使われます。

Venī victum. 私は勝つために来ました。

目的分詞の対格は、それ自身の目的語を持つことができます。

Venī eam raptum. 私は彼女を略奪するために来ました。

rapiō, -pere, -puī, -ptum 略奪する。

### 12.5.4 目的分詞の奪格

目的分詞の奪格は、「何々することにおいて」という観点を示すために、ある種の形容詞とともに使われます。

目的分詞の奪格とともに使われる形容詞は、facilis (やさしい)、difficilis (難しい)、pulcher (美しい)、iucundus (快い)、optimus (最良の)、turpis (恥ずべき)、incrēdibilis (信じがたい) などです。

Hoc problēma difficile est solūtū. この問題は解決が難しい。

### 12.5.5 形式受動態動詞の目的分詞

ラテン語の辞書では、動詞の項目の中に目的分詞の対格の形が書かれているわけですが、形式受動態動詞の項目の中には、目的分詞の形は書かれていません。その理由は、形式受動態動詞の場合、完了の形から目的分詞の形を導き出すことができるからです。

たとえば、辞書の mīror (驚く) の項目は、

mīror, -ārī, -ātus sum 驚く。

というように書かれています。この記述から、mīror の完了分詞の男性・単数・主格が mīrātus だということが分かります。この形の語尾を -um にすると目的分詞の対格、-ū にすると目的分詞の奪格になります。ですから、mīror の目的分詞は次のような形だということが分かります。

対格 mīrātum

奪格 mīrātū

## 12.6 不定詞

### 12.6.1 この節について

不定詞については、すでに第3章のいくつかの場所で断片的に説明しています。この節では、その章で説明したことを復習するとともに、その章で説明しなかったことを補足したいと思います。

### 12.6.2 不定詞とは何か

文の中で動詞を名詞として使いたいときは、通常、その動詞を、「不定詞」(英語では infinitive) と呼ばれる形に変化させます。

不定詞は、次のような性質を持っています。

- 主格と対格があり、文の主語、補語、目的語にすることができる。
- 性は中性で、数は単数。
- 態と時制に応じて変化する。ただし、時制は、現在、未来、完了の三つだけ。したがって、不定詞の形の個数は  $2 \times 3 = 6$  個。
- 意味上の主語、補語、目的語を伴うことができる。意味上の主語、補語、目的語は、格を対格にする必要がある。

### 12.6.3 不定詞の意味

不定詞は、次のような意味を持っています。

	能動態	受動態
現在	何々すること	何々されること
未来	何々するであろうこと	何々されるであろうこと
完了	何々したこと	何々されたこと

ただし、不定詞の時制は、分詞の時制と同じように、それを含んでいる文の述語動詞の時制に対する相対的な時間の前後関係です。述語動詞の時制に対して、現在は同時、未来はそれ以後、完了はそれ以前を示します。

### 12.6.4 不定詞の能動態・現在

不定詞の能動態・現在は、動詞の現在幹に、-re という語尾を付加することによって作ります。amō、habeō、regō、capiō、audiō の不定詞の能動態・現在は、次のような形です。

amō amāre

habeō habēre

regō regere

capiō capere

audiō audīre

不規則動詞の不定詞の能動態・現在は、次のような形です。

sum esse

possum posse

volō velle

nōlō nōlle

mālō mālle

eō īre



ferō	ferre
fiō	fieri
dō	dare
edō	edere (esse)

不定詞の能動態・現在は、格では変化しません。目的語として使う場合も、主語として使う場合も、補語として使う場合も、同じ形を使います。

不定詞の能動態・現在は、「何々すること」という意味で使われます。

Eam epistulam scribere sciō. 彼女が手紙を書いていることを私は知っています。

### 12.6.5 不定詞の受動態・現在

第一変化動詞、第二変化動詞、第四変化動詞の不定詞の受動態・現在は、動詞の現在幹に、-rī という語尾を付加することによって作ります。第三 a 変化動詞と第三 b 変化動詞の不定詞の受動態・現在は、動詞の現在幹から末尾の e を取り除いたものに、-rī という語尾を付加することによって作ります。

amō、habeō、regō、capiō、audiō の不定詞の受動態・現在は、次のような形です。

amō	amārī
habeō	habērī
regō	regī
capiō	capī
audiō	audīrī

ferō という不規則動詞の不定詞の受動態・現在は、ferrī という形です。

不定詞の受動態・現在も、能動態・現在と同じように、格では変化しません。

不定詞の受動態・現在は、「何々されること」という意味で使われます。

Eam laudārī sciō. 彼女が賞賛されていることを私は知っています。

laudō, -āre, -āvī, -ātum 賞賛する。

### 12.6.6 不定詞の能動態・未来

不定詞の能動態・未来は、

未来分詞 + esse

という構造を持っています。ただし、未来分詞の部分と esse の部分とは、合体しないで別々の単語のままになりますので、二つの単語が一つの不定詞として機能することになります。不定詞の能動態・未来の esse は、省略されることもあります。

不定詞の能動態・未来の形に含まれている未来分詞の部分は、その不定詞の主語の性と数に応じて変化します。また、不定詞が主語または補語として使われる場合は主格、目的語として使われる場合は対格に変化します。

たとえば、amō の不定詞の能動態・未来・男性・単数・主格は、amātūrus esse という形です。

sum の不定詞の能動態・未来は、未来分詞が futūrus ですので、futūrus esse という形になります。また、fore という形が、sum の不定詞の能動態・未来として使われることもあります。

不定詞の能動態・未来は、「何々するであろうこと」という意味で使われます。

Eam epistulam scriptūram esse sciēbam.

彼女が手紙を書くであろうということを私は知っていました。

### 12.6.7 不定詞の受動態・未来

不定詞の受動態・未来は、

目的分詞の対格 + irī

という構造を持っています。目的分詞の部分と irī の部分とは、合体しないで別々の単語のままです。ちなみに、irī というのは、eō の不定詞の受動態・現在です。

たとえば、amō の不定詞の受動態・未来は、amātum irī という形です。

不定詞の受動態・未来は、「何々されるであろうこと」という意味で使われます。

Eam laudātum īrī sciēbam.

彼女が賞賛されるだろうということを私は知っていました。

### 12.6.8 不定詞の能動態・完了

不定詞の能動態・完了は、

完了幹 + *isse*

という構造を持っています。

たとえば、*amō* の不定詞の能動態・完了は、*amāvisse* という形です。

不規則動詞の不定詞の能動態・完了は、次のような形です。

<i>sum</i>	<i>fuisse</i>
<i>possum</i>	<i>potuisse</i>
<i>volō</i>	<i>voluisse</i>
<i>nōlō</i>	<i>nōluisse</i>
<i>mālō</i>	<i>maluisse</i>
<i>eō</i>	<i>īsse (īvisse)</i>
<i>ferō</i>	<i>tulisse</i>
<i>fīō</i>	<i>factus esse</i>
<i>dō</i>	<i>dedisse</i>
<i>edō</i>	<i>ēdisse</i>

不定詞の能動態・完了は、「何々したこと」という意味で使われます。

Eam epistulam scripsisse sciō. 彼女が手紙を書いたことを私は知っています。

### 12.6.9 不定詞の受動態・完了

不定詞の受動態・完了は、

完了分詞 + *esse*

という構造を持っています。完了分詞の部分と *esse* の部分とは、合体しないで別々の単語のままです。完了分詞の部分は、性と数と格に応じて変化します。

たとえば、*amō* の不定詞の受動態・完了・男性・単数・主格は、*amātus esse* という形です。

不定詞の受動態・完了は、「何々されたこと」という意味で使われます。

Eam laudātam esse sciō. 彼女が賞賛されたことを私は知っています。

### 12.6.10 形式受動態動詞の不定詞

能動の意味を持つ形式受動態動詞の不定詞としては、現在と完了では、受動態の形が使われません。たとえば、*mīror* (驚く) という形式受動態動詞の場合、能動の意味を持つ不定詞は、現在は *mīrārī* という形で、完了は *mīrātus esse* という形です。

能動の意味を持つ形式受動態動詞の不定詞の未来としては、受動態の形ではなくて、能動態の形が使われます。たとえば、*mīror* の不定詞の未来は、*mīrātūrus esse* という形です。*mīrātum īrī* ではありませんので、注意してください。

## 12.7 動名詞

### 12.7.1 動名詞の基礎

文の中で動詞を名詞として使いたいときは、基本的には不定詞を使えばいいわけですが、どんな場合でも不定詞が使えるというわけではありません。不定詞には主格と対格しかありませんので、それら以外の格が必要な場合、不定詞は使えないのです。

「何々すること」という意味を持つ準動詞としては、不定詞のほかに、「動名詞」(英語では *gerund*) と呼ばれるものがあります。動名詞は、主格だけがないのですが、属格も与格も対格も奪格もありますので、不定詞にない格は動名詞によって補うことができます。

動名詞の性は中性です。そして数は単数だけで、複数はありません。

## 12.7.2 動名詞の作り方

動名詞の対格は、次のような方法で作ります。

- |           |                                     |
|-----------|-------------------------------------|
| 第一変化動詞    | 現在幹に -ndum を付加する。現在幹の末尾の ā は短母音になる。 |
| 第二変化動詞    | 現在幹に -ndum を付加する。現在幹の末尾の ē は短母音になる。 |
| 第三 a 変化動詞 | 現在幹に -ndum を付加する。                   |
| 第三 b 変化動詞 | 現在幹から末尾の e を取り除いたものに -iendum を付加する。 |
| 第四変化動詞    | 現在幹から末尾の ī を取り除いたものに -iendum を付加する。 |

amō, habeō, regō, capiō, audiō の動名詞の対格は、次のような形です。

amō	amandum
habeō	habendum
regō	regendum
capiō	capiendum
audiō	audiendum

## 12.7.3 形式受動態動詞の動名詞

形式受動態動詞の動名詞の対格は、次のような形です。

第一変化動詞	mīror (驚く)	mīrandum
第二変化動詞	vereor (恐れる)	verendum
第三 a 変化動詞	sequor (追う)	sequendum
第三 b 変化動詞	morior (死ぬ)	moriendum
第四変化動詞	mentior (欺く)	mentiendum

## 12.7.4 不規則動詞の動名詞

不規則動詞の動名詞の対格は、次のような形です。

eō	eundum
ferō	ferendum
dō	dandum
edō	edendum

## 12.7.5 動名詞の変化

動名詞の変化は、第二変化 -um 型名詞と同じです。たとえば、amō の動名詞 amandum は、格に応じて次のように変化します。

属格	amandī
与格	amandō
対格	amandum
奪格	amandō

## 12.7.6 動名詞の用法

動名詞は、不定詞の能動態・現在と同じように、「何々すること」という意味で使われます。ただし、主語、目的語、補語として使うことはできません。

Beātītātem amandī sciō.	愛することの幸福を私は知っています。
Problēma cōgitandō solvitur.	問題は考えることによって解決されます。

beātītās, -ātis, *f.* 幸福。

不定詞と同様に、動名詞にも対格があるわけですが、動名詞の対格を使うことができるのは、対格を支配する前置詞の後ろに動名詞が置かれる場合だけです。

Ad amandum vivō. 愛するために私は生きているのです。

動名詞は、目的語を持つこともできますし、副詞で修飾することもできます。

Difficultātem nāvem faciendī sciō.

船を作ることの困難さを私は知っています。

Philosophiam ad liberē vīvendum discō.

私は自由に生きるために哲学を学んでいます。

difficultās, -ātis, *f.* 困難さ。

コルメツラ (Lūcius Jūnius Moderātus Columella, 4~70 ごろ) という古代ローマの農学者は、『農業論』(Dē Rē Rusticā) という書物の中で次のように述べています。

Nihil agendō hominēs male agere discunt.

人間たちは、何もしないことによって悪事をなすことを学ぶ。

agō, -ere, -ēgī, actum する。

日本語にも、「小人閑居して不善をなす」という慣用語があって、「器の小さい人間は、暇を持て余すと、ついよからぬことをしてしまう」という意味で使われます。

ちなみに、「小人閑居して不善をなす」という言葉の出典は、『大学』という儒教の経典です。この言葉が登場する部分を引用してみましょう。

故に君子は必ずその独りを慎むなり。小人は閑居して不善を為し、至らざる所無し。

[現代語訳] それゆえに、君子は独りであるときでも必ず慎み深くしているものだ。それに対して、器の小さい人間は、独りであると、ついよからぬことをしてしまう。しかも際限なくしてしまう。

慣用語としての意味と、原典の中での意味とのあいだに違いがある、というところがちょっと面白いと思いましたので、ついよからぬ脱線をしてしまいました。

## 12.8 動形容詞

### 12.8.1 動形容詞の基礎

「動形容詞」(英語では gerundive) は、形容詞または名詞として使われる準動詞の一種で、「何々されるべき」という、受動的な義務または必要という意味を持っています。

形式受動態動詞の動形容詞も、「何々されるべき」という受動的な意味で使われます。

第 12.1.3 項の脚注で説明したように、動形容詞は、分詞の受動態・未来だと考えることもできます。

### 12.8.2 動形容詞の作り方

動形容詞の男性・単数・主格は、動名詞の対格の末尾にある -um を -us に変更することによって作ることができます。

たとえば、amō の動形容詞の男性・単数・主格は、動名詞の対格が amandum ですから、amandus という形になります。

### 12.8.3 動形容詞の変化

動形容詞の変化は、第一第二変化形容詞と同じです。たとえば、amō の動形容詞 amandus は、性と数と格に応じて、次のように変化します。

		男性	女性	中性
単数	主格	amandus	amanda	amandum
	属格	amandī	amandae	amandī
	与格	amandō	amandae	amandō
	对格	amandum	amandam	amandum
	奪格	amandō	amandā	amandō
	呼格	amande	amanda	amandum
複数	主格	amandī	amandae	amanda
	属格	amandōrum	amandārum	amandōrum
	与格	amandīs	amandīs	amandīs
	对格	amandōs	amandās	amanda
	奪格	amandīs	amandīs	amandīs

#### 12.8.4 動形容詞の用法

動形容詞には、次のような用法があります。

- 限定用法
- 名詞的用法
- sum の補語として使う用法
- 動名詞を代用する用法

#### 12.8.5 動形容詞の限定用法

動形容詞は、名詞に対する修飾語として使うことができます。

Nāvem laudandam fēcērunt. 彼らは賞賛されるべき船を作りました。

#### 12.8.6 動形容詞の名詞的用法

動形容詞は、名詞として使うこともできます。

Laudandum agis. あなたは賞賛されるべきことをしています。

#### 12.8.7 sum の補語としての動形容詞

sum を述語動詞とする文の主格補語として動形容詞を使うことによって、「何々は何々されなければならない」という文を作ることができます。

Laudanda est. 彼女は賞賛されなければなりません。

動形容詞の叙述用法で、「誰々によって」という行為者を示したい場合は、名詞の与格を使ってそれを示します。

Tibi amanda est.

彼女はあなたによって愛されなければなりません。

(あなたは彼女を愛さなければなりません)

与格で行為者を示すと、文があいまいになる場合があります。たとえば、次の文は、二通りに解釈することができます

Flōs mihi puellae dōnandus est.

花は私によって少女に贈られなければなりません。

花は少女によって私に贈られなければなりません。

このような場合は、ā (ab) と名詞の奪格で行為者を示します。

Flōs ā mē puellae dōnandus est.

花は私によって少女に贈られなければなりません。

自動詞についても、その動形容詞を sum の補語として使うことによって、「誰々は何々しなければならない」という意味の文を作ることができます。その場合、主語は不要で、sum は三人称、動形容詞は中性・単数を使います。行為者は、名詞の与格で示します。

Tibi dormiendum est. あなたは眠らなければなりません。

### 12.8.8 動形容詞による動名詞の代用

第 12.7.6 節で、動名詞は目的語を持つことができるという話をしました。つまり、動名詞を使って、「何々を何々すること」を表現することができるということです。しかし、ラテン語では、「何々を何々すること」は、動形容詞を使って表現することも可能で、どちらかと言えば、動形容詞を使う表現のほうが普通です。

動名詞から動形容詞へは、次の手順によって変換することができます。

- (1) 目的語の格を、動名詞と同じ格に変える。
- (2) 動名詞を、目的語の性と数と格に一致する動形容詞に変える。

たとえば、nāvem faciendī (船を作ることの) は、動形容詞へ次のように変換されます。

- (1) faciendī が属格なので、nāvem を属格の nāvis に変える。
- (2) nāvis が女性・単数・属格なので、faciendī を、faciendae という動形容詞の女性・単数・属格に変える。

したがって、変換の結果は、nāvis faciendae となります。

Difficultātem nāvis faciendae sciō.

船を作ることの困難さを私は知っています。

## 参考文献

- [Harwood,2003] Natalie Harwood, *The Complete Idiot's Guide to Learning Latin, Second Edition*, Alpha Books, 2003, ISBN 978-0-02-864450-9.
- [Lewis,1891] Charlton T. Lewis, *Elementary Latin Dictionary*, Oxford University Press, 1891, ISBN 978-0-19-910205-1.
- [Moreland,1977] Floyd L. Moreland and Rita M. Fleischer, *Latin: An Intensive Course*, University of California Press, 1977, ISBN 978-0-520-03183-8.
- [Morwood,2005] James Morwood (ed.), *Pocket Oxford Latin Dictionary, Third Edition*, Oxford University Press, 2005, ISBN 978-0-19-861005-2.
- [Simpson,1968] Donald Penistan Simpson, *Cassell's Latin Dictionary*, Wiley Publishing, 1968, ISBN 978-0-02-522580-0.
- [Traupman,1966] John C. Traupman, *The New College Latin and English Dictionary*, Bantam Books, 1966, ISBN 978-0-553-13252-6.
- [Wheelock,2005] Frederic M. Wheelock, revised by Richard A. LaFleur, *Wheelock's Latin, Sixth Edition, Revised*, HarperCollins, 2005, ISBN 978-0-06-078371-6.
- [有田,1964] 有田潤、『初級ラテン語入門』、白水社、1964、ISBN 978-4-560-00750-1。
- [泉井,2005] 泉井久之助、『ラテン広文典(新装復刊)』、白水社、2005、ISBN 978-4-560-00792-1。
- [逸身,2000] 逸身喜一郎、『ラテン語のはなし——通読できるラテン語文法——』、大修館書店、2000、ISBN 978-4-469-21262-4。
- [大西,1997] 大西英文、『はじめてのラテン語』、講談社現代新書、1353、講談社、1997、ISBN 978-4-06-149353-7。
- [風間,2005] 風間喜代三、『ラテン語・その形と心』、三省堂、2005、ISBN 978-4-385-36252-6。
- [小林,1992] 小林標、『独習者のための楽しく学ぶラテン語』、大学書林、1992、ISBN 978-4-475-01803-6。
- [小林,2006] 小林標、『ラテン語の世界』、中公新書、1833、中央公論新社、2006、ISBN 978-4-12-101833-5。
- [田中利光,2002] 田中利光、『ラテン語初歩・改訂版』、岩波書店、2002、ISBN 978-4-00-002419-8。
- [田中秀央,1966] 田中秀央(編)、『羅和辞典・増訂新版』、研究社、1966、ISBN 978-4-7674-9024-3。

- [土岐,2002] 土岐健治、井阪民子、『楽しいラテン語』、教文館、2002、ISBN 978-4-7642-7215-6。
- [中山,2007] 中山恒夫、『古典ラテン語文典』、白水社、2007、ISBN 978-4-560-06784-0。
- [野津,2010] 野津寛、『ラテン語名句小辞典』、研究社、2010、ISBN 978-4-7674-9105-9。
- [樋口,2008] 樋口勝彦、藤井昇、『詳解ラテン文法・新装版』、研究社、2008、ISBN 978-4-327-39414-1。
- [松平,1979] 松平千秋、国原吉之助、『新ラテン文法・第4改訂版』、南江堂、1979、ISBN 978-4-524-00901-5。
- [水谷,2009] 水谷智洋（編）、『羅和辞典・改訂版』、研究社、2009、ISBN 978-4-7674-9025-0。
- [村松,1961] 村松正俊、『ラテン語四週問』、大学書林、1961、ISBN 978-4-475-01008-5。

## 索引

- ā, 57, 115  
 a.m., 57  
 ab, 57, 115  
 ac sī, 140  
 ad, 56  
 ad hoc, 57  
 adeō, 142  
 alacer 型形容詞, 64  
     —の变化, 65  
 aliquī, 85, 86  
 aliquis, 85, 86  
 alius, 88, 89  
 alter, 88, 89, 97  
 ante, 56  
 ante merīdiem, 57  
 antepaenultima, 20  
 antequam, 136  
 apud, 56  
 at, 59, 138  
 atque, 59, 83  
 aut, 59  
 autem, 59  
  
 Caesar, Gāius Jūlius, 110  
 Castor, 61  
 certē, 52, 138  
 circum, 56  
 citrā, 56  
 Columella, 156  
 contrā, 56  
 cōram, 57  
 cum, 57, 136, 140  
     —と人称代名詞との複合語, 79  
 cum prīmum, 136  
 -cumque, 134, 135  
 cupiō, 53  
 cūr, 71, 134  
  
 dē, 57  
 dē factō, 57  
*Dē Rē Rusticā*, 156  
 dēbeō, 53  
 deus ex māchinā, 57  
 dō, 46, 48, 55, 105, 107, 108, 122, 125, 126,  
     148, 153–155  
 dōnec, 136, 137  
 dum, 136, 137  
 duo, 94  
  
 ē, 57  
  
 edō, 46, 48, 55, 105, 107, 108, 122, 125, 148,  
     153–155  
 ego, 76  
 enim, 59  
 eō, 46, 47, 55, 105, 107, 108, 122, 125, 140,  
     142, 148, 152–155  
 ergō, 59  
 et, 59  
 etiam, 52  
 etiamsī, 138  
 etsī, 138  
 ex, 57, 75  
  
 fēlix 型形容詞, 65, 68, 148  
     —の变化, 66  
 ferō, 46, 47, 55, 105, 107, 108, 122, 125, 126,  
     148, 153–155  
     —の受動態, 115  
 fiō, 46, 47, 55, 105, 107, 108, 122, 125, 153,  
     154  
 fortis 型形容詞, 64  
     —の变化, 65  
 Fossa Magna, 63  
  
 Herculēs, 61  
 hic, 79  
  
 i.e., 81  
 id est, 81  
 idcircō, 140  
 īdem, 79, 82  
 īdem...quī, 139  
 ideō, 140  
 igitur, 59  
 ille, 79, 80  
 in, 57  
 īfrā, 56  
 inter, 56  
 ipse, 79, 82  
 is, 71, 79, 81, 142  
     先行詞としての—, 133  
 iste, 79, 80  
 ita, 52, 142  
 ita...ut, 139  
 itaque, 59  
 i 幹名詞, 34  
     —と子音幹名詞の判別, 36  
     —の变化, 35  
  
 jubeō, 53  
 juxtā, 56



- magis, 74  
 mālō, 46, 47, 55, 105, 107, 122, 125, 148,  
 152, 154  
 maximē, 74  
 mēcum, 79  
 meminī, 108  
 meus, 78  
 mille, 96  
 minimē, 53  
  
 -nam, 84  
 nam, 59  
 -ne, 21, 51  
 nē, 86, 123, 124, 126, 128, 129, 141, 143,  
 145  
 nec, 59  
 nēmō, 90, 91  
 neuter, 88, 90  
 nihil, 90, 91  
 nihilō minus, 138  
 nisi, 86, 137  
 nōbiscum, 79  
 nōlō, 46, 55, 105, 107, 108, 122, 125, 148,  
 152, 154  
 nōn, 47, 51, 52, 86, 90, 91, 123, 124, 126,  
 127  
 nōnne, 53  
 noster, 78  
 nūllus, 88, 90, 91  
 num, 53, 86  
  
 ob, 56  
 omnis, 91  
 optō, 53  
  
 p.m., 57  
 paenultima, 20  
 per, 57  
*Phormiō*, 140  
 plūs, 74  
 Pollux, 61  
 possum, 46, 53, 55, 105, 107, 122, 125, 147,  
 152, 154  
 post, 57  
 post merīdiem, 57  
 postēquam, 135  
 postquam, 135  
 prae, 57  
 praeter, 57  
 priusquam, 136  
 prō, 57  
 prope, 57  
 propter, 57  
  
 proptereā, 140  
  
 quīn, 142  
 quā, 71, 134  
 quam, 71, 75, 134, 139  
 quam...tam, 140  
 quamdiū, 136  
 quamquam, 138  
 quamvis, 138  
 quandō, 71, 134, 136, 140  
 quandōcumque, 135  
 quantō...tantō, 140  
 quasi, 140  
 -que, 21, 60  
 quī, 83–86, 131  
 quia, 59, 140, 141  
 quicumque, 134  
 quīdam, 85, 87  
 quis, 83, 85, 86, 134  
 quisquam, 85, 86, 90  
 quisque, 85, 86  
 quisquis, 134  
 quō, 71, 134, 141  
 quō...eō, 140  
 quoad, 136, 137  
 quod, 140, 141, 145  
 quoniam, 140  
  
 rēs, 91  
  
 sānē, 52  
 sciō, 108  
 sēcum, 79  
 secundum, 57  
 sed, 59  
 sī, 86, 137  
 sīc, 52  
 simul atque, 136  
 simulac, 136  
 sine, 57  
 sōlus, 88  
 sub, 57  
 suī, 77  
 sum, 46, 50, 55, 105, 107, 108, 111, 112,  
 117, 122, 125, 127, 129, 147, 149,  
 151–154, 157  
 —の補語としての動形容詞, 157  
 —の未来分詞, 149  
 super, 57  
 suprā, 57  
 suus, 78  
  
 tālis, 142  
 tālis...quālis, 139

tam, 142  
 tam...quam, 139  
 tamen, 138  
 tametsī, 138  
 tamquam, 140  
 tamquam sī, 140  
 tamdiū...quamdiū, 139  
 tantopere...quantopere, 139  
 tantus, 142  
 tantus...quantus, 139  
 tēcum, 79  
 Terentius, 140  
 that, 145  
 tot, 142  
 tot...quot, 139  
 totidem...quot, 139  
 totiēns...quotiēns, 139  
 tōtus, 88  
 trāns, 57  
 trēs, 94  
 tū, 77  
 tuus, 78  
  
 ubi, 71, 134, 136  
 ubi primum, 136  
 ubicumque, 135  
 ūllus, 85, 86, 88, 90  
 ultima, 20  
 ultrā, 57  
 unde, 71, 134  
 ūnus, 88, 93  
 ut, 136, 140, 141, 143, 145  
 ut primum, 136  
 ut quisque...ita, 140  
 uter, 88-90  
 uterque, 90  
  
 -ve, 21, 60  
 vel, 59  
 velut sī, 140  
 vērō, 52  
 vester, 78  
 vetus 型形容詞, 65  
     —の変化, 66  
 vōbiscum, 79  
 volō, 46, 53, 55, 105, 107, 122, 125, 148,  
     152, 154  
  
 挨拶, 55  
 アウグストゥス, 93  
 アクセント, 20  
 アドホック, 57  
 アラビア語, 22

位格, 58  
 イタリア語, 14  
 イタリアック語派, 14  
 位置関係  
     形容詞と名詞の——, 62  
 位置によって長い, 20  
 一人称, 39, 76  
     ——の人称代名詞, 76  
 一致  
     性・数・格の——, 28, 61  
 一般疑問文, 51  
     ——を作る後倚辞, 51  
 意味  
     過去完了の——, 112  
     完了の——, 110  
     現在の——, 48  
     接続法・過去完了の——, 129  
     接続法・完了の——, 127  
     接続法・現在の——, 122  
     接続法・未完了過去の——, 126  
     副詞節の——, 131  
     不定詞の——, 152  
     未完了過去の——, 105  
     未来完了の——, 112  
     未来の——, 107  
 意味上  
     不定詞の——の主語, 54  
     不定詞の——の補語, 54  
     不定詞の——の目的語, 53  
 意味論, 22  
 印欧語族, 14  
 インド・イラン語派, 14  
 インド・ヨーロッパ語族, 14, 22  
 引用符, 144  
  
 ウンブリア語, 14  
  
 大文字, 15  
 オスク語, 14  
 覚え方  
     動詞の変化の——, 40  
     名詞の変化の——, 27  
 音節, 18, 36  
 音素, 16  
  
 懷疑, 122, 124, 126  
 カエサル, 110  
 格, 25  
 格助詞, 25  
 格変化, 23  
 過去完了, 39, 111  
     ——の意味, 112  
 カストル, 61

- 活用, 23
- 可能性, 122, 124, 126, 128
  - の条件文, 137
  - の譲歩文, 138
- 関係詞, 134
- 関係代名詞, 84, 131
- 関係副詞, 131, 134
- 韓国語, 22
- 冠詞, 22
- 勸奨, 122, 123
- 間接目的語, 24, 26, 49
- 間接話法, 144
  - 疑問文の——, 145
  - 平叙文の——, 144
  - 命令文の——, 145
- 感嘆詞, 61
- 感嘆符 (!), 16, 24
- 感嘆文, 24
- 間投詞, 22, 61
- 感動詞, 61
- 願望, 122, 123, 126–129
- 完了, 39, 108
  - の意味, 110
  - 受動態の——, 116
- 完了幹, 42, 108, 111, 112, 154
  - 不規則動詞の——, 110
- 完了受動分詞, 116
- 完了分詞, 116, 117, 127, 129, 154
  - の作り方, 116
  - の変化, 117
- 関連
  - 時制の——, 130
- 機械仕掛けの神, 57
- 基数詞, 92
  - 1 から 20 までの——, 92
  - 10 の倍数をあらわす——, 94
  - 100 の倍数をあらわす——, 95
  - 1000 をあらわす——, 96
- 義務, 126, 129
- 疑問
  - を強調する後倚辞, 84
- 疑問形容詞, 83, 124, 126, 131
- 疑問代名詞, 83, 124, 126
- 疑問符 (?), 16, 23
- 疑問副詞, 71, 124, 126, 131, 134
- 疑問文, 23, 51, 89
  - の間接話法, 145
- 客観的な
  - 理由, 140
- 級, 72
- 強意代名詞, 82
- 強弱アクセント, 20
- ギリシア語派, 14
- ギリシア文字, 15
- 禁止, 55, 123, 127, 128
- 近代オリンピック, 74
- 句, 24
- 空白, 15, 23
  - 『クオ・ワディス』, 71
- 屈折語, 22
- 句点 (。), 23
- 句読点, 15
- 国
  - や地域の名前, 30
- グループ
  - 名詞の——, 28
- 形式受動態動詞, 119
  - の現在分詞, 147
  - の動名詞, 155
  - の不定詞, 154
  - の変化のグループ, 119
  - の目的分詞, 151
- 形態論, 22
- 形容詞, 22, 28, 61
  - と名詞の位置関係, 62
  - の限定用法, 61
  - の最上級, 72
  - の叙述用法, 61
  - の比較級, 72
  - の分類, 62
  - の名詞的用法, 61, 68
  - の用法, 61
  - 辞書に書かれている——の項目, 64, 67
- 形容詞節, 131
  - の接続法, 133
- 形容詞的用法
  - 指示代名詞の——, 83
- 結果, 131, 141, 143
  - 事実としての——, 142
- ゲルマン語派, 14
- 原級, 72
- 現在, 39, 43
  - の意味, 48
  - 命令法の——, 54
- 現在幹, 42, 43, 54, 55, 107
- 現在完了, 110, 130
- 現在能動分詞, 147
- 現在分詞, 147
  - の作り方, 147
  - の変化, 148
  - 形式受動態動詞の——, 147
  - 不規則動詞の——, 147
- 限定用法

- 形容詞の——, 61
- 動形容詞の——, 157
- 分詞の——, 149
- 後倚辞, 21, 51, 60
  - 一般疑問文を作る——, 51
  - 疑問を強調する——, 84
  - 等位接続詞的な——, 60
- 行為者, 115
  - 動形容詞の——, 157
- 構造
  - 動詞の——, 42
- 膠着語, 22
- 高低アクセント, 20
- 肯定的な
  - 返答, 52
  - 目的, 141
- 肯定文, 51, 86, 90
- 後文, 137
- 呼格, 25, 26
- 語幹, 27, 42
- 語順, 50
- 古代ローマ, 14
- 古典ラテン語, 14
- 語尾, 27, 42
  - 受動態の——, 113
  - 能動態の——, 43
- 小文字, 15
- 暦の月
  - の名前, 68, 93
- 孤立語, 22
- コルメツラ, 156
- コロン (:), 16
- コンマ (,), 15
- 再帰代名詞, 77
  - の属格形, 78
- 最上級, 72, 140
  - 形容詞の——, 72
  - 副詞の——, 75
- サンスクリット語, 22
- 三人称, 39, 76
- 子音, 16
- 子音幹名詞, 34
  - と i 幹名詞の判別, 36
  - の変化, 34
- シェンキエーヴィチ, 71
- 時間, 131, 135
- 死語, 15
- 指示代名詞, 79
  - の形容詞的用法, 83
  - の属格形, 83
- 事実
  - としての結果, 142
  - の条件文, 137
  - の譲歩文, 138
- 辞書
  - に書かれている形容詞の項目, 64, 67
  - に書かれている動詞の項目, 42, 119
  - に書かれている名詞の項目, 29
- 時称, 39
- 時制, 38, 39, 103
  - の関連, 130
  - 接続法の——, 121
  - 分詞の——, 149
- 時制符号, 42, 104, 106, 111–113
- 自動詞, 39, 113
- 支配する, 56
- 姉妹語, 14
- 謝罪, 56
- 従位接続詞, 59
- 修飾, 24
- 修飾語, 24, 130
- 従属節, 121, 130
  - の分類, 130
- 従属接続詞, 59, 131
- 重文, 60
- 主格, 25, 26
- 主格補語, 50, 62
- 主観的な
  - 理由, 140
- 主語, 24, 49, 130
  - 不定詞の意味上の——, 54
- 主節, 121, 130
- 述語, 24
- 述語動詞, 24, 49, 130
- 受動相, 40
- 受動態, 40, 113
  - の完了, 116
  - の語尾, 113
  - ferō の——, 115
  - 第一変化動詞の——, 113
  - 第二変化動詞の——, 114
  - 第三 a 変化動詞の——, 114
  - 第三 b 変化動詞の——, 114
  - 第四変化動詞の——, 114
  - 命令法の——, 115
- 授与動詞, 24, 26, 49
- 準動詞, 146
- 畳音, 109
- 条件, 131, 137
- 条件文, 137
  - の分類, 137

- 可能性の——, 137
- 事実の——, 137
- 非事実の——, 138
- 譲歩, 122, 123, 127, 128, 131, 138
- 譲歩文, 138
  - の分類, 138
  - 可能性の——, 138
  - 事実の——, 138
  - 非事実の——, 139
- 叙述用法
  - 形容詞の——, 61
  - 分詞の——, 150
- 序数詞, 92, 97
  - 1 から 20 までの——, 97
  - 10 の倍数をあらわす——, 98
  - 100 の倍数をあらわす——, 98
  - 1000 の倍数をあらわす——, 103
- 女性, 28
- 所有形容詞, 78
- 数, 25, 38, 39
- 数詞, 22, 88, 92
  - の変化, 92
- 数副詞, 92, 101
  - 1 から 20 までの——, 101
  - 10 の倍数をあらわす——, 102
  - 100 の倍数をあらわす——, 103
  - 1000 の倍数をあらわす——, 103
- スピーヌム, 151
- スペイン語, 14
- スラブ語派, 14
- スワヒリ語, 22
- 性, 27
  - 第一変化名詞の——, 29
  - 第二変化名詞の——, 30
  - 第四変化名詞の——, 36
  - 第五変化名詞の——, 38
- 性・数・格
  - の一致, 28, 61
- 西洋古典語, 14
- 節, 24
- 接続詞, 22, 59
- 接続法, 40, 59, 121
  - の時制, 121
  - の用法, 121
  - 形容詞節の——, 133
- 接続法・過去完了, 128
  - の意味, 129
- 接続法・完了, 127
  - の意味, 127
- 接続法・現在, 121
  - の意味, 122
- 不規則動詞の——, 122
- 接続法・未完了過去, 124
  - の意味, 126
- 不規則動詞の——, 125
- 絶対的奪格, 150
- 接尾辞, 71
- セミコロン (;), 16
- 先行詞, 131, 134
  - としての is, 133
- 前接辞, 21
- 前置詞, 22, 56
  - 対格と奪格を支配する——, 57
  - 対格を支配する——, 56
  - 奪格を支配する——, 57
- 全否定, 91
- 前文, 137
- 相, 40
- 相関詞, 139
- 想像
  - にもとづく比較, 140
- 促音, 17
- 祖語, 14
- 属格, 25, 26
  - 部分の——, 79
- 属格形
  - 指示代名詞の——, 83
  - 人称代名詞と再帰代名詞の——, 78
- 態, 38, 40, 113
- 第一第二変化形容詞, 62
  - の変化, 62
- 第一変化動詞, 41, 44, 119
  - の受動態, 113
  - の未完了過去, 104
  - の未来, 106
- 第一変化名詞, 28
  - の性, 29
  - の変化, 29
  - 特殊な——, 30
- 第二変化 -er 型名詞, 30
  - の分類, 31
  - の変化, 31
- 第二変化 -um 型名詞, 30
  - の変化, 32
- 第二変化 -us 型名詞, 30
  - の変化, 30
- 第二変化動詞, 41, 44, 119
  - の受動態, 114
  - の未完了過去, 104
  - の未来, 106
- 第二変化名詞, 28, 30
  - の性, 30

- の分類, 30
- 特殊な—, 32
- 第三変化形容詞, 62, 64
  - の分類, 64
- 第三変化動詞, 41, 54, 119
- 第三 a 変化動詞, 42, 44, 119
  - の受動態, 114
  - の未完了過去, 104
  - の未来, 106
- 第三 b 変化動詞, 42, 45, 119
  - の受動態, 114
  - の未完了過去, 105
  - の未来, 106
- 第三変化名詞, 28, 33
  - の特徴, 33
  - の分類, 34
- 第四変化動詞, 41, 45, 119
  - の受動態, 114
  - の未完了過去, 105
  - の未来, 106
- 第四変化名詞, 28, 36
  - の性, 36
  - の変化, 37
- 第五変化名詞, 28, 38
  - の性, 38
  - の変化, 38
- 第一時制, 130
- 『大学』, 156
- 対格, 25, 26
  - と奪格を支配する前置詞, 57
  - を支配する前置詞, 56
  - 目的分詞の—, 151
- 帯気音, 17
- タイ語, 22
- 第二時制, 130
- 代名詞, 22, 76
  - の分類, 76
  - の変化, 76
- 代名詞的形容詞, 86, 88, 90
  - の変化, 88
- 奪格, 25, 26
  - と対格を支配する前置詞, 57
  - を支配する前置詞, 57
  - 目的分詞の—, 151
- 他動詞, 39, 113
- 他人
  - が主張している理由, 141
- 単語の列, 23
- 単数, 25, 39
- 男性, 28
- 単文, 60
- 短母音, 16
- 地域
  - や国の名前, 30
- 地格, 26, 58
- チベット語, 22
- 中国語, 22, 23
- 中性, 28
- 長音符号, 16
- 長短, 19
- 長母音, 16
- 直説法, 40, 121
- 直接目的語, 24, 49
- 直接話法, 144
- 作り方
  - 完了分詞の—, 116
  - 現在分詞の—, 147
  - 動形容詞の—, 156
  - 動名詞の—, 155
  - 未来分詞の—, 148
- デカルト, 49
- デファクト, 57
- テレンティウス, 140
- 等位接続詞, 59
  - 的な後倚辞, 60
- 動形容詞, 146, 147, 156
  - による動名詞の代用, 158
  - の限定用法, 157
  - の行為者, 157
  - の作り方, 156
  - の変化, 156
  - の名詞的用法, 157
  - の用法, 157
  - sum の補語としての—, 157
- 統語論, 22
- 動作主, 115
- 動詞, 22
  - の構造, 42
  - の分類, 41
  - の変化, 38
  - の変化の覚え方, 40
  - の変化表, 40
  - 辞書に書かれている—の項目, 42, 119
- 同時性, 136
- 同等性, 139
- 動名詞, 146, 154
  - の作り方, 155
  - の変化, 155
  - の用法, 155
  - 形式受動態動詞の—, 155
  - 動形容詞による—の代用, 158
  - 不規則動詞の—, 155

- 特殊疑問文, 51  
 特殊な  
   — 第一変化名詞, 30  
   — 第二変化名詞, 32  
 特徴  
   第三変化名詞の —, 33  
 トルコ語, 22  
 中島敦, 49  
 名前  
   国や地域の —, 30  
   暦の月の —, 68, 93  
 二重子音, 19  
 二重否定, 91  
 二重母音, 19  
 二人称, 39, 76  
   — の人称代名詞, 77  
 日本語, 22, 23  
 人称, 38, 39, 76  
 人称語尾, 42  
 人称代名詞, 76  
   — と cum との複合語, 79  
   — の属格形, 78  
   — の複数属格形, 79  
   一人称の —, 76  
   二人称の —, 77  
 年齢, 97  
 『農業論』, 156  
 能動相, 40  
 能動態, 40, 113  
   — の語尾, 43  
 配分数詞, 92, 99  
   1 から 20 までの —, 100  
   10 の倍数をあらわす —, 100  
   100 の倍数をあらわす —, 101  
   1000 の倍数をあらわす —, 101  
 パチカン市国, 15  
 撥音, 17  
 破裂音, 19  
 半形式受動態動詞, 120  
 判別  
   子音幹名詞と i 幹名詞の —, 36  
 比較, 131, 139  
   想像にもとづく —, 140  
 比較級, 72, 139–141  
   形容詞の —, 72  
   副詞の —, 74  
 比較変化, 23, 72  
 非事実  
   — の条件文, 138  
   — の譲歩文, 139  
 ヒッポクラテス, 67  
 否定的な  
   — 返答, 52  
   — 目的, 141  
 否定文, 51, 86, 90, 91  
 ピリオド (.), 16, 23  
 比例, 140  
 品詞, 22  
 フォッサマグナ, 63  
 不規則動詞, 41, 45, 55, 108  
   — の完了幹, 110  
   — の現在分詞, 147  
   — の接続法・現在, 122  
   — の接続法・未完了過去, 125  
   — の動名詞, 155  
   — の未完了過去, 105  
   — の未来, 107  
 複合語  
   人称代名詞と cum との —, 79  
 副詞, 22, 69  
   — の最上級, 75  
   — の比較級, 74  
 副詞節, 131  
   — の意味, 131  
 複数, 25, 39  
 複数属格形  
   人称代名詞の —, 79  
 複文, 60, 121, 129  
 不定関係代名詞, 134  
 不定形容詞, 85, 90  
 不定詞, 41, 53, 146, 152, 154  
   — の意味, 152  
   — の意味上の主語, 54  
   — の意味上の補語, 54  
   — の意味上の目的語, 53  
   — の受動態・完了, 154  
   — の受動態・現在, 153  
   — の受動態・未来, 153  
   — の能動態・完了, 154  
   — の能動態・現在, 152  
   — の能動態・未来, 153  
   — の用法, 53  
   形式受動態動詞の —, 154  
 不定代名詞, 85, 90  
 部分  
   — の属格, 79  
 部分否定, 91  
 フランス語, 14  
 文, 23, 60  
   — の先頭の文字, 23

- 分詞, 41, 116, 146, 147
  - の限定用法, 149
  - の時制, 149
  - の叙述用法, 150
  - の名詞的用法, 149
  - の用法, 149
- 分詞構文, 150
- 分数, 99
- 文法, 22
- 分類
  - 形容詞の——, 62
  - 従属節の——, 130
  - 条件文の——, 137
  - 譲歩文の——, 138
  - 第二変化 -er 型名詞の——, 31
  - 第二変化名詞の——, 30
  - 第三変化形容詞の——, 64
  - 第三変化名詞の——, 34
  - 代名詞の——, 76
  - 動詞の——, 41
  - 名詞の——, 28
- 平叙文, 23, 48
  - の間接話法, 144
- ベトナム語, 22
- ヘルクレス, 61
- 変化
  - alacer 型形容詞の——, 65
  - felix 型形容詞の——, 66
  - fortis 型形容詞の——, 65
  - i 幹名詞の——, 35
  - vetus 型形容詞の——, 66
  - 完了分詞の——, 117
  - 現在分詞の——, 148
  - 子音幹名詞の——, 34
  - 数詞の——, 92
  - 第一第二変化形容詞の——, 62
  - 第一変化名詞の——, 29
  - 第二変化 -er 型名詞の——, 31
  - 第二変化 -um 型名詞の——, 32
  - 第二変化 -us 型名詞の——, 30
  - 第四変化名詞の——, 37
  - 第五変化名詞の——, 38
  - 代名詞的形容詞の——, 88
  - 代名詞の——, 76
  - 動形容詞の——, 156
  - 動詞の——, 38
  - 動名詞の——, 155
  - 未来分詞の——, 149
  - 目的分詞の——, 151
- 変化表, 40
  - 動詞の——, 40
  - 名詞の——, 27
- 返答
  - 肯定的な——, 52
  - 否定的な——, 52
- 母音, 16
- 法, 38, 40, 121
- 補語, 24, 50, 61, 130
  - 不定詞の意味上の——, 54
- 補足不定詞, 53
- ポルックス, 61
- ポルトガル語, 14
  - 『ボルミオー』, 140
- 本質的に長い, 19
- ポンペイウス, 118
- 未完了過去, 39, 103
  - の意味, 105
  - 第一変化動詞の——, 104
  - 第二変化動詞の——, 104
  - 第三 a 変化動詞の——, 104
  - 第三 b 変化動詞の——, 105
  - 第四変化動詞の——, 105
  - 不規則動詞の——, 105
- 未来, 39, 105
  - の意味, 107
  - 第一変化動詞の——, 106
  - 第二変化動詞の——, 106
  - 第三 a 変化動詞の——, 106
  - 第三 b 変化動詞の——, 106
  - 第四変化動詞の——, 106
  - 不規則動詞の——, 107
  - 命令法の——, 107
- 未来完了, 39, 112, 127
  - の意味, 112
- 未来能動分詞, 148
- 未来分詞, 148, 153
  - の作り方, 148
  - の変化, 149
  - sum の——, 149
- 「無題」, 49
- 名詞, 22
  - と形容詞の位置関係, 62
  - のグループ, 28
  - の分類, 28
  - の変化の覚え方, 27
  - の変化表, 27
  - 辞書に書かれている——の項目, 29
- 名詞節, 131
- 名詞的用法
  - 形容詞の——, 61, 68
  - 動形容詞の——, 157
  - 分詞の——, 149



- 命令, 122, 123
- 命令文, 24, 54, 115
  - の間接話法, 145
- 命令法, 40, 121
  - の現在, 54
  - の受動態, 115
  - の未来, 107
  
- 目的, 131, 141, 143
  - 肯定的な—, 141
  - 否定的な—, 141
- 目的語, 24, 49, 130
  - 不定詞の意味上の—, 53
- 目的分詞, 42, 117, 146, 151, 153
  - の対格, 151
  - の奪格, 151
  - の変化, 151
  - 形式受動態動詞の—, 151
- 目的補語, 50, 62
- 文字
  - 文の先頭の—, 23
  
- ユリウス・カエサル, 93, 118
- ユリウス暦, 93
  
- 拗音, 18
- 用法
  - 形容詞の—, 61
  - 接続法の—, 121
  - 動形容詞の—, 157
  - 動名詞の—, 155
  - 不定詞の—, 53
  - 分詞の—, 149
- 与格, 25, 26
  
- ラティウム, 14
- ラテンアルファベット, 15
- ラテン語, 14
  
- 理由, 131, 140
  - 客観的な—, 140
  - 主観的な—, 140
  - 他人が主張している—, 141
- 流音, 19
  
- ルーマニア語, 14
- ルピコン川, 118
  
- 歴史的完了, 110
  
- ローマ・カトリック教会, 15
- ロマンス語, 14
  
- 分かち書き, 23
- 話法, 144